
第二の人生はゲームらしいです～

てんびん座

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第二の人生はゲームらしいです

【Nコード】

N1407W

【作者名】

てんびん座

【あらすじ】

私の主は人間でした。

しかし、下克上を繰り返してとうとう最高神に…！

やりましたね、教授！

え？他の最高神を黙らせるから転生してこい？

この作品は『これは第二の人生という名のゲームだ』の続編です。できれば前作を読んでください。キャラがわからないと思います。

下克上はされる方が悪い(前書き)

さっそくですけど続編書きました。

下克上はされる方が悪い

神界、それはあらゆる神が集う場所。

新旧問わず神はそこで自分の役割を果たす。

そこで今、前代未聞の事態が起こっていた。

それは…、

「貴様、我々を廃して上位にのし上がるうだなど…！」

恥を知れ！！」

そう、神となりそう長くない新米が下克上を行っているからである。数多くの神は既にその者の踏み台となり、序列を落としていった。

神の世界は基本、年功序列で成り立っている。

しかし神に寿命はない。よって序列が変わるということは基本的にない。

稀に生まれながらにして強い力を持つ者もいるが、そうはないことである。

そして、そのどちらでもない異例イレギュラーの存在が現れた。

「ああ？役立たずが偉そうにしてんじゃねえよ。

むしろ、賢くて部下に恵まれた俺の踏み台になれたんだ。

逆に感謝してくれても良いんだぜ？」

我らが教授である。

白衣の姿に神々しさはまるでない。

それもそうだ。彼の力は全て下克上した他の神から奪い取ったものである。

しかも、戦っているのは彼に仕える天使たちだ。

彼は全く戦っていない。

「おのれ…！」

世界を司る神でありながらそのような振る舞い！
貴様はそれでも神か！？」

「はっ、ヴァーカ！」

部下の成果は俺の物、俺の物は俺の物だ。

お前が何を言おうと負け犬の遠吠えにしか聞こえないな？
オラ、年取っただけの老害は消えろ」

そしてその神を氷の剣が切り裂いた。

「うーし、これで俺はさらに上位の神に昇格ってことだな。

流石は俺だ、手際が良い」

「戦ってるのは基本的に私たちですけどね」

「つーか、神になってもやってることまるで変わらないよな」

ルナたちも健在で、相変わらずベルツ家は平和なようだ。

すると、教授の目の前に見慣れた扉が現れた。

神として上の階層に移るための扉である。

三人はそれをくぐると、扉の先には二人の神がいた。

一人は長身で金髪碧眼の美青年。

もう一人は赤毛で深紅の眼の少女だ。

「おやあ？」

これは最高神様たちではないですか？

私めに何か御用でしょうか？」

目の前の二人は神界でも最高クラスの二人である。

その身体から溢れる力は、並みの神ならば立っていることすらできないほどだ。

しかし、教授もルナもライアも全く動じない。

多くの神の力を奪ってきた三人には、それだけの『格』があるのだ。

「まさか、実力だけで本当にここまで上がってくる者がいるとはな。

そなたらのような者は初めてだ」

「左様。しかし、このままでは神界の秩序が乱れる。

よってこのようなことは今後は慎め」

「はあ？なんで、俺様がお前たちの命令に従う必要があるんだよ？無能な連中を掃除してやったんだ。礼の一言があっても良いんじゃないの？」

そう、もはや彼の上には数えるほどしか上位の神はいない。

そして大半は狩られる運命にあるのだらう。

それほどに教授の力は強大になっていた。

目の前の二人を除いては。

つまり、教授は短い期間で神界での三強になってしまったのだ。異例をとりこして異常である。

「ぶっちゃけさ、そろそろ決着つけようや。

お前らが裏でコソコソ俺を潰そうとしていたのはわかってんだよ。ここで決着をつけるのが一番平和な方法だろ？」

「ふむ、一理ある。」

確かにこのまま無意味に時が過ぎるのも危険だ」

「では、どのように決める？」

私たちが本気で争えば、あらゆる世界が滅ぶぞ」

二人も賛成のようだ。

しかし三人（一人は部下たち）が戦えば世界が本当に滅びかねない。

「ふん、その内容は既に決めてある」

その場の全員が教授に注目した。

「一昔前に流行った『転生者システム』を使う」

転生者。

それは人間を神が別世界に転生させ、その世界での生き様を観察して楽しむものだ。

神たちの間では娯楽として流行っていたが、教授が現れてからはやる者が激減した。

第二の教授が現れる可能性を恐れたためだ。

「ふむ、悪くはない。」

確かにそれならば我らが争うことによる余波はないな」

「私も賛成だ。

転生者を選ぶ眼を競うのも悪くない。

して、舞台となる世界はどこにするのだ？」

「俺が昇格する切欠となった『魔法少女リリカルなのは』の世界だ。力、知、理の全てが必要な世界だ、決戦の舞台として悪くはあるまい。

そこで自らが選んだ転生者を一人だけ送り、殺し合わせる。

最後に生き残った転生者の主が勝者だ。

基本ルールは転生者システムを逸脱しない範囲とする。

異存は？」

「「ない」」

満場一致で結果は決まった。

そして二人は光に包まれると一瞬で消えた。

転生者となるべき人間を探しに行ったのだろう。

「俺たちも帰るぞ」

「はい」 「おう」

そして三人も光に包まれると消えていった。

いや、上手くいった上手くいった。

俺の勝ちが決まったようなもんだろ、これは。

あ、皆さんハロ。レン＝ベルツです。

今、世界を超えた神界征服をしています。

残りは二人だけなんだが、所詮は年寄りが二人。簡単にホームグラウンドに入ってきてくれた。

「それで、転生させる人を探しに行かないんですか？」

「ルナ、やめとけ。

どうせまたセコイ手段を考えてるんだよ」

「外道の神だし」

「この前の決闘なんて毒を盛ってたわ」

「そこに痺れる！憧れるうー！」

「でも、相手は最高神ですし」

「え、えっと、それは教授もです」

失礼なやつらだな。

俺の頭脳プレイをセコイだと？

「まあ良い。」

そう、前世が魔導師ならば最初から強い。
だがそれだけじゃない。

「人間ならば誰でも良いんだよ。
例えば、天使から人間に堕ちた存在でもな」

「…教授、まさか」

全員が理解した様子だ。
つまりはそういうことだ。

「お前ら、ジャンケンしろ。
負けたやつに一人で転生してもらおうから」

下克上はされる方が悪い（後書き）

さあ、誰が転生するんでしょうか？

最高神は伊達じゃない！！（前書き）

教授に思いつくことは最高神にだって思いつきます。

最高神は伊達じゃない！！

うっん？なんかきな臭いな…。

あ、皆さんグーテンターク。レン＝ベルツです。

さっき他の最高神たちと細かいルールの取り決めをしました。

しかし、なんか怪しい。

俺が提案したルールを簡単に飲む。

まあ良い。

それで、決まったルールだが、

『転生者の現地での年齢は同一とする』

『最低でも、無印、A・S、STSには直接関わること』

『転生者は、現地の者に転生者であることを知られてはならない』

『殺さなくても、転生者が降伏、もしくは勝手に死亡しても敗北とする。』

ただし、降伏した転生者は転生前や転生者システムの記憶がなくなる』

『転生者の肉体は転生する直前、もしくは死亡した直前のものとする』

『特典は三つに固定する。増やすのも減らすのも禁ずる』

一つ目と二つ目のルールは俺が決めた。

俺みたいに遙か昔から準備されたら流石に面倒だし、圧倒的に有利になるからだ。

二つ目もその保険みたいなものだ。

三つ目と四つ目は最高神どもと話し合った結果できた。

降伏した転生者は、転生に関しての記憶を失うのも残りの転生者にとってはありがたいだろう。

五つ目のルールは他の最高神が提案してきたものだ。

訳がわからん。いったい何がしたいんだ？

俺もそのルールを提案する気ではあったが、わざわざ向こうから提案する理由がわからん。

∴俺にも有利な条件だから別に良いが。

最後のルールは昔からある抜け道の一つだ。

これは満場一致で可決された。これがあると全員が困るからな。

しかし、何か引っかかる。

俺はとんでもない思い違いをしているんじゃないだろうか？

「で、結局は誰が転生することになったんだ？」

会議を終えて戻ってみると、既にジャンケンが終わっていた。

え？そんなにジャンケンに時間は掛からないだろうか？

いやいや、こいつらのジャンケンは本当に長い。

だって、相手が出す手を見て自分の手を変えるんだぜ？
腕を振り下ろす間に手の形が高速で変わりまくる。
前はそれで二時間もジャンケンをした。

「…ぜえ、ぜえ、は、はい、ぜはあ、私で、す」

どうやらルナが負けたようだ。

相当本気でジャンケンをしたのだろう。

全員が汗でびっしょりだ。息も荒い。

「よし、じゃあこれからお前に転生をしてもらおう。
通例のとおり、お前には特典を選ぶ権利がある。
なお、転生先の身体は転生直前、もしくは死亡する直前のものになる」

これだけでルナは大きなアドバンテージがある。

下手な特典がなくても、これだけで最強クラスだ。

「特典に関して、俺は聞かれたことにしか答えない。

それもできるだけYesかNoでだ。

さあ、お前の願いは何だ？」

sideルナ

特典。

それは第二の人生を走破するためのキーアイテムです。
よく考えなければ…。

「では、まずデバイスをください。」
私のアルテミスをそのままです。」

「良いだろう」

ふむ、これくらいならば制限に引っかからないようですね。

「それと、転生ではなくトリップにはできますか？」

「…できるな。かなりギリギリのラインだが」

「なら、四歳くらいの年齢でトリップさせてください」

転生で異世界に移動するのは危険です。

周囲の環境とかを一々気にしなくてはならないですからね。
誰々のファンだとか言つのなら話は別ですが。

それに、三歳くらいまでは転生した後で最も無意味な時間だと私は
思います。

ダラダラしていると勘が鈍りそうで恐いですし。

しかし、もう最後の特典ですか。

そろそろ能力を追加した方が良いですかね？

でも、稀少技能は原則で一人で一つですし…。
だったら、

「……………」

これが良いでしょう。

「良いだろう。」

特典は以上で良いな？」

「はい。」

うん、こんなものでしょうね。

後は臨機応変のケースバイケースで何とかするしかありません。

「んじゃ、転生を開始する。」

お前が負けるなんてことはまずねえとは思っが、油断はするな」

「了解しました〜！」

教授の激励でやる気が漲ってきました！

必ず勝利してみせます！！

「じゃな〜。」

ここから俺らは見物してるからよお」

「負けて帰ったら殺す」

「ルナ〜、頑張れ〜！！！」

「ま、ほどほどに頑張りなさい」

「応援してますね」

「ふ、ファイトですう〜！」

あ、皆のこと忘れてました。

完全に映画でも観るような雰囲気ですね。
くっ、あそこで私がパーを出していれば…！

「それでは、行ってきます」

side out

side 赤毛の最高神

と、教授は考えているのだろう。

転生者システムを使つての決戦か。

発想は面白いし、歴史もある。

それに奴の得意な分野でもあるのだろう。

しかし、古いだけに手の内も読みやすい。

教授のことだ。

手持ちの天使どもを使つて勝利しようというのだろう。

前科を問わないというシステムくらい、私だつてわかっている。

天使を人間に墮としてから転生。これが奴の作戦だろう。

ならば、こちらにも策はある。

目には目を、歯には歯を、魔導師には魔導師を、だ。

死ぬ前から強力な魔導師で、なおかつ敵の能力を知る者がいる。
これ以上の適役はいないだろう。

輪廻の輪から魂を取り出し、目の前に呼び出した。

「お前に復讐のチャンスをやろう。」

更なる力をもって復讐を成すならば、私は手を貸そう」

「できるのか？そんなことが…」

「勿論だ」

ふん、人間を操ることなど容易い。

少しの甘言で簡単に釣れる。

さあ、愚かな元人間め。

私の転生者の前に無残に敗北するが良い！！

s i d e o u t

s i d e 金髪碧眼の最高神

と、考えているのだろうか、あいつは。

「やつらが転生させる者などとつくに目星はついている。
復讐で釣る作戦などは特にな」

そう、復讐者はおそらくあの者だろう。

ならば、そいつは原作キャラを悲しませることはできまい。

「だからお前には原作キャラの身内に転生してもらおう。
肉体を調整するのに特典は必要ないだろう。」

なんせ、その身体はあの者のコピーなのだからな」

「了解しました。」

つまりは他の転生者を打倒すれば良いのですね？」

「そうだ。その後は好きに生きて良い。」

その代わり、負けは許されんぞ？」

まあ、心配はいらないだろう。

この者は強力な魔導師であると同時に戦闘のエキスパートでもある。

身内に転生すれば原作キャラは味方についたも同然。

そして復讐の転生者は原作キャラの敵にはなれないだろう。

これで我の勝利は決まったようなものだな。

s i d e o u t

最高神は伊達じゃない！！（後書き）

奇策の対策の対策が出てきました。

まさかのあの人が復活！？

同情しなくて良いから金をくれ！（前書き）

今回からはルナの視点で進みます。

同情しなくて良いから金をくれ！

…む、むむ？

あれ、私は何で寝てるんでしょう？

「あ、そういえばトリップしたんでしたね〜」

あ、皆さんこんにちは。ルナ＝ベルツです。

今後は私が挨拶を担当しますので、どうぞよろしくお願いします。

気がつくとは私は見知らぬ森の中で寝ていました。

身体の様子を確認してみると、特典のとおり四歳ほどのものになっていました。

そして手の中には宝石が…。

「おお、アルテミス！

お久しぶりです〜。元気でしたか〜？」

「はい、お久しぶりですマスター」

アルテミスとは神界に行くときにお別れしてしまいましたからね。話をしたのはかなり久々です。

「それで、今はいつでここはどこですか〜？」

「現在は新暦60年の春で、ここはミッドチルダ郊外の森林地帯です。」

教授より事情は伺いましたのでご安心を」

「仕方ありませんね。
ここは昔やった手を使いましょう」

昔やった手。

それはいたって簡単です。
完全に人頼りですけど。

そこから私はとりあえず道路が通ってる場所まで移動しました。
この辺は無人大帯の近くなので、交通量がかなり少ないです。
しかし、皆無というわけではありません。
道路の脇で車を待ち構えます。

30分くらい待つと、ようやく車が来ました。トラックです。
助かりました。正直、そろそろ空腹も限界だったので。

「すみませ〜ん！止まってくださ〜い！」

道路の脇から身を乗り出すようにして手を振ります。
運転手がかなり嫌そうな顔をしているのがここからでも見えました。
私がおなのかわかったのでしょうか。しかしこっちは必死です。

すると、トラックが私の前で止まりました。
助手席の車窓から人が乗り出していきます。

「あん、何だ嬢ちゃん。ヒッチハイクか？」

「じよ……………！？」

お、落ち着きなさいルナ。

少女に見られても仕方ありません。

教授だって雌性体のつもりだったと仰っていたでしょう。
そんなことよりも作戦を成功させなくては！

話を戻します。

そう、これが私の作戦。

その名も、『ヒッチハイクに乗じて食べ物に分けてもらう』

「悪いな、今は満席なんだ。

他の車を当たってくれ」

「いえいえ構いません」。

どうせ皆さん、次の街までたどり着けませんから」

ように見せかけて強盗をする作戦』です！

アルテミスを展開して一振り。

それで一瞬で運転席の人たちを全員凍らせました。

中の三人を運転席から放り出し、中にあった食べ物を片っ端から食

べます。

っていうか、お酒のつまみみたいな物ばかりですね。お腹は膨れるから別に良いですが。

十分くらいで食事を終えて、運転席から出ました。さてと、

「どうでしょうか、この凍死体。

一応、食べ物之恩はありますし」

えっと、こういう時は死体を十字に斬るんですけどっけ？

『マスター、それではただのバラバラ死体です。十字を切るんですよ』

「うーん、まあ良いです。

ご馳走様でした、この恩は忘れません。

…たぶんですが」

これが見つかるのと面倒なので、とりあえず近くの森に転送しておきます。

これで証拠の隠滅は完了。

後は…、とりあえずクラナガンまで行きましょうか。文明が恋しいです。

『マスター、それならばその車を使いましょう。変身魔法で身体を大きくすれば運転できるでしょう』

「そうですね」。

それでは行きましょうか」

変身魔法を使った私は、とりあえずそれでクラナガンに向かいました。とりあえずは二十代くらいになっているので、運転に支障はないです。

え？運転なんてできるのかって？

それくらいできます！私は前は二十代まで生きたんですよ！

で、現在クラナガンに向かっているんですが…。

「失敗しましたね〜」

『そうですね』

何を失敗したのかというと、

「まさか車内に金品が全くないとは…」

『全員が持ったままだったのでしょう』

そう、お金がないのです。

どうやら財布とかは全員が持ち歩いていたようです。

「チッ、あの野郎ども…！」

身包み剥いでから捨てれば良かったです〜」

こうなったら現金の輸送車でも襲ってしまいませんか…。
冗談でそんなことを考えていると、

『噂をすれば影ですね。』

前方に停車している車がそうですよ』

「…マジですか」

結構先ですが、本当に現金輸送車が停車していました。
道路の脇から人が出てきて何かを運び込んでいます。

「…こんな所に何故に現金輸送車が？」

っていうか、こんな所で停車している時点で訳ありですよね」

カーナビで確認しましたが、この辺りは無人地帯がしばらく広がっているようです。

ここを通っている時点でもう怪しさ爆発ですね。

「……………スルーの方向で」

『…そうですね』

そのまま横を通り過ぎようとなりました。

面倒事をご免ですし、私自体が面倒事の塊みたいなものですしね。

すると、

「誰か、誰か助けてー！ー！ー！」

「……………」

おそらく小さい子供の悲鳴が…。

…くっ、どうしてミッドのトラックは静かに移動できるんですか!?!
地球の騒音トラックを見習いなさい!

おかげで悲鳴…、じゃない!変な音が聞こえてしまったじゃないですか!

『マスター』

「…スルーで」

『しかしマスター。』

追っ手がかかっています』

「…うわあ〜」

ミラーを覗くとトラックの後ろから魔導師たちが追ってきます。
人数は二人です。

「これは流石にスルーできなさそうですね〜」

そのまま停車します。

すると追っ手の魔導師が運転席のドアをぶち破り、中に侵入してきました。

って、何してくれてんですかー!?!?

「…お前、さっきの声を聞いたな?」

「は?声?ナンノコトデシヨウカ〜?」

とりあえずすつ呆けます。

ここはポジティブに考えましょう。

ひよっとすると見逃してくれたら…、

「悪いが、お前にはここで死んでもらう」

「…ですよね」

しませんでした。最悪です。

その間にもう一人がエンジンを破壊してくださいました。

これでもうこのトラックは使えません。

「…とりあえず、十字に斬りましょうか」

その後、二人を四分割してから輸送車に向かいました。

このまま飛行魔法でクラナガンまで行っても良いんですが、管理局に見つかると面倒なので。

輸送車でさっきの二人を待っていた人がいたので土に還して、さらに森にも還します。

後ろのスペースに人みたいな何かがあった気もしますが、私は何も見ていません。

三歳くらいの女の子が二人なんていませんでした！別に捨てませんでした！

こっちを見てなんていませんでした！！

「ふい〜。」

これでようやく一件落着です〜。

では、行きましようか〜」

「ま、待って！置いていかないで！！」

「……………（コクコクコク）！！」

一人が懇願し、もう一人はもの凄く頷いています。

つていうか、服の裾を掴むのはやめてください。伸びるでしょうが！
くっ、無視するのも段々ときつくなってきましたね。

「え〜と、ほら！

きつともうすぐ管理局が来ますから、その人たちに保護してもらっ
てくださいい〜。」

そうすればお家に帰れますから〜」

面倒なのでとりあえずそう言います。

通報？勿論してませんが？

「…嫌だよ。

こんな所に置いていかれたらまた連れてかれちゃう。

それに、家なんてないもん」

「……………（ガクガクガク）」

知るかあああああ！！と叫びたいのをグツと堪えます。

ここで二人を連れて行っても良いことなんて何もありません。
百害あって一利なしってやつですね。

だいたい、誘拐だか何だか知りませんが…。

…ん？誘拐？

普通はこんなに小さな子供を誘拐しても良いことなんてないはず。身代金が目的？それにしても扱いが雑すぎです。

しかも二人とも魔力量がかなり多い。歳の割にはですが、それにさっきの家がない発言。

ということは…。

二人とも、ひよっとして人造魔導師でしょうか？
それとも管理外世界から誘拐されたとか？

…可能性は高いですね。
それにしても、人造魔導師とかですか？
一応、同族として助けてはあげたいですけどね？
どうでしょうか？

「…はあ〜。

わかりました、乗ってください〜」

そういうことは人里に降りてからにしましょうか。
ひよっとしたら今後の事態に協力してもらえるかもしれませんがね。
どうせ帰る場所もないというなら保護した方が今後にとっては得でしょう。

自分に言い訳しながら二人を助手席に乗せます。
後部座席がない型なので仕方ありません。

「…あの、どうして連れて行ってくれるの？」

自分で言っておきながらそれを聞きますか？
ま、不安なんでしょうけど。

「このまま置いていって死なれても寝覚めが悪いだけです。
何なら降りますか？」

二人は残像が見えそうなくらい速く首を振りました。
よろしい。

「では改めて、行きましようか？」

「…あ、あの！ありがとうございます、お姉さん！！」

「……………（コクコクコク）！！」

「テメエら、やっぱり降りろ…」

『落ち着いてくださいマスター』

旅は道連れ世は情けってやつです」

「う、うぐぐ、えぐつ、ぞ、ぞう、だっだん、ですが」

なんて、なんて良い子たちなんでしょう！

思わず感動してしまいました。

こんなに感動したのは劇場版ド○えもんを観た時以来です！
ジヤイアン最高です！！

あ、皆さんどうも。ルナ＝ベルツです。

今、クラナガンへ向かう途中のファミレスの駐車場です。

本当は中で食事をしたかったんですが、二人の衣服がボロボロなため入店できません。

なのでテイクアウトして車内で食べていたんですが…。

その時、片方の女の子が身の上をポツポツと話してくれました。

なんでも、二人は予想通り人造魔導師らしいです。

実験に耐えられなくなったために脱走してきたとか。

しかし二人は研究所での親友らしく、二人で手を取り合ってきたらしいです。

それでさっきとうとう捕まっただんだとか。

自分が涙もろいというのは自覚していましたが、二人の脱走の話を聞いていて不覚にも泣いてしまいました。

そこまで親友を大事に思っているとは…！！

こんな良い子たちが不幸になるなんて、世の中間違ってます！
少し前に面倒とかほざいていた自分を爆殺してやりたいです！

「わかりました！
あなたたち二人は、私が、責任を持って助けますから！
今後のことも任せてください！
また誘拐されそうになったら相手をバラバラ死体にしてやりますか
らね！！」

私は二人をひしっと抱きしめました。
え？甘いつて？
それがどうしたああああ！！

『しかしマスター。
この二人を連れて行くには色々と問題が…』

「黙りなさい！！
ここで二人を見捨てるくらいなら私は死にます！」

そう言い切るくらい私は本気でした。
教授がいれば同じことを言ったはずです！

(いや、俺は別にそんなこと…)

言ったはずです！！間違いありません！

『……………そうですか。
ならばこれからどうするのか、具体的なプランの提示を願います』

「…プランですか」

そう言われると困ります。
っていうか、その案を考える前に二人を保護しましたから。

…はっ！

そういえば教授から困ったときのためのアドバイスを受けているんです！

困った時に思い出すように転生する前に言われてます。

回想

「ルナ、とりあえず転生したら原作キャラを仲間にする。前回と同じような作戦は駄目だ」

「はあ、何故ですか？」

「今回はお互いを消し合う長期戦だ。

そんな時、転生者にとって最も消しにくい相手はどんなやつだ？」

「…なるほど、管理局の後ろ盾がある相手ですね？」

私は負けを認める気がない以上、殺すしかありません。

そんな状況で管理局は逆に邪魔でしょうからね。

それに転生は原作キャラ以外は味方を作りにくいですし。

管理局と一緒にいれば、原作キャラも味方にしやすいと？」

「そういうことだ。

そして、これは相手もおそらくわかっているだろう。

敵がどんな手を使ってくるかわからない以上、十分に注意しろ」

回想終了

…ふむ、原作キャラの仲間ですか。

高町なのはと八神はやては除外ですね。

海鳴にはもう転生者がいる可能性が高いです。

一番味方にしやすいシチュエーションは幼馴染か身内ですから。

クロノ執務官はどうでしょう？

それも微妙ですね。

絶対に味方にできるといふ状況を作るのは難しいです。

管理局は身動きを取りにくくしますし…。

他の人では無印どころかA・Sにすら間に合いません。

となると…。

「プラン決定です。」

進路は変更してアルトセイムに向かいます。

そこでプレシア「テストアロツサと接触しましょう」

sideレン

はい、今レンって誰だよって思った人、拳手！。

いやさ、ぶっちゃん俺も一瞬だけ思った。

これからは教授にしてもらおう。

え、挨拶？

あれはルナに譲った。俺はもう引退だ。

現在、俺たちは全員でテレビを見ている。

映っているのは転生者の三人だ。

残りの二人を見た時は思わず度肝を抜かれたが。

「それにしても、さっそく殺人してるし。

ルナにしては過激な行動だな」

「は？ルナらしいじゃねえかよ」

「想像通り」

他の皆も頷いている。

え、俺だけ？

「そうそう、私は子供を拾ったのが意外だったな」

「確かにね。容赦なく捨てると思ってたわ」

ああ、それは確かに。

しかし、それも仕方ないだろう。あいつ涙もろいからな。

ジブリ作品の全てに涙するようなやつだし。

ゲ○戦記のどこで泣けるのか。謎だ。

ちなみに俺の好きな作品はも○のけ姫だ。

「でも、今後の方針は悪くないと思いますよ？」

「え、えつと、そうですね」

そう、俺たちが注目したのはそこだ。

海鳴に行かなかったのは正解と言えるだろう。

なんせ、残りの転生者が集合してるんだからな。

「気をつけるよ、ルナ。」

あいつら、もう合流して結託してるぞ」

ま、大丈夫だろう。

例えあの二人が組んでもルナには勝てまい。

どんな特典を持っていてもだ。

あの腐れ最高神どもを最高に警戒してやったんだからな。

魔導師であるかぎり、いや、転生者であるかぎりルナには勝てん！

「なんせ、ルナの特典はあらゆるチートの中でも最凶だからな」

side out

旅は道連れ世は情けってやつです〜(後書き)

ルナは他にもク○ヨンしんちゃんでも号泣します。

世の中、助け合いが大切ですよ

ミッドチルダ郊外アルトセイム地方。

そこには巨大な遺跡級でもある『時の庭園』が鎮座していました。時代的にはまだフェイトはいないはずですが、好都合ですね。

あ、皆さんこんにちは。ルナ＝ベルツです。

今、私はアルトセイム地方にいます。

ここに来るまで少し時間が掛かりましたが、何とかたどり着きました。

「ルル、ナナ！行きますよ」

「お兄ちゃん、待って〜！」

「……………（ステテテテ）！」

あ、そういえば二人の紹介がまだでしたね。

さつきから私に返事をしたり、話しかけてくるのがルルです。

茶髪のポニーテールで、瞳は赤色の白人種です。

で、無言なのに感情表現が激しいという訳がわからないのがナナです。

水色の髪のアートで、瞳も青色の同じく白人種。

表情がコロコロ変わるのに無言なのは会話恐怖症？だかららしいです。念話も不可。

名前の由来？

私の名前を分解しただけですけど？

教授から頂いたお名前なので、結構私にとっては重要な名前です。単純で悪かったですね…。

二人ともお揃いの白いワンピースを着ています。

ナナはパーカーのフードを被ってますが。

え、お金？

輸送車の人たちから身包み剥いだものですが？

ここに来るまでは何とかなりました。

もうほとんど残っていませんけどね。

「なんでこんな遠くまで来たの？」

「……………（コクコクコク）」

「それはですね、私の未来に関わることだからですよ」

車では中に入れないようなので車を降りています。

歩きで中に入りますが、どうやって来たことを知らせれば良いのでしょうか？

インターフォンとかはないみたいですし。

仕方ないですね。広域念話で話しかけてみますか。

【すみませ〜ん。

プレシア〓テストロッサさんはいらっしゃいますか〜？】

庭園の全域まで届くように念話を送ります。

これで中にいれば聞こえるはずですよ。

「うう〜、頭がガンガンするう……」

「……………（クワンクワン）！？」

あ、そういうえば二人が魔導師の卵だったのを忘れてました。
念話が頭に響いたようです。

【…何か用かしら？】

すると中から返事が返ってきました。
よし、これで良いです。

【単刀直入に言いますね〜。

あなたのプロジェクトFですが、失敗しますよ〜？】

すると頭上に莫大な魔力反応が…！？

咄嗟にルルとナナを抱き寄せます。

「アルテミス！」

『Rejection』

瞬間、頭上から落雷が落ちました。

防いでいなかったら消し炭になっていましたね、これは。

【いきなりですね〜。】

いくら癪に障ったからといって、これはないでしょう〜？】

【…もう一度だけ聞いわ。何をしに来たの…？
私を馬鹿にするために来たのなら帰って…！】

ありやりや？

何か冷静になつてしまいました。

挑発してバテさせる作戦だったんですが。

仕方ないですね。ここは普通に交渉といきますか。

【…今日は取引をしに参りました〜】

【…取引？】

【そうですね〜。】

私もその分野について多少の知識があります〜。

しかし、その研究をできるだけの設備も環境もありません〜。

ですので、そのお手伝いをすると同時に設備を貸していただきたい
のです〜】

はい、嘘八百です。

知識があるのは事実ですが、本音はフェイトを完成させるためです。

【あなたみたいなお嬢が私の研究を手伝う？】

馬鹿も休み休み言いなさい】

…このクソ婆、ぶつ殺すぞ！？誰が小娘だ！？

ちゃんと二十代の身体だし俺様…、じゃない、私は男です！

くっ、段々と素が戻ってきてますね…！

【…事実です】。

何なら私の研究成果をお渡ししましょうか？】

そう言つてディスクをチラつかせます。

ここに来る途中でアルテミスに保存していたデータをコピーしておきました。

中にデータを放つておいて良かったです。

今の彼女よりは進んだ技術が入っているのだけは保障できます。

【……………入りなさい】

やたらと自信満々な私の態度に揺らいだのでしよう。

中に入れてくださいました。

とりあえずは第一段階は成功ですね。

「ルル、ナナ、行きますよ」

「ええっ！？もうやめようよ！」

「……………（コクコクコク）！！」

そんな二人を引きずって中に入ります。

しばらく進むと、傀儡兵が立っていました。

私たちの姿を見ると、誘導するように奥に進んでいきます。

それについていくと、居住エリアらしき所に着きました。

そこには満面の笑みを浮かべたプレシア「テストロッサが

「さっさとそのデータを渡しなさい。
話はそれからよ」

いるはずもなく、鬼の形相でした。

アルフ、あなたの鬼婆という表現は適切でしたね。
鬼婆じゃなければ山姥です。

そんなことは勿論口に出さずに彼女にデータを渡しました。
ここで待つようにと言い、彼女は奥に引っ込んでしまいます。

「…ねえ、もう帰ろうよー」

「……………（ガクガクガク）」

二人ともすっかり彼女にビビってます。
ま、仕方ないですが。

数分ほど待つと、彼女が戻ってきました。
データをこちらに差し出してきます。

「それで、取引は成立ですか？」

「…ええ、そうね。」

確かにこの中身はとても参考になったわ。
でも、一つだけ教えなさい。
どうやってここを…、いえ、私がプロジェクトFを進めていると知
ったの？」

「それをあなたが知る必要があるのですか？
私は研究をしたい、あなたは技術を確立したい。
それ以外に何か必要ですか？」

「…そうね」

あ、危ねえええところでした！
それを聞かれたらどうしようかと冷や汗ものだったんです。
上手く誤魔化せましたよね？

「ルナ＝ベルツです」。
しばらくお世話になります」

そう言つて右手を差し出します。

「…プレシア＝テストアロツサよ」

そして彼女も右手を出します。

交渉成立です。

side 教授

うわ、プレシアのやつ、ルナを小娘とか
よく死ななかつたな。

「ルナのやつ絶対に『ぶつ殺すぞ！?』とか思ってるな、ありゃ」

「『クソ婆が…！』とか思ってたそう」

「一瞬だけど頬が引きつってたしね」

お、やっぱりお前らもそう思うか。

「え〜、嘘だあ〜」

「え？あのルナさんがそんなことを思うはずない…、ですよね？」

「れ、礼儀正しいですし」

あ、そうか。この三人はルナの礼儀正しいバージョンしか知らないのか。

じゃあそう思っても仕方ないな。

「いやいや、ルナは本来はライアとアリスを足して二乗した感じだったんだよ。」

一人称は俺様、二言目には殺す、目つきも最悪だったしな」

「「「……………」」」

三人が疑いの眼差しを向けてくる。

いや、本当だって。

「俺の口調はルナの影響だけ？」

あいつは下ネタ全開で最悪だったけどな」

「昔は一日に最低でも百回は殺すって言ってた。顔を合わせる度に死ねとか消えろとか」

「でも二人とキャラが被るからって口調と態度を直したのよ。急にルナがニコニコしだした時はパニックになったわよ？
とうとう気が狂ったのか！？って」

そうそう、懐かしいな〜。

秀困気的には超凶暴なヴィータって感じだった。
俺の言うことはちゃんと聞いたけど。

そのあいつがガキを二人も面倒を見るとか…。
なんか、興味半分心配半分なんだが。

本当に大丈夫か…？

s i d e o u t

世の中、助け合いが大切ですよ（後書き）

プレシアさんと結託！

これはフェイトフラグでしょうか？

仏の顔は三度までですが私は一度でも許しません

「あなたとは一度、どちらが上の立場なのかハッキリさせた方が良
いみたいね」

「そうですね。いい加減、私もあなたのがままに振り回される
のに疲れました」

この婆、絶対に殺す！！

あ、みなさんどうも。ルナニベルツです。
今、プレシアさんと最高に険悪な雰囲気です。
お互いにデバイスを構えた戦闘体勢です。

何故こんなことになったのかというと、話は少し遡ります。
一ヶ月前、ついにフェイトが稼動を始めました。
私が助手になって一年、正直デスマでしたがついにです！
おっと、今はまだアリシアでしたね。

しかし、最近になってオリジナルとの差が顕著に現れ始めたようで
それで口論になったんです。
その流れを簡単に説明すると、

「あなたのデータなんて何の役にも立たなかったじゃない！」

「記憶だけで人格の完全再現なんてできませんよ〜！
それでもあなた一人の時よりも再現率は上がったはずですよ〜！」

「利き腕も、魔力資質も違うのよ！」

「そんなのは誤差の範囲です〜！」

「やっぱりあなたみたいなお嬢に頼ったのが間違いだったわ！」

「表出ろやくソ婆が〜！」

つて感じですよ。

注文が細かすぎなんですよ、この人は。

そんなにアリシアが好きならば神界に来なさい、会えますから！

「お、お兄ちゃん？ど、どうしたの？」

二人とも凄く殺気立ってるけど……」

「……………（ガクガクガク）」

「か、母さんもルナさんも落ち着いて……」

「うるさい〜！」

三人が止めに入りますが一蹴します。

この婆には礼儀ってやつを教えてやりませう。

あ、ちなみにフェイトが同い年の私をさん付けで呼んでるのは、私
が変身した姿のまま一年を過ごしていたからです。

ルルとナナも私の本当の歳は知らないです。

「で、どうします〜？」

「ここで殺り合っても良いですよ〜？」

「構わないわ。一撃で終わるもの。
大魔導師と呼ばれたこともある私に喧嘩を売ることの愚かさを教え
てあげるわ」

「はっ、年増の婆が偉そうに…。現役の私に勝てるっても〜?」

私たちの身体から溢れた魔力が電気と冷気に変換されます。
おかげで彼女の周囲は黒焦げ、私の周囲は凍り付けです。

「殺す!!!」

瞬間、私たちの足元に魔方陣が展開されました。

なるべく早く、なるべく重い一撃で婆を殺します!

しかし、それは向こうも同じらしく攻撃の瞬間は同時でした。

「サンダースマツシャー!!!」

「アイスジャベリン!!!」

衝突した魔力が地面を抉り、余波で周囲の木々が吹き飛び、そのま
ま氷結します。

ルルたちは吹き飛ばされないように三人で抱き合っていました。

そして魔法が消滅します。

結果は互角。

チツ、私が成長過程だということのもあるのですが、流石は大魔導
師!

腐っても鯛ってことですか！

「やるわね。研究者をやめて局員にでもなったらどう？」

「そうですね、あなたが土下座して謝るなら考えても良いですよ？」

再び沈黙。そして術式展開。

今度はさらに大技です！カキ氷にしてやります！

「お兄ちゃん！もうやめて！」

「……………（バタバタバタ）！！！」

「母さん、喧嘩は駄目だよ！！！」

そこに三人が割り込んできました。

くっ、三人とも邪魔です！その婆を殺せないでしようが！

「退きなさい！さもないと三人ごと……、ゴホッ！」

その時、プレシアが吐血しました。盛大に。

そんな身体で魔法を使うからそうなるんですよ。

「勝負ありですね。」

これからは私に対する態度は改めるように。」

「……くっ、私はまだ負けてな、……ゴフッ！」

そのまま咳き込み気絶してしまいました。

よくまあ、そんな状態でそんなことが言えますよね。
とりあえず寝室まで運んであげます。

え？殺さないのだった？

フェイトに泣きながら頼まれたから殺せなかったんですよ。

……………チツ！

その後、プレシアさんとは一言も口を利いていません。

食事や掃除などの世話はこなしますが、お互いに目も合わせません。
しかし、どうやら彼女はフェイトからアリシアと呼ばれていた記憶
を消したようです。

ルルとナナに釘を刺してました。

そんなある日、突然プレシアさんが使い魔と契約をしました。

なんでも、私に生活を支えられている状況に腹が立ったんだとか。

今後はフェイトの教育もするらしいですが…。

まあ、家事の分担ができるから別に良いですけど。

そういうえば、

「そろそろルルとナナにも魔法を教えましょうかね？」

研究所で少しは教わってるらしいですが。

「えっ、本当!？」

「……………(キラキラキラ)!!」

二人ともかなり喜んでます。

少し前まではあまり構ってあげられなかったですから。最近家事以外にやることもないですし、良い機会でしょう。

「ねえ、じゃあフェイトお姉ちゃんと一緒にでも良い!?一緒に勉強したい!」

「……………(コクコクコク)！」

うん、一緒にですか。

正直、二人には私の魔法を教えられたんですけど。あの系統、門外不出なんですよね。

まあ、基礎は同じミッド式ですしね。別に良いですか。

「じゃあ、リニスに相談してみますね。」
「向こうがOKしてくれたらそうしましょうか。」

どうせです。

フェイトを魔改造でもしてみますか。

仏の顔は三度までですが私は一度でも許しません（後書き）

フェイト魔改造です。

リリ狩るマジ狩る頑張ります〜！！

はあ〜。平和ですな〜。

前世では今頃は訓練ばかりでしたからね〜。

ああ、第二の人生って幸せです。

あ、皆さんこんにちは。ルナ＝ベルツです。
今は六歳です。

リニスが来てから、既に一年が経っています。

まだフェイトの魔改造はしてませんよ？

魔改造は基礎ができていないと崩壊しますから。

そもそも、プロジェクトFに見切りをつけたプレシアさんの下に私
が何故いられるかというと、フェイトの生後の様子を見るという大
義名分があるからです。

だからフェイトの魔改造をする権利は私には充分にあります。
初めからそのつもりでもありましたし。

今、私とリニスは三人の今後について話しています。
将来の意味ではなく訓練のことですよ？

「では、今後はこんな感じで行きましょうか」

「了解です〜。

そういえばフェイトの専用デバイスを作成してるんですよね〜？」

「ああ、バルディッシュですね。

はい、まだAIの作成段階ですが来年にはだいたい完成しそうです」

「そうですね。」

何か協力できることがあったら言ってくださいね。」

AIから作ってるんですか。

それは凄いです。

普通はそんな面倒なことはせずに市販の物を買ってしょうに。

「リニス、ルナさん、お願いがあるんだけど…」

その時でした。

フェイトたち三人が部屋にきました。

それにしても、控えめなフェイトがお願いとは珍しいですね。

「何ですか？」

「よっぽどのことじゃなければ良いですよ。」

するとルルが目を輝かせて、

「私たちね、必殺技が欲しいの!!」

と言いました。

「必殺技、ですか？」

リニスも困り顔です。

そりゃ突然こんなことを言われれば困りますよね。

「うん。さっき見ていたアニメでね、主人公が必殺技で敵を倒すの

を見て……」

「それで私たちも欲しくなったんだ！必殺技！」

「……………（コクコクコク）！！」

アニメの影響ですか。

必殺技ねえ。力がついてきた影響でもあるんでしょうけど……。

「ルナ、どうしますか？」

「その前に一つ聞きたいんですけど」

三人を見回して言いました。

昔からずっと疑問だったことなので丁度いいです。

「必殺技って、単純に相手を『必』ず『殺』す『技』ですよね？
それなら単純に射撃魔法に威力を込めれば良いのでは？」

「……………」

全員が沈黙しました。

え、え？違うんですか？

「そ、そういえばそうだね…」

「で、でも別に殺したい訳じゃないし…」

「……………（グルグル）？」

「ルナ、その質問は大人気ないと思いますよ？」

やっぱり違うんですか!？

昔から方舟の皆に浪漫がないとは言われていましたけど…。でも必殺技って読んで字のごとくじゃないんですか？

するとルルが

「えっと、殺さない必殺技を教えてください！」

と言いました。

「……………はあ？」

殺さない必殺技？なんですかそれは？

矛盾でしょうそれは。トンチの類ですか？

っていうか、冷静に考えたら非殺傷設定にすれば相手は死なないんですからそれで良いのでは？

「ルナ、子供の言う必殺技というのは単純に大魔法のことですよ。」

派手な魔法に憧れているんでしょう」

派手ですか。

なんだ、そうならそうと最初からそう言えば良いのに。てつきり非殺傷不可能魔法を教えてほしいのかと思いました。

敵のリンカーコアだけを氷結させる魔法とか、血液を凍らせて爆散させる魔法とか。

禁術なので困っていたんですが、それなら話は別です。

「そうですね〜。

しかし、派手と言っても色々ありますし〜」

「前にお兄ちゃんがフェイトお姉ちゃんのお母さんと喧嘩していた時に使っていたやつ！

あれ凄くかつこよかった！！」

アイスジャベリンですか。

確かにあれは良い魔法ですけど、

「ルルには無理ですね〜。

あなたは炎熱の魔力変換持ちでしょう〜？

氷結変換のナナなら練習しだいでできるでしょうけど」

そう、ルルは炎熱でナナは氷結の魔力変換資質があるのです。

ルルは剣を教えていて、ナナは普通に魔導師向きですね。

「そうですね〜。

それじゃあ今度の魔法のテストで全員が合格できたら良いですよ〜。三人に一つずつ教えてあげます〜」

「本当！？」

「やった！」

「……………（喜びの舞）！！」

三人とも喜んでますね。

しかしナナ、何ですかその妙な踊りは…。

数日後、テストを行いました。

結果は勿論全員が合格です。

私の教え子ですよ？当然です。

「やった！合格！」

「これで必殺技だあ〜！」

「……………（バタバタバタ）！！」

はしゃぎ過ぎです。

っていうか、必殺技といっても普通の砲撃魔法を教える予定ですが、あ、ルルは近接技ですけど。

『マスター。提案があります』

ある日、訓練が終わった後にアルテミスに言われました。

「何でしょうか？」

『そろそろ海鳴に偵察に行ってはどうでしょうか？』

「偵察？転生者のですか？」

なるほど。

確かにそろそろですね。

ルルたちはリニスに預ければ良いですし。

というわけで、来ちゃいました、海鳴に。

「うーん、久しぶりですね。」

前の時は戦闘ばかりでゆっくりと観光できませんでしたからね。」

自然に囲まれていながら、中央にはビル群があります。

自然と人口が調和している良い街です。

「さて、これからどうしましょうか？」

転生者は全員が同年齢ですよ？」

つまり学校には行ってないはずですが。」

『とりあえず高町なのはの両親が経営しているという喫茶店に行ってみては？』

それもそうですね。

ひよっとすると高町さんと一緒にいたりするかもしれませんね。お腹が減ったからというのもありますか…。

そして移動しようとしたんですが、

「ねえ君、今一人？」

ナンパされました。

「クソがッ、誰が彼女だ！ぶち殺すぞ！？
ベタベタ触りやがって、キモイんだよカス！」

『落ち着いてくださいマスター』

あの後も、道すがら数人の男性に絡まれました。
全員昏倒させて道の脇に転がしておきましたが…。
今の私は普通に男物の服を着ています。
それなのにこう何度もナンパされると…。

「…はあ、私ってやっぱり女みたいなんですよね？」

『そ、そんなことはありません！凛々しいお姿だと私は思いますよ！
あ、マスター！例の喫茶店が見えてきました！』

アルテミスが強引に話を切り上げました。
そうですね、今は切り替えないと。

そして店内に入り、窓際の席に座りました。
時間が昼から少し遅いからでしょうか？
あまり人がいません。

カウンターには若い大学生くらいの男性が立っています。とりあえず注文が決まったので呼びますか。

「すみませ〜ん、注文良いですか〜?」

するとこちらに来ました。

むむ、只者ではないですね。足運びが武人のそれです。

「はい、ご注文は?」

「ではコーヒーとシュークリームで〜」

前に教授がこちらのシュークリームは美味しいと言っていたので、それに挑戦しようと思います。

少し待つと注文の二品が運ばれてきました。

さっそく食べてみましたが、かなり美味しいです。

私がつくったのよりも美味しいですね。軽く敗北感。

すると、店に二人の女の子が入ってきました。

片方は見覚えがあります。高町さんです。

もう一人は…。

……………え?

「ああ、なのはに星^{せい}」

その『星』と呼ばれた少女の姿に驚愕しました。

だって高町さんと瓜二つだったんですから。髪型はショートカットですが。

彼女が双子だなんて話は聞いたことはありません。

つまり、

【さっそく見つけられましたね、転生者】

【どうします？接触しますか？】

…どうでしょうか？

正直、相手の神が選んだ転生者です。

普通の人のはずはないでしょう。

つまり、今関わったらその場で戦闘になる可能性があります。

もう一人の転生者も気になりますし。

ま、少しだけ試してみますか…。

店内に他の客が数人いることを確認し、

全力で殺気を振りまきます。

すると、案の定その少女はガタンと椅子から立ち上がって周囲を見回しました。

やはり素人ではないですね。高町さんはキョトンとしています。

っていうか、なんでカウンターのお兄さんも店内を見回しているんですか。

なんですかこの店は？超人喫茶ですか？

しかし、今の反応で大体の力量は把握しました。

彼女は純粹な魔導師か、もしくは半人前です。

今のうちに潰しても良いでしょう。

私は残りのコーヒーを飲み干します。

瞬間、封鎖結界を発動しました。

ターゲットは魔力を持つ者で、高町さんだけを意図的に弾きます。

すると、店内には私と星という少女だけになりました。

彼女は一瞬だけ目を見開くと、元の無表情になってこちらを見つめてきます。

「…あなたでしたか、先ほどの殺気は」

「はい、驚かせてすみません」

お互いに動きません。

情報の取り合いをするためです。

「それで、私に何の御用でしょうか？」

「聞くまでもないでしょう？」

始末しに来ました。もう一人の方はどちらですか？」

この少女を殺すのは訳ないでしょう。

一瞬で詰め寄って首をスパンツです。

しかし、もう一人をまた地道に探すのも面倒です。

「さあ、どこでしょう？」

知っただけでも教えることはないですが」

「そうですか。」

じゃ、死んでください」

情報を話す気はないらしいです。
ならばさっさと殺した方が良いでしょう。

一瞬で近づいた私は、星さんに展開したアルテミスを振り下ろします。

しかしそれは難なく避けられ、店外に逃げられました。

「ありやりや〜？何か変な避け方されましたね〜」

『攻撃が完全に読まれてましたね』

まあ、そんなことを気にしても仕方ないです。
星さんを追って外に出ます。

すると、牽制でシューター何発か撃ってきました。
全部斬りましたけど。

しかし、その間にさらに遠くに走っていきます。

あ、代金はテーブルに置いていたので食い逃げではありません。

「彼女、デバイスを持ってないみたいですね〜」

『デバイスは、持っけていても不思議ではない状況になって初めてクリアされる特典です。』

彼女が現段階でデバイスを持っているのは不自然だと最高神たちが判断したのでしょう。』

なるほど、出自不明な私がデバイスを持っけていても不自然じゃない
つてことですか。

ならば本当に今がチャンスですね。どうせ結界からは逃げられませ
ん。

走って追いますが、彼女の方が土地勘がありますね。
スイスイと道を曲がって行ってなかなか追いつけません。
魔力を身体強化に全力で使っているみたいです。

ようやく追いつくと、そこは公園でした。

ああ、高町さんとフェイトと一緒に戦った海浜公園ですね。

「諦めました？」

「なら、鬼ごっこはお仕舞いですね。」

「ええ、しかし諦めた訳ではありません。」

その時、背後から殺気を感じました。

咄嗟にその場を飛び退くと、私が立っていた場所に白い魔力刃が叩きつけられました。

「つて長つ!？」

よく見たら数十メートルはあります。

フェイトのジェットザンバーと同じですね。

攻撃してきた少年は魔力刃を消すと、こちらに歩み寄ってきました。
手には剣型デバイスが握られています。

「久しぶりだな。」

本当は今の一撃で殺すつもりだったんだけどな。流石だぜ。

「ま、こんなんじゃ終わったら転生しなおした意味がないけどな。」

憎悪のこもった声で私に語りかけてきます。

体中から溢れる殺気が今の言葉が本気であると証明していました。

「黙ってんじゃねえぞ！」

俺はお前を殺すためにまた転生してきたんだぜ？

何かいうことはないのかよ？」

その少年が私に叫びます。

しかし私に言えることはありません。

何故なら、

「……………誰でしたっけ？」

私は彼を知らませんから。

リリ狩るマジ狩る頑張ります〜!! (後書き)

復讐者(笑)、参上!!

「……………はあ？河内さんですか？」

って誰でしたっけ？

「すみませんが記憶にありませんね。
人違いでは？」

そうですね。それが一番納得できます。
私を誰かと勘違いしてるんでしょう。

「ふざけやがって！
なら力尽くで思い出させてやる！！」

そう言っただけが斬りかかってきました。

一合、二合と斬り合ってみますが、なかなかの腕前です。
この歳でこれほどとは、驚嘆します。間違いなく一流です。

しかし、

「そんな短い手足で私と戦えると思ってるんですか？」

斬りかかってきた彼を蹴り飛ばします。

変身魔法を使っている私とはリーチに差がありすぎるんですよ。
子供を苛めてるみたいですけど。

転がっている彼に近づき、アルテミスを一閃！

しようとした瞬間に彼がこちらに手を翳しました。
何の意味が？

すると彼はニヤリと笑い、

「食らいやがれ、AIC!!」

『Active Inertial Cancelor』

瞬間、私の腕が宙でガクンツと止まりました。
押しても引いても動きません。
何かに縫いとめられている？

「星、やれ!!」

「ブラストファイアー!!」

すると彼はその場を飛び退き、星さんが砲撃を放ってきました。
デバイスなしで砲撃ですか。
なるほど、彼は囷ということですね。

『Rejection』

しかし甘いです！

シールド防御を斜めに展開し、砲撃を受け止めるのではなく逸らします。

デバイス有りの全力の砲撃だったらできなかつたでしょうけど。

その間に私の腕を固定する魔法を、特典で解析します。
なるほど、そういう魔法ですか。

その後、すぐにそれを凍り付けにして解除し二人み向き直ります。

「なかなかの腕前ですね〜。

しかし、それが本気というなら興奮めです〜。

ここで仲良くジ・エンドですね〜」

「誰が！

ジ・エンドなのはテメエだ！」

そう言つて彼は術式を展開しました。

ミッド式の魔方阵が彼の前に数個現れますが…。

…何も起こらない？

その時、

「ゴツ、ア!?!」

私は見えない何かに殴り飛ばされました。

それも一発や二発ではありません。複数発の衝撃が私をぶちのめします。

痛みを気にする前に理解ができません。

今、いったい何が起こつたんですか？

攻撃されたという自覚がありませんでした。

不可視の攻撃？

「へっ！どうだよ、龍咆の威力は？
どンドン行くぞ！」

その場に留まるのは危険と判断した私は、その場を飛び退いてとにかく横に走ります。

正面から攻めても的になるだけです。

私の移動した跡が、見えない攻撃によって次々と吹き飛びます。

この威力で連射もできるんですか！？

しかし、いくつか情報も得られました。

あれは直射弾の類で、おまけにそこまで射程が長くないようです。

さらに、ライアの目を借りて確認しましたが、あれは発生した効果をぶつける物理攻撃でもあるみたいです。

魔力を確認できません。

ならば、

「面倒ですし、正面突破です」

『Sanctum Armor』

そして私はアリスの聖王の鎧を纏い、突進します。カラーは私モデルなので白です。

龍咆？そんなの聖王の鎧の前では無意味です！全て弾きます！

「なんだと！？」

「退いてください」

驚愕している彼を突き飛ばし、星さんがシューターを私の足元に放ちました。

おかげで前が見えませんが、

「構わず突撃です〜！」

爆煙を突き抜け、彼女に突進します。

しかし、それは予想済みだったらしく、

「ルベライト」

設置型のバインドに捕まってしまいました。

タイミングが絶妙です。いえ、絶妙すぎます。奇妙なくらいに。

おまけに関節を縫いとめられているので全く動けません。

「ナイスだ、星！」

頭上から声が出たかと思うと、さっきの白い魔力刃を纏ったデバイスを振りかぶった彼がいました。やばいです。避けきれません。

『R e j e c t i o n』

アルテミスがシールドを張ってくれました。しかし、

「そんなのが効くかよおおおおお！！！」

魔力刃がシールドを紙のように斬り裂きました。

マジですか!?

「チツ、逃げられたか！」

さっきの一撃で確実に殺したと思ったのに！
あいつはやっぱり強い！

「仕方ありません。

私が闇の書の一部だった間でもあれほどの強さの人間はそうはいま
せんでした。

むしろ、退けられたことを喜ぶべきでしょう」

星はそう言うが、やっぱり納得できない。

俺があいつらに捕まった時の苦しみを知らないからそう言えるんだ
と思ってしまう。

「次に会ったら殺す…。

絶対にだ！」

そう言って踵をかえした。

復讐の意味もある。

しかし、今度こそなのはたちを守るといふ決意もある。
だから星とも協力した。

この星という少女も転生者だ。

前世はこの世界の闇の書の理のマテリアル「シュテル・ザ・テストラクター」星光の殲滅者だ。

今はなのはの双子の妹で、初めて会った三年前よりも随分人間らし
くなった。

昔は転生者を倒すための人形という感じだったが、今では家族を守
るために俺と共闘するほどだ。

神の連中は初めから俺と星を協力させる気だったらしいが。

「教授、今度こそメエの思い通りにはさせねえ。
ルナをぶっ殺して今度は俺が勝つ!!」

side out

「ただいま戻りました」

時の庭園にやっと着きました。

流星は管理外世界、ミッドチルダまで遠いの何の。

「お兄ちゃんお帰り、ってあ————ツ!」

「……………ツ（驚愕）!!」

「…え、ルナさん!? どうしたの!?!」

「ルナ、何かあったんですか!?!」

皆が私を出迎えるなり驚愕します。

え、え? 何事ですか?

「…あ、お土産ですか?」

「すみません、色々あって買えなくて」

「そっじゃありませんよ!

髪、髪!」

「髪?」

手で確かめると腰までであったストレートが肩までのショートカットになっていました。

ああ、最後の―撃でやられたんですね。

「あ、短くなってますね〜。

リニス、後で整えてもらって良いですか〜?」

「そ、それは構いませんが…。

その、何があつたんですか?」

「いえいえ、少し戦闘があつただけですよ〜。
危うく死に掛けましたが〜」

「戦闘!?

ルナさん、怪我したの!?!」

「…………… (あたふた) !?!」

「いえ、大丈夫ですよ?

この通り、無傷です〜」

髪も別にどうってことないですし。

っていうか、私も切りたかったですからね。

昔は教授たちの猛反発にあってあの髪形でしたが、正直あれって戦闘どころか日常生活でも邪魔だったので。

「……………お兄ちゃん」

お兄ちゃんって強いもんね！次に会ったら殺すんでしょ？」

「え、ええ、はい！勿論です〜！ズタズタにしてやりますよ〜！」

「困ったら私に言ってね！」

いつでも助けてあげる！私、お兄ちゃんの力になれるように頑張るね！」

そう言っただけは奥に走って行ってしまいました。

ルルがいなくなった場が沈黙します。

「…ナナ、ルルって昔からあんな感じだったんですか？」

「……………（ブンブンブン）！！！」

それじゃあ私が預かってからあんな感じだったんですか…。

ふと、あの子に背後から剣で串刺しにされて死ぬ光景が浮かびました。

そしてその死体を返り血に塗れたルルが愛おしげに抱きしめています。

「……………」

ま、まっさかね〜！！

初対面の人にはまず挨拶を（後書き）

ルルが壊れました。

いえ、一つヤバイ段階に進化しました。

ペットの命には責任を持ちましょう！

「ほら、いきますよ。こんにちは」

「……………（ペコリ）」

「…変化なしですね」

「…いたいどうすれば…」。

あ、皆さんこんにちは。ルナ＝ベルツです。

私とナナが二人で何をしているのかというと、会話の練習です。

対人関係で挨拶が重要ということで、いい加減に会話恐怖症をなんとかしようと思ったわけです。

結果はこのとおりですが。

「せめて念話ができれば少しは違うんですが」

「……………（しょぼん）」

念話も会話の内なんですよね。

これじゃあどうしようもないです。

最悪、プラカードに書いて意思表示でも良いんですが…。

その時でした。

「ルナさん！

大変なんです！すぐに来て！」

フェイトが鬼気迫った表情で部屋にきました。
大人しいフェイトがここまで騒ぐとは、とうとうプレシアさんが危篤にでもなりましたか？

「何事ですか？」

「いいから早く！リニスとルルもいるから！」

そしてフェイトに連れて行かれたのは庭先でした。
庭といってもそこら辺の森とかと繋がってるんですが。
するとそこにはオレンジ色の子犬が…。

「あの犬！なんだか苦しそうなの！」

それに普段は群れている種類なのに一人だけで…！
軽くその犬を診ると、どうやら病気みたいです。
外傷がないのに息が凄く荒いので。

「あゝ、何かの病気ですね。
っていうかこれは狼です」

「だから群れから見捨てられたんでしょう。
残念ですが、もう…」

「え、そんな…。
じゃあこの子、死んじゃうの…？」

「ルナさん、リニス！何とかならないの…？」

そう言われても…。

正直、動物の治療は専門外なんです。

ん？オレンジ色の狼？

あっ、ひょっとしてこの狼ってアルフですか！？

あ、危なかったです。

危うく原作キャラを殺すところでした。

「それなら使い魔にすれば良いのでは？」

「「使い魔？」」「……………（疑問）？」

「ルナ、それはフェイトたちにはまだ早いですよ！
もう少しリンカーコアが成長してからじゃないと！
負担が大きすぎます！」

そうなんですよね。

私も少し反対なんです、まあ大丈夫でしょう。

「でも、それ以外に方法はないのでは？」

私は使い魔の契約をする気はありませんし。」

私の手にかかれば優秀な使い魔を生み出せるでしょうが、その分だけそちらに回す魔力が多くなるからしません。
それに前衛型の私に使い魔は必要ないですし。

「…やる。」

リニス、ルナさん。私、この子と契約する！」

「フェイト！」

「そうですね。」

なら、契約内容を決めてください。」

そう、使い魔は契約内容のために主人に尽くします。

それが終わればお払い箱です。

だから使い魔は基本的に使い捨てなのです。

リニスが良い例ですね。

そんなこんなでフェイトは子犬と契約しました。

契約内容は『ずっと傍にいたいこと』らしいです。

ほえ、一生ものですね。

アルフもそれに同意し、本契約は終了…、なんです。

「それじゃあ始めよつか！」

チキチキ、フェイトの使い魔の名前を決めよう大会！」

アルフの名前を決める戦いになりました。

リニスと私は傍観です。

最終的にはアルフに無理やりにもしますが、面白そうなので。

「じゃ、まずはフェイトお姉ちゃん！なんて名前が良いの？」

「え、えっと、『アルフ』なんてどうかな？」

お、フェイトは原作通りに来ますか。
問題は残りの二人ですね。

「次はナナ！何が良いの？」

『ポチ』

ナナはホワイトボードで会話をしています。
っていつかその名前はないでしょう。昭和ですか。

「最後は私ね！」

私は『黄昏を貫く橙の閃光』が良いな！」

「って、それはアニメの決め台詞のパクリでしょう！」

だいたい厨二臭すぎですよ。

こんな名前で呼ばれたら恥ずかしすぎるでしょう！

「か、かつこいい〜！」

しかし意外にもアルフの受けは良かったんです。

ええ〜、将来のことを少しは考えなさい。長いですし。

「…これは『アルフ』で決定ですね〜。

少し男っぽいですか〜」

「ですね。ではアルフ、これからよろしくお願いしますね」

「う、うん、よろしく」

ルルとナナは残念そうですが。
あっ、丁度いいですね。

ここでナナの会話の訓練といきましょう。

「はい、ナナ。」

今からアルフの名前を呼んでください。」

「ッー？……………（ブンブンブン）…！」

案の定、拒否してきました。

でもいい加減に名前くらいは呼べるようにしないと。

「アルフだって名前で呼んでほしいでしょーっ？」

「う、うん、せっかく貰ったから…」

「ね？？ほら、ナナ、せっの」

「……………（ブンブンブン）…！」

「せっの…！」

「……………（ブンブンブン）…！」

「せっの…！」

「……………（ブンブンブン）…！」

「……………呼ばねえと殺す」

「……………(ブンプ…、コクコクコク)!!」

ようやく頷いてくれました。

名前を呼ぶだけなんですから、深く考えなくても良いんですよ。
あれ？リニスたちが引いてますけど、どうかしたんでしょうか？
アルフも半泣きですし…。

「ほら、せいの」

「……………あ……………、るふ？」

初めて聞いたナナの声は、鈴を転がしたような綺麗な声でした。

「…うん！」

「ほら、できたじゃないですか」

合格です！

人の名前を呼ぶのなんて簡単でしょう？

「……………お、……………兄、ちゃん？」

「はい、そうです〜」

うんづん、ちゃんとできてますよ。

お姉ちゃんとか言った日には吊るし上げてましたが。

「そういえばずっと疑問だったんですが、何故ルルたちはあなたを兄と呼ぶのですか？」

女性なんですから普通はお姉さんでは？」

「…あ、私もずっと不思議だったんだ」

「……………あ？」

「お兄ちゃん落ち着いて！」

「……………（コクコクコク）！」

ルルとナナが私を抑えている間にアルテミスが説明しました。
つていうか、二年近くも一緒に暮らしていて知らなかったんですか
!?

「え!?!男性だったんですか!?!」

「嘘！？全然そうは見えないのに！」

「え、ルナって男の人なの！？」

「テメエら、ぶっ殺すぞ！？」

色々と友情とか家族愛とかが深まった一日でした。

石橋は叩き壊してつり橋を造りましょー！

「あー、もうじき無印ですねー」

『ですね。いったいどのように動く御つもりですか？』

「その時になればわかりますよー」

それにしても、リニスがいなくなってからもう一年になるんですねー。

おかげで家事が大変です。

あ、皆さんこんにちは。ルナニベルツです。
無印までもう一年しかありません。

リニスは『フェイトを一人前の魔導師にする』という契約を終えて
消滅しました。

原作とは違い、フェイトの正体を知ることではなく。
これが私にできる彼女への感謝の仕方です。
心残りは原作よりもずっと少なく逝けたでしょう。

「フェイトは今何？」

『プレシアニスタロッサの指示でアルフを連れて出かけています。
どこかの管理外世界のようです』

「そうですねー」

とりあえずは計画は順調です。

フエイトは原作よりも強くなっただけです。
魔改造とまでは行きませんが。

奥の手としてルルとナナの二人もいますしね。
まあ、彼女たちが活躍するのはA・S以降の予定ですけど。

「それで、彼の調査は済んだのですか？」

『はい、完了しています。』

どうやら母親が管理世界の出身のようです。

父親は現地の人間ですが、執務官になっています。』

彼というのは河内さんのことです。

彼は転生者なのに既にデバイスを所持していました。

これではデバイス所持のルールに反します。

それで背後を洗ってみると母親がデバイスマイスターだったことが
判明しました。

父親は管理局の元執務官で、既に殉職されているようです。
あの世界で魔力持ちとは珍しい。

しかも最悪なことに、彼の父親はリンディ＝ハラオウンの知人だそ
うです。

うーん、状況次第では不利なことになるでしょうか？

「ま、それでもなんとかしますけどね。」

最悪、力尽くで強行突破すれば良いですし。」

それにしても、彼は何故か私にご執心なようです。

そして星さんと協力しているということは原作キャラの味方をする
つもりなのでしょう。

なかなかの正義っぷりですが…。

ククク、今回に限っては大失敗ですよ、それ。

管理局を最大に利用できるのが協力者だけの特権だと思わないでください。

無印ではそれを最大に味あわせてさしあげます！

s i d e 星

私は今、家族の旅行で温泉にきています。

家族ぐるみでの旅行なので、アリサとすずか、それに亮の家族も来ています。

もつとも、彼の家族は亮と母親の二人しかいないのですが。

温泉を皆で堪能した後、私と亮は近くの川まで来ました。

別に遊びにきた訳でも散歩をするために来た訳でもありません。今回の旅行は調査が目的でもあります。

「ここで良いのですか？」

「ああ、間違いねえ。

一年後、ここでジュエルシードが発動する。

そしてフェイトとなのはが奪い合う」

「了解しました。

では、時を視ます」

そして私は特典を使用しました。

瞬間、私の頭に映像が流れ込んできます。

一日後

一週間後

一ヶ月後

半年後

一年後

この辺りですね。

流れ込む情報を視る速度を落とします。

くっ、流石に一年後は辛い…！

しかしその甲斐もあり、欲しかった時間に到達しました。
そしてその映像を、頭の中に再生します。

『りゃりゃ〜？また会いましたね〜。』

『最近はエンカウント率が高いです〜』

『はっ！そりゃ、お前がここに来ることはわかっていたんだからな！
待ち伏せするのは当然だろ？』

『わかっていた…？またそれですか〜。』

『あなたは私の心でも読めるんですか〜、星さん？』

『どうでしょう？』

『どちらにせよ、ここであなたを倒せば同じことでしょう』

『それもそうですね〜。』

『ここであなたたち二人を倒せば同』

『

「ぐっ、ううううう！」

そこまでが限界でした。

私の両目からは血が滴り、涙のように流れ落ちます。

「星！大丈夫か！？」

「…ええ、大丈夫です。」

それに、目的の情報は手に入りました」

亮に今見た映像をそのまま伝えます。

すると、亮は私をそっちのけで思案顔になりました。

「…以前から気になっていたのでありますが、あなたにとってあのルナという女性はそんなに重要なのですか？

あなたが彼女について考えている時はまるで別人のようですよ」

私は目に治療魔法を施しながら彼に尋ねます。

「当たり前だ。

あいつに復讐するために俺はまた転生してきたんだ。

今度こそあの女を殺す。それで俺はあいつに復讐すると同時に教授への復讐を果たすことにもなる。

あいつは俺の全てなんだよ」

そう話す彼は本当に普段とは別人のようでした。

彼の復讐心は思った以上に巨大なようです。

しかし、関係ありません。

「なににせよ、早く旅館に戻りましょう。

母さんたちが心配します」

そう、私は私の家族や友人が無事ならばそれで良い。

それらの平穏が脅かされるなら、その元凶を排除するだけです。

私が家族を、皆を、なのは守ります。

s i d e o u t

チートがすぎると友達が減りますよ？

「暗い公園ですね。」

少し中央から外れるだけでめっきり人が見えなくなりましたよ。」

そしてさっきから聞こえる獣のようなものの声。

これは九歳児にはきついでしょう。

あ、皆さんこんばんは。ルナ＝ベルツです。

とうとう原作が始まりました。

現在、ユーノ＝スクライアがジュエルシードの暴走体を封印しようとしています。

あ、失敗した。

そのまま暴走体は逃げ去っていきました。

そして彼は変身魔法でフェレットに…。

そして、彼の元には二つの宝石が残りました。

「やっぱりですか。」

原作では彼が持っているのはレイジングハートのみ。

しかし事前調査によると、彼は二つのデバイスを所持していることがわかったのです。

二つ目のデバイスの名は『ルシフェリオン』。

聞いたことがないこの名を聞いてピンと来ました。

これは星さんのデバイスです。

原作の直前まで待つてみましたが、彼女がデバイスを手に入れた気配はありませんでした。

つまり、あれが彼女の特典によるデバイス。

「彼女の力が未知数である以上、あのデバイスは邪魔ですね」

なので破壊します。

茂みから出てスクライアさんの所へ向かいます。

かなり消耗していますし、私に気づくことはないでしょう。

レイジングハートは少し拝借してログを削除すれば良いのです。

これで私が犯人であるという証拠は残りません。

「テメエがそうするってのはわかってたぜ」

声が聞こえた瞬間、私はバインドとAICで拘束されます。

そして、

「ガッ、ア!？」

背後から剣で貫かれました。

「…あ、あなたは…！」

「よう、久しぶりだな。

お前をこうしてやるのをどれだけ待ち望んだか」

そのまま彼は剣をグリグリとかき回します。

なかなかの外道ですね。外道検定の五級を差し上げます。

「…亮」

「ああ、わかってる。

こいつは人形の方だろ？」

それもばれてるんですか。

彼が言うとおり、私は本体ではありません。

本体は引越して忙しいのでこの魔法で来ました。

リアルタイムで繋がっていますが。

「この魔法のことを知ってるなんて、何者ですか？」

「…まだ思い出せないのか」

背後に立たれているので表情は確認できませんが、不満そうなのはわかります。

…まさか、

「あなたは、まさか…！？」

「ようやく思い出したって遅いんだよ！」

そうやって彼は剣に魔力を込めると、私が自爆するよりも速くこの身体の中にある魔力を霧散させました。
これでは自爆できませんね。

「次は殺す」

最後にそう聞いて、本体とこの身体のリンクが切れました。

「……………」

「ルナさん、どうしたの？」

作業が止まっていたのでフェイトが声をかけてきました。
おっと、これはうっかりです。

「いえいえ、ちょっと気になることがあって」

「そう？何かあったら私たちに相談してね」

「それはお互い様ですよ」

ま、転生者については現地人には言えないんですが。
っていうか、これはアウトなんでしょうか？
まさかあの河内という少年が…、

私のストーリーカーだったとは…!!

それならば初対面の彼が私を知っていた理由もわかります。
きっと前世で私をストーリーキングしていたんですね！
転生してまで私を追ってくるとは…！未恐ろしいですね。

これが執念の成せる業ですか…！
恐れ入りました。

それよりも、

「私があそこに来ることをわかっていた？」

あのストーリーカーさんはそう言っていました。
ストーリーキング
尾行でしょうか？それはないですね、かなり注意はしましたし。
推理したとか？ますますないですね。

今のところで最も有力な説は、原作の重要なポイントを全て回っている、ですが…。
それでは『わかっている』とは言えないのでは？

「うーん、これは保留ですね」

今後の動きによってはわかるでしょう。
特典だという可能性だって高いんですね。
あれこれ考えたって今は無駄です。

「お兄ちゃん、こっち手伝って〜！」

「はいはい」

とりあえずはこっちを終わらせなければ。

今回の引越しにはルルとナナも一緒です。

あんな婆の所に二人を残していくなんてできません。
久しぶりに帰ったら死体でした、なんてことになってそうです。

ふっ、あの婆め！

私が普段から世話をしてやってることのありがたさを思い知りなさい！

s i d e 教授

ち、チート臭え〜！！

なんだよあのマテリアルもどきの能力!?

初見のやつは瞬殺じゃねえかよオイ! いや、理論がわかってても普通は勝てんわ!

未来視? 予知能力? そんなチャチな能力じゃねえ。それは特典の一端の一端に過ぎない。

下手すればランクの差なんか簡単にひっくり返る能力じゃねえか!

っていうか、こんなの世界観ぶち壊しの域に余裕で到達してるだろ!?

しかし手元に送られてきた資料によると、魔力の大量消費だけじゃなく肉体への負荷もプラスさせて保ってるらしい。寿命削ってまで使うのかよ。

ギリギリの裏技だな。

「おいおい、ルナ。」

あの転生者はやばいぜ? お前でも倒すのは苦しいかもしれないぞ!」

「対一でルナが負けるとは思わないが、敵は二人だ。油断しているとやられる。」

「そんなにやばい能力なのかよ?」

「まあ、チートの中では最高クラスだな。」

オマケにあいつは砲撃魔導師だ。そのせいでスペックが反則を超えてバグチートの領域に達してる!」

「私より強い?」

「うん、正面きって倒せるかもしれないのはルナとイデア、ギリ

ギリでアリスだけじゃないか？

不意打ち有りならライアとキャロもいけるかもな。
アリシアは論外だ、出直して来い」

「なんか私だけひどい！」

だがこれは事実だ。アリシアなら向こうが本気なら二秒もかからない。

『タルタロス』以外の勝利方法が思いつかない。
とんだダークホースだな。

っていうか、河内のやつ忘れられてるしwww
本当に負け犬人生だな。何回生まれ変わっても負け犬は負け犬だ。

あいつはマテリアルもどきの本当の能力を知らない、確実に。
知っていれば初戦でもっと攻勢に出ていたはずだからな。

それにあの中で一番弱いだろうし。
前もそうだったな、あいつ。

敗北の神にでも好かれてるか、悪霊でも憑いてるんじゃないか？

s i d e o u t

チートがすぎると友達が減りますよ？（後書き）

星の能力は予知能力だけではないようです。

ちなみに、ルナはゲーム版の方の存在を知りません。

.....え？

私の、観察日記？

これは本当に見ても良いのでしょうか？いえ、大丈夫なのでしょう
か？

中を覗くのはマナー違反ですし、何より恐怖心がわきました。

「と、とりあえず少しだけ。」

失礼します、ルル。」

そして早くも後悔しました。

○月 日

お兄ちゃん、五時に起床。

その後、ジャージに着がえた後、屋外にて剣の素振り。

今日着ているジャージは先週に買った新品で、その白い生地は彼に
とてもよく似合う。

木剣を振る度に周囲に汗が煌めくその姿は神々しいものであり、彼
がどれだけ美しいかが一目で理解できる。

この姿は写真として記録し、ブログにも上げておこうと思う。この
広い次元世界に数多く存在する同志たちのためにも。

ああ、綺麗だよお兄ちゃん。人気者のお兄ちゃん。

でもお兄ちゃんは私のもの私のもの私のもの私のもの

思わずクラツつとききました。

なんでそんな朝早くに起きてるんですか。

ってというかブログって何！？私の隠し撮り写真を載せてるんですか！？

それに同志って誰！？数多くってどういうことですか！？

「あ、アルテミスう」

「マスター、それは一ページ目です。

ひよっとすると次のページからはまともかもしれませんよ」

半泣きで相棒に縋ると、全くありがたくないアドバイスをくれました。

後でブログを消去するのは確定として、確かにルルの日記を初見の印象で決めるのは早計かもしれませんがね。

「そ、それでは次のページを…」

×月○日

お兄ちゃんが昼寝をしている。

彼はあの愛くるしい容姿なのに反し、絶大な戦闘能力を誇っている。寝ていても迂闊に近寄れば気づかれる。

よって家にあつた睡眠薬で無理やり眠らせた。

これで彼はしばらくは目を覚まさない。何をしても。

試しに彼の頬を突いてみるが、可愛らしい寝息以外には何も反応し

ない。
これで寝顔の写真撮影はもちろん、普段は触れないところに触っても

「ひ、ひiiiiiiiiiiii!」

思わず悲鳴を上げた私を誰が責められるでしょうか？

プレシアの婆め、薬品くらいちゃんとしておきなさい!

っていうか、あの日に昼寝が異様に長引いたのはこれが原因ですか!?

なんかもうやだ。見たくないです。

これでまだ数ページだけなのにこの犯罪臭。

プライバシーとか個人情報保護の保護に真っ向から喧嘩を売ってます。

「もうお仕舞いです!

これ以上は私の精神がもちません!」

『しかしマスター、まだ日記は残っています。

ここまで来たら全て確認しておいた方が良いのでは?』

む、それは一理ありますね。

しかし、それにはこれを読まなければなりません。

自分が細かに観察されているこの日記を。

私はとりあえず深呼吸をしました。

心を落ち着けて、精神を平静に保つのです。

そして私はパンドラの箱を開けました。

月 日

今日は私の誕生日だ。

家族の皆が祝ってくれた。プレゼントも貰った。

お兄ちゃんは私のためにヘアゴムをくれた。

炎のような形をした飾りがあり、それはお兄ちゃんの手作りらしい。このヘアゴムは私の一生の宝にすると決めた。

「…あれ？意外と普通ですね」

『ですね。』

やはり普通の日記に途中で変更したのでは？』

それなら良いですけど。

日記をつけること自体は悪いことではありませんね。多少は安心していましたが、

夜、誕生日だから二人きりで寝させてほしいとお願いするとOKし

てくれた。

お兄ちゃんの部屋は良い香りがする。

ああ、これがお兄ちゃんの部屋の香りかあ。

記憶に刻むのはもちろん、全身に循環させるように深呼吸を

「段々と変態チックになってきましたよ。」

本当に大丈夫でしょうか？」

『異性の部屋の臭いが気になってしまつのは仕方ないのでは？

それよりも続きを』

深夜、お兄ちゃんはぐっすりと眠っている。

当然だ。例の睡眠薬を彼が寝る前に飲むホットミルクに混入した。

これで何をしてもバレはしない。

普段は一緒に寝ようとするとナナがついてくるが、今日はフェイトお姉ちゃんと寝ている。

つまり、これから周囲に目を配る必要なく好きなことができる。

その時に服なんて邪魔な布はいらないよね？

私はお兄ちゃんの寝巻きに手を掛け

「ルルーーーーー！！！」

その日、マンションに怒号が響き渡りました。

まったく、あんな恐ろしいブログが存在していたとは！

ルルを吊るし上げて吐かせようとしたが、全く口を割らなかつたのでPCのログを漁ってなんとか見つけました。

削除はしたんですが既に世界中、いえ、次元世界中に私の隠し撮り写真が出回っていました。

その画像の枚数、なんと268枚！どんだけ撮ってるんですか！？日記ももちろん捨てました。シュレッターで細切れです。

「ルル、言い残すことはありませんか？」

「お兄ちゃんのプライバシーを侵害したから殺されるなら本望だよ！覚悟はできるもん！我が人生に悔いなし！」

私が死んでも第二第三の私がお兄ちゃんを盗撮し続ける！」

「良い度胸だ、小娘！」

お前のその腐った脳から破壊してやるよ！」

「……や、やめ……て……！！！」

『落ち着いてくださいマスター』

ナナとアルテミスが私を押し止めようと思いますが、今度ばかりは許せません！

このガキ、コンクリに詰めて海に沈めてやる！

【マスター、彼女を殺さなくても他の転生者を殺して神界に戻れば良いんですよ。

ここで手を血に染める必要はありません。

それに、教授の『家族を大切にせよ』という言葉に逆らうつもりですか？】

む、それはそうですね。

しかし、ここで許したらさらにルルが調子に乗る気はするんですが。

..... はあ、仕方ないですね。

「...わかりました。今回だけは許します。」

ただし、次にこういうことをしたらタダじゃおきませんよ？」

「私の業界ではご褒美で.....、なんでもありません」

今ルルが妙なことを言いましたが、早口だったので聞き逃しました。なんだったんでしょうか？

S i d e l l

「アルテミス、さっきはありがとう。
おかげで助かったよ」

『礼には及びません。
マスターを御するのは私の仕事です』

「でも、ブログと画像が消されちゃったね。
どうしよう。これじゃあ皆にお兄ちゃんのすばらしさを伝えられな
い」

『ご心配なく。画像は全て私の中に保存しております。
ブログはまた作り直せば良いんです。
それに、これでマスターもしばらくは油断するでしょう』

「流石はアルテミス！
お主もなかなか悪よのう〜」

『いえいえ、お代官様ほどでは…』

「『全ては、世界中のルナ様信者たちのために！』」

日記も問題はない。

あれは23代目の観察日記だしね。
整理していた拍子に置きっぱなしにしてみた。
ちなみに今は31代目を使ってるよ！

私たち二人の戦いは終わらない！！
これからもお兄ちゃんの愛くるしい姿を広め続ける！！
でもね、お兄ちゃんの全てを知っているのは私だけなの。
うふふふ、お兄ちゃん、あなたは私のものだよ。

side out

「いつひいいいいいい！！？」

「……お、兄ちゃん？どう、し……たの？」

「い、いえ、なんだか悪寒が……」

あなたのプライバシーは私のもの、私のものは私のもの（後書き）

アルテミス、まさかの同志！？

勝てば官軍、そして逃げるが勝ちです〜！

「ほえ〜、良い湯ですね〜」

流石は温泉です。

日頃の疲れがビシビシと抜けていきます。

あ、皆さんこんにちは〜。ルナニベルツです。

現在、私は温泉にきています。

バスルームとはまた違ったこの感覚は最高です。

何故か入った途端にガン見されましたが。

【ルル〜、ナナ〜、そっちの湯加減はどうですか〜？】

【最っ高だよ〜！！】

【…ル、ルが泳ぐ、から…、恥ずか、しい…】

あ〜、いますよね、そういうガキ。

周りに凄く迷惑だからやめてほしいです。

そうそう、フェイトたちはジュエルシードの探索をしています。

アルフは後で高町さんたちを見に来るらしいですが。

え？手伝わないのかって？

実は私、フェイトたちに黙って一人で探索してるんです。

だからフェイトたちは私が家事のためにこの世界までついてきたと思ってます。

ルルとナナも同じです。

そして私はもうジュエルシードを一つ手に入れたので、もう探す必要はありません。

それに、ストーカーたちは私とフェイトが繋がっていることを知りません。

だから見つかったとしてもノープロブレム！

よって、今日は本当にただの旅行です。

さあ、今日は存分に寛ぐぞ〜！

と、思っていたんですが。

「…フェイト、ピンチですね〜」

現在、夜です。ルルとナナは寝ています。

私はフェイトの戦いっぷりを見に近くまで来ました。

そしてフェイトたちが高町さんたちと戦っています。

しかし数の差で負けている上に、アルフは強制転移で連れ去られてしまいました。

つまり、一対三。オマケに敵のうち二人は格上。

負けたでしょ、これは。

なので遠距離から援護をしようとしたんですが…、

【はっ、コソコソしても無駄だぜ、ルナ！】

私の下に白色の砲撃が飛来しました。
何故ばれたし！？

咄嗟に飛び上がると、そこには星さんが待ち構えていました。
シューターを大量に撃ってきます。

『Sanctum Armor』

ま、効きませんけどね。

「ありやりや〜？また会いましたね〜。
最近エンカウント率が高いです〜」

「はっ！そりゃ、お前がここに来ることはわかっていたんだからな！
待ち伏せするのは当然だろ？」

「わかっていた…？またそれですか〜。
あなたは私の心でも読めるんですか〜、星さん？」

私は星さんに目を向けます。
見るからに戦闘ヴァカのストーカーがそんな戦略的なことをすると
は思えません。

つまり、黒幕は彼女です。

「どつでしようか？」

どちらにせよ、ここであなたを倒せば同じことでしょう」

「それもそうですね。」

「ここであなたたち二人を倒せば同じです。」

【フェイト、今から私が派手に引きつけますからジュエルシールドを持って撤退を！】

【うん、わかった。

アルフにも言っておくね】

うんうん、気が利く子はお兄さん大好きです。

ルルにも見習ってほしいですね。

さて、それでは陽動を始めますか。

星さんの能力鑑定の時間でもありますが。

なので、

「ストーカーには退場していただきます。」

「…は？ストーカー？」

それって俺のことか。」

「亮、後ろです。」

『Protection』

一瞬でした。

瞬く間に星さんがストーカーの背後に回り込み、シールドを展開しました。

そして彼の背後に設置したダガーが大爆発します。
完璧に防がれてしまいました。

つて、え〜!?

ちよつと、何でその重いバリアジャケットでそんな高速機動ができるんですか!?

フェイトよりも速い!?

ますます彼女の能力がわからなくなりました。

私の予想では未来予知か読心術だったんですが。

加速能力?

それじゃあ攻撃が読まれた理由が説明できません。

空間移動?

同じ理由で却下。

二つの特典の併用?

しかし、彼女の特典はおそらく身内設定とデバイスのはず。
もう余りはありません。

な、謎です。

相手の行動を読みつつ高速移動?

そんなのが可能なんですか?

「来ないならば、こちらから参ります」

そして彼女はまたしても謎の高速移動をし、私の背後に瞬間移動しました。

そのまま砲撃をチャージして発射…、つて、え?

「ブラストファイアー!」

『Rejection』

正面きつて砲撃をガードするのは下策なのですが、それしかできませんでした。

だって、砲撃のチャージから発射までが0.4秒だったんですよ!?

普通じゃないです。絶対におかしいです。反則です。

フェイトと高町さんの良いトコだけを取ったような能力です。ほら、ストーカーも呆然としてますし。

そのまま私は吹き飛ばされ、地面に叩きつけられました。聖王の鎧のおかげでそんなにダメージはありませんが。

「…ありえないですね」

『まったくです』

再び私が空に上がると、二人はそのまま待ち構えていました。どうやらここで決着をつける気のようにです。

「もう降参してはいかがですか？

今でも私は全力ではありません。

あなたほどの騎士ならば勝負は見えたはずですよ」

ま、マジで!?!? どんだけですか!?!?

それと、私は分類で言うなら魔導騎士です。

しかし、フェイトはもう撤退したみたいですね。これで陽動はもういらぬ訳なんですが…、

「このままでは逃げられそうもありませんね。高町さんもこっちに来てしまいそうですし」

仕方ないですね。もう少し秘密にしておきたかったです。

「では、私の特典の一端をお見せしましょう」

瞬間、私はデバイスで殴り飛ばされていました。

星さんは私が何をやる気かわかったみたいです。やっぱり未来予知？

しかもそのまま私が殴り飛ばされた先に回り込み、再び殴り飛ばしました。

砲撃は使いません。私が0.4秒もあれば逃げられるとわかっているみたいです。

しかし、それは聖王の鎧の前では無意味です。凄い威力なので少し痛いですが。

さて、それでは逃げますか。

「能力発動、『ライドインパルス』」

side 亮

空中でルナを殴りまくっていた星が突然止まった。
そしてそのまま超早撃ちで遠くに三発の砲撃を放つと、そのまま降りてきた。

「…星、何が起きたんだよ…？
さっきの能力は何なんだ！？」

「それは答えることができません。
あれは私の切り札です。そう易々と人には教えられません」

「……………チツ！
わかった、それはもう良い。
で？ルナはどうしたんだ？あれだけ食らえば流石に…」

「…いえ、逃げられました。途中で信じられないほど加速し、そのまま一気に。あのフィールド防御をなんとか抜こうとしたのですが、間に合いませんでした」

「加速だと？それがあいつの能力か」

あいつ、ユーナを散々馬鹿にしておいて、結局は同じ能力かよ。だが、加速ならば問題ない。俺の最後の特典と相性は最高だ。次なら確実に勝てる。

(…それだけではないと思いますけどね)

「あ？何か言ったか？」

「いえ、特には…」

side out

逃走完了！

危なかったです。まさか距離を離れたのに長距離砲撃をお見舞いしてくると思いませんでした。

「いや、それにしても速いですね」。

流星はナンバーズ最速の能力です。感覚加速まで付いているなんて便利ですね」

『いえ、おそらくは本家のよりも速いでしょう』

かもしれませんね。

なんせ無駄を省き、魔力を上乗せして加速力を増やしましたし。

「さてと、それじゃあ旅館に戻りますか？」

私も少し眠いですし」

フェイトはもう家に戻っているでしょう。

さっき連絡がありました。

『しかしマスター、旅館はもう転生者が警戒しているのでは？』

「問題ありません」。

見つからずに部屋に戻れば良いんですよ」

さて、部屋に戻りますか？」

「能力発動、『シルバーカーテン』」

そのチートをぶち殺す!!

うん、わかりませんね。

さっぱりです。

あ、皆さんこんにちは。ルナ＝ベルツです。

何を悩んでいるのかというと、星さんの能力についてです。

相手の攻撃を先読みしつつ超高速での移動と攻撃…。

今のところ星さんの能力でわかっているのはこの三つですが…。

正直なところ、全くわかりません。

最初の二つならば読心術か未来予知、後の二つならば加速系、もしくは移動系の能力でしょう。

しかし、この二つがどうしてもイコールで繋がりません。

「アルテミスはどう思いますか？」

「不明です。」

現段階では情報が足りません」

「ですよね」

そもそも、あれで全力ではないらしいですし。

いったいどれほどの戦闘力があるのか、皆目見当も付きません。

マズイですね〜。

次の戦闘で見破れなければアウトです。

その次では管理局が介入してきてしまいますし。

よし、

「次の市街地での戦闘で正体を暴きます〜。

出し惜しみはできる限りでなしです〜」

side 星

私たちは今、都市部でジュエルシードの探索をしています。

亮が言うには今日ここで発動するらしいです。

今回もあのルナという女性（同い年のはずだから少女？）が来ることはわかっています。

断片的な情報しか手に入らないとはいえ、それは確実です。

あまり先のことだとそうなるのが弱点でもありますね。

「もう遅い時間ですね。

本来ならば帰宅しなければならぬ時間なのですが」

早く発動しないでしょうか。

私の予知によればもう発動しても良いのですが。

【亮、そろそろ発動します。準備してください】

しかし、彼からの返事はありません。

届いていないのでしょうか？

「今回こそはルナを倒す」と自慢げに話していたので、帰ってはいないはずですが。

【亮、聞いているんですか？】

【残念ですが、聞いてません〜。

彼は今、どこかの次元世界を冒険してます〜】

念話が聞こえた瞬間に魔力流が発生し、ジュエルシードが発動しました。

咄嗟にユーノが結界を張ったので街に被害はないですが。

【さてと、ジュエルシードは高町さんたちに任せましょうか〜

私たちは私たちでやるのでしょうか〜？】

【…亮をどうしたのですか？】

【戦闘になるとあなたが来そうだったので、静かにどこかの次元世界に転送しました〜

今頃はその世界で迷ってるんじゃないでしょうか〜】

なるほど。それは気づきませんでした。

体術だけではなく魔法の技量もかなりのものようですね。

亮には悪いですが、この辺りで決着をつけた方が良くもしません。

【では、始めましょうか〜】

その声が聞こえる前に私は半歩引きます。
すると私の身体スレスレを狙撃が撃ち抜きました。

【そうですね。

いえ、これで終わりにしましょう】

side out

む、やっぱり避けられましたか。

ライアの転送魔法を利用した狙撃を真似てみたのですが。

「アルテミス、連射しますよ」

『Silent Owl』

あらゆる角度から星さんを狙撃してみますが、全発を回避されま
した。

そう、回避です。

どうやら私の矢の効果まで察知されているみたいですね。
しかし、ここで能力の可能性の一つが消えました。

読心術ならば私の思考を読んでいることになりました。
しかし、彼女は一向に私の居場所にとどり着きません。
これで彼女の異様な回避能力は予知能力に決定です。

さあ、これ後はあの高速移動だけです！

きっちり解析してあげますから、存分に使ってください！

「アイスダガー、一斉攻撃です〜！」

彼女の周囲にアイスダガーを数十個転送しました。

しかし、星さんの顔に焦りはありません。

やはり予知されていたか。

『Ice Detonation』

構わずに一斉に爆破。

ビルが数棟吹き飛びました。

しかし、私にはそんなことは目に映りませんでした。

何故ならば、

「…空間移動？え、え？」

星さんの移動は確実に捕らえました。

ライアの目を使っていたんです。どんなに速くても追いきれません。

その結果、あれは転送魔法の類の能力だとわかりました。

だって位置が突然変わって移動途中がなかったんですから。

そして、それは完璧に私の特典で解析しました。

それなのに何故私がこんなに驚いているのかというと、

「な、なんですか、あの魔法は！？

あんな魔法がこの世界に存在して良いんですか！？」

解析の結果、あの魔法は時間魔法と空間魔法の複合であるという「

とがわかりました。

あ、そこ！時間魔法って何だよとか思ってますね？

流石にジ○ジヨみたいなことはできませんが、物質の時間遅延や時間停止はある程度は普及しています。ロストロギアの封印に使われている封印魔法などがこれに該当しますね。

はい、ここで問題です。

時間魔法 + 空間魔法はなんでしょう？

正解は、

「次回に続きます」

真実はいつも一つというのは偏見です！

答えはわかりましたか？

正直、私は出題者でありながら未だに答えを疑っています。
これは転生者ルールに反するのでは？

あ、挨拶が遅れました。ルナ＝ベルツです。
それでは、張り切って答えを言っていきましょう！

side星

私、高町星は苛立っていました。
さつきから狙撃ばかりで一向に敵の姿が見えないからです。
一応エリアサーチで探してはいるのですが、狙撃を撃たれ続けているために集中できません。

【いい加減に出てきてはいかがですか？】

出てくるはずはないと知っていても、つい言ってしまう。
このままでは最悪、狙撃で髑り殺しにされてしまうでしょう。このままならばですが。

(使うべきでしょうか？あれを…)

あれを使えば確実に勝てる自信があるし、すぐに見つけることもできるでしょう。

その代わり、数年はこの特典を使えないくらいにダメージを負うで

しょうが。

すると、

【そうですね〜。

このままでは埒が明かないですし〜】

意外なことに素直に出てきました。

目的はわかりませんが、これは好機です。

このまま一気に勝負を…！

『戦う前に、答え合わせをして良いですか〜？』

その言葉を言われるヴィジョンが浮かび、思わず動きを止めてしまいました。

答え、まさか…！？

「…その様子だと、私が言うことを予知できたみたいですね〜。反応と現実のタイムラグから、5秒といったところですか〜」

くっ、しまった。情報を与えてしまった。

相手のペースに乗せられてはいけない！

「…なんのことですか？

そもそも、そんなことを私が聞く必要は

「

「平行世界間を移動してるんですよ〜、それ」

「……………」

「ま、聞かなくても結構ですよ？」
私が勝手に話しますから」

「まずいですね。これは迂闊に動けません。

敵が予想した私の能力は、おそらく完全に当たっています。
最悪、対策を立てられているかも…。」

「あなたの能力、それは自分がいる四次元的な距離から五秒以内の時を流れる平行世界を自在に行き来するものです。」

つまり、あなたは私が初めて会った星さんであって星さんではありませんね？」

移動する前とは99,999,999以下アドレスだけ同じですが、別の平行世界からやってきた別人。
それがあなたの能力ですよね？」

「……………」

「未来予知は五秒後を進む世界から知識を移動させていたんですよ？」

そして、あの瞬間移動は過去か未来の五秒以内に自分が移動していた可能性のある世界に移動するんでしょう？」

「……………」

「今までずっとタネを考え続けていたんですが、これは流石に誰も

思いつきませんよね。」

皆、あなたが二つの能力を使っているように思えますって。それがまさか、そんな反則チートを使っているとはね。」

っていうか、戦術の幅が無限に広がるなんて反則です。」

あくまで、可能性があれば良いんですから。」

…98点といったところですね。

私の能力をほぼ理解してますが、完全正解ではありません。

…それにしても、おかしい。

私はさつきから彼女に攻撃を仕掛けようとしています。

なのに、どうして反撃に合う光景しか予知できない…!?

「うふふふ、わかりますよ？」

さつきから攻撃を仕掛けようとしていますよね？でも無駄です。」

既にああなたの能力は完全に攻略しました。」

あなたはもう私に黜り殺しにされるしかないんですよ。」

「…なるほど。」

こちらもわかったことがあります。」

どうやら彼女の能力は解析系のようにですね。

見ただけで相手の魔法を解析する。そして、それを自分でも扱えるようになる。」

それに、あの『聖王の鎧』…。

亮が言うには、あれは嘗ての彼女の仲間の能力であつたらしいです。

これらの特徴からわかることは、

「アルファステイグマ複写眼、もしくは写輪眼ですか？」

確か、両方とも見ただけで他人の魔法をコピーするとか…。前者ならば暴走の予兆がないのは不思議ですが」

「…なんでこの世界出身のあなたがその二つを知ってるんですか！？」

あれ、この世界にもありましたっけ？」

「ありませんよ。」

転生する前に少し勉強しただけです」

NAOUTOは少し長かったです。

それにしても、やはり反撃を受ける光景しか浮かばない。おかしい、どうすれば、どうすれば良い…！
くっ、ここはやはり退くべきで……。

……………んん？

「…まあ、どっちにしてもあなたの勝ちはありません」

「……………」

「…？どうかしましたか？」

状況が絶望的すぎて言葉もありません

「

「…騙しましたね？」

side out

星さんがそう言つと同時に、砲撃を数十発、同時に撃ってきました。

つて、数十発！？

「多っ！？」

咄嗟に避けようとしたが、気がつくと四方八方をバインドが囲んでいました。

あ、これ死んだかも…。

そして直撃。

爆音が結界中に響き渡りました。

「死ぬかと思いましたが」

『よく死にませんでしたね』

私もそう思います。アリスの最強防御があつて良かった。

『ケルベロス』って凄いですね。対私用に作っただけのことはありません。

それにしても星さん、確かに前回は本気じゃなかったんですね。手加減されていたんでしょうか。もしくは何かリスクがあるとか？

「やはりそうですか。おかしいと思つたんです。

どんな攻撃方法を使つても反撃してくるなんて普通はありません。それに、撤退しようとしたのに反撃される光景が浮かびました。

何か、思考を誘導する魔法を使つていましたね？」

…ば、ばれたあああ!？」

はい、そうです。

あんな反則能力に対抗する方法なんて思いつきませんでした。

今で騙されてくれればなく、って感じでハツタリかましました。

くっ、アリシアめ！あなたの能力は全然役に立ちませんでしたよ！

もっと使える魔法を開発しなさい！

(え、私のせいなの!?)

これだから幻術馬鹿は！

クロスレンジも碌にできないくせに最強なんて片腹痛いんですよ！

出直してきなさい、この三下！

(さらにボロクソ言われた!?)

あのアホ金髪め!

そんなんだから方舟の馬鹿クイーンって呼ばれんだよ!
九九もできねえくらい馬鹿のくせによ!

(馬鹿クイーンって何!?それに九九くらいできるよ!?)

さて、これからどうしましょうか。

星さんはかなり怒ってるみたいですし。
見逃してくれたりは、

「私をコケにしてくださいさつたお礼です。

これから、私にでき得る限りの全力であなたを殺します」

無理そうです(涙)

誰か助けて〜!

「お見せしましょう、私の特典の真髄を。

せめて二秒はもってくださいね?」

そして私は改めて思い知りました。

彼女の特典は反則です。

『Parallel Theater』

星さんのデバイス『ルシフェリオン』の電子音が響きます。

それが私には死刑執行の合図に聞こえました。

…私、死ぬんでしょうか（涙）

真実はいつも「と」といふのは偏見です！（後書き）

次回、星が本気を見せます！

裏切り、裏技、不戦勝が私の三原則！！

side o t h e r

「え、えくと、帰って良いですか（涙）」

「却下です」

ルナの泣き言は一刀両断された。

しかし、ルナと同じ立場に立った者ならば同じことを思うだろう。
なにせ状況が状況だ。

「…星さんの能力って、平行世界の移動ですよね？」
てつきり私はちょっと過去をやり直せたり、少くし未来が見えるく
らいの能力だと思ってました」

しかし、星の力はその遥か上を行っていた。
それはルナの前にいる八人の星の姿が証明している。

「まさか、他の平行世界の自分を呼び出すことができるとは。
絶対に能力制限を破ってますよね？」

そう、星の奥の手とはこれだった。
平行世界に存在する自分をこの世界に呼び出す。
しかも全員が元の星と全く同じ実力なのだ。いきなり敵の戦力が八倍になれば卑怯だと思っただろう。

「これが私の全力、『パラレルシアター』。
主演は私、脚本も脇役も観客も私の殺戮劇です。もちろん最後はバツドエンドですが」

瞬間、八人の星の姿が掻き消えた。
四方八方に散った星は、一人一人が数十発の砲撃を放ってくる。
その合計は数百発に相当する。全方位からの面の攻撃だ。

「どないせえっちゅ〜ねん!!」

『Ride Impulse』

ルナも負けじと加速による回避を試みるが、流石に分が悪い。
数発の砲撃を受けてビルに叩きつけられる。

たかが数発だが、一発一発が並みの魔導師を一撃で墜とす必殺の魔法だ。

流石のルナも限界ギリギリである。

「…これで能力のレベルが落ちないなんて絶対に変です〜。
何かリスクか制限があるはずなんです〜」

星の能力を完全に解析したルナだからこそ言える。あれは普通じゃない。絶対に何かカラクリがある。

『マスター、彼女の魔法を使用してみてはいかがでしょう？少なくとも撤退くらいはできるのでは？』

「無理です。さっき試しに使いましたが、三秒先の未来予知が限界でした。」

世界間の移動なんて夢物語です。」

そもそも、星とルナでは体質からして違うと言う。

人間が魚の体の構造を理解してもエラ呼吸ができないのと同じだ。完全なコピーというのが不可能らしい。

「でも、あの魔法の弱点は見つけました。」

所詮は未来の自分の知識しか手に入らないんですよ。」

五秒後の自分が知らないことはわからないんです。」

『?』

「あはは、わかりにくかったですか？」

つまり、気がついたら死んでいたって状態にすれば良いんですよ。」

しかし、それでは確実とは言いがたいですね。」

特典に頼りすぎていて危険です。

…あつ、そつだ。

よく考えれば、わざわざ彼女と戦う必要なんてないじゃないですか。彼女の、最っ高の足手まといを使えば…。

『…フェイト、聞こえますか？』

side out

side 星

彼女を砲撃で吹き飛ばしたのは良いのですが、砲撃の数が多すぎて見失ってしまいました。

この辺りは要改良ですね。

「……………グツ、ゲホツ！」

すると突然苦しくなり、咳き込んでしまいました。

口に手を当てると、その手には少量ですが血が付着しています。

「魔法を数分維持しただけでこれですか…！」

この『世界移動魔法』は絶大な力を得ることができません。

その代償として身体に相当の負担がかかり、ここまで大規模な魔法をこのまま使えば数年は戦えなくなるでしょう。

「…関係ないですね。」

ここで彼女を倒せばそれで終わりです」

そして彼女の捜索に戻ろうとしました。
しかし、

「…ッ!？」

これは、魔力反応ですか？」

五秒後に莫大な魔力が一つのビルから溢れるのを察知しました。それは、

「あそこですか」

瞬間、全員の集中砲火がそのビルを襲います。

一瞬にしてビルは周囲のビルごと吹き飛び、跡にはクレーターしか残っていません。

「…なかなかの強敵でしたが、最期はあっけなかつたですね。ともかく、これで他の転生者を打倒するという目的は終了です」

亮とは別に戦う必要はないと神に言われています。つまり、これで私は自由になったということです。

私は未来視をやめて、ようやく戦闘態勢を解きました。周囲にいた平行世界の私も消えていきます。

「亮には悪いですが、これで」

【はいはい、それでは一方的な脅迫を開始します！】

「なっ!?!」

突然聞こえてきた念話に、私は耳を疑いました。

彼女は確実に殺したはず!?!それなのに、どうして…!?!
未来視を再び使い、私は攻撃に備えました。

しかし、もう先程までのように戦うことはできません。

思った以上に『パラレルシアター』は身体に負担をかけていたようです。

身体が重い…。

「お〜お〜、星さん、お疲れのようですね〜?」

【残念、さっきのは私の人形です〜。

私はコッソリ脱出してたんですよね〜】

すると、目の前に彼女が現れました。

フェイトとその使い魔も一緒です。

気絶したなのはを連れて。

「なのは!?!」

「動いたら殺す」

ルナと一緒に現れたフェイトが、なのはの首元に魔力刃を押し付けます。

それだけで私は動けなくなりました。

「…どうして!?!」

なのはがあなたに大敗するなんて…!」

原作と違う!

それにユーノもいたはずですよ。

それで私に助けを求める間もなくやられるなんてことが…！

それにどうして彼女がルナと一緒にいるのです！

まさか、初めからグルだった？

「確かにこの子は強かった。

でも、私の方が強かった。ただそれだけだよ」

「アタシたちを舐めんじやないよ！」

そんな馬鹿な…！？

彼女たちの強さが原作と違う…！？

「ふふふ、私の生徒は優秀でしょ？」

飲み込みも早くて、教える側としても楽しかったです」

そこでようやく私は理解しました。

フェイトを裏から操っていたのはプレシア＝テストロッサではなくルナであるということ。

「それで、肝心の脅迫ですが」。

とりあえずは持っているジュエルシードを全部いただけます？」

【もちろんこれは建前ですよ？

本当の要求は、この戦いからの脱落です】

会話をしながらルナは念話で話しかけてきました。

くっ、卑怯な…！

今、私は全力で未来をシミュレーションしています。
砲撃の雨、背後からの強襲、他にも数パターン。
しかし、どれをやってもルナがなのはの首を刎ねてから吹き飛ぶと
いう光景にしかありません。

何か、何か手は…！

「返答はどうですか？」

【無駄ですよ。】

私は0.1秒あれば高町さんの首を刎ねられます。】

その言葉に私は絶望しました。

それ以上速くなんて、どうやっても間に合いません。

「…わかりました。

私が持つジュエルシードをお渡しします」

【だから、どうか見逃してください…！

お願いです…！】

「そうですか。でも、それって本当ですか？」

渡すふりをして不意打ちとかしそうです。」

【わかってないですね。】

正直、私にはもう勝利する方法なんてないんです。

だから本当は高町さんを道連れに爆死する気だったんですよ？
せめて今後に響く最期が良いな。って】

その言葉に私は戦慄します。

なのは道連れに爆死？そんなこと…！

【絶対にやらせません！】

【でしょう？】

ですから、あなたの為を思って、諦めていた勝負にわざわざ勝つてあげようと思ったんです。

ああ、本当はもう勝ちなんて諦めていたんですけどね？

第二の人生もこれまでか、残念だな、って思っていたんですよ？】

こいつ…！

【ほらほら、早く私に負けを証明してくださいよ。

そうすれば諦めていた勝利を私が入れる代わりにあなたの大切な家族を返して差し上げますから】

……………。

「…お願いします。

もう私の負けです…！ですから、なのは返してください…！」

私はできる限りの気持ちを込めて、彼女に頼みました。頭を下げる以外にできることなんて私にはありません。

悔しい…！

こんな卑怯な手で敗北することになるなんて…！

しかし、

「頭を下げるくらいなら誰にだってできます」

【脱落が許されるのは、心の底から敗北を認めた時だけですょ？
まだ諦めていないみたいですね〜】

「…そんな!？」

【では、私はどうすれば良いのですか…?】

もう、これ以上の敗北の証など…。
しかしルナは簡単だと言いました。

「【跪いて私の靴を舐めていただけます?】」

side out

side 亮

俺が戻ってきた時、全ては終わっていた。
結界は既に残っておらず、街は喧騒を取り戻していた。

【星、なのは、ユーノ!】

返事しろ！無事か！？】

必死で三人を探し回ると、とあるビルの上で気絶している三人を見つけた。

どうやらルナに敗北したらしい。

見た感じ、三人とも怪我はないようだが…。

「おい、おい三人とも！起きろ！」

すると、星が一番に目を覚ました。

「星、大丈夫か！？」

「…はい、大丈夫です」

星は軽く自分の身体を確かめた。

どうやら本当に大丈夫らしい。

そして、俺はさっそく星に状況を聞こうとした。

特典を使っても倒せなかったのか、と。

しかし、

「星、お前とく

ッ！？」

話せなかった。

特典という単語がどうやっても。

喉から声が出ない。

必死に声を出そうとするが、全く『特典』から先を話せない。

(どづいうことだよ、これは!?)

すると、星の足元にメモ帳の切れ端を見つけた。

そこにはメッセージが書かれている。

宛先は俺、差出人は…、

「…ルナ!？」

それを拾い上げ、急いで目を通す。

そこにはこう書かれていた。

『ストーリーカーさんへ

星さんは脱落しました〜(^O^)/

いや〜、これで残りはあなた一人ですね〜(笑)

ザマミロ〜www

ルナより』

星が脱落した。

その事実を俺は信じることができなかった。

しかし、認めるしかなかった。

転生者についての情報、つまり特典について話せなかったのだ。つまり、星はもうこの世界の人間だ。

前世の記憶なんて欠片も残っていない。

もう、俺の真の味方は誰もいなかった。

s i d e o u t

ルールとマナーを守って楽しく外道をしましょう！

「ククククク、にゃ〜はっはっはっはっはっはっは！」

愉快痛快、こんなに楽しいのは久しぶりです！

あ、皆さんこんにちは！ルナニベルツです！

なぜ私がこんなに機嫌が良いのかというと、久しぶりに他人を陥れたという快感に酔っているからです。

いや〜、なんだかんだ言って私も方舟の一員なんですわ〜。

こう、人が悔しそうにしているのを見るとゾクゾクするというか。私ってSなんですかね〜？

「そういえば、そろそろ管理局が介入してくるんですよね〜？」

『予定では今日の戦闘です』

なるほどなるほど〜。

つまり、今日が勝負ということですね〜。

「ククク

確か、ストーカーとハラオウン家は知り合いましたね〜。

つまり、彼はここで一気に戦力を増強すると同時に管理局を味方につけるつもりです〜」

しかあ〜し！

そうは問屋が卸しません！

今日の戦闘が決定打になるのはそちらの方です！

「ふふふ、せいぜい墓穴を掘ってください。」

掘削作業があなたの仕事ですよ。生き埋めにしてあげます。」

そういえば、今日はプレシアの婆にフェイトが報告に行くと言っていましたね。

どうでしょうか、放っておくのもアレですしね。」

「フェイト、いませんか？」

するとリビングからフェイトが走ってきました。

こら、廊下を走ってはいけません。

「なに、ルナさん？」

「今日って庭園に帰るんですよ？」

「うん、そうだよ。」

後で母さんにお土産を買っていいことと思ってるんだ」

…うわ。この顔…。

完全にあの婆を信用しきってますね。」

大丈夫でしょうか？」

「フェイト、またプレシアさんが虐待紛いなことをしてきたら逃げなさいね。」

自分で働かないあの人にそんな資格はないんですから。」

「…でも、それは私が悪いから」

あちゃ〜、こりゃ駄目ですね〜。

こいつ、ただのマザコンじゃない！よく訓練されたマザコンです！

【アルフ〜、聞こえます〜？】

【なんだい？】

【あの婆が鞭打ちでも始めた時には、フェイトの意思を無視してでも連れ帰ってくださいね〜。】

私が許します〜】

【…あいよ。】

アタシもあれはやりすぎだと思ってたんだ】

ふう〜、これで一安心です。

side 亮

いつもと変わらない学校からの帰り。

なのはと星と分かれて帰る普段通りの道だ。

だが、変わってしまったことだっただけである。

もう、星は俺の味方じゃない。

星がいなければ、俺は完全に後手にしか回れないことにようやく気づいた。

星がいなければ、もうフォローをしてくれるやつがないことに気づいた。

星がいなければ、俺は…。

「駄目だ！ネガティブになるな！」

そうだ、次の戦いで決着をつければ終わる！

ルナの能力は加速だ。ならば俺の特典にかなうはずがない！

「そうだ、今日はクロノたちも来る。

これであいつらは完全にチエックメイトだ」

リンデイさんとクロノとは古くからの交流がある。

親父が本局の執務官だったからだ。

それで、年に一度くらいのパースで会ってモいる。

最悪、無印を乗り切れればあいつは袋の鼠だ。

世界中があいつの敵なんだからな。

すると、

「…ッ!？」

これは、ジュエルシードか!？」

ジュエルシードの反応があった。

今日で終わりにしてやるよ、色々とな！

【亮君、ジュエルシードだよ!】

【私たちはこれから向かいます。

あなたも急いでください!】

【わかった。

俺もすぐに向かう】

ルナ、今日でケリだ！

「カリバーン、セットアップ！」

『Standby, ready, setup』

そして俺が暴走の現場に着くと、そこではもう戦闘が始まっていた。なのはと星、フェイトの三人が暴走体と戦っている。

「…ルナはどこだ？」

辺りを見回すが、どこにもいない。

今日は来ていないのか？

『マスター、上です！』

「なに！？」

真上を見上げると、太陽に隠れて影が少し見えた。それは段々と大きくなり、

「氷華一閃！！」

ルナが襲撃してきた。俺はそれを咄嗟にかわす。基本、あいつの攻撃を受け止めるのは危険だ。

バリアは凍らされるし、剣は絡め取られる。つまり、避けるしかない。

「へっ、とうとう来たかよ。

今日で全部を終わりにしてやる！」

「そうですか〜。

でも、私も負けるわけにはいかないのです〜」

そう言っつてルナは斬りかかってきた。

俺も零落白夜を展開して応戦する。

お互いに鏝迫り合いをするようなことはしない。

どちらの剣も、触れるだけで一撃必殺のものなのだ。

全ての斬撃をかわし、その隙を逃さない。

「…やりますね〜。

まさかこんなに高度な戦いをできるとは〜。

素直に感心しました〜」

「そうかよ！

だったら俺の本気を見せてやる！」

行くぞ、カリバーン！

「トランザム！」

『TRANS・AM』

s i d e o u t

彼の魔力が全身から噴き出し、その身体が魔力光で白く染まりました。

感じられる魔力も激増し、リミットブレイクよりも能力を引き出しているようです。

だからこそ私は言いました。

「それは作品が違うー!!」

思わず叫んだ私は悪くないと思います。
だってトランザムですよ!?トランザム!

もっと統一感を出しなさいよ!

どんだけロボ系が好きなんですか、あなたは!
節操がないですね。

「それがどうした!
これでお前の加速対策は万全だ!
その他の能力も上がっているんだぜ?
負けるわけがねえ!」

そう言って彼は突っ込んできました。

うわゝ、面倒です。

『Ride Impulse』

私も加速し、彼の速度に合わせました。
うゝん、確かに速いんですけどね。

まあ、今回の戦いでは有効かもしれませんが。

『マスター、どうなさいますか？』

「私の答えは決まっていますよ？」
彼がどんなことをしようと、もう管理局が来ますしね。」

なので私は、

正々堂々、全力全開で、

「弱々しく負けてみせます〜！」

side 亮

俺がルナに突撃すると、あいつは加速の能力を使って応戦してきた。
しかし、トランザムの最中は馬力が違う。

剣を打ち合ってみてわかった。

「この勝負、勝てる！」

すると、

【本当にそうですか？】

ルナが念話で話しかけてきた。

高速戦闘において、戦闘中に直接話すのは舌を噛みかねない。だから俺も念話で応えた。

【当たり前だ！

お前もわかつただろ？

トランザムの最中は速さ以外の能力も上がるんだよ！
もうお前に勝ち目なんてねえ！】

【そうでしょうか？】

それにしてもその言葉、昨日の星さんも言っていた気がします。あの負け犬さんのね〜】

【星を馬鹿にするな！】

俺は頭に血が上り、零落白夜を全開にしてあいつに斬りかかる。

すると、今まで避け続けていたあいつが受け止めた。

馬鹿め！受けきれんはずがないだろうが！

予想通りルナは吹き飛ばされ、使っていた変身魔法も解けた。

どうやら零落白夜に無効化されたらしい。

その表情は今まで見たことがないくらい弱々しいもので、俺は勝利

その声が聞こえた瞬間、俺はバインドに捕まっていた。
この魔力光は、クロノか!?

「亮、君は何をやっている!今のは殺傷設定だっただろう!
僕が止めていなければ殺していたぞ!」

その言葉に俺はハツとなった。
そうだ、俺は何を…。

「う、うわ〜ん、助けて執務官さ〜ん!」

すると突然ルナが動き出し、クロノの後ろに隠れた。
は?どういうことだ?

「君は、あの金髪の子の仲間か?」

「そ、そうです〜。」

あの子に攻撃しようとしていた彼を見つけたから気絶させようとしたら、彼が突然殺そうとしてきて〜!」

【傍から見ればそうなりますよね〜?】

ルナが泣きながらクロノに訴える。

同時に念話で俺に話しかけてきた。何のつもりだ?

「それはこちらでも確認した。

突然彼が殺傷設定で攻撃を始めたのもだ」

そしてクロノがこちらを責めるように見てきた。

そうか…!あいつの狙いは…!

「わ、私はずっと非殺傷設定だったのを良いことに、彼が無理やり
く！

う、ううっ、殺されるって思いました」

【本当ですよ？】

私はずっと手加減していたんですから」

「わかった。一先ず、君にも同行を願う。

状況を説明してくれるならば君の安全は保障する」

「あ、ありがとうございます」

【私を殺したければどうぞ？】

その時は全力で逃げるだけです」。

まあ？管理局に？逆らってまで？殺したいならですが？】

「て、テメエ！」

俺は怒りを抑えるしかなかった。

そっだ、全部あいつの言うとおりだ。

傍から見れば危険なのは圧倒的に俺で、あいつは保護されるべき人
間だ。

貴重な情報源でもある。

完全に嵌められた！

管理局の到着を待っていたのは、あいつの方だったんだ！

「ど、どうしてそんなに睨むんですか？」

【あなたに睨まれる覚えは…、あ！】

すると、ルナが（念話で）声を上げた。

「あの、何ですか？」

【あなた、キングオブ負け犬の河内さんじゃないですか。キャロのサンドバックになって死んだ（笑）あまりに情けない面だったんで忘れてました】

こいつ…！

「そ、そんなに睨まれても困ります。」

ジュエルシードは逃げたフェイトが持っているので「

【私の中では、負け犬＝あなたなんですよ。うわ、、どうでもいいこと思い出しちゃいました】

「…デメエ！」

すると、クロノが間に入ってきた。

「亮、やめないか！

君と彼女の間に何があったかは知らないが

」

「初対面ですよ？」

この街に来てから初めて会いました」

【そうでしょう？
転生者の河内さん？】

こいつとの因縁を話すには、どうしても転生者システムを話すしかない。

だが、それはルールに反するから不可能だ。

ルールを逆手に取られた俺になす術はなかった。

もう、俺にはこいつと戦う方法すら残されていなかったんだ。

【ぶすす これからしばらくお世話になりますね？
危険人物の負け犬河内さん？】

s i d e o u t

ありがとうって素敵な言葉だよな！（前書き）

今回は珍しく教授がメインです。

ひよっとすると今後に影響するかも…。

ありがとうって素敵な言葉だよな！

うーん、流石は管理局の次元航行艦。

メカメカしくて私好みの内装です。これで変形とかしたら百点なんですよ。

あ、皆さんこんにちは。ルナ＝ベルツです。

現在、私はクロノ執務官に連行されアースラにいます。

このまま牢屋へガシャーンとかを予想していたのですが、意外にも艦長の下へ連れて行かれるらしいです。

そこには高町姉妹とスクライアさんもいらっしやるとか。

バインドで両手を拘束してデバイスを没収しているとはいえ、少し無用心すぎるのでは？

どうやらそう思っているのは負け犬ストーカーだけのようですが。

さっきからジロジロとこちらを睨んでいます。

そしてしばらく通路を歩き、とある扉の前でクロノさんは止まりました。

「ここだ。」

艦長、重要参考人を連れてきました」

そして扉が開くと、

【うわー、なんとという似非ジャパン…】

【それは艦長には言わないでやってくれ】

盆栽、羊羹、茶釜に番傘と来ました。
これを似非と呼ばずになんと呼ぶと？

「あらあら、どうぞ二人とも座ってちょうだい」

艦長がそう言うので座ろうとしたのですが。

…正座ですか。

ますます似非臭いです。

そして座ったのですが…。その、配置が…。
艦長さんたちから見て、

私 ストーカー 星さん 高町さん スクライアさん

って感じになりました。

なんか、私だけが疎外感バリバリです。

私が一步寄ると、必ずストーカーがこつちを睨みます。

なんなんですか？

私はただ羊羹をいただきたいだけなのに。

あ、でも両手を拘束されているからどの道食べられませんね。

私がどうやって羊羹を食べようか悩んでいると、

「…い、おい君、聞いているのか？」

「ほえ？」

執務官さんに声をかけられました。

あ、ようやくロストロギアがどうこうとかの話が終わったみたいで
す。

「あ、すみません。聞いてませんでした。」

「まったく。君の事情聴取をと言っているんだ。
まずは名前と出身世界を。」

「はいはい。」

名前はルナ＝ベルツ、出身世界は……」

よく考えると、私の出身世界ってどこなんですかね？

前世は方舟ですから次元空間ですし、今回はトリップですし。

「どうかしたのか？」

「……いえ、たぶんミッドチルダなんじゃないですかね。
物心ついた頃には一人旅をしていたもので。」

「一人旅？家族はどうしたんだ？」

「いませんよ、そんなの。」

あえて言うならばデバイスですね。」

「……そうか。」

悪いことを聞いたな。謝罪する。」

「……？」

いえ、お気になさらず」

…え？

なんで私は謝罪されたんですか？

「ルナちゃん…だよね？」

あの子、フェイトちゃんとはどういう関係なの？」

……………ちゃん、だと？

「……………」

「ルナちゃん？」

「…いえ、なんでもありません。

私は彼女の家庭教師みたいなものでして」

「そうなんだ。

それじゃあ、どうしてフェイトちゃんが戦う理由とかもルナちゃんは知って」

そこで高町さんが黙りました。

それどころか、部屋全体の雰囲気が悪くなっています。

星さんはなぜか私を見ようとしません。全力で目を逸らしています。

「…どうかしましたか？」

私は高町さんに声をかけたただけなんです。

それなのに彼女は半泣きで首を振っています。

「あ、あの、ルナさん、何か、私って気に障ること、を言いました、か？」

高町さんが震えながら敬語で聞いてきました。
はて？気に障る？

「別に何も？」

強いて言うなら、私は男子なので『ちゃん』付けで呼んでほしくな
いですね」

「えっ！？男子！？」

そんなに可愛「何か言いましたか？」…いえ、なんでもありません」

はて？一瞬ですが執務官さんが戦闘体勢になっていたような。

星さんも高町さんの手を握って震えています。

あれ？私に関する記憶も消えたはずなんですが？

すると、今まで無言だったストーカーが、

「お、お前、男だったのか！？」

嘘だろ絶対！男の娘なんてのが現実にいるわけ

」

「男の娘って言うんじゃないわええ！」

反射的にシャイニングウィザードを炸裂させた私は悪くないと思います。

足が自由だったのが悪いんです。

side教授

俺は今、最高神クラスの者のみが参加できる会議にいる。会議といっても、俺を含めて三人しかいないが。

「…で？」

わざわざ呼び出した理由はなんだ？
くだらない用なら俺は帰るぞ」

そう言いつつも、内容などわかっている。
どうせセカンドチャンスか闇討ちだろ。

「…我々にはもう勝ち目がない。
よって、このゲームはここで終了だ」

へえ〜。

潔く負けを認めただか。

「おいおい、まだ転生者は一人残っているぜ？
そいつに期待しとけば良いだろ？」

「…私の転生者ではそなたの天使には勝てん。
不本意だが、一度言ったことを取り下げるのは神にあるまじきことだ。」

ならば、潔く身を引くのが筋だろう」

ふうん、潔くねえ。

「つまらねえな」

「なに？」

「つまらないって言ったんだよ。

ここは俺にチャンスを請うか、闇討ちしてでも神の座を守ろうとするところだろ？」

なに勝手に諦めてんだよ」

凄まじく不快だ。

あれだ、ゲームの終盤でもう勝てないからってファミコンのコンセ
ントを引き抜かれた時の感覚に似てる。

お互いに勝敗はわかっているが、釈然としない。

「よつて、俺が勝手にお前達にチャンスをやる。

これで負けても俺は文句は言わねえ。

どうだ、乗るか？」

「……………」

お〜お〜、悩んでるな〜。

プライドと世界の平和を天秤にかけているんだろう。

馬鹿だね〜。俺だったら躊躇なく再戦するぜ？

プライドってのは勝利するためにあるんだよ。「負けても良い勝負をしたから満足だ」とか「フェアプレー精神で頑張った」とかは、俺から言わせれば負け犬の遠吠えだ。

そこが俺ら『ベルツ』とお前らの差なんだよ。

「…わかった。

ではもう一人だけ転生者を「はい、ストップ」…なんだ？」

おいおい、それはないんじゃないか？

「チャンスをやるとは言ったが、これは俺の純然たる好意からだ。それを当然のように受け取るのが神なのか？ だったら見下げ果てたぜ」

「…なにが言いたい？」

「貴様が私たちに勝手に渡したのだろう！

まさか、それに礼を言えと言っのか！？」

「そうだ。人に助けてもらったら感謝するのが礼儀だろ？」

ああ、神にそれを言うなんて釈迦に説法だったな。

それくらいわかって当然だ」

くくく、呆然としている二人を見てると次々と外道なことが思い

つく。

『三回回ってワンと言え』とか、『私は豚ですと言え』とか。

「……………感謝する」

「……………」

金髪の青年の神は感謝の言葉を述べたが、赤毛の少女の神は一向に何も言わない。

ここでもプライドが邪魔しているらしい。

本当に馬鹿だな。これは勝つための代償なんだぜ？

つまり、必要経費だ。

割り切れよ、最高神さん？

「おいおい、最高神は感謝の言葉も知らないのか？
なら俺が教えてやるよ」

そして俺はそいつに近づき、

「土下座して、ありがとうございましたって言うんだよ」

無理難題を吹っかけてみた。

「…貴様、図に乗るのも大概にしろ！」

「それはこっちの台詞だ。

お前が頭を下げるだけで世界の平和が守れるかもしれないんだぜ？
お前の頭がどれだけ高価なのかは知らねえが、プライドなんて安い
もんだろ？」

くくく、楽しいな
さあ、どうする？

「そうか、そこまで嫌なら別に別に良い。
世界は俺が譲り受けるぜい。ああ、どうしようかな。
色んな世界で治療不可能な疫病を蔓延させようか？いやいや、天変
地異も悪くないな」

そうして背を向けた俺に、

「…待て。ま、待って、ください」

か細い少女の声が響いた。
振り返ると、その顔を羞恥に染め、悔しさに震える最高神の姿があ
った。

「なんだ？

俺はこれから忙しくなるんだが」

すると、そいつはその場で頭を地に付けた。

「わ、私たちに機会をくださったって、か、感謝しています…」

あ、ありがとうございます…！！」

…うわ、お、本当に言ったよ。

半ば諦めていたんだが…。

かあ、正義の神様は辛いね。

「はいはい、よく言えました」。

そこまで感謝されたら俺もやる気になっちゃうな」

だ、駄目だ。まだ笑うな。堪えるんだ。
やばい、やっぱり無理かもしれない。

「それじゃ、お前達二人に転生者を一人やろう。

今から参加するのは厳しいだろうから、介入はA・sからとする。

それと、魂は俺が選ばせてもらうぜ。安心しろ、原作キャラの仲間
になろうとするだろう人間を選ぶからな。

これが条件だ」

「わかった」

「…異議なし」

そして俺は死亡した人間のリストから一人を選び出した。
こいつならば面白い展開になりそうだな。

そして、そいつを目の前に呼び出す。

いたって平凡な男が目の前に現れた。

さて、最初が肝心だからな。きつちり転生してもらわないと。
拒否られたら転生させられん。

イメージは某QBさんで。あの人(?)は俺の心の師匠だ。

「くくく、せいぜい楽しませてくれよ?」

side out

果報は寝て待つけど目が冴えて眠れません

sideフェイト

ルナさんが捕まった。あの強いルナさんが、その事実には私たちは驚愕

「うん、計画通り（ニヤリ）」

「上手く捕まったみたいだね」

することはなく、計画が思ったとおりに進んだことを喜んでいた。

事の発端は数日前のことだった。ルルとナナを含めた全員を集めたルナさんが、

「私、自首しようと思うんです」

そう言ったのが最初だった。

初めは全員が何を言っているのかわからなかったけど、段々と理解が追いついてきた。

それはつまり、私たちが母さんを裏切るということだ。

「ちょっとルナ！なに言ってるのさ！？」

まさか、アタシらを裏切るつもりかい!？」

「まさか。良いですか。アルフ。冷静に考えて、もうじき時空管理局が出張ってきます。ロストロギアがばら撒かれたんですよ? スクライアが通報しているはずですよ。」

それは、確かに。でも、

「母さんの願いは諦めない」

そう、それは絶対にだ。管理局と戦うことになっても私は諦めない。

「はあ、わかってませんね。自首するのは私だけです。」

「ルナさんだけ?」

「はい、そうです。フェイトがプレシアさんの望みを叶えたいにしろ途中で失敗するにしろ、最後は管理局に捕まります。わかりますね?」

そんなことはない!

ルナさんに出会わなかったらきっとそう言っていたら。でも、今の私ならば理解できる。世界は、時空管理局はそんなに甘くない。

私よりも強い人はたくさんいるし、きっと最後は捕まってしまうだろう。

「ですから先に私が捕まっておいて、向こうに多少のことを説明しておけば良いんですよ。」

そうすれば情状酌量の余地有りと判断されやすくなります。」

つまり負けるのは前提だけど、その後のことを考えてのことだということらしい。

確かに、それならば。

「いやだよ！」

お兄ちゃんと会えなくなっちゃうなんてやだ！」

「……い……や！」

けど、ルルとナナは猛反対した。

気持ちにはわかる。私も母さんがそんな立場になったら同じことを言うだろう。

「あのね、根性の別れになる訳じゃないんですよ？
長くても一ヶ月くらいですよ。」

「でも嫌なの！」

「……………（コクコクコク）！」

そんなやり取りがしばらくあったけど、最後は二人とも納得してくれた。

「それじゃあフェイト、アルフ。私は管理局が来たら自首するの
で。」
ルルとナナのことをお願いしますね。」

「うん、わかった」

「二人のご飯とかはアタシがなんとかするからさ。
遠慮なく捕まってきたな」

ということがあった。

きつと今は管理局の次元航行艦の中だろう。
上手くやっていると良いけど…。

side out

「ふあゝ、暇ですね」

アルテミスもいませんし、完全に一人です。
流石に四日も閉じ込められていれば暇になります。
あゝ、誰か話し相手が欲しい。

あ、皆さんどうも。ルナ＝ベルツです。

現在、護送室で軟禁状態です。自首したとはいえ私は紛れもない犯
罪者。

しかも次元レベルの大犯罪。当然の扱いです。別にそれは良いんですが、話し相手がないので退屈です。

あ、そうそう。

事件についてはプレシアさんの指示でやっているということや、彼女の戦闘スタイルくらいしか教えていません。

拠点はダミーを教えていますし、人造魔導師などの云々は当然話していません。

だって私に不利なことですし。

「あ、あの〜、ルナちゃ、君、起きてる？」

すると、何故か高町さんが訪ねてきました。

後ろには星さんが。

ちなみに、私は自首したというのもあり面会は自由です。

「ありやりや〜？ いったいどうしたんですか〜？」

何か私に用でも〜？」

「ううん、ちょっとお話したいな〜って思っただけ。

フェイトちゃんとは少し話したけど、あなたとは全然話したことがなかったでしょ？」

そういえばそうですね。

前世を含めて彼女とは会話をした覚えがありません。しかし、いったい何を話せば？

「そうですか〜。ではどうぞ」

「…どっぞって？」

「何か話したいことがあつて来たんでしょ？」

そう言われると何を話せば良いかわからなくなったようで。
高町さんは悩んでいます。

「…うん、じゃあ自己紹介！」

私、高町なのは！なのはって呼んでね？」

「これはこれ〜。改めまして、ルナ＝ベルツです〜。
気軽にルナとお呼びください〜。」

それと、これでも性別は男なので、女呼ばわりしたら殺します〜」

「…う、うん、気をつける」

殺すのところで星さんが肩をビクツと震わせました。
そ、そんなに怯えなくても…。

「それでルナちゃ、君はフェイトちゃんの家教師なんだよね？
でもルナちゃ、君ってあの子と同じ年くらいでしょ？」

…おい、今だけで何回『ちゃん』って言いそうになった？
言い直しているからギリギリで許すが。

「そうですね〜。」

私とあの子は同じ年ですよ〜、たぶん。
でも私は変身魔法で歳を誤魔化して働いていたので、フェイトたちは私の実年齢を知らないと思います〜」

ルルとナナもそうなんですよね〜。

あつちの姿の方が便利だというのもあって、元の姿に戻ったのは数年ぶりです。

「働く？お父さんとお母さんは？」

「いませんね〜。」

あ、でも兄妹みたいなのはいましたよ〜？」

ルルとナナ、今頃どうしてますかね〜？

アルフとフェイトには一通りの家事を教えるので大丈夫でしょうが。

「…ところで、さっきからなぜ星さんはビクビクしているのです〜？
気になって仕方ないんですが〜」

星さんはさっきからなのはさんの後ろで震えています。

私が目を合わせようとすると逃げますし。

「あ、ごめんね。」

星ちゃん、理由はわからないけどルナちゃ、君が怖いらしくて。
会つと震えが止まらないんだって」

「…そうですか〜」

うわ〜、本能レベルで恐怖を刻み込んでしまいましたか？
転生者として戦った記憶が消えたのに私が怖いとか。

「うん、本当にごめんね？」

でも星ちゃんを嫌わないであげてね、ルナちゃ、君」

「わかりました〜。

…それと、もうルナちゃんが良いです」

なんだか一タイラつくのが馬鹿らしくなりました。
もう良いや〜。

「うん、ルナちゃん！」

「…あの、すみません」

嬉しそうに言うなのはさんと申し訳なさそうに言う星さん。
対照的な二人ですね〜、姉妹なのに。

そして二人は護送室を出て行ったのですが…。

「また暇ですね〜」

こうなったら見張りをつけても良いので自由行動の許可を無理やり
にでも貰いましょうか？

うん、明日にでも艦長さんに相談してみましよう！

勝猫の嘲笑

「スゲ〜です！

これが管理局の次元航行艦ですか〜！」

『なるほど、確かに凄いですね』

「あまりはしゃがないでくれ。

周りからの視線が痛い」

これが騒がずにいられますか！

管理局の次元航行艦の内部なんて滅多に見れません！

前世では墜とすのが専門で乗る暇なんてなかったですし。

あ、皆さんこんにちは。ルナ＝ベルツです。

とうとう時間制限付きですが、自由行動の許可ができました。
常にクロノ執務官が見張りに付いてますが。

「護送室に閉じ込められること11日間！

ようやく出歩けるようになったんですよ〜？

はしゃぎますって。ああ〜、娯楽の空気っておいしいです〜」

「…それは悪かったと思っています。

けど、昨日ようやくジュエルシードを全部確認したんだ。

それまでは出すことはできなかった」

そう、昨日ついにジュエルシードが全部見つかったのだそうです。

という事は、海上での戦いは昨日だったんですね。

見逃してしまいました。

「それにしても、君の生徒は随分と無茶をするな。あんな大規模な魔法を使った後で、ジユエルシードを六つも封印しようだなんて」

「お恥ずかしい限りです」。

纏めてやるんじゃないかと管理局が封印に来るのを待ち伏せれば良かったのに」。

封印が終わったところを闇討ちです」！

「……いや、それは僕達が困るんだが」

『マスター、慎んでください』

そうそうアルテミスなんですけど、一昨日ようやく返還されました。フレームは展開できないように抑えられているし、魔法の補助もできないようにされているらしいです。ま、そうじゃなきゃ返しませんよね。ログの方も見られる心配はありません。昔、教授以外には記憶データを弄ることができないようにロックされたらしいので。

『クロノ君、大変だよ！』

すると、通信担当のエイミイさんが突然割り込んできました。モニター越しですが、かなり焦っているのがわかります。

「エイミイ、どうしたんだ？」

「トイレですか？」

『違うよ！』

フェイトちゃんの使い魔が見つかったんだよ！

それも怪我をして！』

「アルフが？」

ああ、そういえばそんなこともありましたね。

プレシアの婆の虐待にとうとうブツンしましたか。

『それで彼女はルナちゃんと話をしたがっているから。

クロノ君、そのまま二人で私の所に来て』

「了解した」

「はあ、いい」

そんな感じでアルフと話をすることになったんですが。

「アルフ、怪我はどうですか？」

『ルナ、ごめん。』

フェイトをあいつから守れなかったよ』

「大丈夫です。そこまで期待してませんから。」

どうせあの人のことだから、私がない間にこれ幸いと鞭の雨でしよつて？」

『ああ。くそつ、あの鬼婆！』

フェイトを、娘を何だと思ってんだ!』

忌々しい人形と思ってるでしょうね。

普段は私が邪魔していますし、ここで日頃の鬱憤を晴らしてるんでしよう。

「あ、そうです。

ルルとナナは元気ですか?」

『ああ、二人は大丈夫さ。

アンタがいなくて寂しそうだったけどね』

「…そうですか」

『それに、フェイトもあの子達を守らなきゃって辛そうで見られないよ』

「申し訳ないです」

な、なんか思った以上に負担をかけていたみたいですね。

その後、話は着々と進み、なのはさんがフェイトの相手をするみたいです。

つて、正気ですか!?

「あの、クロノ執務官。

なのはさんではフェイトには敵わないと思うのですが」

だって私の弟子ですよ?

原作のフェイトよりも強いです。

「そうかもしれない。」

でも、それでプレシア「テストロツサが動けば良い」

なるほど、そういうことですか。」

確かに関係ないですね。」

あ、そうだ。

「なら私も見学して良いですか？」

「というわけで、やってきました海鳴！」

「うるせえ！朝から大声出すな！」

ああ、すみません。

久々に自然の空気を吸ったのでテンションが上がってしまって。

現在、海鳴海浜公園にいます。

原作と違って私と負け犬、星さんがいますけど。

「ところで、本当にフェイトに一对一で挑むんですか？」
正直、無謀を通り越して失笑物なんですが、ぷぷぷ」

「それはひどくない!？」
でも、フェイトちゃんとちゃんと話をしたいんだ。
友達になりたいっていう返事も、まだ聞いてないしね」

「…友達ですか」

確かにあの子ってぼっちですからね。
根暗だしネガティブだし。
私のおかげで多少は変わりましたが。

「あ、あのさ、アンタ、ルナ、だよな？」

するとアルフがおずおずと話しかけてきました。
あ、そういえばこっちの姿は初めてでしたね。

「そうですよ。こっちが本当の姿です。
今まで騙っていてすみませんね。
年齢偽装をしないと職にありつけなかったのです」

「アンタ、性別だけじゃなくて年齢まで誤魔化してたのかい!？」

「ふふふ、面白いことを言いますね？」
私は性別を誤魔化したことはありませんよ？」

「いだだだだだ!ご、ごめんよ」!

わかればよろしい。
アイアンクローを解いてあげましょう。

「…なのは、気をつけて」

星さんは心配そうです。

普通はそうですよ。今までは三人がかりで戦っていたんですし。

「うん。気をつけるね」

するとなのはさんは徐に、

「出てきて、フェイトちゃん」

と呼びかけます。

すると、背後の電灯の上にフェイトがいました。

その下には何故かルルとナナも。

何故か三人とも呆然としています。

【フェイト？

これはどういうことですか？

どうしてルルとナナがいるんです？】

【…ごめんなさい、ひょっとしてルナさんですか？】

…ちっ、一々説明しないといけないんですか。
面倒ですね。

そんなこんなで最終決戦は始まりました。
説明はとて面倒でしたが。

「へえ、なのはさんも思ったより戦えてますね。
まだまだですけど。あ、掠った」

フェイトの斬撃がなのはさんのバリアジャケットに掠りました。
っていうか、そもそもお互いに相性が悪すぎなんですよ。
固定砲撃タイプのなのはさんと、超機動近接タイプのフェイト。
うーん、真逆すぎて完全に技量の戦いになりますね。

というより、フェイトは鞭打ちのダメージが残ってますね。
普段よりも動きが若干鈍いです。

それにしても、

「二人とも、いい加減に離れてください」

「やだ！」

「い……や……！」

さつきからルルとナナが私に引っ付いて離れません。
このままアースラまで付いてくるつもりでしょうか？
別に私は良いですが。

っていうか、

「火力のない戦いですね。
もって砲撃を撃ち合う白熱したものを予想していたのですが」

ぶっっちゃけシヨボイ。

「…あの戦いがですか？

私には高度な戦いに見えますが」

すると、今まで私に近づいてもこなかった星さんが噛み付いていました。

え、だって事実ですし。

前世での戦闘と言ったら牽制で砲撃が出てくる世界でした。

山を吹き飛ばす魔法とかが出てきたりもするんですよ？

「お前らを基準にすんな。

9歳にしちゃあ良い実力だろ」

9歳ね。

まあ、私を基準にするのは確かにアレかもしれませんが。

すると、

「お、？あれは」

フェイトがバインドでなのはさんを拘束し、呪文の詠唱に入りました。

あれを使うつもりみたいですね。

見るからにヤバイとわかるその魔法に、なのはさんは一步も引きません。

サポートを入れようとするスクライアさんの言葉すら跳ね除けます。

「なのは、危険です！」

「大丈夫だ。」

なのはの防御の強度ならなんとかなる」

おおよそ？負け犬さんは冷静ですね。

あ、原作知識ですか。

【ふふふ、ところがギッチョンってやつです〜】

【…どういうことだ？】

私の念話に負け犬さんが振り向きました。
その顔には、既に焦りの色が浮かんでいます。

【フェイトは私の弟子ですよ〜？】

原作なんかよりも強化されてるとは思わないんですか〜？】

【なに！？】

まさか、テメエ！】

ククク、驚いてる驚いてる

そう、フォトンランサーファランクスシフトなんてもう古いのです！

スファイア38基による毎秒7発の攻撃を4秒？

確かにそれは有効な攻撃かもしれません。

しかし、この世に完璧な魔法などありません。

でも、それは裏を返せばまだまだ魔法は進化できるといふことなんです。
つまり、

【進化したフアランクスシフトを御覧あれ〜】

「ユーノ、今すぐなのはを止める！」

「え、どうしたの、急に」

「いいから早く！」

ククク、もう遅いです。

「フォトンランサー、デストロイシフト！」

そのトリガーワードと共に、空中のフォトンスフィアの数が増えます。
38が76に、76が152基になりました。

あそこまで魔力を消費した状態では、普通はあんなにスフィアは出せません。

それに制御に割くりソースも並ではないです。

「デストロイ!？」

フアランクスじゃねえのかよ!!!」

「ククク、これぞ私がフェイトのために考案、作成、完成させた大魔法『フォトンランサーデストロイシフト』です〜！
この魔法のためにバルディッシュの処理能力に強化を重ね、ついに先日完成させたのです〜！」

思わず叫びながら決めポーズをとっていました。
しかし、後悔はしていません。

それくらいのできばえだったんですから！

「ちょ、ちよつとルナ！」

あれはどういうことだい！？

フェイトの切り札はフアランクスシフトのはずだろ！」

「ふふ〜ん、その情報は古いのです〜！」

あれこそがフェイトの現在の切り札、フアランクスみたいなチャチな魔法じゃないですよ〜！

なんと、あれは集束系の魔法なのです〜！」

「集束系だと！？」

負け犬が驚くのも無理はないですね。

だってそれはなのはさんのスターライトブレイカーと同じなのですから。

しか〜し！

なのはさんにできてフェイトにできない技術などありません！

確かになのはさんは適正が高いため、魔法を知って一ヶ月程で使えるようになりました。

フェイトにそこまで高い適正はありませんでしたが、長年に亘ってじっくり教えれば充分に使用可能です。

そして、足りない魔力は周囲から集める！その発想は方舟では常識！

「ふははは〜！」

フェイト、その新米砲撃魔導師に格の違いを見せ付けてやりなさい
〜！」

その言葉が聞こえるはずはないのに、私にはフェイトに届いている
という確信がありました。

フェイトはこちらに少し微笑むと、

「撃ち崩せ、ファイア！」

魔法を発射しました。

その威力は絶大。フランクスとは比較にもなりません。

なんせ、毎秒10発の攻撃を17秒間も掃射させるといふ鬼畜魔法
です。

その合計弾数、なんと25840発！1064発のフランクスと
は桁が違うんです！

欠点は消耗具合が馬鹿みたいってことですね。

仮にも集束魔法、身体にも悪いですし。

そのぶん、マジで必殺の威力を誇っています。

殺傷設定だったら肉片も残りません。

「~~~~なのは！」「~~~~」

「フェイトお姉ちゃん、すごい！」「~~~~」

「……し、死……んだ？」

「まさか」。

あれは非殺傷設定ですよ？」

ククク、どうですか！

流石のなのはさんもこれは防ぎきれないでしょう！

「テメエ、これでフェイトが捕まらなかったらどうすんだ！

この事件が解決しないかもしれねえんだぞ！」

すると突然負け犬が掴みかかってきました。

確かにそうですね。これでフェイトが勝てばジュエルシードが全てプレシアの婆の手に渡るかもしれません。

しかし、

「それがどうかしたんですか？」

そう、どうでもいい。

この世界は物語の世界であり、その物語がどうなるかと知ったことではありません。

私は、私の大切なものが無事ならばそれで良いんです。

「あなたはまだハッピーエンドなんかを期待してたんですか？」

私を倒せばそれが実現するとも？」

甘えですよ、厨二病患者」

本当にそれを願っていたならば、なのはさんをさらに強くすれば良かったんです。

いえ、スクライアに乗り込んでジュエルシードを護衛しても良い。無印が起こること自体を回避するべきだったんです。

「それができないから、あなたは負け犬なんですよ〜。
待ちの姿勢で私に勝とうだなんて馬鹿ですか〜？」

「テメエ！」

「そもそも、何故あなたはまた転生してきたのですか〜？
今までの言葉から察するに、私への復讐でしょう〜？」

だったら、脇目も振らずに修行するなり復讐を実行するなりすれば良いじゃないですか〜。

それすらできないあなたにどうこう言われる筋合いはありません〜」

「この野郎…！」

ふふ〜ん

負け犬の遠吠えとは正にこのこと！

しかし、

【大丈夫だよ】

その声を聞いて、私は腰が抜けるかと思いました。
まだ意識がある！？ってことは…。

海上を見ると、ボロボロになったなのはさんがいました。

バリアジャケットの上着は既にパージされていて、見るからに満身

フェイトが使った分、集まる魔力にロスがあるみたいですが、それでも一撃で墜ちる威力です。
紙装甲のフェイトに耐えられる訳がありません。

そのまま、

「スターライトブレイカー!!!」

はい、フェイト撃墜。

こ、これが主人公補正の恐ろしさですか!?!?
身をもって実感しました!

そのまま海中にフェイトは沈んでいってしまいました。なのはさんが救出してくださいました。

あゝ、でもこれで原作入りは確定ってことですか。

上空で魔力が渦巻き始めました。

勝猫の嘲笑（後書き）

次回かその次で無印は終了です。

また超展開になるかもしれません。

負け犬神家の一族（前書き）

やっぱり超展開はなしにしました。

あれをやると、凄まじく今後が難しくなりそうだったので。

期待してくださった方々、ごめんなさい。

負け犬神家の一族

空が突然陰ったと思うと、莫大な魔力が集中し始めました。どうやらプレシアの婆がキレたみたいですね。

あ、皆さんこんにちは。ルナ＝ベルツです。

現在、なのはさんとフェイトの決闘が終わり、婆が次元跳躍魔法で攻撃をしてきました。

身体に鞭打ってまで頑張りますね。

【ほら、助けに行かなくて良いんですか？】

「…チツ！」

私の言葉に負け犬が動きました。

二人の下に急ぎ、シールドを張っています。

そして雷撃。

「きゃあああああ！」「」

ルルとナナの悲鳴が聞こえましたが、雷撃の凄まじい音にかき消されます。

負け犬は二人をキチンと守りましたが、ジュエルシールドは持って行かれたらしいです。

いえ、わざと見逃したのでしょうか？

まあ、どちらにしても私の無印での役目は終わりです。

放っておけば負け犬と管理局が勝手に解決してくれるでしょう。

「ルル、ナナ、行きましょう。」

今は管理局の次元航行艦にいた方が安全です。」

そして、負け犬たちとアースラに戻りました。

フェイトはなんとか無事といった感じです。

しかし、魔力がかなり減っていたので一応私の魔力を渡して回復させておきました。

バルディッシュもボロボロです。あの婆、容赦ないですね。」

しかし、これが私の唯一にして最大のミスでした。

この時したことが、後の計画の全てを破壊することになるとは、夢にも思わなかったんです。

「なんちゃって」

暇なので計画頓挫フラグを立ててみました。

しかし、実際もう私の安住計画は成功したも同然です。

後は負け犬が我慢できずに襲い掛かってきたところを正当防衛で叩きのめします。

過剰防衛になるまで殺りませんが。

【ふふ〜ん 全てが私の計画通り〜】

これで私は管理局預かりとなります〜。

ご協力いただき、ありがとうございます〜】

【…このゲス野郎が！】

テメエはフェイトの家族みたいなもんなんだろ！？

だったらこれから起こることを止めようと思わねえのかよ！

プレシアの言葉で、いったいどれだけフェイトが傷つくと思ってる！
【…】

【はい〜、全く思いません〜。】

それに、これでフェイトは晴れて情状酌量の余地有りとは判断されるんですよ〜。

喜びこそすれ、止める必要性は感じませんね〜？】

だってプレシアの婆の自供でこの事件の全容が明らかになるんです。そして、あの婆は私が研究に携わっていたことを言いません。

既にそんな記憶はないのですから。

無印が始まる前に、既に私が助手だったという記憶は消してあります。

病人相手に大した手間は必要ありません。

彼女は、私のことをフェイトの世話係のための居候というふうに認

識しているはずです。

つまり、傍から見れば人数が少し増えただけの無印ということになります。

そこに矛盾は存在しません。パーフェクトです。

そして、これで私たちの立場は完全に『守られる者』というものになります。

これで私にはこの『転生者の戦い』にも勝ちを約束されたも同然です。

なんせフェイトと一緒にいるかぎり原作に関わるのも決定なんですから。

そして、原作キャラに味方をする限り私を殺すことはできません。

そんなことをすれば原作キャラの皆さんが私の味方です。

最も邪魔な星さんは既に脱落させました。

さらに、負け犬の彼にはもう合法的に私と戦う理由すらないんです。

そして、

「「「「「「「「「「ツ!?」「」「」「」「」「」

モニターにアリスアアの死体が映し出されました。

そして始まるプレシアの婆の自供。

ク、クク、クククク…！わ、笑ってはいけません！
ここで笑っては全てが水の泡です！

そう思いつつも、全てが上手くいくことの面白さに口からプシュユシ
ユと息が漏れます。

や、ヤバイです！涎が…！

そして明かされる事件の全容。

プロジェクトF、フェイトの出生。

は、早く話し終わってください！
ポーカーフェイスも限界ですよ！

そしてフェイトに降りかかる罵倒。

人形、失敗作、その言葉がフェイトに突き刺さる。

そして、

「良いこと教えてあげるわ、フェイト。

あなたを造り出してからずっとねえ、私はあなたが…」

だ、駄目です、もう止まりません！
頬の筋肉が制御できない！さっきからヒクヒクと動いています。

「大嫌いだったのよ！！」

そしてフェイトが崩れ落ちる。

床に落ちたバルディッシュは砕け散り、それはまるでフェイトの心
のよう。

一方、私はというと、

【ぷ、あはははははははははははははははは！

ひ、ひいゝ！駄目、笑い死ぬ！

聞きましたか、負け犬さん！これで私の完全勝利ですゝ！

やゝい、負け犬負け犬ゝ】

念話で盛大に負け犬を罵っていました。

そつでもしないと表情が崩れて大笑いしていたでしょうから。

後で聞くと、その時の私は唇をかみ締め目に涙を溜めていて、とても痛々しい姿だったらしいです。

フェイトのことを自分のことのように悲しんでいるのだと。

実際は表情が崩れないように歯を食いしばっていただけですし、涙は笑いが抑え切れなかった結果なのですが。

その後は原作通りです。

フェイトは見事に立ち直り、プレシアの婆は虚数空間に真っ逆さま。

これにてPT事件、もしくはジュエルシード事件も終了！

フェイトはなのはさんと友達になり、無事に無印は終了です。

ククク、計画通り！

負け犬神家の一族（後書き）

このままじゃ終わらせませんよ。

超展開を削った分、ただじゃおきません！

バ○マンではありませんが、邪道な王道バトルを目指します！

後は野となれ大和撫子

それは突然のことでした。

私はアースラで眠っていたんです。

夕食を食べて、歯も磨いて、ルルとナナとフェイトにおやすみも言いました。

それなのに、

「どうして神界にいるんですかね？」

あ、皆さんこんばんは？ルナ＝ベルツです。

寝ていたと思ったら神界に戻っていました。
何故か隣には負け犬もいます。

「…テメエ、これは何だ！」

「知りませんよ。」

私だっけさっきまで寝ていたんですから。」

しかし信用された様子はありません。

そんなに疑り深いと禿げますよ？

すると、

「ルナは何も知らねえさ。」

なんせ、俺が勝手にお前らと呼んだんだからな」

光と共に教授が目の前に現れました。
恐れながら、全く似合いません。爆発を背景にした方がしっくりきます。

「テメエは、教授！」

「おうおう、久しぶりだな？」

相変わらずの負け犬臭で安心したぜ」

「誰が負け犬だ！」

「え？あなた以外にいるわけないじゃないですか？」

なに当然のことを言っているんですか、この人は。

「それで、今日はどうしたんですか？」

ひよつとして、負け犬さんのボスが諦めましたか？」

「はあ！？」

そんな訳ねえだろ！俺はまだ「半分正解だ」…なに！？」

「お前の実力じゃルナを倒せねえってあいつらはギブしてきたぞ。
あのマテリアルもどきが負けた時点だな」

「…まさか、俺はこのまま終わりだったのか！？」

「いーや、それじゃあ俺がつまらないからな。

特別に一回だけチャンスをやった」

「チャンスですか？」
「具体的にはどのような？」

「もう一人、転生者を追加する」

「「ッ!？」」

「も、もう一人!？」

「星さんみたいなのがまたですか!？」

「そいつはA'sから介入する。」

「ポジションは当然、原作キャラの味方ポジションだ」

「…何故そんなことをするんだ？」

「それじゃ俺に有利なだけだ。お前のことだし、そいつはよっぽどの役立たずか？」

「いゝや、それは大丈夫だ。」

「お前の上司も、もう一人も納得した上で転生させた」

「なら本当に敵ですね。」

「A'sからはゆっくりできると思っていたんですが。」

「俺からの連絡は以上だ。」

「今日はこれを伝えるためだけに呼んだ。」

「意識だけ呼んだから、身体は向こうで寝てるだろ」

「…あの、質問良いですか？」

「なんだ？」

これだけは聞いておかなければ。
今後を左右するかもしれませんし。

「その人は教授が選んだんですか？
それとも他の方が？」

「俺だ」

胸を張って答えられました。

はい、面倒になるの確定です。

絶対に『面白そうなやつを送ってやる』とか考えてる顔ですもん。

そのまま私と負け犬は神界を出ました。
気がつくと、私はベッドで寝ていました。
もう朝の時刻です。

「ふあああ〜。

なんか、変な夢を見ました」

『おはようございます、マスター。
起きぬけからどうしたのですか？』

「いえ〜、教授が夢に出てきたんですよ〜。
それで、転生者を追加するとか言ってたんです〜」

『マスター、それは夢ではありません。
私にもメッセージが届いていました』

…やっぱりですか。
つまりはまた面倒なことだ。

「はあ、憂鬱です。」

「ルナ、ちよつと良いか？」

午後、私は割り当てられた部屋で魔法の講義をしていました。
相手はルルとナナです。ホワイトボードを借りて二人に説明して
います。

二人の手元には教科書だつてあります。もちろん私の自作です。
私たち『ベルツ』が使う魔法体系『亜流ベルカ式』はとても難しい
魔法です。

なんせ、事前に古代ベルカ式とミッドチルダ式の両方を使えないと
いけないんです。

私は刷り込みがあつたおかげで簡単にできましたが、二人は本当に
一から覚えなさいといけません。
だからこうして私が直に教えていたんですが、そこにクロノ執務官
が訪ねてきました。

「どうなさつたのですか？」

「いや、フェイトの裁判に必要なことがあつてな。
少し聞きたいことがあつたんだ」

ああ、なるほど。

それならここで話す訳にはいきませんよね。

「わかりました。」

ルル、ナナ、授業はここまでです。」

後は復習をして終わりで良いですよ。」

「や、やっと終わった。」

「……私、は…たの、し………かったよ?」

どうやらルルは根っからの騎士派みたいですね。

将来は脳筋になりそうで怖いです。

そして私はクロノ執務官に連れられ、取調室のような部屋にきました。

表には見張りの魔導師さんがいます。

たかが話をするだけなのに大げさですね。」

「それで、何が聞きたいのですか?」

「ああ、まずは」

そして二三の質問をされ、それを返します。

普段のフェイトの生活、プレシアのフェイトへの態度などです。

「こんなものだな。協力に感謝する。

もう楽にしてくれて良いよ。」

「そうですね。」

それにしても大変ですね、執務官って。」

「ああ、だがやりがいのある仕事だと思っている。
そうそう、もう一つ良いか？」

「なんですか？」

「先日、君たちの証言を元にアルトセイムを捜査した。
その時にプレシアⅡテストロッサの使い魔『リニス』の遺書と思わ
れるものが発見された」

「遺書？リニスがですか？」

「ああ、時の庭園があつた場所の近くに建てられていた小屋にな。
それと一緒に彼女の日記のようなものも見つけてな」

日記？そんなものをつけていたんですか。
差し詰め、フェイトの成長記録でしょうか？

「そこに書いてあつたよ。」

君がフェイトに魔法を教えている様子や、

プレシアⅡテストロッサの研究の助手だったことがね」

刹那、私にバインドがかけられました。

取調室の扉が開き、武装局員が数人突入してきます。

どうやら外も固められているらしいです。

「ま、マジですか〜!?!」

「残念だが事実だ。」

君のことが事細かに書かれていたよ。

戦闘能力がオーバースだというのは驚いたが、これではもう逃げられないだろう」

り、リニスうううううううううううう!

余計なことをしてくれましたね!

おかげで捕まってしまいましたよ!

「さて、それじゃあ詳しい話を聞かせてもらおうか」

そしてクロノ執務官は悠然と話しかけてきました。

そのまま手錠のようなリミッターを私につけようとしてきますが、

「すみません〜、私には話すことはないのです」

咄嗟に私は聖王の鎧を発動させました。

そして、

「能力発動『振動破碎』!」

私を縛っていたバインドを一気に破壊しました。

原作のスバル「ナカジマは四肢の末端からしか使えなかったようですが、私はその能力を魔力で作動させているため比較的場所の自由がききます。」

全身のどこからでも発動が可能です。
聖王の鎧を纏ったのは、これは生身で使えば自分の身体にもダメージが来るからです。
鎧の周囲で魔力を振動させることによって、私の身体に反動はダメージ通りません。

「では、失礼します」

そのまま右足を振り上げ、床に叩きつけました。
すると床が爆散、一つ下の階に出ました。

流石に床をぶち抜くのは予想外だったらしく、出た先の通路に人はいませんでした。

さてさて、面倒なことになりましたね。
最悪、このまま逮捕されてA・Sに参加できず脱落なんてことになりかねません。

「能力発動『シルバーカーテン』」

そのままアルテミスにかかったロックの解除にかかります。
シルバーカーテンは幻影を生み出すだけの能力ではありません。
このように機械などに侵入して荒らしまわることのできるのです。
それと同時に、ルルたち四人に念話を送っておきましょうか。

【ルル、ナナ、フェイト、アルフ、聞こえますか？
突然ですが、私はしばらく旅に出ます。

後のことはクロノ執務官の言うことに従ってくださいね】

【ど、どうしたのお兄ちゃん!？】

【え……、え？】

【旅ってどういうこと！？】

私たちは連れて行ってくれないの！？】

【急にどうしちゃったんだい！？】

四人同時に念話を送ってくるので頭にガンガン響きます。

ええい、作業に集中できないでしょうが！

こうしてる間にも後ろから攻撃が来てるんですよ！

【詳しいことはクロノ執務官が教えてくださいませ〜。】

たぶん大体合ってると思うので、その時に聞いてください〜！】

背後からはクロノ執務官たちが追ってきます。

おかげでシューターの雨が私に当たり続けていて走りにくいです。

全部聖王の鎧で防げるんですけどね〜。砲撃でも来ない限り大丈夫です。

しかし全力疾走しながら念話の相手をし、おまけにロックの解除をする日が来ようとは。

どこの怪盗の三世みたいです。やらされている本人は全く面白くありませんが。

『マスター、解除が完了しました。

バリアジャケットの展開、魔法の補助、並びにフレームの展開が可能です』

「はいはい〜、じゃあさっさと逃げましょ〜」

近くの角を曲がると、正面からも同員が向かってきます。だがしかし、少し遅かったですね。

「アルテミス、壁を〜！」

『Ice Wall』

そのまま前後の通路を氷の壁で塞ぎます。これで数十秒はもつはず！

「転送〜！」

そのまま私は近くの世界に移動しました。

【サラダバ〜！ってやつです〜】

sideクロノ

【サラダバ〜！ってやつです〜】

念話が届くと同時に魔力反応があった。これはまさか、転送魔法を使われた！？

「エイミィー！」

『大丈夫！ちゃんと追えてる！
でもこのままじゃ逃げられちゃうよー！』

「くっ、急いで転送ポートの準備を！
転送魔法を使える局員は何人いる！」

すると、数人が手を上げた。

「よし、エイミー！」

僕達のデバイスに座標を送ってくれ！
このまま追跡する！」

「オツケイ！」

座標を送るから、個人で追える人は急いで！
残りは転送ポートへ！」

「クロノ、ルナさんはオーバーSランクの魔導師の可能性がありません。

応援が来るまでは無茶をしないように」

「了解です、艦長」

ルナが逃げたのは『第89管理外世界』、無人で文化レベルはゼロ。
咄嗟に近くの世界に逃げ込んだといったところか。
周囲は密林と大河以外に何も見当たらない。

「全員、手分けをして探そう。」

ルナは必ず近くに潜んでいるはずだ。

二人で組んでそれぞれで

「

刹那、一人の局員が吹き飛んだ。
そのまま近くの大樹に激突して動かなくなる。

「ッ、全員散開しろ！」

そのまま全員が散り散りに動く。
幸か不幸かさっきの攻撃は非殺傷設定の魔法だったらしく、吹き飛んだ局員に怪我はない。
気絶してるだけだ。

「エイミィ、ルナがどこにいるのか探してくれ！
それと、負傷した局員の回収を」

『了解！』

すると、再び攻撃が開始された。
どうやら狙撃でこちらを全滅させる気らしい。
おまけに、その狙撃は四方八方から来るため発射地点を割り出せない。

間違いなくルナの仕業だろう。
彼は莫大な魔力があるにもかかわらず決して力押しをしない。
それはここ数日の会話でわかっている。

【く、クロノ執務か】

【こちらラッド！狙われて】

そして、一人、また一人と狙撃の餌食となっていく。

その狙撃は恐ろしいほどに正確だ。

「エイミィ、まだわからないのか！」

『もうちょっと……、わかった！』

そこから三時の方向、距離は1400！』

「了解！」

そのまま残りの三人と森の中を全速力で移動する。

空から攻めないのは狙い撃ちにされるのを防ぐためだ。

それにこの辺りは密林なため、樹が障害物になって狙撃は困難なはず！

すると、残りの距離が700メートルを切ったところで狙撃が止んだ。

諦めたということはないだろう。

そんなことをしなくても、彼ならクロスレンジで戦いにくる。

「た、大変大変！」

クロノ君、ルナちゃんが召喚魔法をしてるよ！」

「なに！？」

召喚魔法だと！？

そんなこともできるのか、ルナは！

召喚魔法は厄介なものになると広域殲滅魔法に匹敵する戦力になる。

「くっ、この距離じゃ召喚に間に合わない！」

エイミー、ルナは何を召喚した！」

竜種などならば最悪だ。

若年竜でもこの戦力では厳しい。

『ルナちゃん、召喚成功！

呼び出したのは……………、は？』

そこでエイミーの言葉が止まった。

なんだ、何を召喚した！

「エイミー！」

『…ッ！ゴメン！

えっと、召喚したのは……………』

「何だ！まさか竜種か！？」

「うっん、その……………、兎、だと思っ」

「……………は？」

思わず聞き返す。

兎？あの白くて耳の長い？

『うん、でも体長が4メートルくらいある……………って、嘘！？』

「どっした！？」

『召喚獣、砲撃体勢！

発射予想地点、そこだよ！』

『クロノ、退避しなさい！』

「ッ、全員！ここを退避し

」

瞬間、白銀の光が密林に満ちた。

s i d e o u t

後は野となれ大和撫子（後書き）

現在、逆お気に入りユーザー百人突破記念として番外編の作成を考えています。

詳しくは私のページの活動報告をチェック！

お前みたいなのがいるからホームレスになるんだ！消えろ！

「…うわあ、やりすぎました」

さっきまではこの辺りは密林の亜熱帯気候だったのに、今は辺り一面銀世界です。

樹は凍りつき、吐く息は真っ白になってしまいました。

あ、皆さんこんにちは。ルナ＝ベルツです。

クロノ執務官が追ってきたので返り討ちにするついでに、新しい切り札の威力実験をしようと思ったのですが…。
これはヒドイ。

「うーん、死んではいないみたいですね。」

まあ、非殺傷で撃ったんですし、当然と言えば当然なんですが」

通常、召喚獣や召喚竜に非殺傷の攻撃なんてできません。

そのため、対人に使うには召喚師がブレスなどが非殺傷になるように変換しなければなりません。

物理攻撃はさすがに無理ですが。

「それにしても大したものですね、ジュジュは」

「クウ」

そうそう、この巨大な白ウサギの紹介をしなければいけませんね。

この子は以前、召喚獣が欲しいなと思ひ契約したのです。

せっかくキャラの召喚魔法が使えるのに、それを腐らせるなんても

つたいないので。

それで私と相性が良さそうで尚且つ強いとなると、そうそういませ
ん。

しかし危険度はヴォルテールや白天王の一つ下といったほどレベル
の生物なので、私の召喚獣として不足はありません。

ちなみにジュジュというのは愛称で、本名はジュデイスです。
昔の哲学者の名前からとりました。

あつ、ウル〇ススとかは関係ないですよ！

モン〇ンは面白いとは思いますが、あんなにジュジュは不細工では
ありません！

もつと原型の兎に近い感じですよ！

確かに牙が生えていたり爪がすごく鋭かったりはしますが。

あ、耳は後ろに流れるように寝かせられています。

これもチャームポイントの一つですね。

そんなことを考えながら私がジュジュを撫でていると、

「とつとつとつと？」

生き残りがいましたか？」

動いている魔力反応を発見しました。

念のためにライアの目で見張っていましたが、どうやら本当に生き
残りがいたようです。

別に殺したわけではないので生きているのは当たり前ですが。
それに、これはどうやらクロノ執務官のようです。

【クロノ執務官、動かないほうが良いですよ？

非殺傷設定とはいえ、食らい過ぎると身体に悪いですし〜】

返答は砲撃魔法でした。

それなりに距離が離れていたの、ジュジュに乗って回避します。

『Ice Avenue』

魔法で足元に氷の道を作り出し、その上をジュジュが滑るように移動します。

これはスバル「ナカジマの『ウイングロード』を応用した魔法なのですが、私には移動方法がないので手に余っていたのです。

いや、ものは使いようですね。

え？ますますウルク〇スみたいですって？

うるさいです！便利なんだから良いじゃないですか！

【慣れない長距離砲撃なんてしても無駄ですよ。

ここで見逃してくださいされば　　】

【それはできない！】

そのままこちらに一気に接近してきました。

別にそのまま狙撃で撃ち落としても良かったんですが、ジュジュに乗って移動している状態では上手く狙えないので逃げに徹しました。

【もう、あなたじゃ私に勝てないのはわかったでしょう？

いい加減に諦めて、アースラに帰ってはいかがですか？】

そのままアイスダガーを周囲に展開して彼を撃ち落とそうとしましたが、誘導性のある魔力弾で全て破壊されました。

流石は技巧派魔導師、技量がすごい。

このまま追いかけてこを続けても負けない自信はありますが、少々面倒ですね。
ならば、

「速攻で終わらせてあげます」

sideクロノ

あの召喚獣、見た目に反して思った以上に速い。
そしてそれに乗って攻撃されると、完全に追いつけない。
このままではジリ貧だ。

「エイミィ、こちらクロノ！」

応援はまだ到着しないのか!？」

『クロノ君、無事だったあゝ！
応援はすぐは無理！さっきから場所を移動しすぎてて座標を固定でき
ない！
もう少し一箇所で戦って』

その時、突然ルナの召喚獣が高度を上げたと思うと、ジェットコー
スターのように一回転して僕の後ろに回りこんできた。
しまった、後ろを取られた！

しかし、よく見ると召喚獣にルナが乗っていない。
どこに行った？

「上ですね」

声が聞こえたと思うと、頭のすぐ上でルナがデバイスを振りかぶっていた。

あの一回転の時に飛び降りていたのか！？

「氷華一閃！」

「なめるな！」

『Protection』

バリアを展開して防ごうとしたが、

「バリアなんて無駄ですよ」

バリアはルナのデバイスに触れた瞬間に凍りつき、一瞬で碎け散った。

そのまま白刃が迫る。

なんとかS2Uの柄の部分で受け止めたが、そのまま地面まで吹き飛ばされ、叩きつけられた。

「ぐっ、くそ！」

本当にオーバースはあるな。

ジュエルシード事件の時は実力を隠していたのか」

魔法の技術もそうだが、戦い方も上手い。

亮も確かに実力はあるが、ルナは天才的だ。

この歳にしては異常と言っても良い。

くそ、応援が来るまで無茶はしないつもりだったが、最悪それまですらもたない。

場所もかなり移動してしまった。

到着までは時間が掛かるだろう。それまでは

ウウウウウウウ!

ん?何の音だ?

何かの鳴き声のような…。

そう思った瞬間、僕はそこを飛び退いていた。

次の瞬間、ルナの召喚獣が周囲の樹を巻き込みながらそこを押しつぶす。

ただの『のしかかり』だ。それだけで地面が陥没する。

「この、化け物め!」

『Blaze Cannon』

召喚獣に砲撃を撃ち込むが、驚くべき跳躍力で避けられた。そのまま上空の道に飛び乗られる。

「くそ、腐ってもウサギということか!

……?ルナはどこだ?」

『クロノ君、上!』

「なに!?!」

空を見上げると、巨大な魔力の塊が鎮座していた。

なのはのスターライトブレイカー並みに巨大だ。

「暗き闇夜に 導きの光を」

魔法の詠唱が響き、魔力が一層輝きを増した。
まさか、集束魔法だと!?

ええい、どいつもこいつも!
最近の九歳児は化け物ばかりか!?

『クロノ君!』 『クロノ!』

「すみません、任務失敗です」

くそ、この借りはいつか返すぞ…!

「月の欠片よ 降り注げ」

『Lunacy Fragment』

そして魔力の塊は膨れ上がり、この辺り一帯に無差別に砲撃を撒き散らした。

気絶する前に見えたのは、魔力の塊から何条も降り注ぐ砲撃の嵐だった。

side out

side 亮

「なんだと！？ルナが脱走した！？」

それを聞いて最初は驚愕したが、よく考えればチャンスだと思った。だってそうだろ？これで俺は堂々とルナと戦える。

A'sを前にして、不安事項が消えたんだ。それも、他でもないルナ自身の手によつて。

ようやく俺にも運が向いてきたみたいだぜ。

A'sになれば味方も増えるし、それが終わればヴォルケンリッタ
ーという戦力も増える。

前の戦いの敗因は敵の実力もあるが、一番の原因は敵が複数いたことだ。

ライア、アリス、イデア、アリシア、キャロ、リリスとか言う融合
騎、そして教授。

そいつらが完璧な連携で攻めてきたんだ。敗因はそれだろう。

しかし、今回は違う。

あいつは完全に一人で、その状態で戦闘に参加を強制されている。
いくらあいつでも神が定めたルールを破ることはできない。

「クハハハハ、ルナア！」

今回こそは俺が勝たせてもらうぜ！

お前らが大嫌いな『仲間の力』を見せつけてやるよお！」

A・sこそは俺の勝ちだ！
ズタズタに切り刻んで殺してやる！

s i d e o u t

お前みたいなのがいるからホームレスになるんだ！消えろ！（後書き）

さあ、どうやってルナをA・Sに介入させようかな？。

幸せは、歩いてこない、だ、けど走って逃げていく、
(前書き)

今回は少し短いです。

幸せは歩いてこない、だ〜けど走って逃げていく〜

「あ〜た〜らし〜い、あつさが〜来た〜、き〜ぼ〜のあ〜さ〜だ」

「どんだけ音痴やねん！」

朝、台所でラジオ体操のソングを歌いながら朝食の準備をしていると、家主さんからの厳しいツッコミが炸裂しました。

「朝から元気ですね〜。

そんなに興奮していると早死にしますよ〜？」

「誰のせいで興奮してると思っとなるんや！」

「…？勝手に興奮してるんでしょ〜？」

「んなわけないやろ！」

「じゃあ何なんですか〜？」

…あ、ひょっとしてあの日ですか〜、すみません〜」

「おっさんが、アンタは！」

本当に元気ですね、この似非関西弁タヌキは。

あ、皆さんおはようございます。ルナニベルツです。

現在は五月の終盤、私は居候をしています。

「はいはい〜、家主さんがツッコミ好きなのは理解しましたから、

そろそろ席についてくださいね。」

「…なんで私が負けた気分になるんやろ。それより、いい加減に名前前で呼んでな。」

家主命令やで、ちゃんと言うことききなさい！」

はい、この家主さんですが、皆さんが想像した通りの人です。その名も…、

「綾崎はやてさんでしたっけ？」

「ちゃうわ！私には借金なんてあらへんで！」

「冗談ですよ、八神はやてでしょう？」

短気ですね。そんなだからいつまで経っても八神はやてなんですよ。」

本当にいつまで経っても八神はやてなんですから。」

「私の存在が否定された!？」

「ささ、そんなどうでもいい話は置いて、朝食にしましょうか。」

「どうでもよくないわ！」

現在、私は八神家に居候しています。

はやては私のことを外国からホームステイに来た少年だと思っています。

知り合いのおじさんからの紹介ですし、怪しまれることはありませんでしたが。

つまり、私が言いたいのは、

「真実って残酷ですよ〜。」

残酷すぎて惚れ惚れしてしまいます〜」

私は、ギル・グレアムに彼女の凍結封印を依頼されてここにいるという事です。

数日前のことです。

私はミッドチルダの喫茶店にいました。

「はあ〜、これからどうしましょうか〜」

資金は問題ありません。

助手だった間にコツコツ貯めておいたので。

しかし、これからどう動こうか決めかねていました。

「いつそのことA・Sに少しだけ介入して、そのままどこかに逃亡っていう手もありますけどね〜。」

関わったのは事実なんですし〜」

『しかし、それでは敗北はなくとも勝利もありません。
新たな転生者も現れるのです。ここは』

「少し良いか？」

すると、私が座っていた席に見知らぬ青年がやってきました。そのまま私に向かい合う席に座り込みます。

「何か御用ですか？」

他の席にも空きはありますよ？」

「いや、お前に話があつてきた、ルナ＝ベルツ」

…私の名前を知っている？

新しい転生者？だとしたら殺しますが。ま、少し様子見ですね。

それにしても、どこかで聞いたような声ですね。

「そうですか？」

それで、今日はどういったご用件で？
内容と報酬によってはお受けしますよ？」

「その前に、お前は氷結魔法が得意だと聞いた。それは本当か？」

「事実です」

私が氷結魔法が得意だと知って依頼に来た？

…あ、なんか読めてきました。

「…これは他言無用だ。

情報が漏れればお前を始末する」

「了解しました。」
それで、肝心な依頼内容は？」

「……………闇の書の凍結封印だ」

はい、ビンゴ。大当たりです。

ってことは、この青年はギル＝グレアムの使い魔ですね。

えっと、リーゼ＝ロットとリーゼ＝アリアでしたか？

うわーお、何もしなくてもA・Sに介入するのが決定してしまいましたよ。

げに恐ろしきは人の力ってやつですね。

って感じで私は現在、八神家に送り込まれています。
今の私の仕事は彼女の見張り兼護衛ってところです。

ギル＝グレアムですが、私が依頼を引き受けると同時に正体を明かしてきました。

なんでも彼女と生活していれば自然とわかるかららしいです。
まあ、確かにはやてが手紙を送っているのを見ましたが。

本来はリーゼたちが私の役目をやっているところですが、今は『デユランダル』の製作に全力を注ぎたいらしく、私に全てを任せてきました。

しかし完全に私を信用している訳ではなく、私が何か妙なことをすれば直ちに管理局に私の情報を渡すと言ってきました。

なるほど、確かにこの海鳴には負け犬になのはさんと星さん、スクライアさんも時々いますしね。

私を抑えるには充分と踏んだのでしよう。

ちなみに報酬は資金はもちろんのこと、しばらくの海鳴での安全な生活（笑）らしいです。

なぜ（笑）が付くのかというと、素顔のままじゃ表に出れば負け犬たちに見つかるからです。

つまり、自然と私ははやと一緒の家で大人しくしているしかなくなりません。

面倒ですね〜。

「はあ〜」

「どうしたん？」

ため息吐くと幸せが逃げるで」

「はっ、幸せとは自分で掴み取るものです〜！

逃げた分は取り返せば良いんですよ〜！」

「ほえ〜、そんな顔して男らしいこと言うんやな〜。

見直したで〜」

「あっはっは〜！」

どうやらクソ狸さんは朝食がいらならしいですね。
もう、ダイエットでもしているんですか？」

「すみません！」

男の中の男のルナさんには余計な言葉でした！」

「わかればよろしいです」

ククク、はやてを弄るのって楽しいですね。

ここまでの『弄られオーラ』を見たのはライア以来です。

ツッコミが速いのも良いですね。

さて、少し真面目な話をしましょう。

闇の書が覚醒し、ヴォルケンリッターが現れるまであと一週間ほどです。

確かあれははやての誕生日でしたよね。つまりは6/4です。

それから守護騎士たちとの生活が始まるんですが、そこに私という
他人イレギュラーが入り込むことになります。

はやてには一年ほどこちらにしていると云っているので問題はありませ
んが。

問題は、A・Sの終盤まで私が魔導師であることを明かす気はない
ということですよ。

これは私の意志でもあり、依頼内容でもあります。

闇の書を封印した後はさっさと消えるというのが依頼内容です。

私自身も、ことを上手く運ぶためにバレたくはありません。

難しいことになりそうですが、なんとかなるでしょう。

最悪、新しい転生者を確認したら逃げても良いんですし。

「まあ、ボチボチ行きましょつか」

超大型ハリケーンの前の静けさ

「ああ、肩が凝ります」

疲れます。ひたすらに。

あ、皆さんどうも。ルナ＝ベルツです。

なぜ私がこんなに疲れているのかというと、『ライアの目ごと』、『プロヴィデンス・ヴィジョン』を使ったまま生活しているからです。負け犬や新しい転生者がはやてに接触する可能性があるので見張っているんですが…。

こんなに疲れるとは。寝てる時は使ってませんが。

それにしても、あと四時間で日付が変わります。

今日の日付は6/3です。つまり、もうじき闇の書が覚醒します。

なので、

「はやて、私はもう寝ますね」

「えらく早いな」

深夜アニメでも観るんか？」

「そんなもんです」

さっさと寝ましょう。

どうせヴォルケンリッターが現れるのは確定してますし、出てから起きれば良いんです。

それに、いい加減疲れたので早く寝たいんです。

「おやすみなさ〜い」

side シグナム

新しい主は、今までの主とは随分と違っていた。

私達が起動して初めて見た主は、目を回して気絶された姿だった。

「ど、どうしましょう!」

「とりあえず、医療設備のある場所に連れて行くべきだろう」

シャマルが慌てるが、ザフィーラが冷静に窘める。

「では、私が運ぼう。失礼します、主」

そのまま主を抱えて病院を探そうと部屋を出ると、

「ふあ〜あ、バタバタと喧しいですね〜。

今が何時だと思ってるんですか〜」

謎の少女が隣の部屋から出てきた。

寝ぼけているのだろう、白い寝巻きで枕を抱えたままだ。

すると彼女はまずヴィータを見て、次に私、気絶した主、シャマルの順に見回し、ザフィーラを見て視線が止まった。

そのままザフィーラを見つめ、視線を逸らさない。

【おい、こいつってこの主の家族とかじゃねえのか？】

【かもしれんな。同じ家に住んでいるのだ。

顔は似てないが可能性はある】

【そうね、一応事情を説明した方が。

それに病院の場所も教えてもらえるかもしれないし】

無用な混乱を避けるために話しかけようとした。

すると彼女は落ち着いた態度で、

「最近の泥棒はコスプレチックですね。」

でも男性のケモノ耳は流行らないと思いますよ？」

そう言ってきた。

どうやら私達を泥棒と判断したらしい。

「ま、待ってください！

私達はヴォルケンリッターと言って彼女の守護騎士

「泥棒は皆言うんですよ、『自分はやってない！違うんだ！』って
。」

ほら、警察を呼んであげますから。」

「ちょ！話を聞いてください！」

その後、シャマルの必死な説得もあり、通報だけはされずに済んだ。

彼女に理解してもらおうのにはかなり時間がかかったとだけ行っておく。

結局、主はただ驚いて気絶しただけだとわかったため病院には行かず、その場で事情を説明することになった。

「は、魔法か」

主が感嘆の声を上げる。

この世界には魔法文明が存在していないらしい。それならそう反応するのも無理ないだろう。

「良かったですね、はやて。

これで似非関西弁タヌキの他に魔法少女（笑）という称号も手に入りましたよ」

「（笑）って何やねん！」

「…主、先程から気になっていたいたのですが、そちらの方は」

「ああ、ルナちゃんか。

この子はな、家に居候している外国人さんや」

「ちゃんって言うな。

…コホン、改めまして、ルナ＝ベルツです」。

一応お互いに客人という立場ですし、ルナと呼んでくださいね」

最初の印象は華奢で触れれば折れてしまいそんな細い身体。

腰に届きそうな美しい銀髪に吸い込まれそうな蒼い瞳。
間違いなく街を歩けば十人いれば十人が振り返るような、絶世の美
少女といったものだった。

このルナが私たちの今後に大きく関わってくるなど、この時は想像
もしなかった。

だが、ルナならばこう言うだろう。

自業自得だ、と。

s i d e o u t

長いものに巻かれて窒息して死んでください〜(前書き)

新たな転生者、登場！

長いものに巻かれて窒息して死んでください

「今日は、良い天気、そちらは、青くて……」

「その歌は危険や！」

今日も相変わらず素早いツツコミをくれました。

しかし、確かにこの歌は危ないですね。今度フェイトに歌わせたいですけど。

あ、皆さんこんにちは。ルナ＝ベルツです。

現在、私とはやては病院の帰りです。一緒にシャルもいます。これから図書館に寄ってから夕飯の材料を買って帰る予定です。

本当はこのまま帰りたいんですけどね。

だって負け犬に見つかるかもしれないじゃないですか。

はやての前で変身魔法を使うわけにもいけませんね。

ですから、今は髪型をサイドテールにして伊達メガネをかけています。

はやてたちには『誰？』って言われるくらいだったので、変装としては上々でしょう。

その後でスカートをかきさげそうになったので、少しOHANAS HIしました。

というか、それまで守護騎士のほぼ全員が私を女だと思っていたらしいです。

ザフィーラは臭いでわかったらしいですが。

流石は盾の守護獣！今日のご飯はあなただけ豪勢にしてあげますからね

それと、図書館に物凄い魔力を持った人もいますし…。

「それにしても、はやてが本好きというのには驚きました〜。
あ、本だけが友達ってことですか、すみません〜」

「ちょ！マジレスせんといて！」

「でも大丈夫です〜。

はやて、あなたはもう一人じゃありませんよ〜」

「…そうやな。私はもう、一人やない！」

「そうですね〜！」

愛と勇気だって友達です〜！」

「そうや！愛と勇気……って、私はアンオンマンか〜！」

「ふっ、ナイスツッコミです〜。

シヤマルもこれくらいになれば合格ですよ〜。精進してください
ね〜」

「え、私もなの!?!」

「だって守護騎士でのツッコミがあなたの仕事なんですよ〜？
ザッフィーと一緒にツッコミに生きるんでしょ〜？
サポートなんですから、ツッコミのスキルは必須ですよ〜」

「…もう良いです」

そんなこんなで図書館にやってきました。

それにしても、さつきから図書館の中をうろついている巨大な魔力反応。

負け犬ではありません。もっとデカイです。正直、私よりも。こんなに大きい魔力を見たのはキャロ以来です。

これは、本当に来ましたね。

え、何がかつて？

新しい転生者ですよ。

すぐ近くにいるようなので、私はキョロキョロと辺りを見回しました。

はやては読みたい本を探しに本棚の方に行ってしまいました。シヤマルは私と一緒に隅に控えています。

すると、

「……………ん？んん！？」

視界の隅に、明らかに変な人がいました。

服装は普通です。別に変な行動をしている訳ではありません。しかし、その人は明らかに異質でした。

その人は、本棚で本を取ろうとしているはやてに近づいていき、

「はい、これで良いかな？」

爽やかな笑顔ではやてに本を渡しました。

「あ、ありがとうございます……す？」

お礼を言いかけたはやても途中で呆然としてしまいました。
でも、仕方ないと言えば仕方ないでしょう。
だってその人、

イケメンで銀髪で赤と金のオッドアイだったんですから。

「いや、当然のことをしたまでだよ」

そして再び笑顔をキラン。

「げ、ゲホツ、ゴホツ、ゴホホツ！」

なんだそれは！私を笑い殺すつもりですか！？

銀髪のイケメンWWWオッドアイWWWき、キランWWW

ふ、腹筋が！腹筋が爆発しそうです！

図書館で大爆笑なんてルールに反しますが、そんなことを言ってい

る場合じゃありません。

こ、こんな笑いの化身みたいな人とA・Sでは戦うということですか!?

無理!絶対に無理!笑いのせいで顔を見ただけでもう動けない!

「る、ルナちゃん、大丈夫!？」

シヤマルが心配してくれますが、呼吸困難に陥っている私は返事ができません。

ジェスチャーで大丈夫と伝えるのが精一杯でした。

「ふふふ、他にも欲しい本はあるかい？」

君みたいな可愛いお嬢さんの頼みならば何でも聞くよ」

か、可愛いお嬢さんwww

もうやめてください!笑いを抑えるのも限界が…!

「ルナちゃん、本当に大丈夫?」

「エホツ、ゲホツ、だ、だいじょう」

「遠慮しなくても良いよ。僕は暇だったしね。」

それに、レディーを助けるのは紳士として当然さ」

れ、レディーwww紳士www

「ゲホツ、ゲホツ、ガホツ!

す、すみませんシヤマル、先に帰っても良いですか?」

もう駄目です。

あんな『僕が思いついた完璧な主人公』みたいなのを見ていたら死にます。

肺が悲鳴を上げているし、面白すぎて頭も痛いです。

返事も聞かず、私は図書館を出ました。

そのまま走って帰宅します。

そうしないと道端で大爆笑してしまいそうだったので。

「教授、以前負け犬を厨二病と仰っていましたがよね？
でも、上には上がいましたよ〜」

side 新たな転生者

ふふふ、ファーストコンタクトは上々だろう。

はやてはもう、僕に惚れ始めている！

ああ、自己紹介がまだだったね。

僕の名前はジークフリートⅡⅡ神風、転生者だ。

僕がなぜ転生したのだった？

それを説明するには少し前の話をしなければならぬ。

僕は、俺は死んだ。

トラックに撥ねられて死んだんだ。

俺はとりえもなく、容姿も普通。
少しオタクだったかもしれないが、それでも充分普通だったのに。
何でだよ……。俺が何か悪いことでもやったのかよ。ちくしょう。

そして、俺は何もない真っ白の空間を漂っていた。
このまま消えるのかと半ば諦めていた時、それは起こった。

突然、目の前が真っ暗になったかと思うと、神殿のような場所で突
つ立っていた。

そして、目の前には白衣を着た眼鏡の男と、赤毛の少女に金髪碧眼
の美青年がいた。

「やあやあ、おめでとう！お前は選ばれたのさ！」

そう言っつて白衣の男が両腕を広げた。
選ばれた？どういうことだ？

「まあ、突然選ばれたと言われても混乱するだけだろうしな。
順を追って説明してやる。」

まず初めに、俺様たちは神だ」

「……………は？」

「は？じゃねえよ。」

神様がいるんだぜ？何か言うことはねえのかよ？」

紙、髪、神！？」

神だと！？じゃあまさか、

「これってまさか、転生させてくれるっていうアレか!?
二次創作でお決まりの!？」

「そうだ」

「じゃあ何でお前は偉そうなんだよ!

アレだろ、どうせ書類に飲み物溢したせいで俺が死んだとかなんだ
ろ!

じゃあ、何か言うことがあるのはお前らだろうが!」

俺は酔っていた。

どこかの世界で俺 T U E E E E E をしたりハーレムを築いたり。
そんなお決まりのパターンだと高を括っていたんだ。

だが、目の前の神はそんな常識を軽々と破壊してくれた。

「ククク、お前面白いな。そんな訳ないだろ?」

「……………え?」

すると、眼鏡の神は邪悪な笑みを浮かべこっちに歩み寄ってきた。
その目はまるで、虫を見るような目だった。

「前提からして間違ってたんだよ、お前は。

何で神の俺様が、お前が間違ってたんだからって謝る必要があるん
だよ。

神からすれば人間なんてティッシュペーパーよりも役に立たないん
だぜ?

そんな命が一つや二つ吹っ飛んだからって一々構ってる暇はねえんだよ」

ニヤニヤと笑いながら言い放った。
知ったことじゃないと。

「それに、今回は俺様の好意で特別に転生させてやるって言ってるだけだぜ？

良いか？お前の無意味で無価値でクズみたいな命を俺様が有効活用してやるんだよ。

テメエに拒否権があると思ってるのか？一応あるぞ？

文句があるなら言え。その時はテメエを地獄に叩き落として他の奴を呼ぶだけだ」

違った。こいつは俺が考えていた神とはまるで違った。
人間を本当にクズとしか思っていない。

「だが、俺様に従うならば願いを叶えてやるっ。
俺TUEEEEでもハーレムでも主人公アンチでも好きにすれば良い」

それは命令であり脅迫だった。
だが、同時に一つの光明にも見えた。

「お、俺は何をしたら良いんですか？」

あまりの恐怖に、思わず敬語を使っていた。

これは正面から話をしたやつにしかわからない感情だと思う。

まるで、心をズタズタにされた上で踏み砕かれたような感じになるのだ。

「ククク、それで良いんだよ人間。

お前らみたいな下等なゴミはそれが正しい態度だ。

…おっと、話が逸れたな」

そう言うと、神は転生のルールを説明し始めた。

行き先は『魔法少女リリカルなのは』の世界だということ。

他にも転生者がいるということや、そいつと戦うということ。

向こうには強力な仲間がいるということ。

「つまり、俺は補欠ってことですか？」

「そうだ。んじゃ、さっそくだが特典を決める」

『特典』、俗に言うチートのことだが、この世界では行き過ぎたものは却下されるらしい。

だから、無限の剣製などは使えない。

「なら、魔力ランクをSSSにするとかは…」

「可能だ。一つ目はそれで良いな？」

俺は頷く。

ぶっちゃけ、あの世界は魔力量が全てだと俺は思う。

だから魔力が多い、それだけで俺の勝ちが決まったようなものだ。

魔力>技術>デバイス

これが俺の中での強さに必要なものの序列だ。

それに、向こうには強力な味方がいるらしい。

そして相手は一人、もう俺の魔力があるだけで勝ちは確定だろう。

よし、ならば後はハーレムを作るための準備だな！

「二つ目は、俺を銀髪でオッドアイのイケメンにしてくれ！」

「…わ、わかった。

お、オッドアイの色は赤と金で良いか？」

「おお、それ最高！」

わかってるじゃないか、神様も！

よし、ならば最後はあれだ！

「最後の願い、俺にニコポとナデポの能力をくれ！」

「ツツツツツツクククク！」

い、良いぞ。わかった。その二つはセットとして送ってやる」

よっしゃ！これでハーレム作りの準備は万全だぜ！

強くてかっこよくてニコポ持ち、これで作れないハーレムなんかねえ！

幸いにも、味方になる転生者はハーレムとかには興味がないらしい。つまり、俺はヒロイン達を独占できるという訳だ。

「お、お前はA'sからの参戦になる。

原作ブレイクでも何でも好きにして良い。

精々、死なないように頑張れ！」

そして俺は光に包まれ、『魔法少女リリカルなのは』の世界に送られた。

だがな、

「おいおい、俺は何か悪いことをしたか？
ルールの説明に不備があったか？勢力の説明を怠ったか？
違うよな？あいつはわかった上でハーレムを作るって言ったんだぜ
？」

そう、俺は何も悪くない。

確かに原作キャラの仲間になる魂を選ぶとは言ったが、歴戦の猛者の魂を選ぶとは言ってない。

簡単にYesと答えたお前らが悪いんだよ。

それに、あの馬鹿も悪い。

状況を説明してやったのにハーレムなんて甘えことを言ってるんだからな。

これが『YUTORI』というやつか…。

「それによ、案外いけるかもしれないねえぜ？魔力はSSSもあるんだし。」

デバイスも持たずに行くと聞いた時には笑いそうになったが」

「ぐぐぐ、こいつ…！」

ククク、怒れ怒れ。

もう一人の神は既に半分諦めているみたいだぞ？

さてと、あいつが今後どんなことをしてくれるのか、本当に楽しみだ。
だ。

だが気をつけるよ、ルナ。

案外、そういうやつほど状況を自覚すればしぶといもんだぜ？

ゴキブリのようにな。

s i d e o u t

男の娘は辛いよ

「……………はあ、死にたいです」

どうして私がこんな目に…。

私、何か悪いことをしたでしょうか？

あ、皆さんどうも。ルナ＝ベルツです。

ただいま夕飯の買い物中です。一緒にシグナムもいます。

「すまん。だが、これも主の命だ」

「嘔吐きなさい、あなたもノリノリだったでしょう？」

ああ、周囲からの視線が痛いです。

穴があつたら入りたいてこつことなんですね。

なぜ私がこんなに落ち込んでいるのかを説明するには、数時間前の話をしなければなりません。

そう、私は騙されたんです。あのクソ狸に…。

「誕生日プレゼントですか？」

「そや、まだ貰ってなかったやろ？」

六月の終盤、あと一週間もしないうちに七月になるといつこの時期に、はやてが終わった誕生日の貢物をねだってきました。

「え、でも今更な感じじゃないですか？」

「それもそうなんやけどな。

ほら、ルナちゃん約束してくれたやろ？あれを」

「……………あれですか？」

何でしょうか？

何か言った気もしますが、よく覚えてません。

「ほら、私の言うことを一つだけ聞いてくれるっていつやっや」

「…あ」

そういえばそんなのもありましたね。

はやての誕生日の前日、あまり外出ができる状況でもなかった私は『はやての言うことを一つだけ聞く』という訳わからない命令権みたいなのを約束させられました。

「…もう時効で良いんじゃないですか？」

どうせろくな願い事じゃないんでしょうし」

「それはあかん！

こんな面白そうなことを見過ごすなんて私にはできへん！」

ほら、既に変なテンションですし。
するとはやては守護騎士の皆を呼び出し、私に何をさせるかを話し
合い始めました。

「家事を一日代わってもらうのはどうでしょうか？」

「あかん、それじゃあ普通すぎやー！」

「じゃあアイス買ってこさせるとか。もちろんルナの自腹で」

「それもええけど、なんか味気ないな。」

「シヤマルとザフィーラはなんかないんか？」

「いえ、特には」

「はいはい〜！」

私にとっておきの案がありま〜す！」

すると、シヤマルがテンション高めに挙手しました。
うへえ〜、嫌な予感しかしません。

「はやてちゃん！ほら、この前買ったあれです！」

「……あれか！なるほど、その手があったやんか！」

「え〜！？マジでやるのかよ！？」

「ルナが怒り狂う姿が目には浮かぶのですが……」

「シグナム、二人でルナを抑えるぞ」

なんか、どんどん雲行きが怪しくなってきました。
これは逃げた方が良いのかも…。

私が悩んでいる間にシャルマルは自室へと走って戻り、そのままあるものを持ってリビングに戻ってきました。
それは…、

「って、それはゴスロリじゃねえですか!？」

そう、ゴスロリです。しかも水銀○のにそっくりな
ドレスのようなその服はアリスを思い出させます。

「……………ま、まさかこれを着ろって言うんですか?」

「そやで〜。

サイズはピッタリのはずやから、このままここで着て〜な。
その格好で今日一日を過ごす。これが私のお願いや」

「…撤回しないと殺す」

瞬間、部屋に殺気が充満し、守護騎士の皆がはやてを守るような位

置につきました。

そんな中、はやては平気な顔をしてこちらを眺めています。

「そんなに黒ゴスが嫌なんか？」

それなら白バージョンもあるで？あと和ゴスとかも」

「そういう問題ではありませんね。」

私が女顔なのは認めますが、女装なんて男の恥です。」

断固拒否させていただきます。」

まったく、何を考えているんですか。

こんなの断るに決まっているじゃないですか。

「そか、それは残念やな。でも良く考えてみ？」

ルナちゃんは自分が言ってることをわかってるんかな？」

はやてが普段はしないようなニヤリとした笑みを浮かべました。

「…なんですか、なんでそんなに余裕なんですか！？」

「どついうことですか？」

女装はしない、それは確定です。」

「それならルナちゃんは既に男やない！！」

「……………は？」

意味がわかりません…。

なぜ女装をしないことが男ではないことと繋がるんですか？
普通は逆では？

「ルナちゃん、あなたは約束したはずや。』できる限りのことはする』って。

ルナちゃんは服を着ることもできるのか？」

「そんなはずないでしょう？」

ですから、私は男として

「へえ〜。

ルナちゃんが言う『男』ってのは、自分からした約束も守れないんか？」

「え、え？いえ、ですから

「

「ルナちゃん、男に二言はないんやで？」

……………しまった！

はめられたああああああああああああああ！！

ここで私が約束を破れば男の風上にもおけないとか言われます。かと言ってゴスロリを着れば私の男性としての威厳はなくなっても同然！

つまり、逃げ道がない！

「そうだな。男たるもの、約束を違えるのは許されん」

「おいおいルナ、お前は男だろ？なら約束は守れよ」

「そうよ、男の子でしょう？」

「……………すまん」

み、味方もいない！

孤立無援、四面楚歌、絶体絶命です！

「ルナちゃん、ルナちゃんの『心』は男なんか？

それとも、身も心も男の娘なんか？」

そしてはやてが私に、黒ゴスを差し出してきました。

全員（ザフィーラを除く）がとも真剣な顔で私を見つめます。

こいつら、どうあっても私にこれを着せたいらしいです。

「あ、ルナちゃん〜。

今日はルナちゃんが買い物当番の日やからな。ちゃんと行かないとあかんで、その服でな〜」

「あなたは鬼ですか!？」

という訳で、現在に至ります。

服装？もちろん水〇燈ですが、なにか？

はやて曰く、『目の色以外はクリソツやで！おばかさあんって罵ってえな!』らしいです。

一応言っておけると泣いてお礼を言ってきました。正直、気持ち悪かったです。

その後で買い物に行くことになったのですが、見張りとしてシグナムを同行させてきました。

途中で着替えないようにさせるためらしいです。チツ、鋭い!

「さてと、買い物はもう終わりです〜。

このまままっすぐ、まっすぐに!家に帰りましょうか〜」

「わかった。私としてはもう少しその格好のお前を見ていたかったがな。

お前がそんなに落ち着きがないのは初めて見た」

「なら今度、水着で町内を一周してみると良いですよ。きっと私の気持ちが変わりますから」

そんな感じで帰路についたのですが、

「ねえ君、可愛いね。それは○銀燈のコスプレかい？とても似合っているよ」

つい先日聞いた声が聞こえました。

どうやら私に話しかけているみたいです。

「……………はあ、今日は厄日ですね」

振り返ると、先日の厨二病末期患者がいました。

普段ならば顔を見ただけで大爆笑していたでしょうが、この時はデションが下がり下がっていたので大丈夫でした。

「それはどうも、ありがとうございます」。

では、私たちは急いでいるので」

「まあまあ、そんなに急がなくても良いじゃないか？話でもどうだい？」

【転生者同士、話したいこともあるんだ】

すると、厨二さんが念話で話しかけてきました。

『転生者』という単語が入っていたので、私のみに向けられたものようです。

「……………はあ、わかりました」。

シグナム、先に帰っていてください。荷物は後で私が持って帰ります。」

「…いや、私が持って帰ろう。その格好のせめてもの詫びだ。」

そのまま私を置いて急いで帰っていききました。

…はやくに知らせる気ですね、あれは。

ひよっとするとどこかから覗く気なのかもしれません。

「では、どこかに移動しましょうか。」

sideジークフリート

僕と○銀燈のコスプレをした彼女は、近くの喫茶店に移動した。

本当は翠屋に行きたかったが、彼女がここ遠いから嫌だと言ったためだ。

僕が彼女を見つけたのは偶然だった。

家庭の事情で引っ越してきた（という設定）の僕は、まだ海鳴の地理を良く知らない。

だから原作キャラを探すついでに街に出てきたんだ。

すると、少し先のスーパーにピンク色のポニーテールが見えるじゃないか。

シグナムを発見した僕はさっそく声をかけようとしたが、一緒にいた少女を見て思わず息が止まった。

それ以外に言い表せなかった。

黒いゴスロリ風のドレスを身に纏った姿は神々しくすらあった。あんなキャラは原作にはいない。かといってモブにしては美しすぎる。

だから僕は彼女が転生者であると悟った。そして、同時に彼女を僕のハーレムに欲しいとも思った。

幸い、僕にはニコポもナデポもこの完璧な顔もある。

ククク、必ず彼女を手に入れてやる！

「それじゃあ、自己紹介をしようか。

僕の名前はジークフリート」」神風っていうんだ、よろしくね」

ここでニコポを発動させつつスマイル。

ふふふ、これでとりあえずは安心だ。

あの眼鏡の神が言うには、二人の転生者のうちの一人は原作アンチを平気でやるようなやつらしい。

こんな可愛い女の子がそうだとは思えないが、念には念をとっちゃつた。

僕のニコポの前では、あらゆる女の子は僕の笑みの奴隷になる。

これで彼女が危険な方の転生者だったとしても、僕のものになるというわけだ。

「じ、じーくふりーと？ かななぎ？

へ、へえ、なんだか壮大な名前ですね」

すると、彼女がさっそくソワソワし始めた。

ニコポが効いてきたみたいだな。

「それで、君の名前は？」

「あ、申し送れました。」

私はルナ＝ベルツと申します。」

そして向こうもこちらに笑いかけてきた。

若干だが笑顔が引きつっている気がしたが、勘違いだろう。

「それで、私に何の用ですか？こちらの状況は知っているんですよ？」

私があなを速攻で殺すとは考えなかつたんですか？」

「ふふふ、君みたいな可愛い女の子がそんな物騒なことを言うてはいけないよ？」

それに、そんな忠告をしてくれる時点で君が危険な方の転生者じゃないという証さ」

彼女は啞然とした顔で黙り込んでしまった。

ふっ、僕の名推理に驚愕してしまったようだね。

(ば、馬鹿だ、ウルトラ馬鹿がいる…！)

「ん？何か言ったかい？聞こえなかつたんだけど」

「い、いえいえ〜！なるほど、その考えはありませんでした〜！

『迷』推理ですね〜！恐れ入りました〜！

そこまでの自信があるとは、あなたも相当な特典を貰ったんでしょ
うね〜」

「ははは、名推理だなんてそんなことないさ。
それに、僕はただ魔力をSSSランクにしてもらったただけだよ。
まあ、これだけの魔力があれば大抵の敵には勝てるだろうけどね」

「……………？えっと、それだけですか？」

「それだけって？」

「ほら、特典は三つまででしょう？」

「ああ、他の特典は秘密さ。」

でも、SSSランクの魔力さえあればもう一人の転生者くらいは簡単に倒せるよ」

「……………え、え？あの、失礼ですがデバイスは？」

「そんなのどうにでもなるよ。」

ほら、主人公には自然と力が備わるものなんだから」

「……………その発想はありませんでした」

またもヤルナ（既に脳内では呼び捨て）は啞然としている。
ふっ、僕が頼りになるから見とれているんだろう。

「それで、もう一人の転生者はどんなやつなんだい？
剣型のデバイスを使うということくらいしか聞いていないんだけど」

「…え？ああ、もう一人の転生者ですか？」

その通りです、主にミッドチルダ式を使う少年です」

「……………男か」

なるほど、味方になる転生者は原作キャラとくつつくことはないと言っていたのは理解できる。

なんセルナ（本人は呼び捨てにされていることを知らない）は女の子だ。

くつつくことがないのも当然だろう。

逆に、もう一人は誰かとくつつく可能性があると聞いている。

つまり、もう一人は俺と同じ目的である可能性が高い。

「そうか…。今までは女の子一人でたいへんだったかもしれないけれど、これからは僕がいる。」

二人で頑張っていこう！」

そう言っつて、僕はルナ（ジークの中では既に定着）の手を取った。そして安心させるように笑いかける。

「わ、わかりました〜！わかりましたから手を離してください〜！」

ルナはそう言っつて無理やり手を払った。

ふふふ、照れてる照れてる。

「あ、え〜と、そうです〜！」

そろそろはやて帰らないとはやてが心配するので、もう帰りますね〜！」

そう言っつて彼女はそそくさと喫茶店を出て行ってしまった。

ニコポの威力は昨日のはやてとの接触で確認済みだ。

つまり、厨二を上手く使うのがA・Sでの勝利の鍵ですね。そうするには厨二と何度も接触する必要がありますが…。

「これは想像以上にハードですね」

幸い、ケータイのメアドと電話番号は教えてもらったので会うのは簡単です。

私は持っていないので買う必要がありますが。

「……………が、頑張るぞ〜〜〜〜〜!!」

結論、気合でなんとかするんです！

冷静な思考を捨てて、無心で相手をするれば良いんです！

そう、あんな精神鑑定に行った方が良いやつ言葉なんて聞き流しましょう！

やれるぞ、私!!!

そう自己暗示をかけてなんとか帰宅しました。

はやてに『デートはどうやった〜?』と聞かれました。

訂正、あの厨二は死体も残さず殺す。

男の娘は辛いよ（後書き）

ジークワールド、炸裂！ルナは9999ポイントのダメージを受けた！

ちなみに、はやては水銀党です。

ルナ＝ベルツの憂鬱

澄み渡る空、小鳥の鳴き声、八神家の皆の笑顔、そして、

「ははは、はやては面白い子だな。そうだ、一緒にゲームでもしようか」

いつの間にか我が家の一員みたいになっている厨二……。
…どうしてこうなった!?

あ、皆さんこんにちは。ルナ＝ベルツです。
今日は水○燈じゃありませんよ？普通の普段着です。

時は既に十月の頭、これまで色々とくだらないことがありましたが、長くなるので割愛します。

その間に彼、厨二は何度も八神家を訪れてきました。
そして気がついたらこんなことに……。

「あの、はやて……?いつの間にこんなにちゅ、ジークさんと仲良くなったのですか……?」

「ん……なに言ってるんや、ルナちゃんは……?
買い物とかの途中で良く会うからに決まってるやろ?
それに、あれや……、ジークさんってかっこええやん……!」

「……………は?」

な、何を言ってるんですか、この子は!?!?
あれがかっこいい!?!?どう見てもただの馬鹿でしょう!?!?

精神科にでも行った方が………精神科？

まさか！

「シグナムシグナム！」

ジークさんってどう思いますか？」

「な、なに、ジークか！？」

いやそうだな別にどうも思ってたなどいないぞ！？」

こ、こっちもですか！？

「お、おいジーク！」

アイスあるからよ、その、一緒に食わねえか？」

「そうね！一緒に食べましょうジーク君！ほらほら座って！」

そう言ってさりげなく自分の隣に誘導するシャマル。

………えええ。

「ぎ、ザフィーラはどう思いますか？」

ほぼそとザフィーラに話しかけます。

本当は念話を使いたいのですが、八神家は私が魔法を使えないと思っ
っているので却下です。

「…正直に言えば、あまり好ましいやつとは思えんな。

主やシグナムたちに不埒な視線を向けているのも良く見る」

あれ？ザフィーラは普通です。女性限定で厨二が好かれている？

でも、あんな変人をはやてが好きになるでしょうか？
はやてはしっかりとってますし、人を見る目はあるでしょう。
つまり、

「……………洗脳攻撃……………」

しかし、魔法を使っているようには見えません。魔力も感じません
しね。

つまるところ、体質系の特典ですか？

厨二、変態、気障、洗脳。

これらの要素から考えられることは、

「ニコポ、もしくはナデポですか」

しかし、それなら私にもおそらく使っているでしょう。

厨二は私が男だと知らないはずですし、しょっちゅうデートに誘っ
てきますから。

しかし私は相変わらず厨二がキモイと思っています！そしてザフィ
ーラも彼を好ましく思っています。

つまり、男には通用しないのではないのでしょうか？

「ザフィーラ、何かあったらあいつをぶっ飛ばしてやってください
ね」。

その時は私も加わりますから」

「……………心得た」

危ない危ない、厨二が馬鹿で助かりました。

これが性別に関係ないタイプの能力だった場合、私までやられていた可能性がります。

それにしても恐ろしい能力ですね『ニコポ』。ラノベとかで見た時は、『はいはい、ハーレム目指すんですねわかります』みたいな思っていました。が、実際に目の当たりにするとかなりヤバイ能力です。

誰にも気づかれないうちに女性限定とはいえ赤の他人すら味方にしてしまうその隠密性。

ただ相手に笑いかける、頭をなでるといふ動作以外に必要なという簡易性。

そして、もう解除は難しいだろうと思えるほどの洗脳の強力さ。

おそらく敵だろうとあの能力の前では奴隷に成り下がるのでしょう。ハーレム？モテモテ主人公？そんなチャチなことに使うなんて馬鹿としか言いようがありません。

その気になれば世界を牛耳れますよ。

恐るべし、厨二……………！！

そういえば、彼は負け犬が通っている『私立聖祥大学付属小学校』に通い始めたんですね。

負け犬と接触したという話は聞きましたが、私のことは話さないうれたらしいです。

そして、彼にはあまり近づかないようにしてるとか…。騙されてる騙されてる

おっと、話が逸れましたね。
つまるところ私が何を言いたいのかというと、

【アルテミス、明日、私立聖祥大学付属小学校に潜入します】

【あの厨二病患者の学校にですか？】

【ええ、確かめることができました】

なのはさん達も洗脳されている可能性があるということです。

翌日、私は私立聖祥大学付属小学校にいました。

変身魔法を使い、同い年くらいの女子の姿をしています。制服はバリアジャケットで再現してみました。

髪型は黒髪のおかつぱで、眼鏡もかけるという徹底ぶりです。これで地味子の完成。

大人の姿をしないのは、子供の方が風景に溶け込みやすいと思ったからです。

え？なぜ女子なのかって？

半ズボンを穿きたくないからですが何か？

だって恥ずかしいじゃないですか！！それならスカートの方がマシです！

教授には『訳わからん』と昔に言われましたが。なぜわからないのですか？

…また話が逸れましたね。

とにかく、今回の目的はなのはさん達の日常に迫るためのものです。大人が近くには気が散ると思ったので、今回は生徒の姿で潜り込むことにしました。何より怪しいですね。

「アルテミス、見た目はどうですか？」

『問題ありません』

「よし、準備完了です〜！では、行きましょうか〜」

『Yes, my master』

狙いは昼休みです。

その時間は昼食をとるはずなので、仲の良いグループなどに自然と分かれます。

つまり、厨二への好感度が高いならなのはさんは一緒に食事をして
いるはずです。

すると案の定です。

なのはさんは星さんと他に二人、そして負け犬と厨二を誘って屋上へ行ってしまいました。

どうやらそこで食べるらしいですね。

屋上に出ると、ベンチで仲良く……仲良く？昼食を食べる六人がいました。

なぜ疑問そうなのかというと、席が明らかにおかしかったからです。ベンチは三人用を二つ使っています。それなのに、

なのは 厨二 金髪 カチューシャ

星 負け犬

って感じになっています。

おいおい、三人用を四人で使ってるよ…。

そんなに厨二が好きかよお前ら。マジでセンス悪いやつばっかだな…。

うわ、厨二と弁当の中身を交換してるよマジキメエ…。

……はっ！つつい本音が出てしまいました。

いけないいけない、クールにならないと！

そのまま私は厨二のベンチの隣のに座りました。負け犬のとは反対側のベンチです。

一応、弁当は持ってきてるので食べながら話に耳を傾けます。すると不思議なことに気づきました。

星さんが会話に混ざろうとしない？

負け犬とは楽しそうに会話をしています。表情はあまり動いていませんが。

なのはさんや金髪が話しかけてもちゃんと会話が成立しています。なのに、厨二が話しかけた時だけは素早く会話を終わらせるかなのはさん達に振っています。

それはまるで、厨二のことを避けているみたいで…。

まさか、厨二の『ニコポ』が通じていない？

初めはまさかと思いましたが、観察すれば観察するほどそうとしか
思えません。

負け犬に通じないのはわかっていました。星さんにも通じないの
は予想外です。

女性であるということだけが『ニコポ』の対象ではないということ
でしょうか？

「…保留ですね」

【そうですね、現段階では情報が少なすぎます】

そのまま私は弁当を閉じて屋上を立ち去りました。

そして放課後、私は翠屋でシュークリームを食べていました。

もちろん姿はさっきのままです。バリアジャケットを解除して私服
に着替えています。

なぜ私がここにいるのかというと、金髪さんが『放課後に翠屋へ行
くわよ!』と宣言するのを聞いたからです。

しばらく待つと例の六人がやってきました。やはり星さんは厨二と
距離を取っているような…。

そして六人はなのはさんに良く似た栗毛のお姉さんに注文を…。

……………んん？

あれ、おかしいですね？

今、厨二はお姉さんにあのスマイル（笑）を使ったのにお姉さんに
反応はありません。

本当にただのスマイルだった？でもなのはさん達は見とれています。星さんと負け犬は反応なしですが。

…またです、また効果なしの人が出てきました。いったいどんな法則があるのか未だに良くわかりません。

しばらく観察していましたが、結局それ以上の情報は得られませんでした。

うーん、心配だな。本当に厄介な能力ですね『ニコポ』って。知らない間にstssの主戦力のほとんどを支配下に置いてますよ。そういう意味では負け犬以上に面倒な敵ですね。

はあ、A'sが始まったらルルとナナも彼と会うんでしょうね。グレアムさんから聞いた話によれば、二人はリンディハラオウンが預かっているらしいです。

つまりそれはA'sで海鳴に来る可能性が高いということだ…。

「…ルルとナナが心配ですね」。

あの二人、亜流ベルカ式を教えているので情報が駄々漏れです」

ああ、憂鬱ですね」。

饅頭よりも無能な味方が一番怖い（前書き）

今回、少し超展開気味かもしれませんが。
先に謝っておきます、ごめんなさい！

現在は十一月の初め、それなのに全く守護騎士の皆が動き出す気配がありません。

どこかで何か狂ったんでしょうか？

あ、皆さんこんにちは。ルナ＝ベルツです。

最近すっかり寒くなってきました。もう半分は冬ですね。

それなのに皆は各々で出かけています。私も一緒に行きたかったんですが…。

って、そんなことはどうでもいいんです！

本題に戻りましょう。

別に、多少なら守護騎士の皆の活動が遅れても問題はありません。

最悪の場合、厨二の魔力を死ぬまで蒐集すれば良いんです。それで遅れは充分に取り戻せます。

問題なのは、最近はグレアムさんとも連絡が取れないことです。

向こうからの連絡が最後に来たのは十月の中盤。

それ以降はこちらからの連絡にも出ることがありません。リーゼたちも来ませんし。

忙しいから出られないというのではありません。私が教えてもらったのは、グレアムさん本人に直通する完全プライベートの方法です。

多少忙しくても本人に直通するなら気づかないということはないでしょう。

つまり、

「出られない状況なのか、もしくは私を切り捨てたかですね」

『後者である可能性は低いと思われます。』

向こうにとってマスターは充分にに利用価値があるでしょう。闇の書に対しての切り札であるマスターを切り捨てるメリットがありません」

「ですよね。それなら今頃、私は追われる身になっているでしょうし」

『では、負け犬が何かしたのでしょうか？
彼ならば原作知識を利用してこくとも考えられますが』

「可能性としては低いと思いますよ」

負け犬は『闇の書についての情報はどうやって手に入れた？』と聞かれれば答えられない立場です」

家には一回も来てないですし、厨二が言うには八神家と負け犬が接触した様子はないらしいですね」

そうなるとう去法で原因は厨二ということになるのですが…。

「ないですね」

『ですね』

あのウルトラ馬鹿にそんな巧妙な作戦が立てられるとは思えません。私に気づかれずに作戦をする？そんな馬鹿な。

守護騎士たちも何も言ってきませんし、心配のしすぎでしょうか？

すると、ケータイが振動し始めました。着信です。

相手は………、グレアムさん？

「はい、もしもし」？

『ルナ君、久しぶりだね。私だよ』

「本当ですよ。長い間連絡が取れないので心配していました。今までどうしていたんですか？リーゼたちも最近は来ませんし」

『…そのことなんだがね』

突然グレアムさんの声が厳しくなりました。ひよっとして本当にトラブル発生ですか？

『闇の書、いや、夜天の書の凍結封印は中止する』

「……………はい？」

理解不能です。あまりの急展開に頭が追いつきません。封印を、中止？それに夜天の書？なぜその名前が？

「ちょ！突然そんなことを言われても困ります〜！何か問題でもあったんですか〜！？」

『すまないが、詳しいことは言えない。』

ただ一つ言えるのは、君との契約は破棄するということだ』

「破棄！？それじゃあまさか…！？」

『ああ、その通りだ。この通信を終えた後、私は自首する。』

そこで私は全てを話す。今までやってきたことも、君のことも』

「このクソ爺！テメエ、自分が何をしようとしてんのか本当にわか
つてんのか！？」

『もちろんだ。全てわかっている。』

だが、私の目的はあくまで闇の書の脅威を取り除くことだ。

そのために何も知らない少女を見殺しにするのは間違っている。

そう言われてね。闇の書についての目途も立った今、私にできるこ
とはこれぐらいだろう』

闇の書の脅威を取り除く目途が立った！？

あのイカレ魔導書をどうにかする方法を見つけたと言っんですか！？

おまけに誰かの入れ知恵のようです。まさか本当に負け犬が…！？

「クソが！後悔するぞ…！」

そのまま私は通話を終了させます。

するとその直後、そのまま私に電話が掛かってきました。

クソッ、誰ですかこの忙しい時に！

相手を確認かめもせず、私は通話を繋げました。

「もしもし、今忙しいんです〜！話なら後にして

」

『その様子だと、もうギル・グレアム提督から連絡があったみたいだね』

相手は厨二でした。それも何か訳知りな態度です。

…おいおいまさか。

「も、もしかして今回の騒動はあなたが…？」

『その通りさ！幸いにも、リーゼたちが僕に自分から事情を話してくれてね。だから僕が二人を説得してグレアム提督に会わせてもらったんだよ。その後グレアム提督とはやてたちを直接会わせてね。結果は大成功！もうA・Sは心配しなくても良いよ！さつき提督は自分の罪を認めてくれた』

「……………（啞然）」

『君は提督に凍結封印の依頼をされていたらしいけど、それははやくてを守るための行動だったんだろう？流石だね、ルナ』

「……………（呆然）」

『これで闇の書については管理局が手伝ってくれる。なぐに、皆の力を合わせればきっと何とかなるさ！ルナもそう思うだろう？』

「……………え、えっと、ちょっと待ってください」

状況を整理しましょう。

まず、おそらく厨二はリーゼたちをニコポで落としたのでしょう。そこから推測するに、

「あなたはリーゼが偶然話してくれたおかげで、魔法と闇の書について知った。

それによって魔法関係者という『設定』を手に入れました。そしてリーゼ経由で私の仕事について知った。これで良いですか？」

「ああ、間違いないよ。流石にこの間まで一般人だった僕がグレアム提督と知り合うのは不可能だ。

突然出てきても頭がおかしいと思われるだろうしね。でも、自分の使い魔が証人なら話は別だ」

お前は普段からおかしいだろうが。その言葉をグツと飲み込みます。それにしても恐るべし、ニコポ…！女性ならば使い魔だろうと関係なしですか。

おまけに多少は無茶な理論でも女性相手ならば「僕を信じてくれ！」で説得できるんですよ、あれは。

「そしてリーゼたちを味方につけたあなたは、グレアムさんに闇の書の凍結封印をやめるように説得した。

その結果グレアムさんは折れ、自分の罪を認めたとここですか？」

「察しが良くて助かるよ。そう、その通りさ。

その後、はやてたちをグレアム提督と直接会わせてね。結果は大成功さ。

提督は謝罪して、はやてたちはそれを赦した。これで完全にハッピー

「一エンドさ」

「つまり、闇の書はグレアムさんが自首すればすぐにでも管理局に回収されます。」

そして皆で対策を考えて、それで最後は皆ハッピー！そんな完璧な計画を立てた俺に皆はコロリ。

あれれ？いつの間にかハーレム完成じゃん！

これが厨二の考えたことみたいです。

「……どうして私に知らせてくださらなかったんですか？」

『君を驚かせたかったのさ！それに、余計な心配をさせたくなかったんだよ。』

最近、君は疲れていたみたいだったからね。きっとA・Sについて一人で悩んでいたんだと思ったんだ。だから僕からのデートの誘いを断っていたんだろう？もう心配はいらないよ！』

「……そうですか？」

確定、こいつはほんもののばかだ！

ハーレムのためにA・Sを潰しやがった！

さらに言うなら、まだ闇の書をどうにかする目途も立ってねえし！力を合わせればどうなかなると本当に思ってたのか！？

『ふふふ、どうだいルナ？安心し』

『

「黙れこの厨二病末期野郎」

そのまま私はケータイを握りつぶしました。破片が床に散らばります。

これでGPSなどによる私の追跡はできません。

「なるほど、はやてたちが全員いないのはグレアム提督に会いに行ったからですか」

『そうですね』

「これでA・Sが自然に起こるといふ可能性は消えましたね」

『そうですね』

「きつと随分前からはやては厨二の案を知っていたんでしょうね。じゃないと、いきなりグレアムさんと話し合いなんてできませんよ」

『そうですね』

そのまま私は自室に戻りました。

そして扉を閉めて、深く、本当に深く深呼吸しました。

「すう、はあ、すう、はあ」

そして、

「舐めたことしてくれんじゃねえかこの厨二病がああああああ
ああああ！」

全力で叫びました。ご近所迷惑でしょうが、もう関係ありません。
もうここにはいられない。

「クソが！あの野郎、余計なことをしゃがって！」

私は手際よく荷物をリュックに詰め込みます。
緊急時のために持ち物は少なめにしてあるので、荷造りは五分ほど
で終わりました。

「厨二は私が危険な方の転生者だと気づかずにことを進めたんでし
ょう。」

そうじゃなきゃ私を貶めるための策略にしかありません。」

『厨二はマスターにメロメロでしたからね』

まったく、本当に余計なことをしてくれました。
百害あって一利なしです。

「おそらく、闇の書ははやてが本局に持って行ってしまったでしょ
うね。」

話し合った後でそのまま身柄を確保が理想ですから。」

『おそらくそうでしょう。しかし、それではA・Sが…』

「そうですね」

もう原作通りのA・Sが起こることは100パーセントないでしょう。

つまりは無効試合、介入しなくてもOKというパターンになりました。

これで介入してないから脱落という心配は消えましたが…。

「これだと最悪sttsすら消え失せますよ。本局が減ぶ可能性も出てきました」。

「きつと厨二は何も考えずにやったんでしょうけど」

『それではどうなさるのですか？このまま逃亡するのが最も安全な策だと思われませんが』

それはそうですね…。

うーん、これは想定していた中で最悪の手段を取るしかないですね。このままでは今後の予定が全て崩れます。それは何としても避けたい。

よって、

「私自身がA・Sを起こすしかないですね」

宿命のライバル（笑）

管理局本局、通称『海』。

ここには数多くのロストログアが保管されており、中には一級搜索指定だったものや危険度が極めて高いものも封印されています。

その多くはどこか別の世界に移されてしまつのですが、移す先が決まっていないものはここに一時的に保管されます。

つ、ま、り、

「本局の奥に闇の書は封印されているはずですね。」

『その可能性は高いでしょう』

あ、皆さんこんにちは。ルナ＝ベルツです。

現在、私は本局にある一室にいます。侵入しました。

本来は本局は転送魔法をジャミングするシステムが備わっているのですが、さつきサイバー攻撃を仕掛けた混乱に乗じて潜入しました。本当にシルバーカーテンって便利ですね。結局、軽い悪戯程度の攻撃だったのですが、混乱は収まりましたが。

さて、本題ですが。

闇の書の事件はまだ解決していません。むしろこれから起こる事件です。

それならば他の世界に移すはずはありません。

かと言ってはやてに持たせておくのは論外です。それでは最悪、内部で闇の書を使われるという可能性もあるのですから。

ならば本局の遺失物保管庫に厳重封印されているはずですよ。

そこ以外に闇の書を置ける場所などありません。

「さてと、スパイ大作戦ですね。」

『L i a r ' s M a s k』

そして私は局員に化けました。

変装のモデルはクロノ執務官です。あの人、友達とか少なさそうですし話しかけられにくいでしょう。

そのまま最深部へレッツゴー！

怪しまれないという意味では最強ですね、ライアーズマスクは。顔
だけでなく骨格や検査スキャンすらも誤魔化せるなんて。

しかし、

「おい君！君の階級じゃあこの先には行けないだろう」

途中でこの人の階級では進めないところが出てきました。

チツ、せつかく局員証まで偽装したのにここまでが限界ですか。

「ほら、許可証があるならそれを出しなさい」

「いえ、僕は少しこの先に用があるだけで」

「許可証もなしにここを通す訳には行かない」

「…そうですね、それならば」

ないので押し通ります。」

一瞬でアルテミスを展開し、そのまま一閃。見張りの人を両断します。

これで邪魔者は消えました。

「能力発動『シルバーカーテン』」

そのまま扉の電子錠にアルテミスを突き立ててシステムに侵入、電子ロックをこじ開けました。

ふふん 私のサイバー攻撃に対して少しは備えていたようですが、内側からのハッキングには対処していなかったみたいですね。

『マスター、今のハッキングで管制室に異常が探知されたと思われます』

「わかってますよ。ですからこうするんです。」

扉の内側に入り、電子錠をロックし直します。

この時、解除のパスワードなどを完全に書き換え扉をロックしました。

これで扉の解除には少しですが時間が掛かるはず。

『侵入者、侵入者、局員は所定の位置へ集まってください』

「…これは急がないとですね。」

もう変装の必要はないのでライアーズマスクを解除します。

そのまま奥へ侵入。途中の扉は同じようにこじ開け、邪魔者は全員殺しました。

そしてようやくついた最下層。ようやくと言ってもばれてからはまだ8分しか経ってませんが。

「ここですね。まるで倉庫です。」

うわ、一級レベルのロストログアが満載ですよ。」

『マスター、時間がありません』

わかってますよ。それでも圧巻なんですから仕方ないじゃないですか。

え、と、闇の書闇の書は。」

「あつた」

闇の書はつけ〜ん！封印をぶち破り、そのまま回収しました。これ以後は帰るだけですな。

『マスター、B213の収納場所をご覧ください』

「どうしたんですか？」

言われたとおりに見ると、

「おお〜！これはジュエルシードではないですか〜！」

なんとジュエルシードを発見しました。まだ場所を移されてなかったんですね。

これも何かの縁、12個をそのまま貰いました。

「ふう〜、良い拾い物をしました〜」

実は私も一つだけ隠し持っているんですけどね。

見つかるかと面倒なので別の場所に保管してあります。

これで私が所持しているジュエルシードは13個、軽く世界を滅ぼせる量です。

「さ〜と、嬉しい誤算もありましたが、そろそろ本当に退散しましょうか〜。」

このままでは囲まれますしね〜」

幸い、転送魔法のジャミングはまだ解除されていません。

これで一瞬で周囲を囲まれるという心配はなくなったのですが、私自身も脱出できません。

『マスター、どうなさいますか?』

「簡単です〜。」

中で転送できないなら、外で転送すれば良いじゃない!作戦で行きましょう〜!」

side 亮

時空管理局本局は、前代未聞の騒動に見舞われていた。

遺失物保管庫の最奥に侵入されたのだ。おまけに扉は内側からロックされ、転送のジャミングを解除すれば外に逃げられるためにそれもできない。

「クソッ、どうしてこんなことに！」

「亮、落ち着いてください」

今日、俺が本局に来たのはジークのやつが表彰されると聞いたからだ。

あいつは俺が知らない間にA・Sの問題を全て自分で解決したらしい。なぜか俺のことを毛嫌いするから全く知らなかったが。

今日の表彰も星に知らされるまでは全く知らなかった。

なのはジークに会いに行ったためここにはいないが、星は残ったために俺と一緒にいる。

しかし、表彰式まで一時間というところでアラームが鳴り響いた。

『侵入者、侵入者、局員は所定の位置へ集まってください』

そのアラームに、周囲の局員はもちろん、俺も驚愕した。

本局に侵入するということはかなり難しい。不可能と言っても過言ではない。

そして何より逃げるできないのだ。

ここに侵入するなど、自爆目的か捕まりたいかのどちらかと思えない。

そう、相手があいつでなければ。

「映像、出ます！」

すると、近くのモニター全てに内部の映像が出た。
そこに映っていたのは、

「ルナ、だと!？」

さらに驚いたのは、脇に抱えているものだ。
それ気づくと、周囲からも驚きの声が漏れた。

「おい、あれって闇の書じゃないか？」

「…確かに、言われてみれば」

そう、闇の書だ。それで俺は悟った。

あいつはA・Sを自分の手で起こす気だ!

【あゝ、テストース。
皆さん聞こえますか?】

すると、本局中に無差別念話が届いた。
何のつもりだ?

【これより、砲撃魔法による『壁抜き』を実行します。
物理破壊設定なので、流れ弾にご注意を!】

そしてモニターの中のルナが近くの壁の方を向いてデバイスを弓に
変形させた。

そのまま魔力を圧縮していく。

「…うわゝ、なんてタイミングの悪い」

『宿命のライバル（笑）とは戦場で会う運命なのでは？』

最悪のタイミングです。

それに、良く見ると砲撃はこの区画から先に届いていません。
零落白夜で打ち消されたようです。

「あなたは本当に私の邪魔をするのが好きなんですね」

「はっ、当たり前だろ？そのために俺はここまで強くなったんだぜ」

「ふふふ、弱い犬ほどよく吠えますね」

「なら、その弱い犬に負けるお前はさらに弱いな」

……………言うようになりましたね。

辺りを見回すと、まだ避難できていない人も多くいます。

その中に星さんがいました。バリアジアケットを纏い油断なくこちらを見つめ、デバイスを構えています。

避難のカバーに回ったようです。

なるほど、これは使える。

「そろそろ私もあなたのストーカー行為に疲れました」。

なので、この辺りで決着をつけましょうか？」

「俺は初めからそのつもりだ。今日で全てを終わりにしてやるよ！」

そして、戦いの火蓋は切って落とされました。

馬鹿は死んでもなおらない(前書き)

そういえば一週間前、活動報告で特別編をやるといっ話がありました。

後書きにてその発表をします。

馬鹿は死んでもおらない

一触即発、まさにそんな空気でした。

肌がピリピリと焼けるようで、呼吸の乱れすらも隙となる。そう、ここはもう戦場なのです！

そして砲撃で崩れた壁の瓦礫が崩れ、それが合図のように私たちは飛び出そうとしました。その時です。

「行きま「やめるんだ!!」……あなたは空気を読みなさいいいい!!」

せつかく良い雰囲気だったところに聞き覚えのあるウザボイスが割り込んできました。

本当に空気を読んでくださいよ。今、完全にバトルパートだったでしょう！

「はあ、何の用ですか、ジークさん」

今までの空気は霧散し、白けた空気が漂います。

それを断ち切るように私は後ろの馬鹿に振り返って尋ねました。

「ルナ、いったいどうしてこんなことをするんだ。

もう戦う必要なんてないんだよ。ほら、剣を収めて闇の書を返してくれ」

…こいつ、まだ気づいていないんですか？
うわゝ、馬鹿だゝ、馬鹿の世界代表きたゝ。

「おいジーク！なに言ってるんだよ！

こいつが闇の書を返すはずがな「君は黙っていたまえ！」…おい！
！」

「ルナ、彼のことは心配しなくても良いよ。

君のことは僕が全力で守る！もう彼に怯えて力を求める必要なんて
ないんだ」

「……………」

「君のためなら僕は何でもするよ。
それが僕の君への愛の形なんだ！！」

「……………」

「ルナ、僕は君が好きだ！愛してる！
だから君が悲しい思いをして戦うことなんてないようにする！！」

「……………」

「君は僕の全てだ！君がいないと僕は死んでしまう！
だから、戻ってくるんだ！僕はやてたちと過ごした、あの日々」

！」

「……………」

い』でした。
思考回路がズタズタになりそうです。内臓が悲鳴を上げてます。
もうキモイとかウザイを通り越して『凄い』！マジで笑い死ぬから
これ！

これでコイツは真剣なんだよな。

マジでお前は前世で何を学んだんだよ、他人の笑わし方か？

「はあ、はあ、はあ、いや、存分に笑わせてもらったわ。」

お前、笑いの世界に入れよ。俺こんなにウケたのは初めてだし」

ついつい素で言ってしまう。

もうキャラ作りとかしてる余裕がない。呼吸は乱れて髪もボサボサだ。

「る、ルナ？どうしたんだい？」

「いやいや、どうかしてるのはテメエの脳みそだろ？」

なんであんな電波じみた愛の告白ができるんだよ。蛆でも湧いてん
じゃねえか？」

厨二は状況について行けないのか、呆然としている。

まあ、『俺』と『私』の差は凄いな。我ながら別人だ。

「よし、存分に笑わせてもらった礼だ！面白いことをしてやる。

お前、確か俺のためなら何でもしてくれるんだらあ？」

「…ひっ！」

俺がニヤリと笑うと厨二は悲鳴を上げて尻餅をついた。

失礼なやつだな、コイツは。

しかしその悲鳴で我に返ったのだろう。負け犬が襲い掛かってきた。星も危険な空気を感知取ったのか、砲撃を撃ってきた。

「邪魔だ、能力発動『零落白夜』&『ツインブレイズ』」

鞘を取り出し、鞘と刀身を媒介にツインブレイズで魔力刃を作る。そしてその魔力刃を零落白夜に変更。これで砲撃を打ち消し、負け犬の攻撃を受け止めた。

「テメエ、どうして零ら」うるせえ、後にしろ」…くほあ！」

そのまま負け犬を星に向かって蹴り飛ばす。ぶつかつた二人は勢いを殺しきれずに壁に叩きつけられた。そして何事もなかったかのように厨二に向き直る。

「喜べ、お前を闇の書の蒐集対象第一号にしてやる。死ぬまで吸ってやるから覚悟しろよお？」

「し、死！？そんな、嫌だ！」

「ククク、嫌かあゝ？でもなあゝ、お前は俺にいゝ、愛をおゝ、誓つちやつたわけだしゝ？」

男ならよあゝ、自分が言ったことには責任持たないとなあゝ？」

そして俺は、闇の書を開いた。

『Sammlung』

「ルナ＝ベルツ、君は完全に包囲されている！大人しく武装を解除し、速やかに投降しなさい！」

「ああ〜ん？嫌だっつたなら？」

「君を逮捕する！」

君は現在確認されているだけでも殺人、公務執行妨害、器物破損、殺人未遂、暴行罪、無許可での攻撃魔法の使用、本局への不法侵入、ロストロギアの不法所持、他にも数多くの犯罪を犯している！警告に従えば、まだ罪は軽くなる！武装を解除しなさい！」

武装隊のおっさんが俺に投降を促してくる。
だがしかし、

「なんで俺がザコのお前らに従う必要があるわけえ？
気に入らねえなら力尽くで来い！」

そして足元の厨二の頭を踏みつける。
それでなのはの限界は来たようだ。砲撃を放ってきた。
だから、

「おら厨二！出番だ！」

厨二の髪を掴み、目の前に放り出した。
もちろん砲撃は厨二に命中し、俺に迫ってくる。

『Rejection』

しかし俺は防御を発動、普段は絶対にしないが砲撃を正面から防い

だ。
するとどうなるか？簡単だ。

厨二は砲撃で俺の方に吹き飛ばされるが、俺はシールドでそれを防ぐ。

その結果、厨二は俺の防御となのはの砲撃に挟まれて想像を絶するようなダメージが。

非殺傷設定で良かったな、おかげで魔力ダメージだけで済むぞ。

「ジーク君！？」

「おいおい高町、味方を撃っちゃ駄目だろ？」

クヒヒヒ、まあ、こいつが身を挺して俺を守ってくれちゃったのが悪いんだけどな？」

しかし、どうしたもんかねえ。

厨二の肉壁（強制）のおかげで向こうは攻撃を躊躇してはいるが、それも時間の問題だ。

だが、壁を破ろうとすれば隙ができる。どうしようかねえ。

…お、良いこと思いついた！

「おい高町！お前、コイツが好きか？」

そして俺は気絶した厨二の髪を引っ張り前に翳す。

「ふえ！？私は好きとかそんなんじゃ！」

「そつか、好きじゃないか。
ならよ、コイツは死んじゃっても良いよな？」

そしてアルテミスを首元に押し付ける。
もう勘の良いやつなら俺が何をさせようとしてるかわかったよな？

「なっ!？」

「ん？嫌か？ならよお、

お前がその壁をぶち抜いて外への脱出口を作ってくれよ」

その言葉に全員が絶句した。

そつだろつ、なにせ人質の命と犯人の無事を天秤に掛けると言つのだ。

こんなの惨すぎる。俺は大好きだが。

「ほら、早く。」

やらないならコイツを殺しちゃっぞ？」

そしてアルテミスを振り上げる。

「ま、待って！お願いだからジーク君を殺さないで！」

「それはお前しただいな？」

カウントダウン入りまゝす！10、9、8、7、6、5「わかった、

やるよ!」…じゃあ早くな〜?

お兄さん短気なんですよね〜。遅いとサクツと殺っちゃうぞ〜?」

そしてその数秒後、砲撃が本局の壁を撃ち抜いた。

side other

11月13日、時空管理局本局は前代未聞の事態に陥った。

たった一名の侵入者の手によって遺失物保管庫の最奥に侵入されただけでなく、そのまま逃走を許してしまう。

この事件による死者は41名。保管庫に向かう途中に殺された者、砲撃に巻き込まれて死亡した者など。

その後、犯人は逃走。ロストロギア『闇の書』そして『ジュエルシード』12個を奪取される。

足取りは不明。依然逃走中。

以上のことより、今回の犯人ルナベルツをS級次元犯罪者とする。

side out

馬鹿は死んでもなおらない（後書き）

特別番外の発表！

実はこれを読んでも友人に、

『星がいるのに闇の欠片事件をやったらどうなるんだろっな』
と言われたので、それを書くことにしました。A・S編が終わった
ら書こうと思います。オリジナルマテリアルを出すつもりなのでど
うぞご期待を！

正直者が馬鹿を見ると本気で思う人って正直ですよ〜

「蒐集〜」

『Sammlung』

「ぐっはあああああああああ」

周囲には闇の書のページが捲れる音と悲鳴だけが響き渡ります。
今日の成果は18ページ、いまいちですね。

あ、皆さんこんにちは。ルナベルツです。

先日はお見苦しい光景をお見せしました、すみません。

管理局を襲撃してから既に一週間、集まったページは216ページです。

そろそろ300ページくらいあれば良かったんですけどね。人手が足りない上に蒐集を始めた時期が遅かったのでこんなものです。

「はあ〜、厨二が四人くらいいれば良かったんですけどね〜」

『あれほどの魔力を持つ生物はそうはいませんからね』

おまけに管理局が私を探し回っていてウザイの何の。

う〜ん、やはり死ぬまで魔力を蒐集したのがいけなかったんでしょ
うか？

「それにしても、守護騎士たちはよく二ヶ月くらいで666ページも集めましたね〜」。

やはり四人とは効率が違いすぎます」

最悪、ジュエルシードで一気にチャージというのも有りと言えば有りなんですけど…。

「あれって危ないですよね」

『そうですね。あのエネルギー結晶体から魔力を引き出せば、際限なく魔力を放出するでしょう』

「でも、その後が面倒なんですよね」

暴走でもされたら封印しなおさなくてはなりません。

それは面倒です。失敗の可能性だってありますし。

「やっぱり海の局員狩りが一番効率が良いんですよ。」

魔力はそこそこあるのに弱いですし」

しかし、それには大きな問題があります。

局員を狩ると他の局員が集まるので蒐集をしにくいんです。

Eース級の魔導師が来ればもう蒐集しながら戦闘なんてできません。

「はあ、こうなったらチマチマ集めるしかないですね」

『そうですね』

はあ、そろそろモチベーションの維持のために原作キャラでも襲いましょうかね。

ここで一気に稼ぐのも良いでしょう。

………んん？一気に稼ぐ？

「…アルテミス、さっそくですが作戦変更です」

『何か妙案でも？』

「ええ、最高の作戦を思いつきました」。

「上手くいけば、これで100ページ近くは余裕で稼げるはずですよ」

そして私は転送魔法を使いました。

これは場所を選ぶ必要がありますからね。

『どちらへ向かわれるのですか？』

「ミッドチルダの首都『クラナガン』ですよ」

side亮

「クソッ、ルナのやつ！」

「落ち着け、亮」

「そうですね、亮。焦っても何も変わりません」

クロノと星が諫めるが、それくらいでは納まらない。
思わず壁を殴りつける。

ルナが本局を襲撃してから今日で十日、依然ルナは捕まらない。原作のヴォルケンリッターのように拠点がないから足取りを追うので精一杯だ。

ある時は管理外世界で、またある時はミッドチルダで堂々と蒐集するなど、場所に規則性がまるでないのだ。

そんな状況に歯痒くなり、俺と星、そしてなのはは囑託魔導師として協力を申し出た。

しかし、それでも状況が変わることはなかった。

「確かにルナの動向を追うのは至難の技だ。だが、まるで足取りを追う方法がない訳じゃない」

「…どうということだ？」

「何か策でもあるのですか？」

すると、クロノはモニターを空中に出した。

そこに映っているのは今までの被害者や襲われた生物のリストだ。

「ルナはとても合理的で計算高い。そして何より効率の良さを重視する。」

このリストを見れば良くわかるだろう？」

「…なるほど。確かにそうですね」

それで俺たちは気づいた。

襲われているのは高い魔力を持つ魔導師と生物だけだ。それを一気に狩っている。

チマチマと集めてはいるが、相手を選んでいるのだ。

「そしてこれまでのデータから察するに、ルナは人間が相手ならばAランク以下の相手をほとんど狩っていない。だからターゲットも自ずと限られてくる」

「なるほどな。確かにそれなら」話の途中でゴメン！でも緊急事態だよ！』…どうしたんだよ？」

『ルナちゃんが出たんだよ！それもミッドに！』

「なに！？」

クロノが思わず聞き返す。俺や星も耳を疑った。

別にミッドに現れたのが問題じゃない。ルナを捕捉できたことが意外だったからだ。

急いでブリッジに行くと、そこには既になのはとジークがいた。

本当はジークは安静にしているべきなのだが、無理を言っつけてきたのだ。

もう自分が蒐集される心配はないのだから一緒に調べさせてくれと言って。

「ジーク、お前大丈夫なのか？」

「心配ないさ。それよりルナだ」

そしてジークはモニターを睨みつける。

もうジークとの誤解は解けた。そして、お互いにルナに復讐するために協力すると誓った。

ルナが仕出かしたことで唯一感謝してることだ。

モニターを見ると、ミッドの街の上空を移動するルナが映っていた。何かを探しているのか、眼下の街を見回している。

「これはどこだ？」

「クラナガンだよ」

その言葉に俺たちは絶句する。

地上本部があるところで堂々とするなど信じられなかった。

「地上本部は何してるんだよ！目と鼻の先にS級犯罪者がいるってんのによ！」

「さっきから逮捕に向かってるさ。でも、悉く返り討ちにされてる」

クソッ、ここからじゃあどう頑張っても間に合わない。

今、アースラは地球の軌道上にいる。ここからじゃあミッドに行くまでに時間が掛かりすぎる。

すると、ルナが徐に移動をやめた。

そのまま巨大な魔方陣を展開する。その術式は、

「ベルカ式！？」

「エイミィ！あれは古代か！？それとも……」

「解析中！これは……ビンゴー！エンシェント古代ベルカだよ！」

「……………まさか！」

すると、モニターのルナに変化が表れた。魔方阵が輝きを増したと思うと、そこに莫大な魔力が集まっていくな。そして、ルナに接近しようとする局員がどんどん落下していった。他のモニターに映っている映像を見ると、クラナガンの住民たちがバタバタと倒れていった。

「これは、クラナガンの人間のリンカーコアを無差別に蒐集しているのか!？」

クロノの言葉にブリッジの全員が絶句した。あそこには魔導師ではない人間だって大勢いる。ただ魔力が多いだけの人や、魔力が少ない人だっているんだ。

「こんなの、酷すぎるよ」

なのはが思わずといった様子で呟くが、全員がそれに同意した。こんな無差別に魔力を蒐集すれば確かにページは溜まるだろう。だが、下手すれば大量に死者が出るようなことができるなんてまともじゃない。

そして数分後、満足がいったのかルナが蒐集を終わらせた。この蒐集で半径数百メートルにいた人間の魔力が根こそぎ持っていかれたから、かなりの魔力を集められたのだろう。そのままルナは転送魔法で消えていった。

翌日、ミッドの新聞はどれもこの事件についてが一面を飾っていた。『クラナガンを襲った悲劇』『管理局の怠慢』『悪魔の子、ミッドを襲う』など、ルナが起こした事件は相当デカく報道された。これで老若男女を問わず、あそこにいたリンカーコアを持つ人間の魔力が根こそぎ奪われたらしい。死者は百名を超え、数百人が病院に搬送された。

だが、これはA・Sの、後に『闇の書事件』と呼ばれ、『氷殺のルナ』と呼ばれる大犯罪者が起こしたものの始まりにしかすぎなかった。それを俺は思い知ることになる。

side out

いや、集まった集まった！
今回はぼろ儲けでした！

「これで一気にページを稼げましたね、
もう369ページに到達しましたよ！あと優秀な魔導師を6、7
人狩れば完成です！」

『そうですね。しかし、これで管理局もなりふり構わず捕まえに来
るでしょう。』

ストライカー級の魔導師も来るかもしれませぬ。ご注意ください！』

「そうですね。」

こうなったら、原作キャラを狩りまくるのも有りですね。」

そうになると、やはりあの人が良いですね。

大して強くないですし、何より魔力が多いです。

「ふふふ、舞台は海鳴に移りますよ〜。

皆さん、気を抜いたら死んじゃうので気をつけてくださいね〜」

予告ですよ

*特別編の予告です

ルナ・ベルツが起こした世紀の大事件、『闇の書事件』。
幾つもの次元世界を巻き込んだこの騒動は、数人の少年少女の手に
よって終結させられた。

そして訪れた平穩、世界は静けさを取り戻した。

が、しかし。

散らばった闇の書の破片、そして現れる闇の書の残滓。

それは『闇の書事件』が起こる以前の彼らを模していた。

しかし、成長した彼らの前に過去の彼らは敵わない。

そして、そのどれも違う異質な存在。

闇の書の復活、砕け得ぬ闇を求める三体の構成素体。マテリアル

それは転生者の知るどの存在とも違っていた。

一つは前世からの因縁を持つ少年の姿を。

「最強！天才！お姉さん完璧イイイイ！……！」

一つは前世の銃使いの少年の姿を。

「闇の書のマテリアルとして、この程度ができなくてどうします」

一つは前世の漆黒の聖なる鎧を持つ少女の姿を。

「キャハハ！頭が高いのよゴミクス！ひれ伏しなさい！！」

因縁の三人の姿をとるマテリアル。

果たして少年たちの運命は。

『第二の人生はゲームらしいです』 特別編。

『闇の欠片事件』

A・S 終了後に掲載！どうぞお楽しみに！！

予告ですよ

*特別編の予告です(後書き)

とりあえず、忘れないように書いておきました。

誰がオリジナルマテリアルが一人だと言いましたか？
総入れ替えです!!

鳴かぬなら 泣かせてあげます ホトトギス

sideフェイト

現在は11月の21日、私は本局の隔離施設にいた。仮にも私は裁判中なので、どこかに拘束しておかないといけないらしい。

とは言っても、この前に囑託魔導師になったから行動の制限はほとんど取れているけど。

ここには私の他にアルフとルル、それとナナもいる。

ルルとナナは事件に直接は関係してなかったけど、裁判の証人としてはうつつつけどということと裁判に協力してもらっている。

本当はここじゃなくて別の場所で寝泊りする予定だったんだけど、二人の私の傍が良いという強い希望でここで一緒に生活している。

そんなある日、こんなニュースが放送された。

『さて、次のニュースです。先日クラナガンで大量殺人、及び魔力搾取という前代未聞の重大事件が起こりました。犯人のルナベルツ容疑者は逃走中、足取りは依然として掴めていません』

そしてテレビにルナさんの顔写真が出た。これはクラナガンで撮られたものらしい。

大量の魔力がルナの横に浮いている本に吸い込まれていく。

「.....」

その映像を見て、私たち四人は沈黙した。
何を言ってるのかわからない。ルナさんが、大量殺人？

「……なに、これ」

「こりゃあ、どういうことだい！」

「ナナ！お兄ちゃんがテレビに出てるよ！録画！録画しないと！」

「ルル…、これ、良いこと、じゃ、な…い」

こんなの何かの間違いに違いない。

ルナさんは確かに厳しいしサディストだけど、人殺しなんかをやるような人じゃない。

でも、クロノに聞かされた真実。

ルナさんがF計画に携わっていたという話を思い出すとどうしても疑いを捨てきれない。

別にルナさんが母さんと一緒に私を騙していたことに怒ってはいない。

母さんと違って、私のためを思って黙っていたんだと思うから。

その証拠に、ルルとナナが言うには、二人を人造魔導師と知っていたながら育てると言っていたらしいし、私のこともアリシアの失敗作じゃなくて『フェイトII テスタロッサ』として扱ってくれていたと
言う。

それだけで私には充分だ。

『そして時空管理局の発表により、容疑者は時空管理局本局より『第一級搜索指定ロストロギア』を強奪していたということがわかりました。これにより、多数の死者、及び怪我人が出ました』

「「「……………」」」

「本局を襲撃！？一人で！？すつこい！！」

純粹に驚いているのはルルだけだ。ルル以外はもう声も出ない。

一週間くらい前に本局で何か騒動があったのは知っていたけど、まさかあれが…？

「……………フェイトお、どうするんだい？」

「…クロノに話を聞こう」

「で、でも、教え…て、くれ、る……………かなあ…？」

一人で騒ぐルルを放っておいて、三人でどうするかの会議をする。

確かに、ロストロギア絡みのことをホイホイと教えてくれる可能性は低い。

でも、

「とりあえずは聞いてみた方が良いと思う。少なくとも、今よりは情報が集まると思うし」

「…あいよ」

「ん…、そう、だね」

「ああ！ニュースが終わっちゃっ！録画できてないよお！」

「ルル、うるさい…！」

君も知っているとおりに、ルナがそれを自らの手で起こしてしまった。ジーク、彼女がフェイトだ。隣が使い魔のアルフ、その二人がルルとナナだ」

「クロノ、起こってしまったことは仕方ないさ。問題はこれからどうするかだよ。」

そして、君がフェイトとテストロッサさんだね？

クロノやなのはから良く話は聞いているよ。どうぞよろしく。

アルフに…、ルルちゃんとナナちゃんだね？三人もよろしくね」

「あ、うん。よろしくお願ひします」

彼、ジークがニコリと笑いかけてくる。

だけど、正直少しだけ気持ち悪い。

【ねえねえ三人とも、なんかあのキモくない？】

【る、ルル…！しつね、い！】

【そつだよルル、初対面の人にそういうことは言っちゃ駄目だからね？】

アルフも言葉には…、アルフ？】

【……え！？な、なんだいフェイト！？】

【…どうかしたの？アルフ、ひよっとして調子でも悪いの？】

【なんでもないよ！ほら、話を聞かないと！】

【……？うん、そつだね】

そしてクロノから話を聞いたけど、結局話してくれたのはニユースで放送されていたことと大差なかった。そして確定したのは、ルナさんが本当に人殺しをしたということくらいだった。

「……………そっか」

「ルナのやつ、なに考えてるんだい！」

「うん、世界征服でもする気なのかな？」

「…あ、りえる……………かも」

否定できないところが怖い。

ルナさんはやると言ったらやる。そしてそれを実行できる力も頭脳もある。

最悪、『道づれです！』とか言って自爆しかねない。

「……………クロノ、私の裁判つてもうすぐ終わるよね？」

「ああ、そうだが……………まさか」

「うん、それが終わったら私にも事件の手伝いをさせてほしいんだ」
ルナさんが何を考えているのか。

それを知らなくちゃいけない。あの子の、なのはのように、何度でも。

「危険だ！ルナは君が相手でも容赦しないかもしれないぞ！」

「良いじゃないかクロノ。」

確か彼女はAAA+、下手すればSランクほどの実力があるんだろ
う？

戦力としてはちよūdいい」

すると、今まで黙っていたジークさんが助け舟を出してくれた。
なぜか視線が厭らしく感じるけど、気のせいだろう。

その後、ジークさんの説得のおかげで私もアースラクルの一員と
して捜査の協力にあたることになった。

ルナさんには敵わないかもしれぬ。

でも、皆の力を合わせればきっと何とかなる。

「私が、ルナさんを止めるよ」

side out

「ふああゝ、眠いですゝ」

『ここで寝ないでくださいよ。』

寝たらそのまま一生目が覚めませんからね』

「わかってますよゝ」

でも、既に徹夜も二日目。この未成熟な身体にはキツイです。
早く大人になりたい。

あ、皆さんこんにちは。ルナニベルツです。

徹夜してます。めっちゃ疲れましたし眠いです。

私が今、何をしているのかと言うと、

ジュエルシードを使った大魔法の準備をしています。

どんな魔法なのかはまだ秘密です。

数週間後には三つくらい完成する予定ですけどね。

「アルテミス〜、何個完成してましたっけ〜」

『現在、調整が終わっているジュエルシードは二つです。』

現在調整しているものが終われば三つ、それでようやく稼動可能な個体が一体だけ完成します』

「道のりは長いですね〜。」

途中で失敗すれば周囲の次元ごとドッカーン！ですし〜」

『しかし、成功すれば一気に魔力が集まります』

「わかってますよ〜。」

とりあえず、これの調整が終わったら一体を稼動させて寝ます〜。」

魔力の蒐集はそれに任せれば良いですし〜」

前世で教授がジュエルシードを解析していたので、既に使い方はわかっています。

これで一気に魔力をチャージ！とかは使い方が違うので難しいですが、きちんとした使い方をすれば相当役に立ちます。

プレシアはこれを次元震を起こすためだけに使っていましたか。

「本当に馬鹿ですよね。」

これって、上手く使えば死者の擬似的な蘇生だってできるのに。」

『普通はそんなことはしませんよ。』

教授だって驚いていたでしょう？ かく言う私も古代の技術には驚かされます』

それもそうですね。

さうと、もうすぐこのジュエルシードの調整も終わります。それを使って一気に戦力を増強です！

「ククク、鳴かぬなら、泣かせてあげます、ホトトギス。」

これが私のモットーです。

できないことは多少は強引でも押し通します。

さあ、本番はこれからですよ！！

ヒーローは遅れてやってくる！悪は時代の最先端に行く！

side 亮

ここ数日、ルナは全く動きを見せない。

被害が全く見つからないからだ。静けさが不気味で仕方がない。

現在11月29日、フェイトの裁判が終わって捜査に加わるまであと三日。

それはルナもわかっているだろう。それなのにここまで動きがないと、諦めたのか？という希望も出てくる。

俺は全然そうは思わないが。

「ルナちゃん、もう諦めて逃げちゃったんじゃない？」

「そうかもしれないね。流石に管理局の地上と海の両方を敵に回したんじゃない、いくらルナでも……」

「いや、それはねえ。

あいつなら確実に『はっ、管理局？笑わせてくれますね！』『みたいなき感じに思うはずだ。無茶なことでも強引に切り抜ける。それがあいつだ」

「……………良くわかりますね」

実際、あいつはそんな風に思っているだろう。

できないことはしない、それが『ベルツ』の連中だ。逆に、やること全てに成功させる自信があるということでもある。

「あいつのやることに関しては、常に最悪の事態を考えるべきだ。ルナは必ずその斜め上のことをやらかす」

「……確かに」「」「」

おそらく、全員の頭の中に高笑いしているルナが思い浮かんだだろう。

もう油断はしねえ。

すると、

「皆、大変だよ！」

「ルナか!？」

エイミーが大声を上げると同時に、空中にモニターが出る。その映像には巨大生物から魔力を蒐集するルナの姿があった。

「直ちに向かう! 武装局員たちの準備を！」

「クロノ、俺たちはどうすれば良い！」

「君たちは僕と後から行くぞ。

先行した局員たちが結界を張った後に突入だ」

「……了解!」「」「」

「良いか? 何らかの理由で逸れても、必ず二人一組で動くんだ。組むのは、星と亮、なのはとユーノだ」

「クロノ、僕はどうするんだい？」

ジークがクロノに尋ねる。アホかお前は…。

「ジーク、デバイスもねえお前が出ても足手まといだろうが。お前はこっから見学だ」

「そんな！？僕にはSSSランクの魔力があるんだぞ！

足手まといになってなるはずない！それに、デバイスがないならユニノだって…！」

「では、君はどれほどの魔法が使えるんだ？」

「それは……」

「ユニノはデバイスがなしでも戦えるほどの優秀な結界魔導師だ。君はまだ魔法を知ってから二ヶ月も経っていない素人だ。焦る気持ちわかるが落ち着け」

「……わかったよ」

クロノの説得に渋々ジークが頷いた。

おいおい、本当に魔力さえあれば戦えると思ってたのかよ…。教授の野郎、やっぱ役立たずを送ってきやがった。

ルナに気づかれないうちに、転送は少し距離をおいた場所にされた。

既に武装隊が周囲を取り囲み、結界を張る準備をしている。俺たちはさっきの組に別れ、別方向から襲撃する手筈になっている。

【全員、配置についたな？結界が張られると同時に攻撃する。なのはと星、二人で最初に砲撃を。その隙に僕と亮で突撃する】

【うん、わかった】

【ご武運を】

そして、結界が張られた。

【今だ！】

「ブラストファイアー！」

星が放った深紅の砲撃がルナに発射された。

別方向からはなのはのディバインバスターも撃たれている。

「じゃあ、行ってくる！」

「気をつけて…」

そのままルナに向かって突撃した。

既に零落白夜を展開している。これで一気に、

「ぶっ飛ばす！」

一気に接近した俺は、土煙から出てきたルナにカリバーンを叩きつけた。

するとルナは紙一重で避けたが、そっちにはクロノが撃ったステインガーレイが待っている。

これで少しは足止めができるはず。

聖王の鎧を展開しても、その隙に俺が斬る！

そう思っていたのに、

「はっ、俺様を相手に手数で勝負かよ？勝ち目ゼロだなあお前ら」

そして、全ての攻撃を撃ち落とした。
銃型のデバイスを使って。

「なに！？君のデバイスは剣だったはず！クソッ、まだ他の形態があつたのか！」

違う、そんな簡単なことじゃない。

あの黒い銃型デバイス、そしてあの射撃の腕に口調。

まさか…！？

「さあ？どうだろうな。

ハッキリ言えんのは、テメエらはここでジ・エンドってことだあ！」

そのままルナ（？）は銃を二丁に増やし迎撃してきた。
そこで気づく。

「おい、お前の魔力光は白じゃなかったのかよ…！
どうして『赤い』んだ!？」

それは明らかにルナの魔力光じゃなかった。

通常、魔導師は魔力光を変えることはできない。魔力光はいわば視覚化した魔力パターンであり、それを変えるということは外科的な手術を行っても不可能だ。万が一変えることができても、それは薄っすらと変わる程度であり後遺症も出る。

そんなことをするのはよほどの馬鹿だ。そして、ルナはそんな非効率的なこととはしない。

「はっはあ！敵に素直に情報を渡す悪役は漫画とアニメの中だけだ
ヴアカ!

そんなに知りたきゃ力尽くで何とかするんだなあ！」

『Load Cartridge』

そしてルナ（？）がカートリッジを二発ロードする。
まずい、何か来る！

「クロノ！」

「わかって「いねえなあ、全然よお！」なに!？」

気がつく、俺たちはバインドに捕まっていた。

押しても引いてもビクともしない。

クソツ、腕を押さえられたら零落白夜じゃ斬れない！

「オラア、死に晒せ！」

『Rapid Cannon』

そしてあいつは二発同時に砲撃を放った。一発は俺、もう一発はク
ロノを襲う。

これはおそらく殺傷設定だろう。防ぎきれるか！？

『Round Shield』

しかし、その赤い砲撃を深紅のシールドが防いだ。
クロノの方は翡翠のシールドが見える。ユーノか！

「くっ、亮！無事ですか！？」

「ああ、なんとかな」

「それは何よりです。
それにしてもあの砲撃、チャージが短いのに私やなのはと同程度
の威力があります……」

「…カートリッジシステムだ」

「カートリッジ…？」

すると、俺たちが無事なのに気づいたあいつがニッと口角を吊り
上げる。

普段のルナなら絶対にしない表情だ。

「ははっ、見慣れねえ顔もいるな。
そいつが高町の姉の……なんだったっけ？」

『星殿です、ボス』

「おお！それだそれ！」

星を見慣れないだと？

どういうことだ…、あいつは何度も会ってるはずだ。
やっぱり、そうなのか？

「お前、ルナじゃねえだろ…？」

「は？何を言ってるんですか？あれはどう見てもルナでしょう？」

「そうだ亮、ルナじゃないなら誰だと言っただ？」

「…それは」

すると、突然ルナの偽者に桃色のバインドが掛けられた。
なのはか！？

「ぐお！？やつべっ！捕まっちゃった！」

そのまま遠くで莫大な魔力の集束を感じた。
これは、スターライトブレイカーか！？

【ジーク君を踏んだり、魔力を奪ったり、絶対に許さないんだから
！】

そしてスターライトブレイカーが発射された。
俺たち四人は一斉にその場から退避するが、偽者は拘束されているから逃げられない。

「やっぱりあれはルナじゃない！」

ルナならバインドを凍らせて一瞬で脱出できる！」

「……！確かに……」

そう言ってる間にも全速力で退避する俺たち。

クソッ、なのはやつ！俺たちのことも考えろよ！

【おいおいおい！俺様をこの程度でどうにかできるとか思ってるんですかあ！？

甘すぎだヴォケー！！】

すると、偽者の前に巨大な魔方陣が展開された。
その色は砲撃と同じ毒々しい赤色で、

【これがライア様の真骨頂だあ！目ん玉に焼き付けろ！】

スターライトブレイカーを吸い込んだ。

s
i
d
e
o
u
t

ヒーローは遅れてやってくる！悪は時代の最先端に行く！（後書き）

はい、懐かしのあの人が登場！

ルナの身体でライアって書いていて相当変な感じがしました。

どんでん返しは悪の必須スキルです！

side 亮

「そんな、スターライトブレイカーが……！」

星が思わずと言ったように呟く。

それはこの場の、いや、これを見ているアースラの人たちも同じだろう。

あのスターライトブレイカーが吸収されているんだ。

現在、あの魔法の威力を上回る魔法は俺たちにはない。それをあんな簡単に防がれた。

驚くなど言う方が無理だろう。

しかし、その中で俺だけが別のことに驚愕していた。

もう聞くこともないと思っていたあの名前。

「ライア、だと……！本当に、ライアなのか！？」

「亮、知っているのですか？」

星の質問に答えられる余裕はない。

あれが本当にライアならば、それは最悪なんてものじゃない。

『ベルツ』が、教授たちがこの世界に復活したということになる。

アリスが、アイデアが、アリシアが、キャラが、教授が！この世界に！

【はーっはっはっは！お楽しみは！これからだぜえ！！】

そう念話が響くと同時に、ライアの頭上に巨大な魔方陣が展開された。
何をやる気だ!?

【食らえ高町！スターライトお、ブレイカーあー、返しいい！！】

するとその魔方陣から、なのはのスターライトブレイカーが発射された。

それはそのままなのはの方に向かい、地表が爆散した。
魔力の残滓が空气中に飛び散り、ドームのように広がる。

「……なのは！」「……」

直撃だ！例え当たってなくてもあの威力じゃ！

「エイミーさん！なのはは！なのはは無事なんですか!？」
星が必死にエイミーに尋ねる。

クソッ、どうなってやがる！何だよ、『スターライトブレイカー返し』って！

【はんっ！歯ごたえのねえ、この程度かよー！】

『なのはちゃん発見！…大変！魔力を蒐集されてる！』

「そんな！」

ライアがいた場所を振り返ると、もうそこには何も残っていない。いつの間にも移動した！？

「畜生が！エイミーさん！なのはがいるところを出してくれ！」

カリバーン！トランザムだ！」

『TRANS - AM』

そのまま一気になのはの下へと直行する。

すると、なのはを見つけた。確かに蒐集されている。

なのはは既にかかなりの量の魔力を吸われているらしく、かなり衰弱した様子だ。

「ライアあああああああああ！」

「来たかよ！ザコ剣士！」

俺がカリバーンで斬りかかると、ライアはその場を飛び退いた。咄嗟になのはを庇うような位置に立つ。

「なのは、大丈夫か！？なのは！」

しかし、なのはからの返事はない。

早くアースラに連れて帰らないとマズイ！

「クソッ、どうしてお前がここに！」

「親切に教えるかって言ってるんだろ？」

俺たちは外道の『ベルツ』だぜ？親切な時点で追放ものだったの」

そしてやつは含むように笑い、

「そんで、外道な俺様が次に何をするかわかるよな？」

『Rapid Bullet Hundred Shift』

やつのデバイスが電子音を奏でると、背後に無数の魔力弾が形成された。

一瞬で展開したというのに、既に発射体勢になっている。

「俺様の本業は超早撃ちだ。こればかりは方舟でも最強だったんだぜ？」

『Fire』

そしてそれらが一斉になのはに向かって発射された。

クロノと星、ユーノはまだ来れていない。つまり、なのはを守れるのは俺しかない。

「ちくしょおおおおおおお！」

『Silver Shield』

零落白夜を盾のように展開し、俺は防御の体勢をとった。

幸いにも、あいつの攻撃は全て純粹魔力による魔力弾。零落白夜が

あれば防ぎきれぬ。

そしてライアの魔力弾の雨が俺たちに降り注いだ。

「はっ、どうしたんだよ！お前の攻撃なんか全然効いてねえぜ！」

このままならば大丈夫だ。

消耗は激しいが、このまま防いでいればすぐに星たちが来る！

そして、雨が止んだ。

「リロード」

『再装填します』

しかし、ライアの早撃ちは俺の想像以上だった。
カートリッジを一発だけ炸裂させると、魔力弾は全て元通りになっ
た。

「……マジかよ」

「効いてねえなら効くまで撃つだけだ」

『Fire』

そして俺は再び魔力弾の雨に苛まれた。

side out

「い、オイ、起きろヴォケ！」

「いったあああああい！！！」

誰ですか、私を足蹴にしたのは！ぶち殺しますよ！？

あ、皆さんおはようございます。ルナ＝ベルツです。

現在、何者かによって頭を蹴られて悶絶しています。気配がないので気づきませんでした。

「って、ライアですか？」

何ですか？何かトラブルでも起こったんですか？

「魔力を集めてきたんだよ。これで良いか？」

彼が懐から何か出したかと思うと、それは魔力でした。
ふむ、

「なかなか集まったじゃないですか？」

巨大生物で肩慣らしさせるつもりでしたけど、さっそく魔導師も狩ったんですか？

「ああ、ザコ剣士と高町だ。」

ザコ剣士はかなり消耗していたからあまり収穫はなかったけどな」

「……………うわゝお、いきなりのビッグゲームですね」

まあ、獲れた魔力に罪はないのでそのまま蒐集しますが。さして、どれくらい溜まったかな？

「おお、なかなかですね」。

423ページまで溜まりましたよ！」

「最終ページは666だったか？ようやく三分の二かよ」

いえいえ、当初の予定に比べればだいぶ早いですよ。

今回ライアが二人の魔力を狩ってきたのは嬉しい誤算でしたね。

「んで？もう一つの方は完成してるのかよ？」

「んゝ、ボチボチですね。一つだけ調整が終わってます」

「つまり、残ったジュエルシードはあと九つ。

三体は作れるじゃねえかよ」

「そうですね。でも、もう一体くらいで終了する気ですよ。

いい加減、私も蒐集に加わらないと」

「12月に入る頃には二体目も出来上がるって訳か。もうそれで勝ちも確定したも同然じゃねえか？」

「かもしれませんね。でも、今回の戦闘であなたの秘密もバレたでしょうし」。

そうだったらどの道私がフォローすることになりますから、勝負はまだわかりません」

そのために予備としてジュエルシートをとっておくんです。弱点を突かれればライアたちは一撃で終わりです。

「んあゝ！さてと、作業再開ですね」

「んじゃ、俺はまた行ってくるぜ」

そしてライアは窓から飛び去っていきました。

え？私がいる場所？

フェイトたちと住んでいたマンションですけど？

あの部屋は既に解約されていたのですが、同じ部屋を再び借りました。

逃げ出した犯人が同じ所に戻るの考えにくいという心理を逆手に取った作戦です。

「それじゃあ、そろそろ休憩も終わりですね」

『そうですね。』

それにしても驚かされました。まさか本当に『他人の再生』を実現させるとは』

「まったくですね。昔、教授にレクチャーしてもらいながら目の前で見ましたけど、あの時は開いた口が塞がりませんでした。と
いうか、なんでそんな複雑なことができるんですか！？って感じ

でしたし。流石は技術チートです。あれを見ていなかったら私にも『真似』できませんよ。特典様々です」

ここで皆さんにも説明しましょう！

ぶっちゃけ、あのライアは本物ではありません！ジュエルシードを使って再現した疑似人格と疑似リンカーコアです。

そもそもジュエルシードの本来の使い方が、データを入力して他の生物や物質を完全再現する、いわば再生機なのです。絶滅しそうな動物をこれで増やして交尾させたり、新しい機械を再現したりといった使い方をするもので、エネルギーはあくまで再生したものを動かすための動力。

「だからジュエルシードは暴走したんですよ。なんせ、設定がアバウトすぎたんですから」

例えば猫が巨大化した事件。

大きくなるならば体積は？質量は？どこをどれだけの割合大きくするの？

それらの膨大なデータを詳しく思い浮かべれば想像通りの姿になれたでしょう。

まあ、所詮は猫なので無理でしょうが。

「つまり、設定をメツチャ詳しく打ち込めば打ち込むほどその理想の姿、生物に近づくんです」

私が今してるのは、そのデータの打ち込み作業です。

ちなみに、なぜライアにジュエルシードを三個も使っているのかと言っと、

「思考、つまり脳の代わりに一個、リンカーコアの再現に一個、デバイス『ベロボーグ』の再現に一個という割合です」

あくまで私が設定したもので、思考は私が『ライアならこう考えるだろうな』という想像を元に設定しました。正直、これが一番大変でした。リンカーコアは魔力パターンを完璧に打ち込んだので完全再現です。デバイスも設計図などを完璧に頭に浮かべて設定したので完璧です。

そして皆さんが気になっているであろうあの身体ですが、

「それは私の氷の^{アイスアバター}人形を媒介にしたからです」

ジュエルシードは依り代、つまり元となる身体や憑依する相手がないとメツチャ弱くなるので、その対策を兼ねています。

実際にあの身体をよく見ると、額とデバイスにそれぞれジュエルシードが付いています。それをダイレクトの破壊、もしくは封印されれば流石にイチコロですが。

それと、あくまで私の魔法を依り代にしているので、^{レアスキル}稀少技能も再現できていません。今の偽ライアは目が良くて魔力が多い射撃魔導師です。本人のポテンシャルでカバーしています。

「そんなこんなで、意外と弱点の多い偽ライアの説明でした。ご静聴ありがとうございました」

ああ、肩が凝る。

これをあと数日は続けないといけないなんて。

「自分で蒐集に行った方が楽だったかもしれませんが」

『なにを今更』

本当はもう一体作ったら終わりにしたいのはこれが理由でもありません。

調整中の中断は許されないので、ずっと付きっ切りで調整し続けなければいけません。途中で無理やり中断すればジュエルシードは暴走、そのまま次元震へ一直線です。不眠不休の作業が続きます。

「まあ、戦力が多いに越したことはありませんが」

『戦力と言えば、風の噂によると管理局はヴォルケンリッターを戦線に投入するつもりだとか』

「…それは洒落になりませんね」

stsの主戦力が揃い踏みじゃないですか！

数日後にはフェイトの裁判も終わってしまいますし。

「よし！眠いですが気合を入れふあゝむにやむにや……」

『マスター！マスター！！』

「…はっ！！あ、危ないところでした！

…気を取り直して、気合を入れていきましょーっ！」

『…心配で仕方ありません』

正義は英語で言うとジャスティスです」

side 亮

「ふえ、フェイトII テスタロッサです！
よろしく願います！」

「アルフだよ。よろしく」

今日は12月3日、昨日フェイトの裁判が終わり今日から捜査に
加することになった。
一緒にアルフもいる。

現在、俺たちの状況はあまり良くない。
ルナたちは既にかんりの魔力を蒐集しているらしい。この間まで
静かだったのが嘘のように今は活発に動いている。主に確認でき
るのはライアだけだが。
さらに俺やなのはの魔力も蒐集されたため、リインフォースが使
える魔法が増えてしまった。

「はいはい！それじゃあこの前の戦闘でわかったことを含めた、
今の状況を説明するね！」

すると空中にモニターが現れ、ルナの姿をしたライアが映し出さ
れた。

この前の戦闘を記録したものだろう。

「それじゃあまず、このルナちゃんなんだけど」

「調べた結果、あれは間違いなくルナ本人ではないことがわかった」
するとエイミーさんがパネルを操作し、画面を拡大した。
そこに映っていたのは、

「ジュエルシード…!？」

そう、ライアの額とデバイスにジュエルシードが埋め込まれていた。
これはどういうことだ!？

「彼、ライアと名乗る人物は、プログラム生命体に極めて近い存在
であると確認できた」

「プログラム生命体？」

なのはが首を傾げる。

まあ、わからなくてもしょうがないけどな。

「つまり、使い魔とも違う疑似生命、ってところかな？」

それでもなのはは良くわからないらしい。

「簡単に言うなら、人の形をした魔法つてことだよ。
意思を持って、人間の構造とそう変わらない。魔法で人を作ったっ
て感じ」

「へえ、ユーノ君って物知りなんだね」

なのはが感心したという感じで頷いた。

確かに今のはわかりやすかったな。やっぱりユーノは頭が良い。

「話を戻すぞ。」

このライアという人物はジュエルシードで再現されている。リンカーコア、脳、デバイス、全てだ。ジュエルシードをここまで上手く利用できるとはな。恐れ入った」

「逆に言えば、彼はジュエルシードの暴走体と同じ方法で対処できるんだよ」

「同じって言うと、封印とかかい？」

「そうそう」

「なるほど。意外と簡単に倒せそうだね。亮も零落白夜を使えば一撃で倒せるんだろう？」

「んな簡単に行くかよ。相手はあのライアだ。ポテンシャルだけでも十分な化け物なあいつを簡単に倒せねえよ」

すると全員がこっちに注目した。

ああ、そうか。

「…そういえば、亮は本物の彼に会ったことがあるようでしたね」

「なに！？亮、それは本当か！」

「ああ、本当だ。いつ、どこで会ったのかは言えねえけど…」

「…何か理由があるみたいだな。」

まあ、今は良い。彼について教えてほしい」

「…わかった。まず」

そして俺はライアについて話せることを全て話した。

狙撃の腕、得意な魔法、戦い方から魔法体系、Sオーバーの仲間がいることまで、知っていることを全てだ。

もちろん仲間の名前はルールのせいで言えなかったが。そりゃそうか。アリシアとかキャロの名前は今後に響くからな。

「なるほど、知れば知るほど化け物だな。

おまけに、君の言う彼の仲間が出てくれば軽く戦争ができるぞ」

「そうだ、だから時間を与えずに」

その時、^{アラーム}警報が鳴り響いた。

「エイミィ、何事だ！」

「…嘘」

エイミィさんは呆然とした様子だ。パネルを叩く手も止まっている。

「エイミィ！」

「……ッ、ごめん！ジュエルシードの発動を確認！発動地点、海鳴の海上！」

「……ジュエルシード!?」「」

「映像、出るよ!」

そしてモニターに現れたのは荒れ狂う海だった。

雷が轟き、海が渦巻く。自然現象ではありえないような荒れ方だ。

そして、画面の隅にルナ、もしくはライアがいた。

あいつはその光景を見ているだけで、止めようとも避難しようともしない。

「あいつ、ジュエルシードの暴走で俺たちを誘き出す気か!？」

「クソッ、卑劣な!」

「しかし、私たちは誘いに乗らざるを得ません」

そう、おそらくあいつはそれが狙いだろう。

そして封印が終わって疲弊した俺たちをまとめて叩き、ジュエルシードを奪ってそのまま逃げる気だ。畏だとわかっていても行かざるを得ない。

「…行くしかないか」

side out

「あゝめあゝめぶゝれぶゝれ、母さんや」

『この状況でよくそんな歌が歌えますね』

「え〜、だつてずっとこの光景じゃ、気が滅入るでしょう〜？
久々に外に出たんですし、気分良く行きたいじゃないですか〜」

あ、皆さんこんにちは。ルナニベルツです。

現在、海鳴の海で大嵐を引き起こしてみました。ずぶ濡れです。

「結果は張つてありますし、暴走させたジュエルシードは万一の場
合に備えて二つだけです〜。後は待つだけですよ〜」

『しかし、来るでしょうか？こんなあからさまな罠に』

「来ます〜」

私は確信を持って言いました。

こればかりは100%と言い切れるくらいに自信があります。

「困ってる人を見捨てない、悪い人は捕まえる、それが正義を語る
人たちの美点であり欠点ですから〜」

そして、転送魔法の魔力を察知しました。

弟子が師匠を超えるなんて百年早いです〜！（前書き）

今日、これが投稿されている頃には私はオーストラリアにいますよ。よう。

うう、海外研修なんて行く価値あるの？京都とか沖縄で良いじゃん！

弟子が師匠を超えるなんて百年早いです〜！

「お〜、来ましたね〜」

『目』で確認しましたが、いつものメンバー+フェイトとアルフです。

予想通り、二手に別れて攻めるつもりのようなようです。

封印組は星さん、なのはさん、スクライアさんのようです。

まあ、たかが二つのジュエルシードですしね。あの三人でも十分でしょう。

あ、皆さんどうも。ルナ=ベルツです。

現在、管理局に真っ向から喧嘩売ってます。

「まあ、そう簡単に封印はさせませんけど〜」

『B o w F o r m』

アルテミスを弓に変形させると、そのまま矢を番えて狙いを定めました。

狙いは、

「なのはさんです〜」

『S i l e n t O w l』

ククク、防御が硬いなのはさんでもこの魔法は防げませんよ。

もう蒐集を終えたなのはさんには用はありません。早々に退場して

いただきます！

しかし、それは射線上に割り込んできたフェイトに叩き落とされました。

チツ、魔力刃を展開せずにバルディッシュのフレームで直に破壊されましたか。それでは貫通できません。

「そういえば、この魔法はフェイトに見せたことがありましたね」

「うん、だからその魔法は私には効かない」

そして私は周囲を取り囲まれました。

別に四対一でも負ける気は微塵もありませんが、面倒というのは事実です。

ここにいるのは全員AAAランクくらいの連中ばかりです。

「へっ、今日はライアのやつはいないのかよ」

「今はいませんよ？そのうち来るかもしれないけどね」

その言葉に負け犬の顔が強張りました。

どんだけライアに来てほしくないんですか。

でも、

「…あ、来たみたいですよ」

瞬間、赤色の砲撃が負け犬を襲いました。

しかし流石はベテラン。突然の奇襲を零落白夜で切り裂きました。

「お見事〜」

思わずパチパチと拍手をしています。

いや、流石は私の宿命のライバル（笑）兼ストーカーですね。

すると、ライアが私の横に来るなり文句を言ってきました。

「お見事〜、じゃねえよヴオケ！

お前が変なこと言わなけりや当たってたつーの」

「や〜い、負け惜しみ〜」

「うるせえ！風穴あけるぞ！」

「はいはい〜、そのセリフはピンク髪のツインテールのみに許されるものですよ〜」

「ネタじゃねえよ！！」

ああ〜、懐かしいですね、この感じ。

イジリやすいです〜。

「まあ、遊びはここまでにしましょう〜。

そろそろあちらも焦れてきたようですね〜」

言い終わるかどうかというタイミングで負け犬が斬りかかってきました。

すっかり零落白夜も使っています。

「んじゃ、散開で〜」

「チツ、わかった」

二人で同時に避けると、そのまま別行動になりました。

『ベルツ』においては個人の戦闘能力が高すぎるため、連携なんかせずに個人が思い思いに戦った方がやりやすいのです。なので、ここからは完全に好きに戦うということですよ。

ライアは近場の敵を狩っていく作戦でしょうね。

え、私ですか？私ほとんど狙いがありますよ？

まだ闇の書に蒐集されていなくて、尚且つ弱くて魔力がある人物。

『Ride Impulse』

そこから一気に加速し、その人に接近します。

向こうはようやく私に気づいたようですが、もう遅いです。

「私の狙いは最初からあなたですよ？スクライアさん」

「クッ！」

彼はシールドを展開してきましたが、私の前で防御魔法なんて紙よりも役に立ちません。

「氷華一閃！」

一瞬でシールドを切り裂いた私は、そのままスクライアさんに襲い掛かりました。

はい、一丁上が

『Scythe Slash』

「はああああああ！」

「危なあああい！！！」

フェイトが追いついてきました。

咄嗟にアルテミスでガードしましたが、真横から攻撃されたので勢いを殺しきれずに吹き飛ばされました。

吹き飛ばされながらも状況を確認すると、

「引き裂け、アークセイバー！」

容赦なく追撃も来ます。

こいつ、実は私を殺す気なんじゃないですか！？非殺傷設定ですけど。

「邪魔しないでください！」

『Rejection』

あ、防御魔法で防いじゃいましたけど、確かフェイトの戦い方の定石だと…、

『Saber Blast』

ほら爆発した〜！

これは私の爆発の魔法を見てフェイトが覚えた魔法です。

く〜、相手に使われると厄介なことこの上ないですね。

視界は塞がれるし地味に痛いですし。

「でも、爆煙で視界が塞がれるのはフェイトも同じです〜！
私にはライアの『目』があるのでノープロブレ……………え？」

視覚を『目』に切り替えると、爆煙の向こうにいたと思われるフェイトからかなりの魔力が放出されるのが見えます。

『Thunder Rage』

「やっぱ!！」

爆煙ごと広域攻撃魔法で吹っ飛ばすつもりです！
もう展開が終わってる!？

「アルテミス! 鎧を〜!！」

『Sanctum Armor』

「続いてシールド展開〜!！」

『Load Cartridge・Hard Rejection』

さあ、来なさい!

「サンダーレイジ!！」

そして、視界があまりの光の強さに真っ白になりました。

sideフェイト

セイバーブラストの爆煙が一瞬で吹き飛び、ルナさんが張ったらしい防御魔法にサンダーレイジが直撃した。かなりの魔力を込めて撃ったから、これで少しはダメージが通ったはず。

「フェイト、助かったよ。

これだけの魔法が当たれば、いくら彼でも」

「しっ！油断しないで…！確実に倒したって確認してからじゃないと安心はできないよ」

「そんなオーバーな」

ユーノは倒したと思ってるけど、それは早計だと思う。

ルナさんがこんなに簡単に倒せるならば、とつくに管理局に捕まっている。

すると、

「うんうん」 油断しないその姿勢、流石は私の弟子です」

やけにご機嫌な様子のルナさんが現れた。

フィールド防御を纏っていて、さっきの攻撃があまり通じていないことがわかる。

「何度かヒヤツとする場面もありましたよ」。

成長しましたね」。あの必殺技に憧れていた小娘とは思えません」

「それは小さい時の話です！
……ルナさん、どうして闇の書を完成させようとするの？
あんなもの、完成させても暴走するだけで力なんて得られないんだ
よ？」

「知ってます。でも、これは必要なことなんですよ。
私に義務付けられた宿命さだめと言っても過言ではありません」

「そんなこと……」

【ユーノ、今の内になのはの所へ。ルナさんは私が抑えるから……！】

【……うん、わかった。気をつけて】

そしてゆっくりとユーノが遠ざかろうとすると、

「あ、そうそう」。

スクライアさんの魔力を頂かないと」

そう、『後ろ』から聞こえた。

振り返ると、そこには二人目のルナさんがいた。
バインドでユーノを拘束し、彼の胸元に手を翳す。

「ぐあっ!？」

「魔力もらい」

「ユーノ!？」

ユーノを助けようとするど、

「私に背中を向けるなんて余裕ですね〜?」

正面のルナさんが襲い掛かってきた。

咄嗟にアルテミスをバルディッシュで受け止める。

「クツ、これが亮の言っていた…!」

「そう、アイスバターです〜」

「ぐあああああああ!」

そうしてる間にもユーノの魔力は蒐集されていく。

「1JG...!」

「はいはい〜、熱くならない〜」

『Freeze』

するとアルテミスの刀身が凍結し、バルディッシュに凍り付いた。しまった!

「はい、お〜仕舞い。

フェイトの知り合いなので、殺しはしませんよ〜?」

声に首だけで振り返ると、そこには魔力をかなり吸われて衰弱したユーノがいた。

「適当に転送しておきます〜」と言ってユーノはどこかに転送され

た。

そして彼はこちらに向き直り、

「次はあなたの番ですよ」

そう言って近づいてきた。

私は逃げようとしたけど、バルディッシュが捕まっているから動けない。

最悪、バルディッシュを置いて逃げることに…！

「逃がしません」

『Active Inertial Canceller』

しかし、動こうとした時にはもう捕まっていた。

バインドに捕まっているわけでもないのに身体が動かない。手足が空中に縫い付けられているようだ。

「まあ、あなたは頑張ったと思いますよ？」

相手が悪かっただけです」

そして人形の方のルナさんが私に手を翳し、

「それじゃ、魔力をもら

」

魔力を蒐集しようとした瞬間、白銀の刃に消し飛ばされた。

「フェイト、無事か!？」

『Silver Blade』

離れた場所から亮の声が聞こえる。

どうやら魔力刃を伸ばして攻撃したらしい。

「あゝもう！本当に負け犬は私の邪魔はつかしますね〜！

っていうか、奪った魔力をまだ闇の書に蒐集させていないんですよ
〜！？一緒に消し飛ばされたじゃないですか〜！」

そしてルナさんの意識が亮に逸れた。

チャンスだ！

『Photon Lancer』

「ファイア！」

「ほへ？……ぎにゃあああああああ！」

ゼロ距離でフォトンランサーを発射し、なんとかルナさんから距離をとる。

バルディッシュももう回収した。これで仕切りなおしだ。

「こんの〜！調子に乗ってんじゃねえですよ〜！」

どうやら今のが相当頭に来たらしい。

アイスダガーを連射してきた。

【亮、アルフたちは？】

【ああ、ライアの相手をしてる。
もう封印は終わった。もうすぐ他の部隊から応援も来る。それまで
耐えるぞ】

回避行動をとりながら私は状況の確認をする。
どっちら思ったよりも順調らしい。

「よし、このまま頑張ろう！」

『Yes, sir』

猫に小判は与えても大判は渡さないのが人間です（前書き）

先日、オーストラリアから帰ってきました。

しかし、帰宅早々に風邪をうつされてしまい投稿が遅れました。

しばらくペースが遅くなるのでご容赦を。

猫に小判は与えても大判は渡さないのが人間です」

「この〜！当たり前さい〜！〜！」

「へっ！そんな簡単な攻撃に当たるかよ！」

負け犬が笑いながら悪態をついてきました。
ま、そうでしょうね〜。適当に撃ってますから。

あ、皆さんこんにちは。ルナ＝ベルツです。
さっきからアイスダガーを連射して『時間稼ぎ』をしています。

【ライア〜、そっちはどうですか〜？】

【問題ねえ。順調だ】

それはなにより。

今回はジュエルシールドを二個も犠牲にした超豪華な作戦なんですから、成功してもらわなくては困ります。

とはいえ、

『Scythe Slash』

『Silver Blade』

「わつとど、危ない〜」

この二人の連携は面倒くさすぎです。

両方とも似たような戦闘タイプだからか、連携がとても上手いです。どちらかが危ないならばもう一方が援護し、砲撃のチャージ時間すら補い合っています。

今日、初めて連携をしたとは思えません。

なので、

「これは昔を思い出しますね。ほら、私があなたたちを襲撃した時の。」

フェイトさんは……名前が出てこないのて犬死さんで。

あれと同じ戦い方だったでしょう？びっくりするくらい同じ状況ですね。」

「デメエ!!!」

挑発すると案の定。負け犬は連携を崩し、私に突進してきました。ククク、やっぱり前世の話は彼の弱点ですね。

「亮!？」

フェイトがそれを補おうと彼に合わせるように向かってきました。完全に足手まといですね。

「うおおおおお!!!」

『Silver Blade』

デバイスに零落白夜を纏わせ、隙だらけの大振り。

普段ならば避けてカウンターと行くところなんですけど、

「いつまでも零落白夜そとなせのが通じると思わないことです」

『Ice Sheath』

ここはあえて受け止める！！

side 亮

俺の目の前には、信じられない光景があった。

魔力攻撃においては無敵で、通常の攻撃でもその消耗に見合っただけの威力の零落白夜。

それが受け止められた。

「なん、だと……！？」

「ふふ〜ん そんなにその必殺技を防がれたのが信じられませんか〜？」

刃を弾き、ルナが俺から距離をとった。

そして自慢げにデバイスの刀身を見せ付ける。

「これぞ！長年に亘って私が研究し続けた、『零落白夜殺し』です」。

そもそも、あなたの零落白夜は以前私に防がれているのを忘れたのですか〜？」

そう言われてハツとする。

確かに、前世で俺は零落白夜を防がれている。

「でも、それならばどうして今までその魔法を使わなかったんだよ！？」

「簡単です。あの魔法はリリース……専用の融合騎がないと発動ができないんです。難易度が死ぬほど高いので。」

しかし！それも過去の話！私はあの魔法を劣化、もとい簡略化し、ついに先日完成させたのです！！」

……なるほど。

つまり、あの魔法、『アイスベール』を刀身のみを使って発動させているのか。

「これであなたの必殺技は封じました！
へへ〜ん！もうあなたに勝ち目なんてないんですよ〜！」

そう言うや否や、ルナは俺に襲い掛かってきた。

【亮、動かないでそのままジツとしてて】

すると、フェイトから念話が届いた。

そういえば、さっきからフェイトの姿が見えない。いつの間にか。

「ふふ〜ん 魔力を蒐集したあなたにもう用はありません。ここで退場していただきます〜！」

そしてルナは俺にその氷刃を振り上げ、

「サンダーフォール!!」

上空から飛来した雷に撃ち抜かれた。

side out

「……………痛い」

フェイトのサンダーフォールによって海に叩き落とされました。ぷかぷか浮いてます。

バリアジャケットはプスプスと焼け焦げているし、目がチカチカします。

咄嗟に防御しようとしたのですが、アイスシースの使用中はほとんどのリソースをそっちに回しているので飛行魔法くらいしか使えないんです。

「アルテミス、ダメージは如何ほど？」

『先ほどの攻撃で残存魔力は4割まで削られました』

……………大ダメージですね。

我が弟子ながら、正気を失った味方を囷に使うとは…。

おまけに、少しでも操作をミスっていたら負け犬にも当たってましたよ？

【ルナ、生きてるかあ？】

ライアから念話です。

心配したというより嘲笑いにきたといった感じですけど。

【生きてますね〜。この季節に海水浴することになりましたけど〜。はあ〜、弟子の成長を肌で感じました〜】

【ケケケ。弟子にしてやられるたあ、大した師匠だなあオイ】

【うるさいです〜!】

しかし、このままではいけませんね。

『時間稼ぎ』もほどほどにしておかないと、私たちが撃墜されます。

【ライア、そろそろ撤退で〜】

【あ〜？弟子に敗走か〜？】

【…いい加減にしないと殺しますよ〜？】

【お〜、怖え怖え】

すると、容赦なく海にサンダーレイジが撃ち込まれます。

このままだと感電させられるので、慌てて海から飛び出しました。

「……フェイト、実はあなたって私が嫌いですか〜？

訓練は厳し目だったと思いますけど、ここまで恨まれているとは〜」

「違うよ。ルナさんは私に色々なことを教えてくれた。

戦い方から戦闘の心構えまで、それこそたくさん。その中に入ったんだよ。」

『敵に容赦はするな』って」

「……弟子が順調に育ってくれて何よりです」

これは、私のせいなのでしょうか？

『自業自得です』

「黙らっしやいっ!!」

ええい、まだまだ弟子に追い抜かれるほど柔ではありません！
師匠の威厳を見せ付けてやります！

「アルテミス!!」

『Sword Form?』サード

カートリッジを二発ロードし、アルテミスが形状を変え始めます。
今までの西洋剣とは違い、今度は幅広で2メートル程の長さの大剣
になりました。
バルディッシュのザンバーフォームの实体剣バージョンみたいなも
のです。

真っ白ですけど。

【おい、テメ、何だそりゃ!?!?

そんな形態見たことねえ

】

【ライア、今からとてつもなく危険な魔法を使います。
勝手に逃げるか避けるかしてくださいね?】

【……お前、まさかキレて　　】

【キレてないですよ？】

そしてアルテミスを振り上げ、振り下ろします。
うん、大丈夫。いける！！

「何する気が知らねえが！やらせるかよ！」

『Silver Blade Extension』

負け犬が魔力刃を伸ばして攻撃してきますが、今度は受けずに回避
します。

今まで通りだところでフェイトが、

「サンダースマッシャー！」

砲撃が来るんですよ。

そこそ良い連携ですが、もう私には通じません。

私はアルテミスを思い切り振り上げ、

「よいつしよおおおおおおお！！！」

砲撃を叩き切りました。

ふふ〜ん　これがソードフォーム？の力です！

この形態の使用時は、パワーブーストをアルテミスが自動で行って
くれます。

機動力を捨てた、完全パワー型です。

「まだまだこれからですけどね？」

『Load Cartridge』

カートリッジを三発ロード、今日はカートリッジ使いまくりですね。後で作り直さないかと。

そんなことを考えているとアルテミスが淡い白色に光り始めました。

ふふふ、目に物見せてやります！

「超絶必殺！！」

そして私はその場でアルテミスを腰ために振りかぶり、

「凍牙一閃！！」

全力で横薙ぎに振り払いました。

瞬間、刀身の光が爆発的に伸び始めました。一瞬で20メートル以上になった光はそれでも止まらず、そのまま伸び続けます。

それは私が張った結界に触れると一瞬で凍りづけにしてぶち破り、海面に触れれば氷海に変貌させました。

「そおおおおおおお、れ！！」

『ブースト全開』

ブーストの出力を上げ、光が振り回される速度が一瞬で音速に到達します。

手足がめっさ痛いですが、そんなのは後です！

「死に晒しやあああああああああ！！！」

勝った！！

非殺傷設定なので死んではいらないでしょうが。
まあ、これからじっくりと殺せばそれで良いのです。
ついでにフェイトの魔力も頂きましょうか？

「まあ、なかなか楽しめましたけどね。」
さてとそれじゃあさっそく」

「誰をやったって？」

背後からの声に、思わずギョツとします。
急いで振り返ると、そこには無傷の負け犬とフェイトが。

「そんな馬鹿な!？」
あれを食らって生きているはずが……!!」

凍牙一閃はアイスシースを伸ばして攻撃する技です。
いくら魔法を無効化する零落白夜でも防ぎきれはありますがありません!

「確かにスゲエ魔法だった。
けどな、トランザムを使った状態の俺ならばギリギリ防ぎきれる程
度だったんだよ」

「ルナさん、もう諦めて。
今のルナさんの切り札でしょ?もう私たちの勝ちだよ……」

「そんな、そんなはずが……!」

そ、そうです！まだこっちはライアがいます！二人でなら

」

「残念だが、それは無理だ」

すると、ライアが相手をしていたはずのクロノ執務官がやってきました。

一緒なのはさんに星さん、アルフもいます。

「彼ならばさつき転送魔法を使って離脱した。

おそらく、さつきの攻撃の巻き添えを食らうのを恐れたんだろう。もう、君は一人だ」

「そ、そんな……！！」

確かにいつまで経ってもライアは私の援護に来ません。本当に逃げたみたいです。

さらに、

『クロノ君、やっと繋がった！』

「エイミイか。結界の影響で通信が妨害されていたが、さつき君が破ってくれたんだっただな」

『すぐに応援を送るからね！』

そして周囲に魔方陣が展開されると、アースラに配備されている武装局員が三十人ほど転送されてきました。

どうやら、他の部隊からの応援は間に合わなかったみたいです。

「これでわかっただろう。もう逃げることはできない。
大人しく武装を解除して投降するんだ」

そして私はバインドで雁字搦めにされ、手足を動かすことさえまま
ならなくなっていました。

くう、これでは逃げられません…！

「動くことも反撃することもできず、仲間ももつけない。

こんな状況では流石の君でもどうすることもできないだろう。

ルナ＝ベルツ、君を逮捕する」

クロノ執務官の言葉に、私は思わず俯いてしまいました。

そして私はゆっくりと顔を上げて、

「何を言ってるんですか？」

満面の笑みで言い放ちました。

「まだ私のバトルフェイズは終了していませんよ？」

瞬間、今まで伸びたままだった光の刃がグニヤリと曲がり、一人の武装局員をバリアジャケットごと凍結させました。

「なっ!?!」「どっなっているんだ!?!」「何だこれは!?!」

同員たちが慌てる中、私は容赦なく攻撃を加えます。

あ、もちろん脳内では遊 王のバトルパートのBGMが流れていきますよ?

「ドロ〜!モンスターカード!」

「ぐあああ!」

「ドロ〜!モンスターカード!」

「ぎあああ!」

「ドロ〜!モンスターカード!」

「ぐはああ!」

刃は次々と同員を絡め取り、そのたびに悲鳴が一瞬だけ響きます。なぜ一瞬なのかというと、すぐに氷の塊になって海に落ちていくからです。

「うふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
だ〜れが『凍牙一閃』を刃を伸ばすだけの単純な技だと言ったので
すか〜?」

というか、そんな簡単に私が死亡フラグを乱用するとも?

甘いですね〜、ショートケーキに角砂糖をジエンガのように積み立

ててコーラをかけた謎の物質よりも甘いです！

これはむしろ、シグナムの『飛竜一閃』に近い技なのです！太さが全然違いますが。

パワー重視の形態だとしても小手先の技が苦手になるので、それを補うために作り出した超三次元的な攻撃！逃げても追い続け、防御魔法の上からでも相手を凍りづけにする！

「ならば、術者を直接狙えば…！」

すると、クロノ執務官と高町姉妹が攻撃を仕掛けてきました。誘導弾から砲撃まで雨あられですが、

「ドロ〜！モンスターカード！」

その掛け声で全ての魔法は『凍牙一閃』に巻き込まれ、一瞬で凍りづけになってしまいます。

しかもそのままでは終わらず三人とついでにアルフを巻き込み、全員凍りづけにしてしまいました。

「なのは！星！アルフ！」

「畜生！テメエ、騙すなんて卑怯だぞ！」

「ふふ〜ん まんまと罠に引っかかったあなたたちが馬鹿なんですよ〜。

犯罪者の言うことをあっさり信じるなんて、それでも同員ですか〜？」

フェイトは器用に避けて、負け犬は零落白夜で弾きながら私に接近

してきます。

良く見ると、二人以外は全滅したようです。他に人が見当たりません。

そしてついに二人が私のところに到着しました。

流石に私は伸びきった魔力刃を消し、二人の攻撃に備えます。

「食らえ!!」「これで!!」

そしてフェイトは魔力刃を、負け犬は零落白夜を私に叩きつけよう
とします。

しかし、私は二人の攻撃を刀身の腹の部分で受け止め、

「^{トランプ}畏発動〜!『聖　るバリア　ミラー　オース』!!」

瞬間、未だに淡く光っていた刀身が再び輝きました。

そして爆発するように光が二人を包み込み、

「はい!氷像二つ、一丁あがり〜!」

二人は凍りづけになって落下していきました。

本来ならば殺傷設定でこの魔法を使い、凍りづけになった敵ごと爆
発させるのが定石なのですが、

「まあ、今回は魔力を奪わなければいけませんしね〜。
勘弁してあげます〜」

『か、勘違いしないでよ!別に弟子の成長が楽しみな訳じゃないん
だからね!ってやつですわわかります』

「……勝手なハイルアクトなごじゅだわらぬ」

へヒーローテンション

sideライア

「と、まあそんな感じで魔力を蒐集してきました」

「……………お。お、お疲れ？」

さっきは思わずルナを見捨てて逃げ帰ったが、ルナは全く怒った様子を見せない。

それどころか、普段通りの態度で接してきやがる。それどころか、この前買ってきたコタツで蜜柑なんか食ってるし。ちなみに俺も入ってるが。

……………これは、もしかして怒っていないんじゃないかね!?

ならば好都合!

このままなかつたことにして

「あ、そういえば」!

ライアって、さっき私を見捨てて逃げましたよね?」

ギクッ!!

「あ、あ?そ、そういやあそうだったな」。

いや、そんな状況でも一人で何とかするなんてルナさんマジパネエッス!」

「そんな〜、褒めても何も出ませんよ〜？」

……………そう、何一つね

「…？」

ボソボソとルナが何か言ったようだが、小さすぎて聞こえなかった。何だ？

「ただいま」

「あ、おかえりなさい」

すると、そこに『アリス』が帰ってきた。トコトコと寄ってきて、そのままコタツに足を突っ込む。

……………つて！！

「なんでアリスがいるんだよ!？」

普段通りのゴスロリ、普段通りの無愛想さ、普段通りの眠そうな面、普段通りすぎるがルナの顔でやってるから違和感が半端ない。

「おいルナ！いつの間にアリスを『再現』したんだよ!？
いるならいるで今日の戦闘に参加させりゃあ良かったじゃねえか！」

「あ〜、うるさいですね〜あなたは。

ちゃんと説明しますから黙ってください〜」

「静かにしないと殺す」

うっ、二人から不機嫌オーラを全開で向けられた…。

『ベルツ』の長男長女の言葉に流石の俺も黙らざるをえない。

「さてと、それじゃあ今回の作戦の裏側を説明します〜。

今回の作戦は表向き、ジュエルシードを使って私たちが管理局を誘き出すといったものです〜」

そうだ、俺はそう説明された。

途中でルナがスクライアと弟子の魔力を蒐集するから時間稼ぎをしる〜。

「しかしその実、今回はあまり魔力の蒐集を目的にはしてませんでした〜」

「はあ？じゃあ何でジュエルシードを二個も使うなんて馬鹿みたいなことしたんだよ？大損も良いところだろ」

おまけに両方とも回収されちゃったし。

アリスに使ったのも入れれば八個の消費、残りは五つだ。

「今回、アリスには別行動をとってもらったんです〜」

「別行動？」

「そう、魔力の蒐集」

そこまで聞いてピンと来た。

ルナの野郎……。

「俺らは囿だっただってことかよ」

「そうですね。今回、アリスには応援に駆けつけた部隊を狩ってもらいました」

「質が悪いからあまり集まらなかったけど」

「十分です。今回の目的は魔力の蒐集よりも、潰した部隊の数ですから」

「それならそこそこ。」

小隊を七つ、中隊を五つ、大隊も一つだけ潰した」

「……………スツゲ」

流石は対集団型、殲滅はお手の物ってか。

俺たち『ベルツ』の人造魔導師にはそれぞれコンセプトがあり、全員がそれに則って製作されている。

オールラウンダー

万能型のルナ。集団殲滅のアリス。支援、迎撃の俺。突撃のアイデア。拷問、攪乱、潜入のアリシア。キャロは実験目的だな。

教授？あれは頭ブレインだろ。リリスはその補佐だ。

「それで、現在は何ページですか？」

「488ページ」

「おいおい、そんだけ狩ってたただそれだけかよ。」

シヨツベくなあオイ。確か昨日の時点で450くらいはあったろ
くが」

「うるさい。大半は蒐集する前に回収されたから仕方ない。
それに一匹を蒐集している間に他のが連れて行かれる。効率が悪い」

「まあまあ、フェイトたちから蒐集した魔力でそれは取り返せます
」

そしてルナはアリスから闇の書を受け取り魔力を蒐集させた。

パラパラとページが捲れ、魔力が蒐集されていく。

こりゃあ今日で全部埋まったか？

しかし、

「……ん、残念。ちょっと足りませんね」

「ん、後ちよつと」

「かあ、メンド臭え」

632ページ。

あとたったの34ページだ。だが、たったそれだけを埋めるために
動くつてのがメンド臭え。

「おいおい、どうすんだよ？もう原作キャラはあらかた狩っただ
ろ？」

つまり、地道に狩るしかねえじゃーん」

「面倒」

「そ、そんなことを言われても〜」

「守護騎士どもは本局で厳重な監視下におかれてんだろ〜？
小物を大量に狩るか、大物のモブを探すしかねえし」

「今日で応援に来そうな近隣の部隊はあらかた潰した。
しばらく待たないとザコすら来ない」

「……乱獲しすぎましたね〜」

まったくだ。

巨大生物どもを狩っていたら管理局が寄ってくるだけで大して蒐集
もできない。
八方塞だ。

「噂によれば管理局がヴォルケンリッターを投入する『かもしれな
い』らしいです〜。もし本当だとしてもいつからかはわかりませ
ん
が〜」

「地上を攻めるのは？」

「無理ですね〜。地上部隊は『次に来たら全戦力を使ってでも逮捕
してやる！』とレジアス中將が息巻いているらしいですから〜。
最悪、袋叩きにあって蒐集どころではありません〜」

「なら本局は……って、そりゃ無理か」

「ですね〜」

少し前にルナが単騎で攻略したらしいしな。

防衛レベルも跳ね上がっているだろうし。自滅覚悟なら話は別だが。

「どうするかねえ」

「どうしようもない。向こうが痺れを切らすのを待つべき」

「それもそうですね」

よいしょっと言ってルナはコタツから出て行った。

「ああ？どこ行くだよ？」

「夕飯の買出しですよ。今日は皆頑張りましたし、豪華にステーキと行きましよう！」

「おお！マジか！？」

「流石はルナ、良くわかってる」

そう来なくっちゃな！

今日はそこそこ戦ったし、これくらいは当然だろ！

ちなみに、ジュエルシードで身体を構成されている俺たちは本来は食事を必要としない。

だが、味覚を楽しむという意味では食事は重要なんだぜ？娯楽だ娯楽。

「ふふふふ、楽しみにしててくださいね」。

……アリス『だけ』」

「……オイ、今聞き捨てならねえことを聞いたんだが」

流石にルナを呼び止める。

アリスだけ？なんで『だけ』を強調してんだよ！？

「まったくも〜。味方を見捨てて逃げるような野郎に食わす飯なんてあるはずないでしょう〜？あなたは麦茶でも飲んでなさい〜」

「オイ！！流石にそれはねえだろ！

マジでスンマセンシタ！！だから俺にも肉を……！！」

「肉？何を言ってるんですか〜？」

そしてルナは玄関のドアを掴み、

「テメエに食わす夕飯はねえ」

晩飯の全品抜きを宣言してドアを閉めた。

悪魔め……！！

「自業自得。でも、土下座して『肉を分けてくださいお姉様』って
言いながら一時間拝み通すなら」

「わけてくれるのか!?!」

「一口の四分の一くらいから出る肉汁をあげても良い」

「セロツ!?!」

訂正、悪魔どもめ……!!

side out

押すなよ！絶対に押すなよ！！マジで押すなよ！？

「……………暇ですね」

「暇だな」

「zzz」

皆さんこんにちは。暇なルナ＝ベルツです。

あれから一週間、特に活動もせずに引きこもっています。

蒐集もほとんど行っていないので本当に何もやってません。コタツで暖をとっています。

「最近は局員が一つの世界に必ず一小隊はいるみたいですからね。狩るうにも狩れません」

「わらわらと集まってくるしな」

「zzz」

それにしても、アリスは本当に幸せそうに寝てますね。

前に『私の安眠法は108式ある（キリッ）』とか言っていましたし、本当に寝るのに妥協しません。

「ルナ、何か一発逆転の方法とかねえのか？」

「そんな方法があったらとっくに使ってますよ」。

まあ、強いて言うとしたら……………」

「したら？」

「守護騎士が動き回ってくれて、それにピンポイントで接触できれば良いんですけどね」

「うわ、希望的観測すぎるだろ、それは」

「もしくは……」

「もしくは？」

「管理局が私たちを見つけて、攻勢に出てくるとか」

「……いや、それはこっちがマズイだろ」

「そうなんですよね」。

でも、現状では動きにくすぎて仕方がないというのが事実です。集まってきたてもその場で闇の書が完成するならばそれで良いんですが、それには結構な量の魔力が必要です。なのはさんクラスは要りません。

「あ、平和って退屈だ」

「あれです、『来るなよ、絶対に来るなよ！』とか言っていればあっさり来てしまったたりして」

「ダチヨウ倶 部か」

「でも定番でしょ？」

「ほらほら、言ってみてくださいよ」

「俺かよ……。」

あゝ、クルナヨゝ、ゼツタイニクルナ

バリイイイイイイイン！！

ライアが棒読みであの有名なネタをやっていると、マンションに張っていた隠蔽結界が外部から破られました。

「……………」

「……………何？結界が壊れたみたいだけど？」

痛い沈黙が部屋を包む中、アリスがのっそりと起き上がります。というか、いまさらですけどコタツで寝ると風邪を引きますからやめましようね？

「ら、ライアのネタのせいですよ〜！」

「俺のせいだよ！？そもそも発端はテメエが振ってきたんだろっが！？」

「……………眠い」

こんな非常時だというのにチームワークはバラバラです。

ああ、こんなことをしている場合じゃないのに〜！！

【ルナ＝ベルツ、並びにライア＝ベルツにアリス＝ベルツ！君たちは完全に包囲されている！
武装を解除して投降しろ！10秒だけ待つ！それまでに投降の意思を確認できない場合、武力をもって君たちを逮捕する！！】

「「短つ！？」」

クロノ執務官のものと思われる念話に、思わずツツコミを入れました。

じゅ、10秒？トイレの途中だったら酷いことになっていましたよ！？

「私も入ってる」

「そりゃあ、大隊を潰せば嫌でも逮捕されるだろうよ」

「管理局がへボいのが悪い」

それには同感ですが、そうしているうちにも時間は過ぎて行ってるんですよ！？

まあ、答えは決まっています。

【時間だ！返答がないため、投降の意思がないものと判断する！】

「横暴だな」

「嫌いじゃない」

「対象が私たちじゃなければですけどね」

【総員、撃てええええ！】

side 亮

俺を含めた数百人規模の魔導師たちの魔法が、一斉にマンションに突き刺さった。

なのはやフェイト、星たちはカートリッジを装備してきたため、今日は前までとは火力が違う。

そもそも、なぜ俺たちがこの場所を突き止めることができたのかというと、発端は数日前のフェイトの言葉からだった。

「ルナさんたちの隠れている場所だけど、海鳴が怪しいと思う」

その言葉に最初こそ皆は否定的だったが、俺は納得していた。なるほど、その発想はなかった。

「ありえるな。ルナのことだから『逃げ出した犯人が同じ所に戻るの考えにくい』という心理を逆手に取った作戦です」とか言ってるんだ」

「……すごいね。本当に言いそうだよ、それ」

伊達に長い付き合いじゃねえからな。
口には出さねえが。

それで手始めにフェイトの住んでいたマンションを調べてみれば、

「……………いきなりビンゴだよ。マンションの周辺に隠蔽結界を確
認」

「本当か!？」

それから数日間そこを監視すると、ダミーではなく本物のアジトだ
ということもわかった。ルナが買い物に出かけるのを発見したから
だ。

「灯台下暗しとはよく言ったものだな」

「クロノ、これからどうするんだ？」

なのはたちの要望で、既にカートリッジシステムの装備は終わって
いる。

原作とは違い、破損がなかったために早く改修ができたからだ。も
ちろん俺のカリバーンも装備している。いつでも出撃は可能だ。

「まずは近隣の部隊を招集し、戦力を整える。

今回はルナと同レベルの魔導師があと二人もいるんだ。用心に越し
たことはない」

というクロノの言葉で、各部隊から急遽応援が駆けつけた。

その数、なんと200人を越える。アースラのメンバーを加えれば

250人には届く。

「この人数でも不安は残る。なんせ、相手はオーバースが三人だ。油断はするな！」

そして現在、作戦は開始された。

今の一斉攻撃には俺となのは、フェイト、星は参加していない。俺たちは切り札らしいから、大きいのを後から撃ち込む係なんだとか。

【四人とも、今だ!!】

【【【了解!!】】】

どうやら出番らしい。

「三人とも行くぞ！」

そしてあらかじめチャージしておいた魔法を発動する。

これがフェイトの『プラズマザンバーブレイカー』を参考にして編み出したおれの新技！

カートリッジを全発使った本気の攻撃だ！

「白銀一閃、シルバーセイバー」

「スターライト」

「ルシフェリオン」

「プラズマザンバー」

「……ブレイカー……!!」

そして一斉に最大威力の砲撃が発射され、マンシヨンは粉々に

【調子に乗るな】

ならなかった。

突然、マンシヨンの前に四枚のシールドが形成された。

一枚だけは白いからルナのものだろう。それが俺の砲撃を、残りは黒いシールドが個々に砲撃を防ぎきった。

「なに!?!」「そんな!?!」「信じられません……!!」「硬い……!!」

【ルナたちにすら『無敵要塞』と称された私の防御を破れる?】

side out

「あ、あつぶな……!!」

「冷や汗が出たぜ……」

「ザコ剣士は相性が悪い」

リアル弾幕やら収束砲撃やらを撃ち込まれ、正直なところ寿命が縮みました。

「どうすんだよ？こりゃあ明らかに不利だろ」

「そうなんですよね〜」

そう言いつつも、外の状況を必死に確認します。こつこつ時に『目』って凄まじく便利です。

……むむー！

「……ライア、良い報せと悪い報せのどちらから聞きたいですか？」

「ああ？じゃあ良い報せだ」

「なら悪い報せから。敵の総数は263人、Aランク越えの魔力もチラホラいます〜」

「……オイ、俺の意見を聞く意味あったのか？」

「ついでにもう一つ。」

敵は転送妨害の結界を張っているので、お得意の『トランスミッシヨンシールド』は使えませんよ〜」

「オイ！俺の戦力の三割が死滅したぞ！？」

「良い報せは、相手の中にヴォルケンスを発見しました」

「……それって良い報せなのか？」

「ますます戦力的に敗北が近づいた気がするんだが……」

「ですね」。

今の状況をわかりやすく説明すると、マグ ットコーティングしたガン ムがア・オア・クーに単機で突撃するのと同じくらい不利です。つまるところ、

「蒐集も脱出も絶望的ですね」

「こりゃあ無理だろ」

「分の悪いゲームは嫌いじゃない」

悪すぎて無理ゲーの域に達してますけどね。

ああ、嫌になっちゃいます。

……………あ。

「シグナムとヴィータ、それとザフィーラが突入してきました」。

「あ、それに追隨してフェイトたちも来てます」

「はい死んだ！もう勝ち目ゼロ！くっ！ここは俺が時間を稼ぐ！お前たちは逃げろ！！」

「っっっ死亡フラグがあったよな。ルナ、今度はお前がや

」

「おお〜！マジですか〜！」

「さっすがライア！後は任せましたよ〜！」

「華々しく死ねば？」

「オイ！真に受けんな！冗談だ！！！」

「またまた〜！恥ずかしがる必要はありませんよ〜！
ささ、どうぞ前に〜！！！」

「ふざけんな！テメエが行けこの野郎！」

「ならば二人で行けば良い。私は脱出するから」

「逃がすか！テメエも道づれだ！」

「私を置いてあの世へ行きなさい〜！」

「黙れ！テメエも連れて行かん！！！」

「そうこうしている間にもフェイトたちは迫ってきます。
あああ〜！どうしたら〜！！！」

「……………あ！！！」

「二人とも、妙案を思いつきました〜！」

「あ？」

二人が怪訝そうな顔でこちらを見てきました。そりゃそうですよね。本当に突然なんですから。

「そのためには、二人がどうしても必要です」

「……………言ってみろ」

「まともな案じゃなければ殺す」

「二人には、死んでもらわなければなりません」

真つ赤なああ誓いいいいいはどの動画でも弾幕が凄いです

sideライア

「……………正気の沙汰じゃねえな」

「効率的にはまともだけど、精神が病んでいるとしか思えない」

「でも、これくらいしか生き残る方法はありません」

そりゃそうだがよ。

うわ、テメエの血は何色だよ？赤いのが信じらんねえ。

「わったよ。それで行くぞ」

「ん、異論はない」

「それじゃあ決行で」

「了解」

そしてルナはデバイスを展開し、さっきの弾幕の流れ弾で酷いことになっているベランダから外に出て行った。

「うっし、それじゃあ俺たちも急ぐか」

「ん、わかった」

そして俺たちは闇の書を開き、

『Sammlung』

自分たちの魔力を蒐集させた。

side out

『マスター、この策が本当に成功すると思いますか？』

「成功確立は良くて三割つてとこですな。むしろ、大失敗する可能性の方が高いです。」

ちなみに、ただの失敗は私が普通に捕まるか殺されることです。』

大『失敗の意味は………まあ、その時にでも。』

あ、皆さんこんにちは。ルナ＝ベルツです。

今から生死を賭けた大作戦を行うところです。マジで死にますよ、大失敗すれば。

『正直に申し上げますと、私はこの作戦は無謀だと思います。成功するなんて奇跡を起こすようなものです』

「ふっふっふ」

思わず笑ってしまいました。

奇跡ですか。面白いことを言いますね、この子は。

『……何か秘策でもあるのですか？』

「いゝえ？でも、奇跡という言葉は大好きです。それは即ち『運』でしょう？」

それならば、奇跡なんてものは至極簡単です。

「『運も実力の内』！つまり、その奇跡は私の『実力』です！！」

そして私は飛行魔法で一気にベランダから飛び立ち、連中に突撃しました。

sideフェイト

私は今、守護騎士の皆や亮たちとマンションに突入しようとしている。

この状況とあの防御力から見るに、ルナさんはきつと籠城しようとするだろう。しかし、その間に広域殲滅魔法を使われればこちらは瞬殺だ。それは絶対に避けたい。

しかし、予想に反してルナさんは堂々と私たちの前に姿を晒した。

「ひゝふゝみゝ……八人ですか。ということは、スクライアさんとアルフとシャルマルは転送妨害と封鎖結界の維持に回っているんですね。」

こちらの人数を知らながらこの余裕。何かの作戦？

「ルナ、君ならばこの状況を理解できるだろう。大人しく他の二人と投降するんだ」

「クロノの言うとおりだぜ。この人数が相手でここまでの準備をされたら、いくらお前でも逃げ切れねえ」

そう言いつつも、亮は全く油断していない。むしろ、断つたらずぐにでも襲い掛かろうとしているのがわかる。

「んん〜、そうなんですよね〜。流石の私でもこの大人数では逃げ切れません〜。困った困った〜」

そして、本当に困ったように笑う。

「正直、私もこの状況は流石に絶望的だと思っっているんですよ〜？つていうか、どうして拠点があったのですか〜？」

「フェイトちゃんが気づいたんだよ。ルナちゃんなら元の場所に戻ってくるって」

「……………さ、流石は我が弟子？」

『思考が読まれるのは予想外でしたね』

「まったくです〜。フェイトって、ルルみたいに私のストーカーでもしていたんですか〜？」

「し、してません!!」

というか、ルル!!それは犯罪だよ!

「それにしても、シグナムたちを戦線に投入するとはね〜。
管理局も相当に切羽詰ってきたのが窺えます〜。自分たちが無能な
ばかりにね〜？」

「……ルナ、それは違う。主を含め、私たちは自分の意思でお前と
戦うことを決めた。お前は最初から夜天の書を狙っていたのだから。
だからこそ、これは私たちが決着をつけなければならぬ！」

「ぶん殴ってでもはやてのところに連れ帰ってやる！！」

「……ルナ、ここまでだ。お前ほどの騎士ならばわかるはずだ」

守護騎士の皆がルナを説得するも、やっぱりルナは困ったように笑
うばかり。投降する素振りは見せない。

「あなたたちの意思って……どうせ、ジーク厨二に言われたからでし
よう〜？そんな安い言葉、聞く耳持ちません〜。それに、ここまで
の大犯罪を犯しておいて、今さら投降してどうするんですか〜？ど
うせ私は一生牢獄ですよ〜？」

「それでも、罪は償わなくてはなりません。

犯した罪は消えなくとも、それが咎人にできる唯一のことです」

「星の言う通りだよ。ルナさんが犯した罪は重い。でも、それでも
償わなきゃいけない」

「戯言ですね〜。私が懺悔しようと思えば後悔しようと思えば、過去は変わりま
せん〜。それならば、私は未来を少しでも面白おかしく生きるだけ
です〜」

その言葉に、私はルナさんの生き様、悪く言えば本性を見た気がした。過去のせいで立ち止まることを許さず、常に未来に目を向けていく。

『ルナさんにとっての過去とは、未来を生きるための糧でしかないのだらう。』

しかし、ここに来て、私の勘は最高レベルで警報を鳴らした。絶対におかしい。ルナさんが戦闘中にこんなに話すことそのものがおかしい。

そして私の脳裏に、過去にルナさんが教えてくれた教訓が甦った。

『良いですか、フエイト。
明らかに相手の方が不利な状況で相手がペラペラと余計な話を始めたら、それは』

「時間稼ぎ!?」

「なななななななのことととととととでででですかかかかかか?」

『以心伝心ですね』

やっぱり!!!

「皆、これは罠だ! ルナさんのこれは時間稼ぎ! たぶん本命は中の二人!!!」

『Ride Impulse』

「何のことですかああああキイイイイック!!」

「ぐふうふううっ!!!?!」

すると突然ルナさんが加速し、クロノに盛大なドロップキックをかました。しかも、蹴った部分のバリアジャケットが凍結している。いきなりの攻撃にクロノは反応できず、錐揉みしながら吹き飛んでしまった。

「クロノ!?!」

「お一人様ご案内!」

『Ice Detonation』

そして未だ吹き飛んでいるクロノが爆発した。

そのまま気を失ったようで、地面に自由落下している。

「先手必勝!?!つまりは後手必敗です!?!後手に回った彼が悪いのです!」

「それはいくらなんでも無茶苦茶だよ!?!」

幸いにも、地面に激突する前に他の局員に救助された。

どうやら非殺傷設定だったらしく、遠目からだけどクロノに怪我は見当たらない。

良かった。

でも、今のはつきりした。

残りの二人、もしくは二人がしていることがルナさんの切り札!

それがなくなれば私たちの勝ちだ！そうじゃなきゃこんなに攻勢に出たりしない。

【全員、聞いて。一人でも良いから残りの二人のところに行くべきだと思う。ルナさんが一人でここを守ってるってことは、たぶん中の二人は無防備ってことだから】

「……私の勘では、フェイトが何か余計なことを言ってるってそうです。なので、ここからはマジで手加減なしですよ。本気でいきますよ！」

そしてルナさんは、

「フルドライブ！『レジェンドモード』！！」

『Ignition』

私すらも見たことがない、フルドライブを発動させた。亮がフルドライブを一度だけ見たことがあると言っていたけど、聞いていたのと違う。現に亮も驚いていた。亮が言っていたのは、バリアジャケットが変わらないはずなのに……！！？

「バリアジャケット、バージョン『アイデア』！！」

『Idea form』

「大剣を〜！」

『Sword Form?』

瞬間、今までのロングコートのようなバリアジャケットが光に包まれ、純白だが重装甲の鎧に変形した。明らかに防御力を重視していて、高速戦闘に向いていない。それにあのデバイスの形態、パワー勝負で来る気だろうか？

「皆、見た目に騙されるな！あれは高速せんと」

『Lightning Road』

「スパークムーヴ！！」

パンツと放電時の火花のような音がしたと思うと、ルナさんは一瞬で亮の背後に移動していた。『神速』、その言葉が頭に浮かぶ。

『Load Cartridge』

「紫電一閃！！」

普段とは違い、刀身に電気変換した魔力を乗せての斬撃だ。あんな高速機動なのに破壊力も重視しているなんて……！！？

『TRANS - AM』

「舐めんな！！」

しかし亮はルナさんが移動を開始した瞬間にトランザムを発動させ、刃が振り下ろされる前にその場を脱出した。そして、そのままルナさんの背後に高速で回りこみ、零落白夜を発動させたカリバーンを振り下ろす。

「遅いです〜！」

『Lightning Road』

しかし、再びルナさんは高速移動して亮の背後に回り込む。

「なんの〜！」

しかし、これも亮はルナさんが移動した瞬間に高速で背後に……
…あれ？これっていたちごっこじゃ？

「遅いです〜！」

「なんの〜！」

「遅いです〜！」

「なんの〜！」

「遅いです〜！」

「なんの〜！」

「遅いです〜！」

「なんの〜！」

「遅いです〜！」

「なんの〜！」

「遅いです〜！」

「なんの！」

「遅いです〜！」

「なんの！」

「遅いです〜！……………と見せかけて〜！」

ルナさんは今度は剣を振り下ろさずに背後を振り払った。しかしそこには亮はいない。

「ど、どこに!?!」

「終わりだああああ!?!」

『Silver Blade』

タイミングを読んでいたのか、それとも偶然か、亮はルナさんの頭上にいた。そのまま一撃必殺の攻撃をルナさんに振り下ろす。しかしルナさんに刃が触れた瞬間、その姿が消え失せた。

これは、『幻術』!?!

「なに!?!」

「超隙ありです〜！」

瞬間、ルナさんが亮の背後から突然現れ、大剣を振り下ろした。

「やらせん！」

しかし、二人の間に守護獣のザフィーラが割り込み、シールドを張って亮を救う。

どうやら今の攻防の間にヴィータとシグナムはマンションに向かったらしい。姿が見えない。

「ザフィーラ！？ってことは……！」

『烈火の将と鉄槌の騎士の姿が見えません』

「追いますよ〜！」

「行かせん！！」「行かせるかよー！！」

すると二人は猛攻撃を始めた。

移動の隙を与えないためだろう。三人とも接近しすぎていて援護ができない。

【星、なのは、フェイト！ここは俺たちが何とかする！
三人はライアとアリスを頼む！】

すると亮から念話が届いた。

確かにあの二人はオーバーSらしいし、援護に向かった方が良くかもしれない。

あっちが本命の可能性が高いし。

「星、なのは、行こう」

「しかし……」

「亮くんならきつと大丈夫だよ。それに、ザフィーラさんだっついでる」

「……………わかりました。亮、ご武運を……………」

そして三人でシグナムたちを追ってマンションに急いだ。しかしすぐ近くまで来ると、シグナムとヴィータが大急ぎでマンションから飛び出してくる。

「二人とも、どうし」

「テストロッサ！退けえ！」

「デカイのが来んぞ！」

その言葉で理解した私たちはその場で急停止し、焦らずに防御魔法を展開した。

急がず焦らず、けれども正確に。ルナさんの教えの一つだ。

「バルディッシュユ！」

『Defensor Plus』

念のためにカートリッジを使って防御魔法を発動する。星となのはも防御魔法を発動させ、シグナムたちも私たちの近くに来るなり障壁を張った。

瞬間、マンションが内側から爆散して、

【お前たちは全員殺す】

百発にとどくほどの量の誘導型の砲撃が視界を覆った。

side out

芸術は『超』大爆発です〜!!!

海鳴の上空では、普通の人間はおるか一流の騎士すらも真つ青な超高速戦闘が繰り広げられていました。白い稲妻と閃光は激突と離脱を繰り返しながらも、決してマンションから離れようとしません。

「二対一とか、それでもあなたたちは騎士ですか〜？プライドとかないんですか〜？」

「うるせえ！犯罪者に言われたくねえんだよ！」

一合、二合、三合と負け犬と打ち合っていると、隙を突くようにザフィーラが殴りかかってきます。ええい！追いつけないくらいの高速戦闘なのに付いてこれるのは流石と言ったところですね。

「テメエ、いったい何考えてやがる！？もう勝ち目はねえ！諦める！」

「諦めたらそこで試合終了です〜！1%でも可能性があるならば、私は諦めません〜！」

「少年漫画の主人公かテメエは！」

まあ、なんだかんだ言って諦めていないのは事実ですが。本当はこのまま時間稼ぎをして、ライアとアリスが闇の書を完成させてくれるのが理想です。そう簡単にはいかないでしょうが。

あ、皆さんこんにちは。ルナベルツです。

現在、負け犬&ザフィーラと高速戦闘中です。速いです。

「っていつか、前から思っていましたけどトランザムは作品が違くないですか〜！もっと統一するべきです〜！！！」

「うるせえ！勝ちゃ良いんだよ！」

うわ、美的感覚が欠片もないです。そんなだから負け犬なんですよ、あなたは。

すると、マンションから巨大な魔力反応を感知しました。魔力のパターンから言って………アリス？

【お前たちは全員殺す】

無差別念話が届くと同時に、マンションの一室が内側から爆散、無数の誘導砲撃が発射されました。

………って、あの無差別魔法ですか！？

『マスター！』

「振り切ります〜！」

負け犬との打ち合いを中止し、アルテミスをあえて大振りで薙ぎ払って追い払います。ザフィーラはまだ私たちに追いついていません。

『Lightning Road』

そして一気に移動、とにかく移動です。

さっきの念話からして明らかに殺傷設定でしょうし、あそこにいれば消し炭にされます。

私が移動した直後、砲撃は全てが意志を持っているかのような動きで散開しました。そして、あの場で戦闘をしていた魔導師、いえ、結界内にいる全ての魔導師を自動で狙って攻撃を始めました。

もちろん、そのターゲットには私も含まれている訳で、

「迷惑極まりないんですが〜!？」

『一発ですが接近してきます』

「はいはい〜」

近づいてきた砲撃を一刀両断、切り伏せました。

これでとりあえずは安心です。近場にいたら集中砲火に遭うところでした。

【アリス、何のつもりですか？『ダインスレイヴ』を使うのは個人戦の時だけにしてくださいよ〜】

するとしばらくの沈黙の後、

【……………ライアが殺られた】

思わずその言葉に絶句します。

殺られた？いえ、あれは本物ではないので死んだわけではありません。つまりそれは、ジュエルシードを封印されたということです。

【……………何個持って行かれましたか？】

【二つ。蒐集している時だったから自分の身を守るので精一杯だった】

【……闇の書は？】

【まだ完成してない。あと三ページくらいなのよ】

……それは困りましたね。

闇の書の蒐集は一人につき一回、つまりはアリスの魔力は使えないということですよ。ここになって、ここまで来て面倒な……！
後で戦闘に参加してもらったためにダメージを減らそうと、蒐集をなるべくゆっくりやらせたのが裏目に出ましたか。

『Lightning Road』

一人弾幕砲撃が止むのを見計らい、一気にアリスの下へ移動しました。ここでアリスまで殺られれば確実に捕まえられるので、かなり急ぎます。

「アリス〜！」

「ようやく来た。はい、闇の書」

そして私に来るなり闇の書を投げ寄越してきました。
ちよ！それ仮にも一級搜索指定のもんですから丁重に扱ってください！

「おつとと！危ないです〜。」

まあ何にせよ、あとはこれに私の魔力を蒐集させれば

「

「やらせるかよー！」

すると、ベランダから負け犬が突進してきました。

左手は闇の書で塞がっているため、仕方なく右腕だけで受けますが、

「お、重いー！！！」

結果、受けきれずに吹き飛ばされ、壁に叩きつけられました。

そりゃそうですよね。大剣を持ち上げるのでさえギリギリでしたし。

でも、

「捕らえよ、凍てつく足枷！」

『Freezing Fetter』

ただではやられません！

負け犬の足元で魔方陣が展開され、そのまま彼を捕らえようとしません。

しかし、それに逸早く気づいた彼は一瞬でそこから離脱し、私たちから距離をとってしまいました。

隙あります！！

「蒐集ー！！！」

「えほっ、えほっ、無念です〜」

『マスター、これでもう魔力を蒐集させることができません』

「……………ですね〜。それにすぐにフェイトたちも来るでしょうし、このままでは……………」

「負ける」

そして私はゆっくり立ち上がります。

万事休すですね、これは。

こちらには、もう打てる手がありません。本当に駄目ですね、ゲームオーバーです。

私の魔力はもう蒐集に使ってしまいましたし。蒐集に使えるのは一人一回までですから、もう一度蒐集するというのは不可能です。

なので、

「はあ〜、今回は私の大敗です〜。完敗です〜。大敗北です〜」

非常に遺憾ですが、素直に負けを認めます。
このたかい
A'sは私の負けです。

「……………どういづつもりだよ。」

テメエ、今度は何を企んでやがる!?!」

「本気ですよ。今回は厨二やあなたの大活躍で負けました」

すると、フェイトたちがベランダから部屋に入ってきました。これで完全に時間切れです。

「……ルナさん、もうあなたの負けです。二人とも、武装を解除して投降してください」

「ルナ、もうどうにもなりませんよ？」

「だから剣を収めて！」

フェイトと高町姉妹がデバイスを突きつけてきました。チエツクが掛かりましたね。

なので私はアルテミスを待機状態に戻します。

「アリス」

「……わかった」

するとアリスも両手を上げ、降参の意思を示しました。すかさず私たちはバインドで後ろ手に拘束されます。

「……まず、闇の書を渡せ」

負け犬が警戒しつつも近づいてきたので、私は闇の書を床に放り出して数歩下がります。

負け犬は恐る恐るそれに近寄り、拾うと同時に後ろに下がりました。

「……間違いねえ、本物だ」

「……ルナさん、あなたを大規模騒乱罪、及びロストロギアの不法所持などの罪で逮捕します」

それでフェイトたちもようやく安心したのか、私とアリスを確保しようとして近づいてきました。

なので私は、

「そういえば、私ってビルの爆破解体をするのが夢だったんです」

マンション中にあらかじめ仕掛けてあったアイスダガーを爆破しました。

side 亮

轟音が鳴り響き、建物がいきなり40度は傾いた。

突然の異常に俺たちは反応できず、そのまま壁際まで転がり落ちてしまう。

「クソッ、やっぱり諦める気なんかねえじゃんかよ！」

派手に建物が揺れる中、ルナとアリスは咄嗟に飛行魔法を使ったら

しく、揺れをものともせずにはスイスイとベランダから出て行った。

すると突然の浮遊感。

ビルが沈むように崩壊していつているのだと全員が気づいた。

「全員、脱出するぞ！」

そのまま一気に窓を指して飛行した。走って移動なんてとてでもできない。

しかしその時、俺の視界にとんでもないものが映った。

それは、窓枠に突き刺さった数本の氷のダガーで、

「ッ！？皆、止まれ！！！」

それら全てが一斉に爆発した。

爆風で俺たちは吹き飛ばされ、再び部屋の中に戻ってしまう。

そうしている間にもマンションは倒壊を続けていて、このままでは闇の書ごとペシャンコだ。

「亮、手を！！！」

すると、フェイトが手を差し出してきた。

どうやら彼女と守護騎士の二人は既に体勢を立て直したらしく、なのはと星を抱えて脱出しようとしている。

俺は咄嗟に手を出し、フェイトの腕を掴んだ。

瞬間、いきなりの加速によってマンションから飛び出した。

背後ではマンションが倒壊し、瓦礫の山となっている。危機一髪だ。

「クソッ、ルナのやつ！蒐集できないとわかった途端にこれかよ！」

【ええ、そうですが何か？】

すると、ルナから突然の念話だ。

どうやら俺以外のやつにも聞かせているらしく、なのはたちも辺りを見回してルナたちを探している。

「負けを認めたんじゃねえのかよ！あれは出鱈目か！」

【出鱈目とは失敬な。ちゃんと負けを認めていますよ。

はあく、慣れない電気変換の魔法まで使って勝てないとは……。

正直、あなたたちの力を舐めていましたね。】

すると、俺たちの頭上、それも結界のギリギリと思えるくらいの距離から、莫大な魔力を感じた。波打つようなこの感覚は……まさか！？

『皆、生きてる！？生きてたら返事をして！』

すると、空間モニターが開きエイミーさんが通信をしてきた。

どうやらかなり心配してくれたらしく、顔色が悪い。

「もちろん生きてますよ。全員無事です。そんなことより、この魔力はいったい？」

『そうだった！皆、今すぐそこを離れて！ルナちゃんが残りのジュエルシードを全部使って何かしてる！』

「ジュエルシードで！？」

「テメエ、ルナ！何するつもりだ！？」

【内緒です。あ、そうです！クイズをしましょう！問題です。

私の手元には現在、アリスに使用中のものを含めて十個のジュエルシールドがあります。これらを共鳴、暴走寸前の状態にしたとして、そこに強い衝撃を与えたらどうなるでしょうか？】

その内容に、俺たちは顔を青くした。

そんなの誰でもわかる。昔にも起こった大災害。

「……次元震にともなった次元断層……」

【はいはい、正解です！景品として、良いこと教えてあげますね。】

たった今、ジュエルシールドが臨界点に到達しました！】

瞬間、頭上が太陽ができたかのように輝いた。

その膨大な量の魔力に、思わず冷や汗が流れる。

もう何をしても暴走は止められない。

今さらになって気づいた。あいつは、叶わないとわかった時点で決めていたんだ。

全員を道連れにして『自爆』する、と。

【さあさあ！！私の究極芸術を見せてあげます！冥土の土産に持っていきなさい！！】

そして魔力が一瞬だけ弱まり、

【芸術は、『超』、大爆発です！！！！】

破裂するかのように撒き散らされ、海鳴が吹き飛

ぶことはなかった。

side out

side other

新暦65年12月10日、第97管理外世界にて一級搜索指定遺失物『闇の書』の奪還、及び所持者『ルナベルツ』の逮捕が行われた。

綿密な準備の末、総勢263名の武装局員での攻撃を決行した。しかし、逮捕が間近に思われた瞬間、容疑者は所持していた残りの全ジュエルシードを使用し、次元断層を起こす規模での自爆を図る。

しかし、

結界内の結界魔導師たちが爆破の直前に強制転移の発動に成功。

転送妨害の魔法を寸前で解除し、容疑者をジュエルシードごと軌道上に転送。

間を置かずに、闇の書の暴走に備えて、予め準備されていたアルカノンシエルをアースラは発射。

爆破を起こすと同時に空間ごと反応消滅した。

多少の次元震は現地で確認されたものの、次元断層は確認されず、ジュエルシードは容疑者二人とともに消滅したと見られる。

闇の書は無事に奪還、幸い死傷者も出なかった。
これにより、一ヶ月もの間、世間を騒がせた『闇の書事件』、もし
くは首謀者の名前から『LB^{ル太ルツ}事件』は終了した。

side out

魔法剣士負け犬リヨウ、始まるぜ！！（前書き）

今回からは負け犬が主人公です。

新しい主人公の視点からs t s、及び『闇の欠片事件』をお楽しみ
ください。

魔法剣士負け犬リヨウ、始まるぜ！！

ルナが死んだ。

死因は自爆、もしくはアルカンシエルによる消滅。

どちらにしても方に一つも生き残っていないだろう。

これによって闇の書事件は表向き終了。

残るは壊れた闇の書、いや、夜天の書をどうするかだが。

そこは原作と同じ方法でなんとかあった。

はやてたちに事前に作戦を説明し、無人世界で完成させた。

原作通り暴走を始めた管制プログラムは俺や星を加えた原作メンバ

ーに守護騎士も加わったフルメンバーで取り押さえ、その後、はや

ては無事に意識を取り戻し、暴走プログラムは俺の零落白夜でコア

ごと完全に破壊、防衛プログラムは消滅した。

これのおかげかどうかはわからないが、リインフォースはすぐに消

滅させる必要がなくなり、その間に彼女の修復の方法を管理局が探

すという方針になった。

それと、ルナが連れていた二人の少女、ルルとナナは管理局の施設

を脱走したらしい。ルナの死亡を聞いてからは少し錯乱気味だった

らしく、その影響ではないかということだ。現在捜索中らしいが：

…。

何はともあれ、ルナが死んだ途端に状況は全て好転し、俺は転生し

て初のハッピーエンドを迎えた。誰も死なず、誰も悲しまず（フェ

イトとアルフは少なからずショックを受けていたが）、誰も不幸に

ならない。そんな風に思ったんだ。

しかし、俺は気づくべきだったんだ。

リインフォースが生きているという状況。

これではまるで、ゲーム版と同じということに。

side???

「つつかまつえた」

「グツ、貴様、離せえ!!」

盾の守護獣の『偽者』が何か言っているけど、そんな言葉聞く耳持たないもんね！

「いただきます!」

「グ、アアアアアアア!」

魔力を吸い取り、私の糧にする。

そのためにわざわざ『湖の騎士』とビリビリ金髪まで戦ったんだし、今さら容赦する気なんてさらさらない。もっとも、初めからそんなことするつもりもないけどね

ここは『闇の書の闇』が破壊された無人世界。

この世界ではひっそりと、それでも確実に異常が起こった。

ふふふ 一回目は負けちゃったけど、今度は負けないもんね！

今度こそ『砕け得ぬ闇』を完成させて、私たちは完全復活するのだ
！！！！

【『力』のマテリアル、そちらはどれほど狩りましたか？】

すると、私の姉弟とも言える子から念話が届いた。

無口なあの子が自分から話しかけてくるなんて、これは高感度アツプの予感！！

【ノープロブレムだよマリス君！お姉さんの手にかかれば、守りと筋肉しか能がないワンコロなんて敵じゃないのさ！！】

【そんなことは聞いていません。私は、わたくしあなたがどれだけ欠片を集めたのかを聞いているのです。こんな簡単な会話すらできないとは、あなたの頭は飾りですか？】

【飾りじゃないもん！！私は天才だよ！この頭には人類の叡智が詰まって
】

【黙れ馬鹿。さっさと私の質問に答えなさい。姫も先程からイライラしております】

【も〜！マリス君は姫とお姉さんとどっちが大事なの！？】

【あなたが馬鹿である限りは姫です】

【あ〜！また馬鹿って言った！私は天才で
】

【あゝもう！うるっさいわね！さっさと答えなさいよ！さもないとそのお天気な頭を吹っ飛ばすわよカス！！】

すると、大音量の念話によってマリス君との念話が遮られた。うるさいのはそっちじゃないかゝ！

【もゝ、姫は短気だなゝ。そんなんだから阿呆って思われるんだよ！】

【はあ？阿呆はアンター一人で充分よ。そんな当然のことより、どれだけ獲物を狩ったのか答えなさい屑】

【うわゝん！マリス君、姫が私を屑って言ったゝ！！】

【早くしなさい屑。ドタマぶち抜きますよ？】

すると頭の横をスレスレで魔力弾が通過し、髪の毛が数本持つていかれる。

流石に冷や汗が流れた。っていうか、今の狙撃ってマジじゃなかった？

【はい！！『湖の騎士』と『金髪の電気使い』、それと『盾の守護獣』を倒しました！】

【そうですか。私は『双子の魔導師』と『鉄槌の騎士』を】

【キャハハ！なら私が一番ねゴミども！

『黒い男の魔導師』と『闇の書の主』、『烈火の将』と、遠目だったからよく見えなかったけど『銀髪の男』を倒したわ！】

むむむ！天才で最強の私が追い抜かれた！？
くっそ〜！悔しい〜！

【ふむ、そうになると我々のオリジナルともう一人が足りませんね】

【あ、闇の書の闇を破壊した剣士！そういうえば見なかったね】

【え〜？そいつらは私も見なかったけど〜？】

マリス、アンタ探しなさいよ。そういうの得意でしょ？】

【……少々お待ちを】

そして数秒、マリス君は押し黙った。

たぶん『目』を使って数キロ範囲で探しているんだろうね。

流星はマリス君、頼りになる〜！

【……ふむ、見当たりませんね。

それどころか、例の剣士を除いて魔力の残滓すら見当たりません】

残滓も？とゆーことは……。

【初めからオリジナルはいなかったってことかな？】

【馬鹿のわりには良くできましたね、その通りです】

やった〜！マリス君に褒められた〜！

【そんなお天気は放っておいて、それじゃあ剣士はどこ行ったわけ？】

【それはわかりかねますが、どこかに転移したと思われる。この近く、半径十数キロ圏内には感知できませんでした】

【はいはい！それって、剣士たちの故郷じゃないかな！お姉さんの勘がそう言っているよ！】

それに、根拠もある。

ここに現れた『欠片』たちは記憶があやふやな様子だった。つまり、自分の記憶に従って行動するならば、自分の知っている場所に戻るうとする可能性は充分にある。

【どう、この推理！！】

【……あなたはただの馬鹿だと思っていました】

【キャハハ！喜びなさい！

あなたのことをゴミ屑からゴミに格上げしてあげるわ！】

【うー、嬉しくない〜】

そもそも、それってどう違うの？
屑が抜けたただけだし。

【それじゃあ行こっか！】

【ふむ、善は急げと言いますしね】

【キャハハ！ついでに本物どもも食ってやるわ！】

よーし！それじゃあレッツゴー！！

そして私たちはその無人世界から転移した。

目的地は……………えーっと、えーっと、……………あ！

海鳴だ！！

s i d e o u t

12月17日、事件が終了し、一昨日にようやく家に帰ってこれた。はやてと守護騎士、それとリンフォースはまだ帰宅できないらしいが、数日後には帰宅が許されるらしい。星となのはも帰宅しているはずだし、フェイトはリンディさんたちが預かっているはずだ。ジークは……………取材でも受けているんじゃないか？マスコミが今回の事件を騒いでいたらしいし。

ともかく、これで俺の心配事は概ね終了した。後は10年後のstsまでの細かな事件だが、それは俺とジークがいる。

原作知識があれば危険はそうないだろう。なんせ、それを邪魔するルナはもついないのだから。

「結局、決着はつけられねえままだったけどな」

それだけは残念だ。あいつは俺がこの手で倒すと決めていただけに、自爆という手段で散ったのだけが今回の事件での心残りだ。まあ、今さら言っても仕方ないけどな。

そんなことより、来週にはクリスマスだ。

原作や前世では大忙しだったが、今回はかりは楽しむとする。

なのはたちはもちろん、はやてたちやアリサたちも誘って盛大に。

『全員、聞こえるか？こちらクロノ。』

事件が終わったばかりで悪いが、緊急事態だ』

その時、クロノからの通信が届いた。

眼前にモニターが浮かび上がり、突然のことだったからかなり驚いた。

『クロノ君、どうしたの？』

『何か事件でも？』

なのはと星の声もモニターから聞こえる。全員と繋がっているのか。

『街中に、結界が発生しているんだ』

『アースラスタッフに調査出動をかけたんだけど……』。

なのはちゃんたちも注意して』

結界？なんだそれは……！？こんなの、原作にはねえぞ！？

『はい！でも、近くなら私も行って確認します！』

『私も行きましょう』

すると、なのはと星が名乗りを上げた。

二人がいれば並大抵のことは大丈夫だろうが……。

「クロノ、俺も行く。」

AAAランクの魔導師が三人もいれば何があっても大丈夫だろう」

『すまない、頼めるか』

『「了解！」』

行くぞ、カリバーン！

そして俺は、冬の寒空へと飛び立った。

そこに何が待ち受けているのかも知らずに。

俺たちの物語はまだまだつ「続けさせるかよおおお!!」

なんだ、何なんだよ、これは!?

クロノから連絡を受け、すぐに星たちと合流した俺たちは結界に入した。

しかし、結界に突入した俺たちを待ち受けていたのは、俺自身だった。

「……………なんだ、お前は？」

すると、俺と瓜二つの外見をしたやつが俺に話しかけてきた。その声も寸分違わず俺と同じもので、星たちも驚いている。しかも、良く見れば持っているデバイスまで同じだ。

「おい、テメエは何なのかって聞いてんだよ。

俺とそっくりな見た目しやがって、何の真似だ？」

【亮、これはいったい……………？】

【ふえ〜!?!? 亮くんが二人いるよ〜!?!?】

二人が困惑するのも無理ない。現に俺だって混乱している。

俺のクローン? あり得ない。俺が表舞台に立ったのは半年前だぞ? いくらなんでも早すぎる。

……………待てよ、こんな状況に確か覚えが……………。

そうか、『星』！！

思い出した！これはゲーム版の方の話だ！

確か、闇の書の残滓が作り出した偽者だったか？

『三人とも、聞こえる？』

すると、ユーノから通信がきた。

それは目の前の『俺の偽者』についてのこと、『闇の欠片』のことだった。

俺の予想通り、これはゲーム版のこのようだ。

しかし、そうなると疑問が残る。闇の書のマテリアル『シュテル・ザ・デストラクター星光の殲滅者』はどうなるのだろうか？本人がここにいるんだし……。駄目だ、全く想像できない。

「ゴチャゴチャ話してんじゃねえぞ！！」

すると、俺の偽者が突っ込んできた。俺を模倣しているだけあって、攻撃の仕方も速さも零落白夜も全て同じだ。

だからこそ、その動きは簡単に見切れる。

振り下ろされた剣を受け流し、カウンターで蹴りを叩き込む。思わぬ反撃を受けた偽者は吹っ飛び、大きく俺たちから引き離される。そのまま警戒するようにこっちを睨みつけている。

今の手応えで確信した。コイツは俺よりも弱い。所詮は偽者だ。本物には及ばない。

【星、なのは、コイツは俺の見た目をしちゃいるが、俺よりも弱え。二人が手を出すまでもねえぜ】

【……わかりました】

【亮くん、気をつけてね】

二人の念話に片手を上げることに応え、俺は敵に集中する。

俺もコイツも全く同じ構え、同じ零落白夜だが、どこか違和感がある。しかし、それはどこか懐かしさを感じるものだ。

……ああ、そうか。こいつは、初めて転生した時の、『前世』の俺だ。

自然とそうわかった。まだ一合しか剣を合わせていないし、会話だつてしていない。それでもわかった。

ならば今こそ俺は昔の自分を倒し、この世界を生きるための、ルナへの復讐に燃えていた自分への決別をしよう。この世界で、今度こそ俺は幸せになる。皆を守り、そのために剣を振るおう。

さあ、憎悪で剣を握っていた俺はここで終わりだ。今日、ここでコイツを倒し、俺は自由になる！

「行くぞおおおおおおおお！！！！」

そして俺は零落白夜を全開にし、敵に斬りかかった。
そうだ！俺の幸せを求める戦いは、今ここから始まる！！

「そうは、い・き・ま・せええええええん!!!」

瞬間、『過去の俺』は上空からもの凄い速度で飛来した謎の人物によつて、頭から股へと両断された。

真つ二つになった『俺』はそのまま横薙ぎに斬り飛ばされ、十字に斬られた。もともと闇の書の残滓だったからか、そのまま魔力になつて夜の闇に溶けていく。

「アーツハツハツハ！見た見た〜！？今の『偽者』のポカ〜ンとした顔ッ！ウケる〜！！どこまで逃げても無駄なのにさ〜！」

そして『過去の俺』を十字斬りにした『そいつ』は、腹を抱えて爆笑している。

『その顔』をしたそいつは『過去の俺』を易々と斬り殺し、あまつさえ、逃げてても無駄と言いつつ放った。

それが俺には、今までの頑張りを全否定されたように思えて、

「う、あああああああああああああああああ!!!」

気がつくのと斬りかかっていた。非殺傷設定なんてものは当然なく、全力で相手を殺す一撃だ。零落白夜がカリバーンを白銀に染め上げ、まさに一撃必殺の威力をもつて目の前の亡霊を、『ルナ』を仕留めんと襲い掛かる。

だが、

「大声を上げて攻撃すれば倒せるとでも思っていたらっしゃるのですか？」

それは頭上から放たれた藍色の砲撃によって無理やりに中断された。突然の砲撃に俺はなす術もなく直撃し、地面に向かって吹っ飛ぶ。

「亮!!」

しかし地面に激突する直前、星がシールドをクッション代わりにして守ってくれた。

その間になのはは砲撃のチャージを終え、砲撃を放った敵にディバインバスターをお見舞いする。

「キャハハハ!こんな豆鉄砲が効くかってのよゾウリムシ風情が!!」

しかし、それは濃い紫色のシールドに阻まれた。信じられないことに正面からカートリッジを使ったなのはの砲撃を防ぎきった。尋常じゃない防御力だ。実際、防がれた本人のなのはは啞然としている。しかし、俺にはそんなことは目に映らなかつた。信じられない光景が広がっていたからだ。前世の地獄のような戦いの記憶が蘇り、思わず手が震える。

そこには三人がいた。

死んだはずの『ルナ』がいた。

白濁したような髪。漆黒のロングコートに身を包み、真紅の瞳で晒
っている。

この世界にはいないはずの『ライア』がいた。
藍色の逆立った髪に、同じく漆黒のロングコートを着こなし、碧眼
が俺たちを見下ろしている。

ジュエルシードで吹っ飛んだ『アリス』がいた。
紅い髪に赤黒いドレスが映えていて、ラベンダーの瞳は楽しげに歪
んでいる。

間違いない。見間違えるはずがない。
そいつらは、紛れもない俺の仇敵たちだった。

「……………『ベルツ』!!」

長い夜の始まりだった。

俺たちの物語はまだまだつ「続けさせるかよおおお！」「（後書き）

最近になってstsの方針を再決定しました。

空白期からstsにかけては『転生者祭り』で行こうと思います！
こんな能力出してほしいな〜というかたは感想へどうぞ！

あ、そういえばstsは『ベルツ一家』も復活す……ゲエホッ！ゴ
ホッ！失礼、今のオフレコで。

それは都市伝説だっつうのー！

「どついうことだよ……！ テメエらは死んだはずだ！」

目の前の信じられない光景に、俺は思わず叫ぶ。星となのはも信じられないものを見たように呆然としている。当然だ。こんなものを見て「はいそうですか」と納得できる奴なんて、魔法の存在を知る者の中にはいない。

「死んだく？ なに言ってるのか知らないけど、お姉さんはこの通りピンピンしているよー！」

「馬鹿ですか、あなたは。彼が言っているのは、私たちのオリジナルのことですよ」

「キャハハ、そんなこともわかんないわけ？ やっぱリアンタはゴミ屑ねー！」

「ゴミ屑じゃないしー！ー！」

……おかしい。俺の知る『ベルツ』の三人はこんなだったか？ それに、姿も言動も少し違うような……？

「もう、それじゃあ改めて自己紹介だね！」

遠き者は音に聞け！ 近き者は目にも見よ！ お姉さんこそが最強で天才の完璧超人！ 人類の叡智が詰め込まれた最高の頭脳！ 誰もが羨む美貌！ そして一騎当千の剣技！ そう！ 『力』の構成素体！ 『氷結の虐殺者』だよー！ 長いからフリーズって呼んでねー」

「長えよ」

「アイタツ!？」

高らかに宣言すると同時に他の二人に頭を叩かれた。そのせいで口上が台無しになっている。

それにしても、『カ』のマテリアルだと!? 確か、ゲーム版だとフ
イトがオリジナルの『雷刃の襲撃者』レイ・ザ・スラッシャーだったはずだ。
クソツ、こんなところで原作乖離が起こったのかよ!?

「コホン、馬鹿がお騒がせしてしまい申し訳ありません。私は闇の
書の『理』マテリアルの構成素体『悪意の暗殺者』と申します。以後、お見知
りおきを」

「キャハハ! アンタらみたいな雑種に名乗る名前なんてないわ! …
…と言いたいところだけど、特別に教えてあげるわ。感謝して平伏
しなさい油虫! 私は『王』マテリアルの構成素体『常闇の姫』ダークネス・ハイネスよ! 存分に崇め
なさい! …!」

「姫だつて自己紹介長いじゃん! …!」

「うつさいわね! 姫たる私の名乗りが長いのは当然でしょ!」

「ぶ〜ぶ〜! 横暴だ〜!」

……騒がしいのは変わらないらしい。

だが、ゲーム版だと闇の書の構成素体マテリアルはなのはたちと同等の実力だ
ったはずだ。つまり、こいつらはオリジナルの、『ベルツ』の三人

と同レベルの使い手ということになる。

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ!!
どうすれば良い!? 今ここには俺と星となのはの三人しかいない!
一人一殺なんて夢のまた夢でしかないこの戦力差じゃあ一人を相手にするのが精一杯だぞ!?

どうする、どうすれば……!?

その時だった。

『亮! 待たせたね! 応援だ!』

空中にモニターが開き、ジークが通信をしてきた。それと同時に俺たちの周囲にミッド式の魔方陣が浮き上がる。その数は十。そして、最強の援軍たちが転送されてきた。

「はやくてにリインフォース!? ヴオルケンリッターたちまで!？」

「フェイトちゃんにアルフさん! ユーノ君にクロノ君も!」

「おい、ジーク! お前、どうやってはやくてたちの戦闘の許可を取ったんだよ!? ……まさか、無理やり出てきたんじゃない?」

『ハツハツハ、そんなはずないだろう? 許可ならちゃんと取ってるよ。闇の書事件に関係しているというのもあるけど、あの『カ』^{マテリアル}の構成素体の姿が映像に映った瞬間に満場一致でゴーサインが出たのさー!』

なるほど。どうやらあの姿を見て寒気がしたのは俺だけじゃなかった

たらしい。管理局が即席で用意できる最強の戦力を投入してきたのは嬉しい誤算だ。

「亮くんもなのはちゃんたちも無事やな？一先ずは間に合って一安心や」

「はやて、安心するのはまだ早いよ。あの三人をどうにかしなきゃ」

「フエイトの言う通りだ。とりあえず、作戦を話すよ」

どうやらユーノは転送前から作戦を練ってきたらしい。頼もしい限りだ。やはり頭脳戦においてアイツの右に出る奴はいない。

『僕はそこで戦えるほど強くない。一人で安全な所から見ていることしかできないけど、どうか頑張ってくれ』

「ジーク、お前……」

不覚にも感動してしまった。

今まではただの厨二病の馬鹿なんじゃないかと思っていたが、こいつはれっきとした俺たちの仲間だ！

『（ククク、君が死ねば星も僕の物だ。せいぜい前に出張って死ねば良いさー！）』

「ん？何か言ったか？」

『いや、別に？それよりも、今は敵に集中するんだ！』

「お、おう！そうだな！行くぞ、お前ら！」

「落ち着け、亮。焦らずに慎重に行くんだ。そんなんじゃ、いざと言う時にとんでもないミスを」

「作戦長えよ」

瞬間、クロノが『氷結の虐殺者』に斬り伏せられた。

「よくさ、主人公の変身とか作戦会議とかをわざわざ待つ悪役がいるでしょ？」

そんなの都市伝説だったの！！

隙あらば殺すのが本当の悪役だとお姉さんは思ってた！最近の悪役は変身ヒーローのベルト奪ったりするらしいし！」

デバイスをぶんぶん振り回しながら奴が力説する。そんなことを無視してクロノの救出に行きたいが、他の二人が油断なく待機しているため下手に動けない。最悪、撃墜されたクロノごと吹っ飛ばされる。

「ようは何が言いたいのかと言うと」

そして奴は俺に剣の切っ先を向けて言い放った。

「さっさと纏めてかかってこいってことだよ！！」

『Sword Form?』セカンド

電子音が響くと同時に奴の剣が二振りに増え、双剣となった。そのまま俺に突っ込んでくる。

「うりやりや〜!!汚物は消毒だぜヒヤツハ〜!!」

まるで世紀末のチンピラのようなことを言いつつフリーズ（長いから採用）が突撃してくるが、

「敵陣のど真ん中に一人で来るとか馬鹿だろ!?!」

当然ながらヴォルケンリッターや俺に囲まれて形勢は一気に逆転した。左右からはシグナムとヴィータが、背後からはザフィーラが、正面からは俺が襲い掛かる。

しかし、

「彼の言つとおりです。その空っぽの脳みそで少しは考えなさい」

「じゃ!?!」

気がつくくとフリーズはその場から消えていて、『悪意の暗殺者』に首根っこを掴まれた状態で元の場所に戻っていた。

「も〜、せっかく良いトコだったのに〜。マリス君はお姉さんを苛めるのがそんなに好きなの?」

よし、幸か不幸かアイツらは油断している。そこに隙が生まれれば、そこに勝機がある！

「よし！フリーズ、目標を駆逐する」

「さっさと終わらせます」

「キャハハ！格の違いってやつを魂の髄まで刻んであげるわー!!」

そして、戦いの火蓋は切って落とされた。

それは都市伝説だっつうの！！（後書き）

ジークは平和になったせいで本気でハーレムの構築に乗り出したようです。

そう遠くない話で転生者を大量投入します。希望がある方はお早めにどうぞ。

ちなみに決定しているものの例を一つ上げると、某「圧縮圧縮空気を圧縮！！」さんです。ちょっと能力を劣化させて出すつもりです。

蹴散らされた。

強制転送で分断しようという作戦そのものが実行できず、俺たちはあの三人に嬲られ続けた。距離を離せば砲撃と広域殲滅魔法の餌食となり、逆に近づけばフリーズの剣技と爆発に圧倒されっぱなしだ。かと言って突撃しようものならば三人の袋叩きに遭い、即効で撃墜される。はやくもリインフォースとユニゾンして応戦したが、それでようやく『常闇の姫』の火力と同等というレベル。

こんな最強の三人がそれぞれの本気を出しつつもちゃんと連携して攻撃してくるんだ。勝てる訳がない。

「あ、あれ？なんか楽勝だったんだけど……？これって何かの罠だよね？死んだフリ〜！！みたいなノリでお姉さんを騙そうだったって………おい」

「ふむ、確かに些か不完全燃焼ですね」

「はっ、所詮は全員が全員ともミジンコだったってことよ。あゝあ、時間を無駄にしちゃったわ。この大罪、どうやって償うつもりなわけ？ねえ！！」

「グツ！？」

そして『常闇の姫』は俺の頭を踏みつけた。あまりの強さにコンクリートが陥没する。バリアジャケットを装備していなかったら頭が割れていただろう。

「こいつら、どうしてやろうかしら？魔力を死ぬまで吸い取って糧にするだけじゃ、この怒りは納まらないわ」

「確かに、期待はずれも良いトコだったしね」

「ふむ、そうですね。死なない程度に蜂の巣にするのはいかがでしょうか？魔力の確保もできますし」

「キャハハ、一考に値するわね」

「ええ、意識がなくなるギリギリまで魔力を奪ってから爆破しようよ。きつと楽しいよ？」

……マズイ、コイツら本気だ。

こういうところばかりオリジナル「ベルツ」に似なくても良いじゃねえかよ、チクシヨウ！！

すると、死屍累々な中で一人、立ち上がる者がいた。そればかりか、魔力弾を放って三人を俺から引き離す。

「亮から、その足を退けなさい！」

星だ。

彼女は引きずるように身体を動かし、俺の前に立ち塞がった。その姿は見るからに痛々しく、既に限界であるということがわかる。

「退け、ですって？高貴たる私に向かって命令？何様のつもりよアンタ？ミジンコその一風情が！」

「ガッ!？」

瞬間、星は大量の魔力弾に吹き飛ばされる。殺さないためか非殺傷設定だが、それでも今の俺たちには大ダメージだ。

「決めたわ、あのミジンコ女を最初に殺すから!魔力なんて他のミジンコから奪えば良いもの。跡形もなく消滅させてやるわ!！」

そしてアイツは星をバインドで空中に吊り上げると、目の前で砲撃のチャージを始めた。さっきの攻撃で既に限界の星はもうまともに動けないらしく、全てを諦めた表情で俺を見つめている。

【亮、すみません。先に逝きます。三人が私に気を取られている隙に一人だけでも脱出を……】

「よせ、やめろ!！」

そう叫ぶも、『常闇の姫』は楽しそうに笑っばかり。他の二人も俺の悲鳴を楽しむかのように黙っている。

「くそ!テメエ!星に手を出したら絶対に許さねえぞ!絶対にぶっ殺してやる!！」

「クククク、キャハハハハハハハハハハ!!」

面白いじゃない!是非ともそうしてちょうだい!ほらほら、早く何とかしないとこのミジンコが死ぬわよ?」

しかしアイツは全く俺に取り合わず、翳した右手に魔力をどんどんと集めていく。凄まじい魔力を圧縮したその塊は、人間一人をこの

『常闇の姫』の右腕が両断された。

「え？」

斬られた本人も呆然としており、何が起こったのかわかっていない様子だ。
そして、

「ぐ、ぎゃあああああああああああああああああああ！！！」

彼女の悲鳴が響き渡った。

しかし、極限まで圧縮された魔力は制御を失い、一気に膨張する。

「む、いけません！」

「やっぱ!？」

刹那、制御を失った魔力は大爆発を起こし、近くにいた星はもちろんのこと、俺たちまで巻き込むものとなる。しかもあの魔法は殺傷設定だ。巻き込まれれば当然死ぬ。

その時、

「うおおおおおおおおおおお!!」

一人の少年が俺たちの横を走りぬけ、爆発に飛び込んだ。その少年は爆発を恐れることなく、

右手で殴りつけた。

瞬間、爆発は一瞬で消し飛び、そこには爆発の余波で抉られた地面があるばかりで、魔力は跡形もなく消えていた。

「ぐ、うとう、なによ、何が起こったってのよ!？」

ギリギリで自信も爆発から助かった『常闇の姫』は、肘から先を失った右腕を抱え吼える。瞬間、彼女はその場から消え、『悪意の暗殺者』の元に移動していた。

「いったい、お前らは……」

「マズイぞ！俺たちは何とかなくても、なのはたちが！」

「問題ないさ。俺が斬る」

そして、白髪の少年の姿が掻き消えた。そして次の瞬間、

気がつくとき『常闇の姫』の胸を長ドスのデバイスが貫いていた。

「……………あ？」

「もう、眠れ」

そして少年はそのまま一気にデバイスで彼女を両断した。そのまま空気に霧散するように彼女は消滅していく。

「ッ！？」

「え、姫！？」

すると、他の二人は今になって気がついたように反応する。まさか、これは！？

「そう、これが俺の特典の一つ『ぬらりひよんの孫』の『明鏡止水』
な」

そして、戦況は一変し始めたのだった。

さあ、みんな集まって！転生者祭りが始まるよう！（後書き）

ええ、祭りはまだ始まったばかりです。これからも能力の受付はしますので、ドシドシ感想に書き込んでください！

帰ってきた外道たち

side ナナ

い、胃が痛い。極度の緊張状態になると胃がキリキリするって聞いたことがあるけど、あんなのは都市伝説だと思っていました。そこまで緊張することなんて人生ではそうないだろうって。

私はそう思っていた自分を恨めしく思う。

あ、皆さん初めまして。ナナ＝ベルツと申します。

普段は無口、というか話すのが苦手なキャラですが、考えることは普通なのです。

管理局の施設をルルと一緒に脱走した私が今、いったいどこで何をしているのかというと、

「月牙天衝!!!」

「イノケンティウス!!!」

闇の書のまてりある?の二人と戦っている転生者さんたちを近くのビルの屋上から見えています。さつきから続々と新しい転生者が集まってきます。

転生者についてあの人から初めて聞いた時は驚いたけど、おかげで

だいたいの事情は理解しました。どうして最近になるまで話してくれなかったのかと聞くと、最近になってルールが変更になったとか何とか。よくわかりませんが。

「……ナナ、顔色が悪いよ？大丈夫？」

「……うん、……たぶ……ん」

ルルが心配してくるけど、そういうルルも顔色が悪いです。

でも、当然だと思う。この状況で平然としていたら、その人は異常なのか、よっぼどの超人です。

後ろの人たちみたいに……。

「……あゝ、神に貰った強さでブイブイやりやがってよ。腹立つわあゝ。あいつら全員ここで殺そうぜ」

「同感。オリ主TUEEEEは時代遅れ。死ねば良い」

「仕方ないでしょ。きっと転生したばかりで気分がハイになってるのよ。許してあげなさいって。確かに腹は立つけど」

「でも、その方が殺しがいもあるよ！今まで最強だと信じていた自分の能力が全然通じないとわかった時の表情！見てみたいなあゝ！」

「あ、それわかります！きっとこの世の終わりみたいな顔するんでしょうね！」

「キュック〜！」

「あ、あの、皆さん、もう少し静かにした方が……」

うん、普通じゃない！

あの天変地異みたいな戦場を見てそんな感想が出てくるなんて絶対におかしい！私たちと同じ年くらいにしか見えないのに！まるで歴戦の猛者みたい！私やルルなんて完全に恐れおののいてるのに……。え？私たちがおかしいの？

そう思った時、転生者さんたちを見るのに飽きたのか、後ろの人たちの視線が私たちに移ったのを感じました。ルルもわかったのか、肩をビクツと震わせます。

は、話しかけられたらどうしよう!？

「おい」

「ひい!！」

男の人が話しかけてきたので、思わず悲鳴を上げてしまいます。ま、マズイです！声をかけられただけなのに悲鳴を上げるなんて失礼なことをしてしまうとは！

思わず振り返って謝ろうとしますが、

「おいおい、声をかけただけで驚くなよお」

いつの間にか詰め寄られていました。目線がバツチリ合ってます。

「……………」

意識が暗転しました。

side out

sidellル

ナナと男の子の目が合った瞬間、ナナが気絶した。崩れ落ちるナナをギリギリで受け止める。

「ナナ、ナナ！大丈夫！？」

「キユ……………」

め、目を回してる！？いったい何事！？

「お、おい、大丈夫かそいつ？」

「ち、近寄らないでよ！」

アンタのせいでしょ！

ナナを抱えて思わず叫ぶけど、この恐い人にそんなのが通じるとは思えない。きつと気を抜いたら殺されるんだ！そうに違いない！

「え？お、おい……」

「ひっ、それ以上近づいたら焼き殺すよ！」

ナナを抱えるのを左腕だけにして、右手で炎熱変換した魔力弾を構える。

くっ、デバイスがあればもう少し違ったのに！

「……………なあ、俺ってそんなに目つき悪いか？」

「最悪。双子の私より悪い」

「だ、大丈夫ですよ！ライアさんと会う人は皆が通る道です！人は見かけによらないって言うじゃないですか！私だって身をもって経験したことですし！」

「……………キャラ、止めを刺してどうするの」

「え？……………あゝ！ごめんなさいごめんなさい！」

「……………整形しようかな、特に目元とかさあ」

「そんなことしなくてもライアさんは格好良いですよ！私が保証します！」

「キユク〜！」

「そうだね！いるかもしれないね！そういう人も！」

「う、うん…？でしょ？（なんかあっさり納得したわね）」

うん、そうだよ！人は見かけによらないもんね！

具体的な例を言うのはプライバシーの保護のために控えさせてもらうけどね！

その時、

「あ？終わったみてえだな」

爆音や衝撃音などが消え、街が突然静かになった。どうやら戦闘が終わったみたいだね。結果はもちろん転生者たちの勝ち。あれから何人も増援が来てたし、当然かな？

ということとは、

「お待たせしました」

『あの人』が帰ってきた！

「『お兄ちゃん』、お帰り！！」

月明かりに煌く白銀の髪、空のような蒼い瞳、見間違えるはずがな

い！

『ルナ』お兄ちゃんだ！

世間では死んだことになっているけどね！

「はいはいたいま〜、って、ナナ！？なんで気絶してるんですか〜！？」

「うん、あの男の子と目が合ったらキュ〜ってなって

「俺のせいか！？」

「ああ〜、そういうことですか〜。駄目でしょう〜ライア。あなたの目つきはどう見てもマフィアかヤクザなんですから〜」

「そつだよライア！これはもう整形しかないって！だって怖いもん
「！」

「……………そつだな。やっぱり整形を……………」

「早まつちゃダメ〜！！」

「遊ぶな！ほら、ルナの用が終わったならもう帰るわよ」

「賛成。眠い」

「あ、あの、それはいつものことでは？」

なんか一気に賑やかになった。そっか、これが、お兄ちゃんが育つた場所か。

「そうですね。帰りましょう」

そして私たちは新たな拠点へと転送魔法で移動した。

side out

s i d e ルナ

ここはミッドチルダの首都『クラナガン』にある高級マンション。多くの人が寝静まった深夜の時間帯、私たちはそこにいました。

「はいはい、ルルとナナは寝ましたね？それでは、作戦会議と現状説明会を開始します」

現在、このマンションのリビングには『前世のベルツ』の全員が集まっています。それぞれが思い思いの場所で聞いていますが。

「それじゃあ、そちらからお願いできますか？」

そう、実はなぜライアたちがこの世界にいるのか、私は全く知りません。さっき会ったばかりなのです。

「あ、それはだな、ルナ、お前が原因だ」

「はい？」

私ですか？何か反則でもしましたか？

「お前の特典だ。それはチートすぎだって他の神から因縁付けられたんだよ」

「因縁つて、今さらですか？転生する前に言えば良かったじゃないですか。基準レベルまで劣化もさせてますし」

「それが、そうもいかないのよ。あなたは能力を応用してライアとアリスを擬似的にはいえこつちに呼び出した。それを責められたの」

「……はあ？」

そんなの向こうの勝手じゃないですか。可能性で言えばそれは充分あり得たはずですよ。

「それでね！向こうが新しく転生者を増やさせるって要求してきたんだ！だからそれを利用して、教授も新しくルールを取り付けたの！」

「それがあなたたちが来た理由ですか？」

「そうです。新ルールはいくつかあります。

一つ、転生者は教授以外、何人にでも増やせる」

いきなり不利なルールキタアアアアア！？

「え、えっと、でも、一つの世界に同時に転生できるのは十人まで

らしいので」

「あ、なんだ、そうですか」

び、びつくりした」。

あれ？でも、それでも充分なくらいに不利ですよね？

「二つ、転生者について現地の人物に話すのを許可する。
これはルナさんのために教授が新設してくれたルールです」

ああ、ルルとナナを戦力に加えるってことですね。元よりそのつもりです。

そのために施設から連れ出したんですし。

「三つ、私たちを全員こちらに転生させる。年齢は全員が主人公たちと年代とする。

この全員というのは、教授を除いたベルツのメンバーです」

なるほど、だからキャロとアリシアたちとの年齢差がなくなっているってね。

……それと、このルールを見て激怒する相手の神の様子が目に浮かびます。きっと教授に口八丁で言い負かされたんでしょうね。

「四つ、自陣の転生者が全滅、及び敵対の意思がなくなった場合も終了とする。

これで関係ないところに転生して永遠に勝負が終わらないということを防ぎます」

なるほど、お互いに敵対する限りは戦い続けるということですね。

まあ、stsには全員が強制参加なので、その時に風潰しにしてい

けば良いのですが。

「五つ、転生者の容姿は自由に設定できるものとする。これは教授の案です。これで多少は私たちを有利にするハンデとして寄越したものでらしいですよ。表向きは転生者の第二の人生に対するサービスと銘打ってありますけど」

……へえ。教授も味なことをしますね。

「こんなところですね。後はほとんど変わりません」

「了解しました」

うわあ、不利だ。劣勢もここまで来れば清々しいですね。

んん？

「……ちょっと待ってください。あなたたちは特典は？」

「ねえよ」「ない」「ないわ」「ないよ！」「ありませんね」「すみません」

「え、なんでです！？」

「悪いが、デバイスの持ち込みが精一杯だった。能力はそのままだ」

「『転生を許すのに能力までやれるかあああああ！』って向こうの神様が怒り狂ったんだ！」

「そんなこんなで能力はなしよ」

「不平等」

「も、申し訳ありません」

「……いえ、わかりました」

「こ、これで転生者と戦うんですか？」

「そんなに転生者を倒せるほど甘くは……、」

「あれ？別に問題ないかも？」

「前はそれで充分でしたし。」

「それで？テメエはなんで生きてるんだよ？」

「自爆してたよね！」

「私たちは生きているとしか聞いていないわ。どうやったの？」

「ああ、あれですか。簡単ですよ」

「回想に入ります。」

マンションを脱出した私とアリスは結界の頂上まで来ました。

「よし、ここまでは作戦通りです。プラン2ですが」

後はジュエルシールドを自爆させればフィニッシュです！

「アリス、それでは」

「うん、じゃあね」

すると、アリスの身体が虚空に消え、三つのジュエルシールドが残りました。

「ライアを構成していた三つの内、二つが持って行かれたのは痛いですね」

『ですが、自爆のための量には充分です』

その通りです。

二、三個でも次元断層を起こすのは充分なんですから、これだけあれば！

すると、マンシヨンから負け犬たちが出てきました。

これは急がないと。

念話で時間稼ぎをしつつ、ジュエルシールドを発動させます。

そして今、ジュエルシールドが臨海に到達しました。

「さあ、管理局の腕の見せ所ですよー！」

もうこれをどうにかするには封印するか、爆発の瞬間をアルカンシ

エルで消滅させる以外にありません！封印は時間的に無理！つまりは！

『転送魔法によって軌道上に強制転送、アルカンシエルで消滅』

「イエース！そのために結界の転送妨害の機能を解くはずですよ！」
すると、結界の機能が変わり始めました。『目』を使っている私には丸見えです！

【さあさあ！！私の究極芸術を見せてあげますよ！冥土の土産に持つていきなさい！！】

これで周囲に「これから自爆しますよ」とアピールします。
タイミングが命ですからね。サポート班、ガンバ！

【芸術は、『超』、大爆発ですよ！！！！】

瞬間、転送が来ました。

結界も機能の書き換えが完了しています。よし！！

「転送！！！」

『了解ですよ！！』

予め準備していた転送魔法を発動し、強制転送が発動する寸前に私だけ転送します。ジュエルシードはそのまま軌道上に移動させます。これで私が生き残ってると思う人はいないでしょう。ギリギリまで見張っていても、ジュエルシードの影響で私を見失ったでしょうし、転送反応もジュエルシードの余波で探知できないでしょう。

「これで逃走完了〜！」

「って感じですよ〜」

「……スツゲ」

いやですね〜、褒めても何も出ませんよ〜。

「テメエが生き残ってる理由はわかった。で？これからどうする？」

「ふふ〜ん それはもう考えてあります〜」

さっきのルール説明を聞いているうちに考えました。これで私たちの勝利は目前です。この作戦は行けるぞおおおお！！

「それに、戦闘面でも問題ありません〜」

「随分な自信だな。まあ、その特典じゃ仕方ねえか？」

「チートの極み」

「確かにそうね。このルールの中では最強よね」

「能力のインフレだよ〜！」

「その能力の原作でもチートでしたからね」

「か、勝てませんよお」

ふっふっふ、そうでしょう？

劣化して体質系はコピーできないとはいえ、この能力に勝てる転生者は存在しませんよ。

「この『完成』^{ジエンド}にはね〜!!」

ピロリロリン、ルナ八新タナ能力ヲ手ニ入レタ。

- ・ 明鏡止水
- ・ 虚化
- ・ 月牙天衝
- ・ ゴーレム創成^{クリエイト}『イノケンティウス』

解析八終了シマシタガ、アノ魔法無効化能力ハ体質系ノ能力ダッタ

タメコピーデキマセンデシタ。

s i d e o u t

帰ってきた外道たち（後書き）

転生者枠はまだ四人余っています。

さうで、どんな転生者がくるんかな？

ざんね〜ん！それは夢『墮』ちだー！

side???

「行け、イノケンティウス！」

その一言によって『イノケンティウス魔女狩りの王』は目の前にいる巨大なムカデのような生物を一瞬で蒸発させた。爆炎が夜空を照らし、まるで昼のような明るさになる。調べた限りでは、この巨大生物はAAランク指定の危険種らしい。それをこつもアツサリと殺してしまうとは…

「素晴らしい……！素晴らしいぞ、私の力ー！」

しかし今の爆音に釣られてやってきたのか、同種の生物がワラワラと集まってきた。

問題ない。

「新しい力を試すにはもってこいだな」

そして私は手を顔に添える。

すると、私の顔に突如として恐ろしげな赤い模様が浮かぶ仮面が現れた。

「ククク、凄いぞ！力が漲ってくる！」

そして私は特典で貰った刀型デバイス『しちりん』を展開し、そい

つらに襲い掛かった。
結果は当然、秒殺だ。

「ククク、馬鹿どもめ！せっかくの転生をしたのに主人公たちを助けるためにわざわざ危険に飛び込むとはな！」

私のように賢くならんと生きていけんよ？

数日前、私はこの『魔法少女リリカルなのは』の世界に転生した。どうやら他の転生者どもは神が頼んだ通りに主人公たちを助けに行つたようだが、私を含めた数人の賢い者はそんな頼みを一蹴した。

なぜ、わざわざ転生したのに自由に動いてはいけないのか？

そして私はこの世界に転生し、理想の姿をもって顕現した。

将来は美男子になること間違いなしの容姿、黒い髪に紅い瞳といった、某悪魔の執事に瓜二つの容貌だ。これはサービスなため特典には含まれないらしい。年齢はルールに従い主人公と同じ年齢だ。

「つくづく馬鹿ばかりだな。私ほど賢い者もそうはいないだろうが」
なにせ、能力が能力だ。

私が神に望んだ特典は最強だ。一つはデバイス、もう一つは魔力量（これはAAAまでしか与えられないらしいが）。ここまでならば普通の奴でも思いつくかもしれないが、ここからは私しかいないだろう。

「そう！この『見稽古』に敵う能力などいはいはしないさ！」

これこそが、私が神に望んだ最強の能力だ！ルールのせいで多少は劣化してしまい、四つまでしか技をストックすることができなくなつてしまつたが、それでも最強の能力であることに変わりはない！

数日前、あの転生者が集まつた戦闘で、私は他の転生者の能力をこの『見稽古』で習得して回つた。あの馬鹿どもが調子に乗つて能力を使いまくつてくれたおかげで、随分と使える能力が集まつた！

「これで、私に敵う奴などいない！邪悪な管理局を崩壊させた暁には、私が全てのヒロインを貰い受けよう！」

それが誰もが最も幸せで平和な願いだと思わなかね？下劣な他の転生者などと一緒にいるのよりも、この私と添い遂げる方が幸せに決まつている。

「くふふふ、まずは誰を物にするか……。まだ純粹な新人メンバーが良いか？だとすれば、強気なティアナ辺りが良いだろう。クックツク、なあに、時間はたつぷりある。その間に、スバルも、キャロも私好みに調教してやろう！」

「うわっ、キモー！！なにコイツ本当にキモいんだけど！？」

その時、私しかいないはずのこの世界に少女の声が響き渡つた。

馬鹿な！？ここは無人世界のはずだ！それなのに私以外の人間がいるはずが……！？

勢良く振り返ると、数メートル離れた茂みによく見知った少女がいた。月明かりのように透き通った金髪ツインテールに血のような紅い瞳。

フェイト「テストロッサだった。」

「……………何者だ？」

しかし、こんな所にフェイトがいるはずもない。彼女のクローンが他にいと聞いたこともない。つまり、この少女は私と同じ転生者のうちの一人だ。

「むっふっふ 人に名前を聞く時は、まず自分から名乗るのが礼儀だよ!!」

『マスター、あなたはそれを言いたかっただけでしょう?』

……………随分と舐めた口を利用してくれる。しかし、礼儀に反するということも事実だろう。ここは余裕をもって返さねば。

「これは失礼した。」

私の名前は……………そうだな、ヴァロンとで「そんなのはそうでも良いよ!」……………」

自分で聞いておきながら……………!!

「私はね、あなたが危険な能力を持つようだったなら闇討ちして殺してこいつて言われているんだ!あなたってこの前の騒動でコソコソしていた転生者でしょ?何か変な能力を持っているだろうから見張

つてただけど……」

そう言うと彼女はデバイスを展開した。

それは漆黒の大鎌で、柄も、刃も全てが黒い。少女の身の丈ほどもある。バリアジャケットはフェイトに似ているが露出は多くなく、普通の黒いワンピースに黒いマントだ。

彼女は軽々とデバイスを振り回し、私に突きつけた。

「うん、思ったよりシヨボーイね！楽に殺せそうだよ！闇討ちする価値なし！！」

最強の私に向かってそう言い放った。

私は一瞬、何を言われているのかわからなかった。

『見稽古』を、シヨボーイだと？私が思いつく中でも最強の能力の一つだぞ！？劣化しているとはいえ、あらゆる能力と身体能力を習得できるのだぞ！？

「……随分と自信があるようだな、貴様。私の能力のどこがシヨボーイと言っのかね？」

「さあ？自分で考えなよ、自称賢い人（笑）さん！」

「殺す！！」

瞬間、私はイノケンティウスをゴーレムクリエイト創成で作り出し、虚化の仮面を付けた。そして『しちりん』を振り上げ、

「月牙、天衝！！」

私の魔力光である橙色の月牙天衝を放った。
彼女は咄嗟に横に避け、そのまま私に突撃してきた。馬鹿め！

「こちらにはイノケンティウスがいるぞ！」

雄叫びを上げ、イノケンティウスが彼女に突進する。しかし彼女は飛行魔法で上空に飛び上がり、大量の魔力弾を作り出した。イノケンティウスはその特性上、飛行することができない。ならば、私が飛べば良いだけのこと！

「行けえ！ミラージュシューター！」

『Shoot』

大量の魔力弾が発射されるが、そんな物は私には無意味だ！

「明鏡止水」

すると、シューターは明らかにその勢いを減衰させた。当てるべきのが消えたのだ。これでは攻撃のしようがない。

「えっ！？ど、どこに消えたの！？」

「後ろさ、お嬢さん」

彼女の背後に回りこんだ私は、そのまま月牙天衝をその背中に叩き込む。割と本気で攻撃したからか、それとも彼が貧弱だったからか、悲鳴を上げることもなく彼女は地面に叩きつけられる。

「ぐっ、うう！」

『マスター！！』

「勝負あったようだね。口ほどにもない」

這い蹲る彼女の横に降り立った私は、デバイスを掴んでいる彼女の腕を踏みつける。

「これで私の勝ちだ。君の命は私が握っているのだよ。この意味はわかるね？」

「ど、どういう意味！？」

「君をどうしようかと、私の自由ということさ。殺すも、犯すもね」

「ひっ」

私の言葉に顔を恐怖に染めた彼女は、思わずといった様子でデバイスを捨てて逃げようとする。

「逃がしはしないさ。チェーンバインド」

「きゃー！」

バインドによって足を絡め取られ、彼女はその場に転倒した。そのままバインドが彼女の四肢を拘束する。これで逃げることも、抵抗することもできない。

「ジャスト一分！夢は見たかな？」

「……は？」

気がつくと、私は地面に寝転がっていた。
全くの突然だった。私は確かに彼女の服に手をかけ、剥ぎ取るようにしたところだったというのに、一瞬で今の状況になっていた。

「いったい、何が……?」

「さあ? 夢でも見てたんじゃないの?」

その言葉に私はハツとなり、咄嗟に立ち上がるうとするが、手足に全く力が入らない。

「あ、何をしても無駄だよ? 今、あなたの手足は完全に脊髄とのリンクを失っているからね! 脳からの指令は一切届かないよ!」

「なっ!?!」

そんなことが!?! しかし、甘い!!

「イノケンティウス!!」

私がそう呼びかけると、少女の背後にイノケンティウスが創クリエイト成され、彼女に摂氏3000度の豪腕を叩きつける。

しかし、

「だ〜から〜、無駄だつて〜」

そして彼女は私をデバイスで小突いた。
瞬間、

「ぐぎゃ ああああああああああああああああ!!」

激痛が全身を襲った。痛いというレベルを既に超越している。全身の神経を鑢で削られているようだ。

「い、だい！いだすぎるうつつうあああああああ！！」

すると、私の意識が完全に逸れたからか、イノケンティウスはその場で動きを止め、虚空に溶けるように消え去った。

「はい、終了！どつどつ？マゾに目覚めちゃった？」

「ぐ、ああ、つつつつ」

一瞬で痛みは完全に引いたものの、全身を襲っていた痛みの余波のせいか身体が痺れる。応えることなんてできなかつた。

「ふんふん？強烈すぎて天国に逝けそうでした？うわ、変態だ！
！！」

誰もそんなことは言っていない！

「そういえば、ロキ！このマゾの能力って『見稽古』だったよね？あれって確か、目で見た能力とか技を一瞬で自分のものにできるんだっけ？」

『そのように記憶しております』

「…………へえ、ふうん、ほお」

すると彼女は突然ニヤニヤと笑い出し、這い蹲る私を見下ろしてきた。

「ねえ、あなたって死にたくない？それとも一思いに死にたい？」

「……ぐ、何を……!?!」

「応えて」

彼女はデバイスを突き出し、私を再び小突こうとしてくる。

「し、死にたくないに決まっているだろう!」

「だよね!それじゃあ、土下座して私にお願いしてよ!」どうか殺さないでください』ってさ!ほら、もう動けるようにしてあげたから!」

「き、貴様!調子に……!」

「はいは〜い!そんな素直なあなたには、地獄への片道切符を進呈しま〜す!」

「ま、待て!待ってくれ!わかった!するから!」

こんなことはプライドにかけて拒否したいが、命には代えられない。これは必要なことなんだ。それに、この女が油断した瞬間に虚化すれば、まだ勝機はある!

「……どうか、殺さないでください」

「ん〜?なに〜?聞こえな〜い」

「ぐ……!」

どうか!殺さないでください!お願いします!」

恥も外聞も捨てて私は頼み込んだ。この女！絶対に許さん！！

「そっか〜！じゃあ、あなたのことは殺さないであげる！」

すると彼女はデバイスを引っ込めた。

今だ！！

その瞬間、私は立ち上がり、近くに転がっているデバイスを取ろうとしたが、

「……ッ！？う、動けない！？」

そう、土下座の体勢から動けないのだ。手足が固まったように動かない。

「え？何か動く必要でもあったの？

それとも、私の油断した瞬間を突こうとしたの？」

クソッ！顔を上げなくてもわかる。絶対にこの女は笑いながら私を見下ろしている！

「あゝあ？せっかく助けてあげようと思ったのにな〜？約束を破るような人には罰が必要だよね〜？」

そして彼女は一步一步、ゆっくりと近づいてきた。まるでさっきの夢の私のように。

「それじゃあ……」

そして、彼女が片腕を振り上げたのが影でわかった。

「罰ゲーム!!」

彼女が腕を振り下ろす瞬間、私は思わず目を瞑った。この恐ろしい少女の下す罰を正面から受けるなど、到底できそうになかった。

しかし、

「はい、終わり!」

そう言っただけで彼女は唐突に去っていった。辺りには、もう風の音しかない。

「た、助かった、のか?」

手足の様子を確認すると、問題なく動くのがわかった。どうやら、去り際に開放していったらしい。

「.....」

命拾いをした。九死に一生を得たと言っても良い。

「クソ!クソクソクソ!あの小娘め!!」
クソガキ

思わず悪態をついた。よりもよって見逃されるとは!こんな屈辱はない!

「あの女、許さん!次に会った時には犯しつくして、散々な死に方

sideアリシア

「むっふっふっ せっかくの凄い能力も、使用不可能なら意味ないよね？私って頭良い〜!!」

『今頃、あの転生者は焦っているでしょうね。もはや戦闘はおろか、日常生活すら困難でしょう』

「だよ〜 あはは！」

でも、死んだら新しく転生者が来るんでしょ？」

『その通りです、マスター』

「う〜ん、だったらあのマゾにも生きてほしいよね！戦力にもならないのに頭数には入ってるんだもん！」

『そうですね。彼には強く生きてほしいものです』

そして私たちは帰路についた。

さあ、今日の晩御飯は何かな〜？

sideout

sideother

「次のニュースです。昨夜、第35無人世界で身元不明の男の子の死体が発見されました。死因は持っていた剣型デバイスによる自殺と思われ」

「こらっ！誰も観ないならばテレビは消しなさいっ！まったくもうっ！」

そして、テレビの電源が無造作に切られた。

side out

さんね〜ん！それは夢『墮』ちだ！！（後書き）

転生者の募集はまだまだ続きます！能力だけじゃなくて性格も受け付けます！

ちなみに一般の転生者ルールでは、転生できる最高年齢は主人公の年齢までで、最低でもエリオやキャロの一歳下までになっています。

圧縮圧縮空気を圧縮！！（前書き）

今回はついに『あれ』の転生者が登場！

さあ、皆も一緒に叫ぼう！

圧縮圧縮空気を圧縮！！

圧縮圧縮空気を圧縮！！

う〜ん？さっそく転生者が一人退場リタイアしたらいいですね。ザコい能力者だったら捕まえて生かしておくんですけどね。『見稽古』は流石に生かしておくには面倒すぎます。何かの拍子に暴れられたら面倒ですしね。

あ、皆さんこんにちは。ルナ＝ベルツです。

現在、転生者たちについての情報を整理しているところです。

……………あれ？

そういえば、この主人公視点とも言えるものに私が出たのってかなり久々なのでは？

……………お、おお！よく考えればそうじゃないですか！！

「クツクツク！これはめでたいです〜！これはもうテンションに任せて転生者を乱獲するしかないのでは〜！？」

『落ち着いてくださいマスター。そんなことをしても新しい転生者が来るだけです。また情報を集めるのも面倒でしょう？』

「……………それもそうですね〜」

アルテミスの言う通りです。冷静になりなさい、私！

「そうですね〜。私が愚かでした〜」

『わかっていただけただろうで何よりです』

そうですよ、私。落ち着いて考えればすぐにわかることでしょう？
アルテミスはこう言いたいのですよ！

「殺すならば一斉に皆殺しにしないと後が面倒ですよね」

『その通りですマスター』

はあ、そうですよね。どうやら熱くなりすぎていたようです。しつかりしないと。今や私は『ベルツ』を教授から預かっている状態なのですから。

それに、私には頼れる仲間だっています！皆で力を合わせればきつと……！！

「見て見てみんな〜！『Wii』買ってきたからやろうよ〜！！ルルもやる？」

「やる〜！！」

皆で力を合わせればきつと……！！

「……この低反発枕は神。この枕の会社、良い仕事をしている」

「本当に寝具には妥協しねえよな、お前」

力を合わせれば……！

「あ、ちょっとキャロ。買い物に行くついでにタバコ買ってきて。私って一日に最低一箱は吸わないと落ち着かないのよ。銘柄はいつもので」

「……アイデアさん、禁煙するって先月言っていたじゃないですか。ニコレットで我慢してください。っていうか、今は未成年なんですから自重してください。それじゃあ行つてきま〜す」

……はあ、私が間違っていました。

「仲間なんてただの記号です〜！友情なんて金で買え〜！どうせ昨日の敵は今日も明日も敵です〜！！」

「だ、大丈夫ですよ、ルナさん。わ、私とナナさんは味方ですから……！！」

「……お……、お〜……！！」

味方をしてくれるのは嬉しいですが、よりもよって頼れるのはこの口下手コンビですか！？コミュニケーション能力が乏しすぎます。伝言ゲームもできないんじゃないですか、この二人。

「……信じられるのは自分だけですわ〜。アルテミス、私は頑張ります〜」

『心中お察しします、マスター』

あゝ、憂鬱ですね。先が思いやられます。

「それじゃあ、気を取り直して報告会を始めます。現在、生き残っているのがわかつている転生者は四人です」

「あ、あの海鳴で見た人たちです、か？」

「その通りです。え〜つと、名前は覚えるのが面倒なので、ウニ頭を『説教』、白髪を『妖怪』、炎のゴーレムインケンティウスを操っていたのを『バーコード』、虚化していたのを『オレンジ』で」

え、なんでこんな名前なのかですか？これらの能力を使っていた原作キャラの姿と全員が一致しているからです。詳しくはググりましょう。さすれば汝の求めるものを与えん、たぶん。

「っ……………強……………そう……………!!」

「え？そ、そうですか？け、結構チヨロそうに、感じます、けど？」

……………なんでそれだけの会話でこんなに時間がかかるんですか！もう、本当にこの二人が揃うと話が進みません!!

「まあ、何であれ殺すのに変わりはないですけどね〜。これはあくまで殺しやすくするための情報ですから〜」

しかし、何事にも例外はあります。もし、転生者の中に負け犬のような馬鹿ではない転生者がいたとしたら、その時は、

「手厚くもてなしてさしあげましょうかね〜」

もっとも、あの自称賢い転生者（笑）を見た感じでは期待できそうもありませんが。

「そうそう、それからもう一つ、悪い報せがあります。どうやら管理局はリインフォースの修復に成功したらしいです」

「え！？そ、それは本当ですか!？」

「はい、かなり信憑性は高いですね」

そう、これが今回で最も悪い報せでしょうね。これでstssではリインフォース^{ソグファイ}が製作されない代わりに、リインフォースが物語に加わることとなります。融合騎としてはかなり優秀なんですよね、彼女。アギトなんか目じゃありません。

今回の情報でめぼしいものはこれくらいでしょうか。うわ、転生者の情報少なえ。こうなったら原作キャラの身内とかもまた探すべきで

「……………おお〜?」

「……………?どう…した、の?」

ありやりや、ナナはわかりませんか。ルルもわかっていませんね。『Wii』に熱中しています。一緒にしていたアリスアはわかっているようです。動きが止まりました。

「……………へえ、これは流石に予想外でした」

瞬間、マンションが巨大な光に包まれて消滅しました。

side???

「へ、へへ！やったぜ！これで絶対に死んだ！」

能力によって一瞬で倒壊したマンションを見て思わず笑ってしまう。まだこの技は使ったことがなかったから近くのビルから見ているが、アニメとは全然違った迫力がある。この能力さえあれば、俺に勝てる生物なんてこの世には存在しないだろう。

神だか何だか知らねえが、アイツらを殺せと俺たち転生者は言われている。正直、最初はどうでもいいから無視しようと思っていたが、最近になって事情が少し変わった。俺の能力を見込み、奴らを殺す依頼をしてきた転生者が来たからだ。そいつの話によると、奴らは転生者を乱獲する可能性があるらしい。つまり、最強の俺にそいつらを倒してほしいって訳だ。

まあ、最強とまで言われたら受けるのも吝かじゃねえけどな。

【おい、言われた通りに殺したぜ。これで文句ねえだろ】

【すごいね。マンション一瞬で消すなんて、流石だよ】

【けっ、どうやって俺の能力を知ったのかは知らねえが、こうなるのは当然だろ？俺の能力にかかれれば造作もねえ】

【それもそうだね。ああ、そういえば一つ報告があるんだけど】

【ああ？】

【彼ら、死んでないよ】

【……なに？】

おいおい、あれで死んでいないだと？逃げた様子もなかったんだ。流石にそれは信じられない。

【おい、出鱈目もたいがいにしる。まさか、それで難癖つける気か！？テメエ、報酬を払わねえ気だろ！】

【ボクは本当のことを言っているだけなのになあ。ほら、もうそこに迫っているよ。早く逃げた方が……】

【うるせえ！今度はテメエを殺して　　】

「あ、見つけた！！」

すると、背後から楽しげな声。

そこには奴らがいた。間違いない。あの女に聞かされた特徴に全員が一致している。一人足りねえが。

「まさか、いきなり拠点を襲撃されるとは思いませんでした。これは転生者を舐めていたとしか言えません。お見事です」

「だがよ、お前はもうこれで逃げられねえ訳だ。大人しく死ぬか植物人間になるか選びな」

「私たちとしては植物人間を推奨」

……チツ！コイツら、本当に生きていたどころかピンピンしてやがる。

【だから言つたる？ほら、君が本気になれば逃げ出すことだってできるはずよ】

【うるせえ！俺が逃げるだと？あり得ねえ！全員ここで殺す！】

俺は身を低く構え、いつでも連中に突撃できるようにする。コイツらはまだ俺の能力を知らないはず。それならば、俺が負ける要素はどこにもねえ。

「一撃で殺す！！」

side out

うわーお、デバイスも持たずに突進してきましたよ。

いえ、良く見れば首に付けているチョーカー、あれがデバイスのようです。

しかし、この転生者は阿呆なんですかね？どうも私たちが彼の能力を知らないことを前提に攻撃してきている感じです。一撃で殺す

とか言っていますし。こんなの姿を見れば一目瞭然なのですが。

『Rejection』

普通に防御魔法で防ぐと。思った以上の威力が防御を軋ませます。

「チツ、やるな！だったら！」

すると、転生者は一旦下がります。

そして今度は足裏を爆発させたかと思うと、もの凄い速さでまた突進してきます。っていつか、もうこの時点でわかる人にはわかるでしょう。

今度は障壁を張らずに普通に避けます。すると私が今までの場所に腕が叩きつけられ、そのまま床を粉碎、階下までぶち抜きました。

「テメエら、さっきから守ってばかりじゃねえか。ちゃんと戦え！それともびびってんのか？へッ、聞いていたほど大したことねえな！」

……これは挑発のつもりなんでしょうか？こんな子供みたいな挑発に引つかかる奴なんていませんよ。明らかにカウンター狙いでしょうし。

「……ルナ、コイツ馬鹿なんじゃねえか？」

「同感」

「きつと鏡を見たことがないのよ」

「そ〜だね〜」

「だ、だって、あの見た目ですしね」

ルルとナナ以外は全員わかつているようです。

それでは、あの転生者の容姿を説明しましょう。まず、髪は白髪です。目は赤いです。ヒョロヒョロです。ライアほどではありませんが、目つきが悪いです。

大抵の人は白髪でわかつたのではないのでしょうか？

「どうみても一方通行ですよね〜」
アクセラレータ

「ッ！？どうしてわかつた!？」

「いや、そんなの見ればわかるでしょう〜？」

つまり、彼の能力は『ベクトル変換』ですね。

ここで、ルナさんの能力解説コーナー！

『ベクトル変換』とは？

なんと、運動量・熱量・光量・電気量など、体表面に触れたあらゆる力の向きを自由ベクトルに操作する能力なのです。しかも、通常状態では生活に必要な最低限のもの（酸素とか重力とか）以外は反射するように設定されているらしいです。つまり、理論上はどんな攻撃も通用しないということですね。まあ、裏技として酸素を奪うなどの手もありますけど。

つまり、彼は人間に触れた瞬間に血流を逆流させるなどをして、相手を即死させることができるのです。うわ〜、チートだ〜。最強の

攻撃力と最硬の防御力を併せ持った能力。あらゆる敵を一撃で倒し、どんな攻撃も反射して無効化する。それが『ベクトル変換』です。一応コピーできますが、演算量が半端ないので使えません。

あ、そっか！あのデバイスは演算補助のための物ですか！うわ、きつと魔力のベクトルにも対応可能になってるんだらうな。

「テメエら、バレたからにはもう手加減しねえぞ！」

すると彼は両手を上げ、意識を集中させています。

おお！？もしかやこれは有名なアレですか！

「くかきけこかきくけききこかきくこくけけこきくかくけ
けこかくけきかこけきくくききかきくこくけくかくこけく
けくきくきくきこきかかか ツー！！」

そして上空に光り輝くプラズマの塊がッ！！

「うおー！！スツゲ〜です〜！！リアルであんなのを言うなんて！
下手に必殺技の名称を叫ぶのより恥ずかしいのに〜！」

「キャラをリスペクトするってのも大変だな」

「ニニコ動画だったら弾幕出そう」

「うっわ、恥ずかしく〜！」

「アリシア、そういうこと言っちゃ駄目よ。これは一方通行アクセラレータにかけられた呪いみたいなものなのよ、きつと」

「で、でも、使っていない時も……あつた？ような」

「……………」

ルルとナナはこの光景に呆然としています。下手に理解できる分、この現象が信じられないでしょう。

「お、おに、お兄ちゃん！ たた大変だよ！ ぷら、プラズマがッ！
！人間が一人でプラズマ作ってるよ！？ しかもあんなに大きいの！
死ぬ！死ぬってこんなの！」

「……………（諦観）」

「え〜？ ルル、炎だってプラズマの一種なんですよ〜。こんなの別に恐くないですって〜。ナナ、諦めたらそこで試合終了です〜。安西監督も言っていますよ〜」

「じゃ、じゃあ！ 何か作戦があるんだ！ 流石はお兄ちゃん！」

「ち、す……がー！」

「え？ ありませんけど〜？」

何を言ってるんですか？ 私にあんな反則チート級を破る手段なんてあるは

「ずないでしょう？逃げるのは簡単ですけど。」

「うわあああああん！！私たちここで死ぬんだ！もう助からないんだあ！お兄ちゃん！内緒にしてたけど、今までずっと好きでした！これからも好きです！結婚してください！」

「年齢的に無理ですね。十年早いです。それと、あなたが私を好きなのは嫌になるほど知っています。」

「……………（テメエなに余裕ぶっこいてんだよ逃げるよふざけんなよ諦めんなよなんで全員笑ってられんだよ頭おかしくなったのか病院行けよ全員精神科行けよ呆けんなよどうでもいいから逃げるよ！！）」

「……………なんか、今ナナから無言の圧力が来たんですけど。無言なのに目力だけで意思が伝わってきます。」

「め、目つきが尋常じゃないくらいに凄いことになってます！これ、ライアよりも眼力あるんじゃないですか！？」

「圧縮圧縮空気を圧縮！！風のベクトルを使えばこんなことは造作もねえ！俺は無敵だ！」

「ぶっ、無敵？そんなのはあり得ません。厨二って好きですよね、無敵設定。きつと授業中にノートに書き殴っていたんでしょ。」

「あ、いるいるそういう奴。きつと邪気眼設定を練りこんでんだろおな。」

「お前なんて保健室登校がお似合い」

「っていつか家に籠ってなさいよ。社会に迷惑だから」

「か・え・れ！か・え・れ！」

「あ、アリシアさん、帰れコールは流石にかわいそうですよあ」

「うるせえええええ！テメエらは死ぬのが恐くねえのか！」

「くくくくく……三下みたいなセリフだな」

「なんで皆はそんなに余裕なおおおおおおおおおお
お！？」

「……………（わけがわからないよ）」

ルルとナナは既にパニックに陥っています。
未熟ですね。こういう時ほどリラックスが必要ですよ。

「大丈夫です。『ベクトル変換』は確かに強力ですが、無敵では
ありません。それをお見せします」

「で、でも、もう手立てはないんでしょう？あ、管理局の到着を待つ
とか！？」

「いえいえ、そんな必要はありません。っていつか、そんなこ
とをしたら私たちも捕まりますよ」

「じゃ、じゃあどうするの！？」

「ルル、ナナ、皆で正義の味方を呼ぶんです！私に続いてくださいね〜！」

「「え？」」

「行きますよ〜！せ〜の！」

そして私は大きく息を吸い込み、

「助けて〜！キャロえも〜ん！」

そう叫びました。のってくれたのはアリシアだけでした。

圧縮圧縮空気を圧縮！！（後書き）

次回、キャロえもんが買い物の旅から帰ってくる！彼女は状況を打
開けるのか！？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1407w/>

第二の人生はゲームらしいです～

2011年11月6日05時23分発行